

第 1 表 小迫辻原遺跡 B区 竪穴住居跡一覽表

遺構名	調査区	平面形	長軸長 (cm)	短軸長 (cm)	長軸 方位角	床面積 (㎡)	主体本数	地床炉有無	内部土層	ベッド有無	床面	床下土層	時期	備考	旧名称
B区-1号竪穴住居	N2.M2	円形	径 850		—	27.8以上	6本以上	不明	なし	なし	貼床	なし	弥生時代前期後半 ~中期初頭	—	D-住27
B区-2号竪穴住居	N1	円形	径 630~680		—	32.6	10本	中央土層1ヶ所	なし	なし	貼床	あり1ヶ所	弥生時代前期後半 ~中期初頭	—	D-住23
B区-3号竪穴住居	O1.O19	円形	径 135以上		—	6.0以上	2本以上	不明	不明	不明	?	(なし)	弥生時代前期後半 ~中期初頭	B-36土に切られる	D-住29
B区-4号竪穴住居	C4	方形	560	510	68°	25.3	(4本柱)	中央1ヶ所	南壁際中央1ヶ所、小土層 2ヶ所	削り出し1ヶ所	踏みしめ	なし	古墳時代前期前半	周溝あり、廃絶祭祀あり、鏡 片埋納	A、B-住3
B区-5号竪穴住居	D3	長方形	880	700	66°	58.0	4本柱	東側1ヶ所、中央 1ヶ所	南東壁際中央1ヶ所、別に 1ヶ所	削り出し3ヶ所、 盛り土1ヶ所	踏みしめ	あり1ヶ所	古墳時代前期前半	一部周溝あり、廃絶祭祀あ り、土層2は入口施設?	A-住5
B区-6号竪穴住居	E4	長方形	(690)	550	115°	34.0以上	2本?、4本?	中央2ヶ所(つく りなおし)	南西壁際中央2ヶ所(つく りなおし)	削り出し1ヶ所	貼床	あり	古墳時代前期前半	周溝あり、廃絶祭祀あり、床 のはりかえあり	A-住6
B区-7号竪穴住居	E0	方形	270以上	250以上	(60°)	3.8以上	不明	不明	不明	不明	踏みしめ	不明	古墳時代前期前半	—	D-住34
B区-8号竪穴住居	H19	長方形	760	450以上	60°	25.2以上	2本(4本?)	中央1ヶ所	不明	削り出し1ヶ所、 盛り土1ヶ所	踏みしめ	あり1ヶ所	古墳時代前期前半	B-6建、B-8溝に切られ る、廃絶祭祀あり	D-住36
B区-9号竪穴住居	I1	長方形	490	340	63°	10.0~ 13.7	2本(3本)	中央1ヶ所	南東壁際中央1ヶ所	なし	踏みしめ	なし	古墳時代前期前半	段状遺構、板張あり(方形→ 長方形)、B-5溝に切られる	D-住25
B区-10号竪穴住居	K1.L1	長方形	470	390	59°	16.0	2本	中央1ヶ所	南東壁際中央1ヶ所、北壁 沿隅寄り1ヶ所、東側1ヶ 所	盛り土2ヶ所	踏みしめ	あり1ヶ所	古墳時代前期前半	周溝あり、入口施設あり、廃 絶祭祀あり、B-5土を切る	D-住24
B区-11号竪穴住居	O2	方形	480	480	6°	(20.2)	不明	不明	南壁際中央1ヶ所	なし	貼床	なし	古墳時代前期前半	周溝あり、一括廃棄あり、B- 32土を切る	D-住26
B区-12号竪穴住居	O19	長方形	365以上	290以上	不明	9.0以上	1本以上	中央1ヶ所	東壁際1ヶ所	削り出し1ヶ所	踏みしめ	なし	古墳時代前期前半	B-36土に切られる	D-住31
B区-13号竪穴住居	J0.J19	小型方形	370	370	2°	10.5	無柱穴	東壁中央(カマ 下)	南東壁際隅1ヶ所	なし	踏みしめ	なし	奈良時代	—	D-住33

第 2 表 小迫辻原遺跡 B 区 掘立柱建物跡一覽表

遺構名	調査区	規模 (間数)	縦軸長 (m) (中心距離)	横軸長 (m)		床面積 (㎡)		方位角(磁北より 東へ真軸の方位角)	時期	備考	旧名称
				中心距離	ひさし付き	本体	ひさし付き				
B区-1号掘立柱建物	F0	2×2(総柱)	3.00	2.40	7.00	-	173°	中世	南北棟	D-建29	
B区-2号掘立柱建物	F0	2×1	4.65	3.50	15.90	-	89°	中世前期?	東西棟,柱穴5より小刀出土	D-建35	
B区-3号掘立柱建物	G0	2×2(総柱)	4.80	4.30	21.50	-	89°	中世前期	東西棟	D-建34	
B区-4号掘立柱建物	H1, H2	3×1	6.10	3.85	22.90	-	8°	中世	南北棟	D-建30	
B区-5号掘立柱建物	H1	2×1	3.95	2.40	9.30	-	3°	中世	柱間変則, 南北棟	D-建31	
B区-6号掘立柱建物	H0, H19	4×2(ひさし 付)	9.85	4.55	44.50	53.80	4°	中世	東ひさし付, 南北棟	D-建32	
B区-7号掘立柱建物	I0, G0	3×2(総柱)	7.15	3.80	26.70	-	94°	中世前期	東西棟, 柱穴より4白磁皿出土	D-建28	
B区-8号掘立柱建物	I0	2×2	4.00	3.35	13.30	-	92°	中世	東西棟	D-建36	
B区-9号掘立柱建物	H19, I19	2以上×2(ひ さし付)	4.90 以上	5.60	30.60 以上	36.70 以上	0°	中世前期	西ひさし付, 南北棟, 南半調査区 外, 柱穴1, 7より青磁破片, 柱穴 5より土師坏片, 柱9の柱痕より 小型磁石出土, 東柱有り, B-50土, B-62土を伴う か	D-建37	
B区-10号掘立柱建物	I19	3×2	6.25	4.65	28.80	-	89°	中世前期	東西棟, 柱穴7より土師坏出土, B-51土を伴うか,	D-建26	
B区-11号掘立柱建物	I19	3×1	5.65	3.25	17.90	-	93°	中世前期		D-建25	
B区-12号掘立柱建物	O1	3×2	5.60	4.10	23.40	-	102°	近世	東西棟,	D-建24	

第3表 小泊辻原遺跡 B区 土壙一覽表

遺構名	調査区	形状	分類	長軸長 (単位:cm)	短軸長 (単位:cm)	深さ	時期	備考	旧名称
B区-1号土壙	J0	大型円形	B	175	160	25	弥生時代前期後半～中期初頭	貯蔵穴?	D-土471
B区-2号土壙	K0	小型長円形(袋状)	C1	122	84	50	弥生時代前期後半～中期初頭	貯蔵穴,2層に遺物一括廃棄あり,B-9溝に切られる	D-土467
B区-3号土壙	K0	大型円形(袋状)	B1	200	183	67	弥生時代前期後半～中期初頭	大型貯蔵穴,2,3層に遺物一括廃棄あり	D-土466
B区-4号土壙	L2	小型長円形	C1	64	48	18	弥生時代前期後半～中期初頭	—	D-土408
B区-5号土壙	L1	不定形	F	(124)	(75)	23	弥生時代前期後半～中期初頭	B-10住に切られる	D-土409
B区-6号土壙	L0	大型円形(竪穴状)	A2	120	110	50	弥生時代前期後半～中期初頭	貯蔵穴?,2層に遺物一括廃棄あり	D-土462
B区-7号土壙	L0	不定形	F	144	96	22	弥生時代前期後半～中期初頭	—	D-土461
B区-8号土壙	L0	小型円形?	A?	(75)	67	31	弥生時代前期後半～中期初頭	—	D-土463
B区-9号土壙	L0	小型円形	A	83	70	27	弥生時代前期後半～中期初頭	—	D-土464
B区-10号土壙	M18	長円形	C1	177	112	26	弥生時代前期後半～中期初頭	3層に炭,焼土の堆積あり	D-土453
B区-11号土壙	L18, M18	長方形?	E?	290	162	20	弥生時代前期後半～中期初頭	B-12土に切られる	D-土454
B区-12号土壙	L18, M18	不定形	F	115	(84)	23	弥生時代前期後半～中期初頭	南半調査区外, B-11土を切る,土器一括廃棄あり	D-土407
B区-13号土壙	M2	小型円形(底丸)	A4	98	87	30	弥生時代前期後半～中期初頭	遺物一括廃棄あり(2層), B-14土と多く接合	D-土406
B区-14号土壙	M1, N2	方形	-	71	(31)	8	弥生時代前期後半～中期初頭	B-13土の土器と多く接合,遺物一括廃棄(1層)	D-土406
B区-15号土壙	M19	長円形	C1	313	230	45	弥生時代前期後半～中期初頭	—	D-土457
B区-16号土壙	M19	長円形	C1	235	187	23	弥生時代前期後半～中期初頭	—	D-土442
B区-17号土壙	M19	不定形	F	180	124	29	弥生時代前期後半～中期初頭	—	D-土439
B区-18号土壙	N18, M18	小型円形(竪穴状)	A2	(208)	(104)	66	弥生時代前期後半～中期初頭	—	D-土448
B区-19号土壙	M18	不定形	F	97	80	31	弥生時代前期後半～中期初頭	—	D-土449
B区-20号土壙	M18	小型円形	A	66	56	19	弥生時代前期後半～中期初頭	—	D-土450
B区-21号土壙	N18	不定形	F	76	45	48	弥生時代前期後半～中期初頭	—	D-土460
B区-22号土壙	M18	長円形	C1	156	52	25	弥生時代前期後半～中期初頭	—	D-土451
B区-23号土壙	N2	長円形	C1	156	117	30	弥生時代前期後半～中期初頭	2層に遺物一括廃棄あり	D-土416
B区-24号土壙	N2	小型長円形	C1	97	63	20	弥生時代前期後半～中期初頭	小型貯蔵穴?,中央にビット	D-土405
B区-25号土壙	O1, N1	不定形	F	132	95	23	弥生時代前期後半～中期初頭	—	D-土402
B区-26号土壙	N1	小型円形(袋状)	A1	73	64	32	弥生時代前期後半～中期初頭	小型貯蔵穴	D-土404
B区-27号土壙	O19, N19	大型円形(袋状)	B1	189	181	81	弥生時代前期後半～中期初頭	貯蔵穴,1層に遺物一括廃棄あり	D-土426
B区-28号土壙	N19	長円形	C1	187	86	38	弥生時代前期後半～中期初頭	—	D-土437
B区-29号土壙	N19	小型円形(袋状)	A1	90	75	74	弥生時代前期後半～中期初頭	小型貯蔵穴, B-80土に切られる,3層上面に炭,焼土土器一括廃棄あり	D-土459
B区-30号土壙	N19	小型円形(袋状)	A1	90	87	56	弥生時代前期後半～中期初頭	小型貯蔵穴,3層に遺物一括廃棄あり	D-土432
B区-31号土壙	N18	大型円形(袋状)	B1	192	—	107	弥生時代前期後半～中期初頭	大型貯蔵穴,上下2回の遺物一括廃棄あり	D-土433
B区-32号土壙	O2	大型円形	B	(170)	(88)	40	弥生時代前期後半～中期初頭	B-11住を切る	D-土417
B区-33号土壙	O1	不定形	F	133	117	41	弥生時代前期後半～中期初頭	貯蔵穴?,上下に遺物一括廃棄あり	D-土418
B区-34号土壙	O1	不定形	F	361	113	46	弥生時代前期後半～中期初頭	カメが逆さにおかれていた,遺物一括廃棄あり(1層)	D-土401
B区-35号土壙	O19	不定形	F	144	(80)	34	弥生時代前期後半～中期初頭	B-12住に切られる	D-土425
B区-36号土壙	O19	船底形	D1	305	125	55	弥生時代前期後半～中期初頭	B-3住を切り, B-12住に切られる,遺物一括廃棄あり	D-土427
B区-37号土壙	E3	小型方形(竪穴状)	A6	114	90	90	弥生時代中期後半	—	A-土1
B区-38号土壙	E3	不定形	F	121	60	37	弥生時代中期後半	—	A-土2
B区-39号土壙	E3	小型円形(竪穴状)	A2	103	89	89	弥生時代中期後半	—	A-土3
B区-40号土壙	G3	土器焼成跡	—	167	157	32	弥生時代中期後半	5ないし6回の造りなおしあり,遺物一括廃棄あり(1・2層)	A-土2'
B区-41号土壙	F1	大型円形(袋状,竪穴あり)	B3	219	190	143	弥生時代中期後半	大型貯蔵穴,壁穴5ヶ所,上下2回の遺物一括廃棄あり	D-土488

B区-42号土壙	G0	大型円形 (壁穴状、壁穴あり)	B3	1.58	1.45	123	弥生時代中期後半	大型貯蔵穴、壁穴4ヶ所、上下2回の遺物一括廃棄あり	D-土480
B区-43号土壙	H1, H2	長方形	E1	4.00	3.00	30	弥生時代中期後半	B-4建物に切られる、床面積10.8㎡・内部に土蔵1ヶ所・長軸の方位角21°・遺物一括廃棄あり(1層・土器集中)	D-住35
B区-44号土壙	I1	小型円形 (底丸)	A4	78	68	16	弥生時代中期後半	—	D-土420
B区-45号土壙	I0	長円形	C1	135	79	10	弥生時代中期後半	—	D-土478
B区-46号土壙	I0	不定形	F	153	105	30	弥生時代中期後半	遺物一括廃棄あり	D-土481
B区-47号土壙	K1	不定形	F	132	90	16	古墳時代前期前半	焼土あり、B-2溝に切られる	D-土486
B区-48号土壙	I0	小型円形	A	90	72	12	中世	—	D-土482
B区-49号土壙	I0	小型円形 (底丸)	A4	67	65	32	中世	—	D-土474
B区-50号土壙	I19	小型円形	A	61	60	4	中世	B-10建物と伴うか	D-土475
B区-51号土壙	I19	小型円形	A	99	90	11	中世	B-11建物と伴うか	D-土476
B区-52号土壙	K19	不定形	F	105	60	21	中世	B-1溝の埋土と同じ土で埋まる	D-土469
B区-53号土壙	K19	不定形	F	585 (355)	20	20	中世	B-2溝に切られる	D-住32
B区-54号土壙	L2	円形 (底丸)	A4	118	104	16	中世	—	D-土415
B区-55号土壙	N18	不定形	F	181	49	29	中世	青磁小片あり	D-土436
B区-56号土壙	J1	不定形	F	245	143	24	近世	—	D-土419
B区-57号土壙	M19	小型円形	A4	95	85	22	近世	—	D-土441
B区-58号土壙	D2	長方形	E1	225	123	34	不明	長軸の方位角63°	(住)
B区-59号土壙	E1	長円形	C1	143	83	34	現代?	—	D-土485
B区-60号土壙	G1	長円形	C1	247	181	89	現代?	現代のゴミすて穴	D-土479
B区-61号土壙	G0	小型円形	A	79	71	24	不明	—	D-土484
B区-62号土壙	I19	小型円形	A	85	80	10	現代	現代の耕作土でうまる	D-土477
B区-63号土壙	J2	不定形	F	229	172	19	不明	遺物等なし、人為遺構かどうか不明	D-土411
B区-64号土壙	J2	不定形	F	145	112	17	不明	遺物等なし、人為遺構かどうか不明	D-土410
B区-65号土壙	J19	長円形	C1	96	72	8	不明	土器細片含む	D-土472
B区-66号土壙	K2	長円形	C1	116	76	32	不明	遺物等なし	D-土413
B区-67号土壙	J2	不定形	F	204	150	22	不明	遺物なし、人為かどうか不明	D-土412
B区-68号土壙	K19	小型円形?	A	90	80	19	現代	土器細片含むが、埋土が新しい	D-土470
B区-69号土壙	L0, K0	方形?	E2	(200)	174	8	不明	自然の土の汚れの可能性高い、遺物等なし	D-土465
B区-70号土壙	L18	長方形	E	173	132	25	不明	焼土の堆積あり、土器等なし	D-土456
B区-71号土壙	M18	小型円形	A2	67	49	16	不明	遺物等なし	D-土455
B区-72号土壙	N1	不定形	F	(81)	—	5	不明	北半が焼失	D-土403
B区-73号土壙	N0	大型円形 (底丸)	B	168	148	41	不明	遺物等なし、B-73土を切る	D-土423
B区-74号土壙	N0	長方形?	E1?	205	135	16	不明	遺物等なし	D-土424
B区-75号土壙	N0	不定形	F	295	108	19	不明	B-73土に切られる、遺物等なし	D-土422
B区-76号土壙	N19	長円形	C1	170	105	21	不明	遺物等なし	D-土428
B区-77号土壙	N19	長円形	C1	82	57	45	不明	遺物等なし	D-土429
B区-78号土壙	N19	長円形	C1	162	132	17	不明	遺物等なし	D-土430
B区-79号土壙	N19	小型円形	—	59	50	37	不明	風倒木痕?	D-土438
B区-80号土壙	M19	不定形	F	198	95	16	不明	遺物等なし、B-29土を切る	D-土440
B区-81号土壙	N18	小型円形	A	70	70	19	不明	土器細片混入	D-土447
B区-82号土壙	N18	小型長円形	C1	86	70	26	不明	小礫、炭、土器小片混入	D-土446
B区-83号土壙	N18	小型円形 (壁穴状)	A2	(100)	93	124	不明	遺物等なし	D-土445
B区-84号土壙	O19	小型長円形	C1	74	50	42	不明	遺物等なし	D-土431
B区-85号土壙	O17, O18	不定形	F	314	(140)	38	不明	遺物等なし	D-土443
B区-86号土壙	J19	小型円形	A	60	55	21	中世?	B-1溝の埋土とよく似ている	D-土473

第4表 小迫辻原遺跡 B区 墓一覽表

遺構名	調査区	棺形式(上/下)	長軸長/長さ (cm)	短軸長/幅 (cm)	深さ (cm)	土壇の平面形	方位角 (長軸または頭位)	時期	備考	旧名称
B区-1号墓	N0	箱形木棺?	230	112	32	長方形	356°	弥生時代前期後半～中期初頭	北頭位・頭部に安山岩角礫をおく・石剣切っ先出土.	D-土421
B区-2号墓	G2	合口甕棺墓(甕/甕)	82(棺62)	49	16	楕円形	270°	弥生時代中期後半	小児用 西頭位.副葬品なし	D-土444
B区-3号墓	H1	合口甕棺墓(甕/甕)	92(棺74)	54	24	楕円形	60°	弥生時代中期後半	小児用 東北頭位.副葬品なし	D-墓7
B区-4号墓	M18	石蓋土城墓	188 (上段) 182 (下段) 154 (石蓋)	104 61	43 27	長方形二段	94°	弥生時代中期後半	成人用・東頭位.石材よろい重ね.副葬品なし 頭部に安山岩角礫をおく	D-土452
B区-5号墓	M18	土器蓋甕棺墓	190 (上段) 133 (下段) 123 (棺)	154 87	51 12	菱形二段	113°	弥生時代中期後半	成人用.東頭位.副葬品なし	D-墓5
B区-6号墓	M17	合口甕棺墓(高坏/甕)	61(棺44)	50	13	楕円形	89°	弥生時代中期後半	小児用.東頭位.副葬品なし	D-墓4
B区-7号墓	N17	土器蓋土城墓	126 (上段) 95 (下段) 114 = (棺)	93 93	42 13	楕円形二段	120~140°	弥生時代中期後半	成人用.南東頭位.副葬品なし.甕棺と甕を利用して頭部に安山岩角礫をおく	D-土444
B区-8号墓	J2		133 (上段) 105 (下段) 63 = (棺)	72 56	9 30	菱形二段	260°	古墳時代前期前半	小児用.西頭位.副葬品なし 下墓内面にペンカラ塗布	D-墓2
B区-9号墓	D2	箱形木棺墓	143	67	25	長方形	0°	中世前期	北頭位.副葬品.短刀.青磁破片 1.土師環2.土師小皿3	B-1号土城墓

第5表 小迫辻原遺跡 B区 溝一覽表

遺構名	調査区	断面形態	長さ (単位:m)		最小幅	方向と方位角	時期	備考	旧名称
			長さ	幅					
B区-1号溝	J19.J18	U字形	(6.6)	0.5	0.4	南北(湾曲)	中世		D-溝28
B区-2号溝	J3.J2.K3.K2.K1.K0.K 19.K18	逆台形	(45.6)	2.2	1.3	南北 4°	中世	陸橋あり.B-47土.B-53土を切り.B-5溝に切られる.	D-溝26
B区-3号溝	N19.M19	U字形	9.8	1.1	0.7	東西 96°	中世	溝状土壇	D-土434
B区-4号溝	E0	U字形	(7.5)		(1.4)	南北 —	近世	畑地境界溝.B-7住を切る	D-溝31
B区-5号溝	E1.F1.G1.H1.I1.J1.K 1.L1	U字形	(73.6)	3.0	0.4	東西 98° → 87°	近世	畑地境界溝.B-9住.B-3墓.B-41土を切る.C-12溝に連続?	D-溝30
B区-6号溝	G2.G1.F1.I1.J1.K2.K 1.L2	U字形	南北溝(8.2) 東西溝 49.0	1.2	0.3	東西 98°.南北 10°	近世	畑地境界溝.B-9住.B-2溝を切る	D-溝24
B区-7号溝	K3.K2	U字形	(14.0)	1.5	0.7	南北 8°	近世	畑地境界溝.B-6溝との切りあい不明	D-溝25
B区-8号溝	I19.K19	U字形.二条	(19.1)	1.4	1.0	東西 96°	近世	畑地境界溝.B-8住を切る	D-溝29.32
B区-9号溝	K1.K0	U字形	10.2	0.8	0.4	南北 157°	不明	遺物等なし	D-溝27

長さの()は検出した部分のみで、それ以上に長くなることを示す

第 6 表 小迫辻原遺跡 B 区 出土土器観察表

小迫辻原 B 区-2号 竪穴住居：弥生時代前期後半～中期初頭

D-NI-住23

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは複元径・単位:cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			器高	口径				
1	1層	弥生土器	壺	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ? 刺繍している	-	-	赤褐色	-	口縁部片
2	1層	弥生土器	壺 B	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ?	-	-	茶褐色	-	胴部片 二条窓部(N字窓部)
3	1層	弥生土器	壺	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ハラミカキ・底ナデ	ナデ	-	明茶褐色	-	底部 胎土に金雲母有り
4	1層	弥生土器	壺 A	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ	-	-	暗茶褐色	-	口縁部 一条丸線
5	1層	弥生土器	壺 A	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ? 刺繍している	-	-	褐色	-	口縁部 一条丸線
6	1層	弥生土器	壺	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	不明・タテハケ	ナデ	-	明赤褐色	-	底部
7	1層	弥生土器	壺	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ	-	-	淡茶褐色	二次加熱 赤変	底部 重の底部の可能性あり
8	1層	弥生土器	壺	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ	ナデ	-	褐色	二次加熱 赤変	底部
9	1層	弥生土器	壺	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ	ナデ	-	淡褐色	二次加熱 赤変	底部
10	1層	弥生土器	壺	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ・底ナデ	ナデ	-	茶褐色	-	底部
11	1層	弥生土器	壺	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ	-	-	茶褐色	二次加熱 赤変	底部
12	1層	弥生土器?	?	-	-	砂粒多い 在地	手づくね	ヨコナデ・底おさえ 指圧痕	黒斑	黒斑	褐色	二次加熱 赤変	底部?

小迫辻原 B 区-3号 竪穴住居：弥生時代前期後半～中期初頭

D-00-住29

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは複元径・単位:cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			器高	口径				
1	1層	弥生土器	壺	5.8以上	(20.6)	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ	-	黒斑	茶褐色~ 黒茶褐色	-	口縁片
2	1層	弥生土器	壺	-	-	砂粒多い 在地	-	タテハケ(6~7本/1cm)・ナデ	(刺繍)	-	黒斑	二次加熱による 赤変	底部片

小迫辻原 B 区-4号 竪穴住居：古墳時代前期前半

A-C3 C4-住3

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは複元径・単位:cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			器高	口径				
1	4層下部・焼絶時一拵	土師器	壺 D	-	頸部(9.2)	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケの上に派林文・ナナメハケ(6本/1cm)	ナナメハケ→上部ヘラケズリ(7本/1cm)・ 頸部下に指圧痕	黒斑	淡褐色・黒 灰色・赤茶色	-	頸部下に派林文・O・4溝・13,14,15,22溝と接合
2	4層下部・焼絶時一拵	土師器	壺 D	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(9本/1cm)・ナナメハケ(4本/1cm)	ナナメハケ	黒斑	淡褐色~ 黒灰色	-	O・4溝・22溝と接合
3	4層下部・焼絶時一拵	土師器 (緑)	壺 D (車口)	36.3	19.2	砂粒多い 在地	横上げ	頸部に細いタテハケ・上部ヨコナデ	ヨコナデ	黒斑	淡褐色	-	わずかに平底のこる B-10住 3層一拵と接合
4	4層下部・焼絶時一拵	土師器	壺 A	-	頸部(14.5)	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(12~13本/1cm)・(車行タテハケのこる)	ナナメハケ(9本/1cm)・指圧痕・接合痕 のこる	-	淡黄白色 淡褐色~ 黒灰色	二次加熱 スス付層	-
6	4層下部・焼絶時一拵	土師器	壺 A(D)	-	-	砂粒多い 散入	横上げ	方向性のないハケ(7・9本/1cm)	ヘラケズリ	-	赤褐色~ 黒色	二次加熱による 赤変 スス付層	地床焼土上面胎土に金雲母多い
7	4層下部・焼絶時一拵	土師器	壺 A	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナナメハケ(6本/1cm)・(タテハケのこる)	ナナメハケ(4本/1cm)の上に大きいヨコハ ケ	-	明茶褐色	-	底部全体圧痕
8	4層下部・焼絶時一拵	土師器	壺 A(D)	-	頸部(10.8)	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(9本/1cm)→ヨコハケ(8本/1cm)→ タテヘラケズリ	ナナメハケ・指ナデ→ヘラケズリ	黒斑	暗褐色	二次加熱 赤変	-
9	4層下部・焼絶時一拵	土師器	壺 B(D)	-	12.4	砂粒多い 在地	横上げ	平行タテハケ・ヨコハケ・口縁部ヨコナデ	ヘラケズリ・横方向の指痕	黒斑	淡褐色	二次加熱 スス付層	上半球形 逆におかれる
10	4層下部・焼絶時一拵	土師器	壺 D	16.6	14.3	砂粒多い 在地?	横上げ	タテハケ→ヨコハケ(9本/1cm)・頸部ヨコハ ケ	ヘラケズリ	-	黄灰(白)色 淡褐色~ 淡褐色	-	完形
11	4層下部・焼絶時一拵	土師器	壺 D	-	-	砂粒多い 散入?	横上げ	ヨコハケ(9本/1cm)	ヨコ方向のヘラケズリ	-	淡褐色~ 灰色	二次加熱 スス付層	胎土に金雲母多い
12	4層下部・焼絶時一拵	土師器	壺 D	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナナメハケ(6・8・10本/1cm)	ヘラケズリ	黒斑	淡褐色~ 灰色	二次加熱 スス付層	-

No	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸法は復元径・単位cm)		胎土	成形	調整		使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面		
13	2層・ゴミ付用後の堆積	土師器	高坏B	—	21.0	—	—	—	—	—	—
14	4層下部・床直上・廃絶時一括	土師器	高坏	—	—	—	—	—	—	—	—
15	4層下部・床直上・廃絶時一括	土師器	高坏	—	(17.6)	—	—	—	—	—	—
16	4層下部・床直上・廃絶時一括	土師器	高坏A	26.0	—	—	—	—	—	—	—
17	4層下部・床直上・廃絶時一括	土師器	小型台付鉢A	—	—	—	—	—	—	—	—
18	4層下部・床直上・廃絶時一括	土師器	片付鉢A	(25.2)~(28.2)	—	—	—	—	—	—	—
19	4層下部・床直上・廃絶時一括	土師器	鉢B	12.6	19.8	—	—	—	—	—	—
20	4層下部・床直上・廃絶時一括	土師器	小型鉢B?	(8.3)	(10.6)	—	—	—	—	—	—
21	4層下部・土壌1内・廃絶時一括	土師器	小型鉢(A)?	(9.9)	(11.4)	—	—	—	—	—	—
22	4層下部・床直上・廃絶時一括	土師器	小型鉢A(D)	(6.4)	(14.6)	—	—	—	—	—	—
23	4層下部・床直上・廃絶時一括	土師器	小型鉢A(D)	—	(9.8)	—	—	—	—	—	—
24	4層下部・土壌1内・廃絶時一括	土師器	小型鉢A	(5.5)	(10.0)	—	—	—	—	—	—
25	4層上部・廃絶時一括	土師器	碗A	4.8~5.0	7.8	—	—	—	—	—	—
26	4層下部・床直上・廃絶時一括	土師器	碗	(4.0)	(16.2)	—	—	—	—	—	—
27	4層下部・床直上・廃絶時一括	土師器	碗A	4.2	(11.2)	—	—	—	—	—	—
28	4層下部・土壌1(14層)・廃絶時一括	土師器	碗A(D)	4.2	11.4	—	—	—	—	—	—
29	4層下部・土壌1(14層)・廃絶時一括	土師器	碗A	(4.3)	(10.6)	—	—	—	—	—	—
30	4層下部・混入?	土師器	碗A	(3.5)	(9.6)	—	—	—	—	—	—
31	1層上部・廃絶時一括	土師器	碗D	(3.1)	(9.8)	—	—	—	—	—	—
32	1層上部・廃絶時一括	土師器	ニニチュア鉢A	3.8~4.1	5.5	—	—	—	—	—	—

A-D3-住5

小迫土原B区-5号 壺穴住居・古墳時代前期前半

No	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸法は復元径・単位cm)		胎土	成形	調整		使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面		
1	1層流入	土師器	壺A (複合口縁)	—	(25.8)	—	—	—	—	—	—
2	1層・廃絶時一括	土師器	壺A (複合口縁)	—	(17.4)	—	—	—	—	—	—
3	1層	土師器	壺A (複合口縁)	—	—	—	—	—	—	—	—
4	4層・廃絶時一括	土師器	壺A (複合口縁)	—	(14.8)	—	—	—	—	—	—
5	4層・廃絶時一括	土師器	壺A	—	—	—	—	—	—	—	—
6	3~5層流入	土師器	壺A	—	—	—	—	—	—	—	—
7	1層・廃絶時一括	土師器	壺A (厚口縁)	—	15.8	—	—	—	—	—	—
8	1層・廃絶時一括	土師器	壺A	43.4	19.4	—	—	—	—	—	—
9	2層・廃絶時一括	土師器	壺A	39.1	21.1	—	—	—	—	—	—
10	1層・廃絶時一括	土師器	壺A	24.9以上	(21.6)	—	—	—	—	—	—
11	1上面(3~6層)	土師器	壺A	—	(18.2)	—	—	—	—	—	—
12	1層・廃絶時一括	土師器	壺A	—	—	—	—	—	—	—	—

A-D3-住5

13	土庫1-0層・廃絶時一括	土師器	壺A	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ タタキ成形	平行タタキ→タテハケ(7~8本/1cm)	ナナメハケ(7本/1cm)→タテナデ	黒斑	黒褐色~ 赤褐色	二次加熱 スス付着	長胴器底部
14	3層	土師器	壺A	—	(21.6)	—	砂粒少い 在地	—	タテハケ→ナデ	ナナメハケ→ナデ	—	—	—	口縁部
15	2層・廃絶時一括	土師器	壺A (異口縁)	—	(16.6)	—	砂粒少い 在地	—	ヨコナデ・タテハケ・タテミガキ?	ヨコナデ	—	—	—	口縁部
16	3-4層	土師器	壺A	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ナナメハケ(7本/1cm)	タテハケ(7本/1cm)	—	—	—	口縁片
17	3-4層	土師器	壺A	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	タテ・ヨコハケ	ヨコハケ	—	—	—	口縁片
18	上面	土師器	壺D	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ	ハラケズリ	—	—	—	頸部下閉部
19	1層・廃絶直前の流入	土師器	壺F	—	(12.4)	—	砂粒少い 在地	積上げ	タテハケ→ナデ(タタキ痕?)	ヨコナデ→ハラケズリ	—	—	—	口縁部
20	3層	土師器	小型壺A	—	(13.1)	—	砂粒多い 輸入?	積上げ タタキ成形	ヨコハケ(6本/1cm)・ナナメハケ(6~7本/1cm)	ナナメハケ(6~7本/1cm)	—	—	—	タテ長裏 胎土に白堊多い
21	3層	土師器	小型壺A	—	(16.2)	—	砂粒多い 在地	積上げ タタキ成形	平行タタキ→ヨコナデ	ヨコハケ→ヨコナデ	—	—	—	口縁部
22	廃絶時一括・炉2内	土師器	小型壺A	—	(17.0)	—	砂粒多い 在地	積上げ タタキ成形	平行タタキ→タテハケ(7本/1cm)	ヨコハケ(7本/1cm)→ヨコナデ	黒斑	淡茶褐色~ 明褐色	二次加熱による 赤変	口縁~胴部片 底部 平底
23	1層	土師器	壺A	—	—	3.2	砂粒多い 在地	積上げ	ハラケズリ	ナデ・指圧痕	—	—	—	底部 平底
24	上層	土師器	壺A?	—	—	3.8	砂粒多い 在地	積上げ	ナデ	ナデ	—	—	—	底部 平底
25	3層	土師器	壺B	—	—	4.4	砂粒多い 在地	?	不明	指圧→くずれた蓑杖ハケ(4本/1cm)	—	—	—	底部 平底
26	2層・廃絶時一括	土師器	壺B	—	—	(6.0)	砂粒多い 在地	—	タテハケ(7本/1cm)	蓑杖ハケ(7本/1cm)	—	—	—	底部 平底
27	3~5層	土師器	支脚A 上部	4.5以上	—	—	上部程 砂粒多い 在地	手づくね	平行タタキ+指圧痕	平行タタキ→ヨコナデ	黒斑	明茶褐色	—	内部 中空
28	3-4層	土師器	支脚A	5.0以上	—	—	上部程 砂粒多い 在地	手づくね	ナデ	ナデ	—	—	二次加熱による 赤変	故意に壊されている可能性あり・内部 中空 穿孔あり
29	3~5層	土師器	高坏A	—	(21.9)	—	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)→ヨコナデ	ナナメハケ(6本/1cm)→ヨコナデ	—	—	—	—
30	2層・床面にありこむ	土師器	高坏A	6.5以上	—	—	砂粒多い・穴 形 胎着・在地	円蓋充填	タテハケ(7本/1cm)→丁寧なナデ	しぼり痕	—	—	—	壁六使用中の遺物・胴部 穿孔(外から)・胎土に黒斑石
31	2層・廃絶時一括・政層 31の上	土師器	高坏A	14.0以上	—	16.0	砂粒多い 在地	円蓋充填?	タテハケ(10本/1cm)→タテハラミガキ	タテハケ(10本/1cm)→丁草なナデ 斜めらせん状のハケ(10本/1cm)・ヨコ方 向のハラケズリ	—	—	—	実形 胴部・穿孔(ココ外から内)・胴部のみ横 位に
32	4層	土師器	高坏A?	—	—	—	砂粒多い 在地	円蓋充填?	タテハケ(6~7本/1cm)	ナデ・ヨコハケ	—	—	—	胴部 穿孔(径0.6cm)
33	4-5層	土師器	高坏A	—	—	—	砂粒多い 在地	円蓋充填	タテハケ(7本/1cm)・ナデ	しぼり痕→ナデ	黒斑	淡褐色	—	—
34	4層	土師器	高坏A	—	—	—	砂粒多い 在地	円蓋充填	タテハケ(7本/1cm)・ナデ	しぼり痕→ナデ	小黒斑	淡褐色	—	—
35	2層・床面にありこむ	土師器	高坏A	—	—	—	砂粒多い 在地	円蓋充填	タテハケ(6本/1cm)	ヨコハケ→ハラケズリ・しぼり痕	—	—	—	—
36	3~5層	土師器	高坏A(D)	20.5	—	13.4	砂粒多い 在地	円蓋充填	タテハケ(7本/1cm)→ハラケズリ	ヨコハケ(4・7本/1cm)→ナデ	黒斑	淡褐色	—	—
37	4層・廃絶時一括	土師器	台付鉢A	20.5	—	17.4	砂粒多い 在地	積上げ さじこみ	タテハケ(9本/1cm) タテハケ(6本/1cm)・一部ヨコハラミガキ・ハ ラケズリ	ヨコハケ	—	—	—	壁六使用中の遺物・胴部 (しい)
38	2層・廃絶時一括	土師器	台付鉢A	—	くひれ 22.0	—	砂粒多い 在地	積上げ 円蓋充填?	タテハケ(6本/1cm)→一部ヨコハラミガキ・ハ ラケズリ	ナデ・ヨコハケ	黒斑	淡茶褐色	—	—
39	2層・廃絶時一括	土師器	台付鉢A	—	6.3	—	砂粒多い 在地	積上げ 円蓋充填?	タテハケ(6~7本/1cm)	洗いタテハケ(6~7本/1cm)	—	—	—	—
40	3~5層	土師器	台付鉢A	—	—	—	砂粒多い 在地	?	タテハケ(9本/1cm)→ナデ	指ナデ	—	—	—	—
41	3~5層	土師器	台付鉢A	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ	ヨコナデ	—	—	—	—
42	埋土中	土師器	鉢A	9.0以上	(25.8)	—	砂粒多い 在地	積上げ 燻積み	タテ・ナナメハケ(8本/1cm)・ヨコナデ	ナデ・ヨコハケ(6本/1cm)	黒斑	明褐色	—	—
43	4層・廃絶直前の流入	土師器	直口壺A	9.0以上	(13.9)	—	砂粒多い 在地	積上げ (複合痕のこ)	タテハケ(9本/1cm)・ナナメハケ	ヨコハケ(8本/1cm)・ナデ	—	—	—	—
44	3~5層	土師器	鉢A	7.0以上	15.6	—	砂粒多い 在地	積上げ	ナナメハケ(6本/1cm)→ヨコナデ	ヨコハケ(9本/1cm)→タテハラミガキ	—	—	—	—
45	2層・床面直上・廃絶時一括	土師器	小型鉢 A(D)?	8.2	(12.1)	—	砂粒多い 在地	積上げ タタキ成形	平行タタキ→タテハケ(7本/1cm)	ヨコハケ(7本/1cm)・指圧痕	小黒斑	明茶褐色~ 褐色	—	—
46	3-4層流入	土師器	小型壺A	3.5以上	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(6~7本/1cm)	ハラケズリ	黒斑	淡褐色	—	—
47	2層・廃絶時一括	土師器	ミニチュア鉢	2.9以上	(6.4)	—	砂粒多い 在地	手づくね	指圧痕	ヨコハケ(10本/1cm)・指圧痕	—	—	—	—

小迫辻原 B区-6号 竪穴住居：古墳時代前期前半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは標準口径・単位cm)		胎土	成形	調面		整内面		焼成	色調	使用痕	備考
				口径	胴部最大径			外	内	外	内				
1	4層	土師器	壺A (複合口縁)	—	—	砂粒多い 在地	輪組み	ナナメハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	—	赤褐色	二次加熱 スス付着	口縁部片 一条刻目台形突起	
2	2~4層(上層)	土師器	壺A	—	—	砂粒多い 在地	輪上げ タタキ成形	ナナメハケ(10本/1cm)・右より平行タタキ	ナナメハケ	ナナメハケ(7本/1cm)	—	暗褐色	二次加熱 スス付着	胴部片 指による一条三角突起	
3	6層・底絶時一拵	土師器	壺A	—	(49.0)	砂粒多い 在地	輪上げ タタキ成形	ヨコナデ・平行タタキ	ヨコナデ	ヨコナデ(10本/1cm)・一筋タテハケ	黒斑	暗褐色	—	胴部片	
4	4層	土師器	壺A	—	(30.2)	砂粒多い 在地	輪上げ	タテハケ	タテハケ	ナナメハケ	黒斑	淡褐色	—	胴部片 一条刻目突起	
5	2~4層	土師器	壺A	—	(20.2)	砂粒多い 在地	輪上げ	タテハケ(10本/1cm)	タテハケ	ヨコナデ(6本/1cm)	—	茶褐色	—	口縁部	
6	5層・土壁1埋土中	土師器	壺A	—	(19.1)	砂粒多い 在地	輪上げ	ナナメハケ	ナナメハケ	ヨコナデ	—	茶褐色	—	口縁部	
7	6層・床面直上	土師器	高坏A	—	(18.5)	砂粒多い 在地	輪上げ	ナナメハケ	ナナメハケ	ヨコナデ	—	淡褐色	—	坏部	
8	6層	土師器	鉢A	—	—	砂粒多い 在地	輪上げ	ナナメハケ	ナナメハケ	ナナメハケ	黒斑	淡褐色	二次加熱	—	
9	4層	土師器	鉢A	—	(24.3)	砂粒多い 在地	輪上げ	ナナメハケ(6~7本/1cm)・指圧痕のある	ナナメハケ	ヨコナデ(8本/1cm)	—	茶褐色	—	—	
10	土壁1埋土中	土師器	小型壺	—	—	砂粒多い 在地	輪上げ	タテハケ	タテハケ	指ナデ	—	赤褐色	二次加熱による	胴部片 小迫2期	
11	土壁1埋土中	土師器	小型鉢D	—	—	砂粒多い 在地	輪上げ	タテハケ(4本/1cm)	指ナデ	指ナデ(指圧痕のある)	—	茶褐色	—	—	
12	4層	土師器	碗A	—	9.1	砂粒多い 在地	輪上げ タタキ成形	タテハケ・ヨコナデ・ヨコ方向の平行タタキ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒斑	褐色	—	—	—
13	埋土中	土師器	小型鉢A	—	(9.6)	砂粒多い 在地	輪上げ	ナナメハケ(6本/1cm)・タテヘラミガキ	ナナメハケ	ヨコナデ(6本/1cm)・タテヘラミガキ	—	茶褐色	—	—	—
14	4層	土師器	碗B	—	8.2	砂粒多い 在地	手づくね	ナメ・指圧痕	底縁状ハケ	底縁状ハケ	黒斑	茶褐色	—	—	壳形 正位におかれる

小迫辻原 B区-8号 竪穴住居：古墳時代前期前半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは標準口径・単位cm)		胎土	成形	調面		整内面		焼成	色調	使用痕	備考
				口径	胴部最大径			外	内	外	内				
1	2層・底絶時一拵	土師器	壺A (複合口縁)	—	(24.0)	砂粒多い 在地	輪組み	ヨコ方向の平行タタキ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒斑	赤褐色	—	—	口縁部 頸部 三角突起
2	1層(埋入)	土師器	壺A	—	—	砂粒多い 在地	輪上げ	平行タタキ	ヨコナデ	ヨコナデ	—	黒黒褐色	二次加熱による	—	貼付台形突起・突起上に平行タタキあり
3	2層・底絶時一拵	土師器	壺A	—	3.8	砂粒多い 在地	輪上げ	平行タタキ	ヨコナデ	ヨコナデ	—	暗赤褐色	二次加熱による	—	底部
4	2層・底絶時一拵	土師器	壺A	—	(27.7)	砂粒多い 在地	輪組み	平行タタキ	指圧痕	指圧痕	黒斑	にぶい赤褐色	二次加熱による	—	頸部 貼付一条三角突起
5	2層+土柱穴1内+炉内・底絶時一拵	土師器	壺A	—	(20.0)	砂粒多い 在地	輪上げ	平行タタキ	タテハケ	タテハケ	—	褐色	二次加熱	—	口縁部
6	2層	土師器	壺A	—	—	砂粒多い 在地	輪上げ	平行タタキ	ヨコナデ	ヨコナデ	—	にぶい赤褐色	二次加熱	—	口縁部
7	2層・底絶時一拵	土師器	壺A	—	3.4	砂粒多い 在地	輪上げ	平行タタキ	ヨコナデ	ヨコナデ	—	暗褐色	二次加熱あり	—	底部 小平底・内面に黒色物付着
8	2層・床面直上・底絶時一拵	土師器	壺A	40.5	(19.2)	砂粒多い 在地	輪上げ	平行タタキ	タテハケ	タテハケ	黒斑	茶褐色	二次加熱	—	ほぼ壳形に還元
9	2層	土師器	壺B	—	—	砂粒多い 在地	輪上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒斑	にぶい黄褐色	—	—	口縁部片
10	2層・底面直上	土師器	高坏A	18.8	28.9	砂粒多い 在地	輪上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	ナメ	黒斑	にぶい褐色	—	—	ほぼ壳形に還元
11	1層・ベッド・床面直上	土師器	高坏A	—	—	砂粒多い 在地	輪上げ	ナメ	ナメ	ナメ	—	にぶい褐色	—	—	頸部 径4.2cm・穿孔3個
12	2層・底絶時一拵	土師器	碗A	4.6	9.8	砂粒多い 在地	手づくね	指圧痕	指圧痕	指圧痕	黒斑	淡黄褐色	—	—	ほぼ壳形

小迫辻原 B区-9号 竪穴住居：古墳時代前期前半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは標準口径・単位cm)		胎土	成形	調面		整内面		焼成	色調	使用痕	備考
				口径	胴部最大径			外	内	外	内				
1	床面直上	土師器	壺A	—	—	砂粒多い 在地	輪上げ	不明	不明	ナメ	黒斑	黒茶褐色	二次加熱	—	底部 丸底
2	床面直上	土師器	小型壺D	—	(16.2)	砂粒多い 在地	—	ナメ	ナメ	ナメ	黒斑	明褐色	—	—	胴部片

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			外 面	内 面				
1	1層流入	土師器	壺A (椀合口縁)	—	(14.6)	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ・刻目	ヨコナデ	—	淡褐色	—	口縁部片 椀合口縁
2	1~2層流入	土師器	壺A (椀合口縁)	—	(14.2)	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	—	明褐色	—	口縁部片 椀合口縁
3	2層流入	土師器	壺A	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ・X字状刻目	ナデ	—	淡褐色	—	頸部片・刻目帯
4	3層・廃絶時一括(下部)	土師器	壺A	38.8	16.4	25.0	横上げ タタキ成形	平行タタキ→タテハケ(7本/10本/1cm)→指ナデ	指ナデ	黒斑	淡茶褐色	—	宍形でおかれている。側面に1ヶ所、内側から抜いたような穴があく。黒斑(対向位に2ヶ所)
5	3層~床面直上・廃絶時一括(上部)	土師器	壺A	—	(21.8)	(24.0)	横上げ タタキ成形	タテハケ(5本/1cm)	ナデ	黒斑	茶褐色~ 黒灰色	—	上半
6	3層・床面直上・廃絶時一括(上部)	土師器	壺A	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	平行タタキ→タテハケ	ナデ	黒斑	茶赤褐色~ 黒灰色	二次加熱による 赤変	下半(底部丸底)
7	3層・廃絶時一括(上部)	土師器	壺A	—	—	(25.6)	横上げ	タテハケ(6本/1cm)	タテハケ(6本/1cm)・ナデor板ナデ	黒斑	黒灰色	—	丸底 胎土に金雲母少し
8	3層・廃絶時一括(上部)	土師器	壺A	—	22.8	—	横上げ	タテハケ(6本/1cm)	ヨコハケ(6本/1cm)・不明	黒斑	(外)淡茶褐色 (内)淡褐色~ 黒灰色	二次加熱による 赤変	—
9	3層・廃絶時一括(上部)	土師器	壺A	—	—	—	横上げ	ナデ(剥離が激しい)	ナデ	—	(外)淡褐色 (内)淡褐色	二次加熱内面 にスス付着	底部 やや平度のこす丸底
10	3層・廃絶時一括(上部)	土師器	壺A	—	(22.0)	—	横上げ	タテハケ(9・10本/1cm)	指ナデ・タテハケ(8本/1cm)→ヘラケズリ	黒斑	灰褐色~ 黒灰色	二次加熱による 赤変	やや尖った丸底・技法にヘラケズりを入れている
11	3層・廃絶時一括(上部)	土師器	壺A	—	—	—	横上げ	タテハケ(6本/1cm)	タテハケ(6本/1cm)→ヘラケズリ	黒斑	赤淡褐色~ 黒灰色	二次加熱による 赤変	底部(丸底)・内面にヘラケズリ技法と入れられる
12	3層・床面直上・廃絶時一括(下部)	土師器	壺A	34.9	17.0	28.0	横上げ タタキ成形	平行タタキ→細いタテハケ	ヨコハケ(6本/1cm)→ヘラケズリ・指ナデ	—	灰褐色~ 黒灰色	—	円錐形で、楕円形におかれる。内面にヘラケズリ技法と入れられる
13	3層・廃絶時一括(上部)	土師器	壺A	—	—	—	横上げ タタキ成形	右よりの平行タタキ→タテハケ(8本/1cm)	タテヘラケズリ	—	淡褐色	—	底部(丸底)・外面に右よりのタタキ・内面にヘラケズリ技法と入れられる
14	3層・上部	土師器	壺A	—	(17.2)	—	横上げ タタキ成形	接合痕→水平な平行タタキ	ヨコハケ・板ナデ・接合痕のこる	—	淡褐色~ 黒灰色	二次加熱 スス付着	口縁部
15	3層・床面直上・廃絶時一括(下部)	土師器	小型壺B	13.2	13.6	(13.9)	横上げ タタキ成形	平行タタキ(上半)・指ナデ(下半)	指ナデ・ナデ(指圧痕のこる)	—	赤褐色・黒色 黒灰色	赤変 スス付着	—
16	3層・上部	土師器	支脚A	6.7~8.0	—	9.4	横上げ タタキ成形	指ナデ	指ナデ	—	淡赤褐色	二次加熱による 赤変	—
17	3層・床面直上・廃絶時一括(下部)	土師器	高坏A	20.0	30.6	15.3	横上げ 丸底成形	丸底成形	ヨコハケ(坏部)・ヨコハケ(しほり痕)・ナデ	—	茶褐色~ 暗褐色	—	底部 透し穴 3ヶ所
18	3層・廃絶時一括(上部)	土師器	高坏B	—	—	—	横上げ 丸底成形	丸底成形	ナデ・しほり痕	—	黄褐色	—	胴部 伝統的V様式系
19	3層・廃絶時一括(上部)	土師器	高坏C	—	—	(17.0)	横上げ	ヨコナデ	ヨコハケ	—	茶褐色	—	胴部 底折部あり(上・下・4)
20	3層・床面直上・廃絶時一括(上部)	土師器	小型器台C	—	—	(14.8)	横上げ 胎土入り	ナデ(剥離激しい)	ナデ(剥離激しい)	—	明褐色	—	炭化材の下にある。胴部
21	3層・廃絶時一括(上部)	土師器	台付鉢A	—	—	10.6	横上げ 胎土入り	皿部(ナメハケ・タテヘラミガキ)・台部(細いタテハケ)	ヨコハケの上下にタテヘラミガキ・板ナデ	黒斑	淡褐色~ 黒灰色	—	口縁部径 12.2cm、台部径 3.6cm、台部穿孔 3個・逆さにおかれている
22	3層・廃絶時一括(上部)	土師器	大型鉢A	—	—	—	横上げ	タテ・ナメハケ(5本/1cm)	ヨコハケ(6本/1cm)	黒斑	淡褐色~ 黒灰色	—	復元頸部径 30.2cm・片口の可能性がある
23	3層・廃絶時一括(上部)	土師器	壺A	(4.4)	(8.6)	—	横上げ	ナデ・一部板ナデ	ナデ	黒斑	淡黄白色~ 黒灰色	—	石多い

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			外 面	内 面				
1	4・5層・土壁・内廃棄一括	土師器	壺A?	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ	ヨコナデ・ナデ	黒斑	淡褐色~ 明褐色	—	復元くハレ径 12.7cm
2	2層・床面直上・廃絶時一括	土師器	壺A(B)	—	(22.4)	(28.1)	輪組み タタキ成形	平行タタキ(水平)→タテハケ(6本/1cm)	ヨコナデ(指圧痕のこる)	黒斑	淡褐色	二次加熱による 赤変・スス付着	胴部 1/2形 内面接合痕が明確
3	4・5層・土壁・内廃棄一括	土師器	高坏B	—	—	砂粒多い 在地	差し込み	ナデ	ナデ	黒斑	淡褐色	—	伝統的V様式系?
4	3層・床面直上・廃絶時一括	土師器	高坏B	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテヘラミガキ(下部ヘラナデ)	薄板ハケ	—	黒灰褐色	—	—
5	1~2層流入	土師器	鉢A?	—	(22.8)	—	横上げ	ハケ	板ナデ	黒斑	明褐色	—	二次加熱による
6	4・5層・土壁・内廃棄一括	土師器	小型壺A?	—	(10.0)	—	横上げ	ナデ(急烈)	板ナデ	—	淡褐色	—	二次加熱による 赤変

4・5層・土槨1内腕葉一 7層	土師器	小型碗 B	6.7 (13.9)	—	3.8	砂粒多い 在り	種上げ	指圧痕→タテヘラケズリ	ヨコハケ→ナデ	黒斑	淡茶褐色～ 灰茶褐色	—	壳形 伝統的V様式系の底部
8層・底絶時一括 2層・底面直上・底絶時	土師器	台中碗 B	6.0	—	6.0	砂粒多い 在り	手づくね?	指圧痕→ヨコナデ	—	黒斑	淡茶褐色～ 淡茶褐色	—	壳形
9一括	土師器	碗 A	3.5 (10.8)	—	—	砂粒多い 在り	手づくね?	龜裂+指圧痕→ヨコナデ	指圧痕→ナデ	黒斑	黒褐色～ 茶褐色	—	1/2壳形 穿孔(直径 7mm)

小迫辻原 B区-12号 竪穴住居、古墳時代前期前半

D-O19-住31

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格()つきは複元径・単位(cm)			胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径	胴部最大径			底径	外面				
1層・底面直上	土師器	壺 A (複合口縁)	—	(19.0)	—	砂粒多い 購入	縁積み	タテハケ→ヨコナデ	ヨコハケ	黒斑	明褐色	—	口縁片 金雲母多い・破片が散在	
2層	土師器	壺 (D)?	—	(17.7)	—	砂粒多い 在り	種上げ	ヨコナデ→ヨコヘラケズリ	ナデ→ヨコヘラミガキ・ナデ→ヘラケズリ	黒斑	暗褐色	—	口縁片	
3層～2層・土槨1上面	土師器	高杯?	—	—	(25.4)	砂粒多い 購入?	種上げ	ハケ・ヨコヘラミガキ	ヨコヘラミガキ	—	暗茶褐色	—	脚部つぶれている	
4層・底面直上	土師器	高杯 A?	—	—	—	砂粒多い 在り	種上げ	ナデ	ナデ	—	暗褐色	—	脚部・穿孔あり・金雲母多い	
5層	土師器	壺 A (D)	—	—	—	砂粒多い 在り	種上げ	柄ナデ・ナデ	指圧痕→ヘラケズリ	黒斑	明褐色	—	床面ややういている	
6層・底面直上	土師器	鉢 A	(8.3)	(18.6)	—	砂粒多い 在り	種上げ	ナデ・指圧痕	ナデ・指圧痕	—	黒褐色	—	保持具? ひとつ底の可能性もあり	
7層・底面直上	土師器	ミニチュア碗	4.0	7.6	—	砂粒多い 在り	手づくね	指圧痕	指圧痕	黒斑	明褐色	—	正位におかれた赤形品がつぶれている	

小迫辻原 B区-13号 竪穴住居、奈良時代

D-UO-住33

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格()つきは複元径・単位(cm)			胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径	胴部最大径			底径	外面				
1層・底面直上	須置器	坏身	—	—	—	砂粒少ない	ロクロ成形	回転ナデ	—	—	外 暗茶褐色 (自然釉・内) 淡青灰色	—	口縁片	
2層・底絶時一括	土師器	須置用 製土器	—	—	—	砂粒多い 購入	種上げ	ナデ・指圧痕(刺繍が深い)	ナデ	—	明褐色	—	二次加熱による 逆縁形 上に焼土のる・胎土に石差多い	

小迫辻原 B区-7号 竪立柱建物、中世

D-HO・HO-建物28

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格()つきは複元径・単位(cm)			胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径	胴部最大径			底径	外面				
1柱4・柱穴埋土	白磁	皿	3.3	(11.0)	—	(7.0) 灰色	ロクロ成形	釉かけ 口ばげ・口縁部は無釉	—	—	—	淡青緑色	—	口ばげ皿

小迫辻原 B区-9号 竪立柱建物、中世

D-H19・119-建物37

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格()つきは複元径・単位(cm)			胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径	胴部最大径			底径	外面				
1柱穴1	中国製青磁	碗	—	—	—	緑色	ロクロ成形	釉かけ	—	—	—	淡青緑色	—	口縁部片(文)縁部片・貫入あり
2柱穴7	中国製青磁	碗	—	—	—	淡青緑色	ロクロ成形	釉かけ	—	—	—	淡青緑色	—	口縁部片(文)縁部片
3柱穴5	中国製青磁	碗	—	—	—	灰色	ロクロ成形	釉かけ・全面貫入	—	—	—	淡青緑色	—	口縁部片
4柱穴5	土師質土器	小皿?・坏?	—	—	—	砂粒少ない 在り	糸切り?	回転ヨコナデ	—	—	—	明褐色	—	底部片

小迫辻原 B区-11号 竪立柱建物、中世

D-I19-建物25

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格()つきは複元径・単位(cm)			胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径	胴部最大径			底径	外面				
1柱7	土師質土器	坏身	—	—	—	—	ロクロ成形	回転ナデ・回転糸切り底	ナデ	—	—	褐色	—	—

小迫辻原 B区-1号 土塚、弥生時代前期後半～中期初頭

D-UO-住471

NO	出土位置 ・遺構	種別	器種	規格()つきは複元径・単位(cm)			胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径	胴部最大径			底径	外面				
1層	弥生式土器	壺 A	—	—	—	砂粒多い 在り	種上げ	ヘラ文様・ミガキ	ヨコヘラミガキ	—	淡褐色	—	—	頭部～胴部片・同一個体(B-3土1)
2層	弥生式土器	壺	—	—	—	(6.6)	種上げ	タテハケ(底)不明・刺繍	不明(刺繍)	—	明茶褐色	—	二次加熱 赤変	底部

小迫上原 B区-2号 土壙:弥生時代前期後半~中期初頭

Table with columns: NO, 出土位置・遺構, 種別, 器種, 規格(寸)つきは復元径・単位(cm), 胎土, 成形, 調整面, 焼成, 使用痕, 備考. Rows 1-5.

小迫上原 B区-3号 土壙:弥生時代前期後半~中期初頭

Table with columns: NO, 出土位置・遺構, 種別, 器種, 規格(寸)つきは復元径・単位(cm), 胎土, 成形, 調整面, 焼成, 使用痕, 備考. Rows 1-13.

小迫上原 B区-4号 土壙:弥生時代前期後半~中期初頭

Table with columns: NO, 出土位置・遺構, 種別, 器種, 規格(寸)つきは復元径・単位(cm), 胎土, 成形, 調整面, 焼成, 使用痕, 備考. Rows 1-1.

小迫上原 B区-5号 土壙:弥生時代前期後半~中期初頭

Table with columns: NO, 出土位置・遺構, 種別, 器種, 規格(寸)つきは復元径・単位(cm), 胎土, 成形, 調整面, 焼成, 使用痕, 備考. Rows 1-3.

小迫辻原 B区-6号 土壙:弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つきは複元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
12層一拵		弥生式土器	甕A	-	-	砂粒多い在地	横上げ	不明(剥離)	平滑なナデ	黒斑	褐色	-	口縁部~胴部
22層一拵		弥生式土器	甕A	(24.8)	-	砂粒多い在地	横上げ	タテハケ(10本/1cm)・割離	平滑なナデ	黒斑	鈍褐色	-	口縁部刻目・一条沈線
31層		弥生式土器	甕	-	-	砂粒多い在地	横上げ	タテハケ(10本/1cm)・(底)未割離	平滑なナデ	黒斑	浅黄褐色	-	底部
42層一拵		弥生式土器	甕(瓶)	-	-	砂粒多い在地	横上げ	タテ方向のナデ・(底)コナデ	平滑なナデ・ヘラケズリ	黒斑	褐色	二次加熱赤変	底部・底を穿孔(直径1cm・内径0.65cm)

小迫辻原 B区-7号 土壙:弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つきは複元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
11層		弥生式土器	甕B	-	-	砂粒多い在地	横上げ	ナデ・割離	平滑なナデ	-	黄褐色	-	頸部削出突帯
21層		弥生式土器	甕(ニニチュア)	-	-	砂粒多い在地	手づくね	不明(剥離)・(底)ナデ	ナデ・割離	-	褐色	-	底部

小迫辻原 B区-10号 土壙:弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つきは複元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
11+2層		弥生式土器	甕A	-	-	砂粒多い在地	横上げ	不明(剥離)	平滑なナデ	-	淡褐色	-	口縁部
21+2層		弥生式土器	甕C	-	-	砂粒多い在地	横上げ	不明	平滑なナデ	-	淡褐色	-	口縁部(突帯突出)・一条三角突帯
31+2層		弥生式土器	甕	-	-	砂粒多い在地	横上げ	タテハケ・割離	不明	-	淡褐色(断片)色	二次加熱赤変	底部

小迫辻原 B区-11号 土壙:弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つきは複元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
11層		弥生式土器	甕B	-	-	砂粒多い在地	横上げ	不明(剥離)	平滑なナデ	-	淡灰褐色	-	口縁部刻目・はりつけ一条突帯刻目
21層		弥生式土器	甕B	-	(20.2)	砂粒多い在地	横上げ	不明(剥離)	平滑なナデ	-	明赤褐色	二次加熱赤変	胴部はりつけ一条突帯刻目

小迫辻原 B区-12号 土壙:弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つきは複元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1中央部一拵		弥生式土器	甕	-	-	(6.8)砂粒多い在地	横上げ	タテハケ(底)ナデ	平滑なナデ	-	明赤褐色~淡褐色	二次加熱赤変	底部a手法
2中央部一拵		弥生式土器	甕	-	-	7.0砂粒多い在地	横上げ	タテハケ(底)ナデ	ナデ	-	明赤褐色	二次加熱赤変 二次付着	底部・焼成後に穿孔・瓶に転用

小迫辻原 B区-13号 土壙:弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つきは複元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
12層一拵		弥生式土器	甕C	(18.1)	-	砂粒多い在地	横上げ	タテハケ(9本/1cm)・ナデ	平滑なナデ	-	明褐色	-	口縁部・No2上同一個体・はりつけ一家三角突帯
22層一拵		弥生式土器	甕	-	-	6.9砂粒多い在地	横上げ	タテハケ(3本/1cm)・(底)ナデ	平滑なナデ	-	茶褐色	-	底部・No1上同一個体
32層一拵		弥生式土器	甕A	(23.0)	(22.2)	砂粒多い断片	横上げ	タテハケ(6本/1cm)	平滑なナデ一部にハケ様のナデ	黒斑	茶褐色	二次加熱スス付着	口縁部~胴部 胎土に金雲母・石英混入
42層一拵		弥生式土器	甕C	(20.7)	-	砂粒多い在地	横上げ	不明(剥離)	平滑なナデ	-	淡褐色	二次加熱赤変	口縁部~胴部
52層一拵		弥生式土器	甕	-	-	(9.1)砂粒多い在地	横上げ	不明(剥離)	平滑なナデ	-	明褐色	二次加熱赤変	底部a,b手法

小迫辻原 B区-14号 土壙: 弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1層一括	弥生式土器	壺C	-	(16.6)	砂粒多い 在地	積上げ	不明(剥離)	ナテ	-	明褐色	-	口縁部 胎土に黒曜石混入
2	1層一括	弥生式土器	壺C	14.3以上	(22.1)	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)	平滑なナテ	-	明褐色	二次加熱 スス付着	口縁部~胴部 B-13土と接合 口縁部 胎土に金雲母・石英混入・同一個体 B-13土
3	1層一括	弥生式土器	壺C	-	-	織入	積上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	黒斑	明茶褐色	-	

D-M19-1-457

小迫辻原 B区-15号 土壙: 弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1層	弥生式土器	壺A?	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	ナナメハケ<ヨコナテ	ヨコナテ	-	淡褐色	-	口縁部
2	1層	弥生式土器	壺	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	-	明褐色	二次加熱 赤変	底部

D-L19-1-442

小迫辻原 B区-16号 土壙: 弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1層	弥生式土器	壺B	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	指圧痕・タテハケ	平滑なナテ	黒斑	褐色	-	口縁部 一条沈線・ほりつけ 一条三角突帯 刻目
2	1層	弥生式土器	壺	-	(11.0)	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(8本/1cm)<(底)ナテ	平滑なナテ	黒斑	淡黄褐色	二次加熱	底部

D-N18-1-439

小迫辻原 B区-17号 土壙: 弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1~3層	弥生式土器	壺A	-	(10.8)	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	黒斑	淡黄褐色	-	口縁部 胎土に黒曜石
2	1~3層	弥生式土器	壺B	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	不明(剥離)	不明なナテ	-	淡黄褐色	-	口縁部 ほりつけ 一条三角突帯
3	1~3層	弥生式土器	壺	-	-	7.6 砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(8本/1cm)<(底)ナテ	平滑なナテ	黒斑	褐色	二次加熱 赤変	底部 ab手法

D-N18・M18-1-448

小迫辻原 B区-18号 土壙: 弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1層下部	弥生式土器	壺A	-	(17.0)	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナテ	ヨコナテ	黒斑	明黄褐色	-	口縁部 刻目・一条沈線
2	1層下部	弥生式土器	壺A	-	(23.2)	砂粒多い 在地	積上げ	不明(剥離)	指圧痕・平滑なナテ	-	明黄褐色	二次加熱 赤変	口縁部 胎土に黒曜石 一条沈線

D-M18-1-449

小迫辻原 B区-19号 土壙: 弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	2層	弥生式土器	壺	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)<(底)ナテ	平滑なナテ	-	明茶褐色	二次加熱 スス付着	赤変 底部
2	2層	弥生式土器	壺	-	(7.9)	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)<(底)ナテ	平滑なナテ	-	灰茶褐色	-	底部
3	2層	弥生式土器	壺	-	(8.0)	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(4本/1cm)<(底)ナテ	粗いナテ	-	明黄褐色	二次加熱 赤変	底部
4	2層	弥生式土器	壺	-	-	4.9 砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ<(底)ナテ	ナテ	黒斑	茶褐色	-	底部

D-N18-1-460

小迫辻原 B区-21号 土壙: 弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()つきは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1埋土中	弥生式土器	壺	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)<(底)ナテ	平滑なナテ	黒斑	明黄褐色(内) 明茶褐色~ 淡褐色	二次加熱・赤変 スス付着	底部

小迫江原 B区-23号 土壌: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1/2層一拵		弥生式土器	壺 B	—	—	砂粒少い 在地	積上げ	不明(剥離)	しほり痕	—	赤褐色	二次加熱 赤変	頸部はりつけ一条三角突帯
2/2層一拵		弥生式土器	壺 A	25.0	20.4	6.4	19.4	砂粒多い 6.4 輸入 在地	積上げ	指圧痕→タテハケ(7本/1cm)・ナデ	黒斑	二次加熱 スス付着	宍形 石英大型粒多い・底部 h 手法
3/2層一拵		弥生式土器	壺 B	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコナデ	平滑なナデ	—	赤褐色	二次加熱 スス付着	口縁部刻目・はりつけ一条三角突帯刻目
4/2層一拵		弥生式土器	壺 C	—	(19.8)	—	(18.3)	砂粒多い 在地	積上げ	ナデ	—	赤褐色	口縁部～胴部
5/2層一拵		弥生式土器	壺 C	—	(28.6)	—	—	砂粒多い 輸入 在地	積上げ	タテハケ	—	赤褐色	口縁部・胎土に金蓋母・一条沈線
6/2層一拵		弥生式土器	壺	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)・底ナデ	黒斑	二次加熱 赤変	底部 a,b 手法

小迫江原 B区-24号 土壌: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1/1層		弥生式土器	壺 A	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	不明(剥離)	—	—	明棕色	二次加熱 赤変	口縁部刻目 一条沈線

小迫江原 B区-25号 土壌: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1/1層		弥生式土器	壺	—	—	砂粒多い 7.0 輸入 在地	積上げ	不明(剥離)	平滑なナデ	—	淡明棕色	二次加熱 赤変	底部 a,b 手法・胎土に金蓋母・石英混入

小迫江原 B区-26号 土壌: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1/2層		弥生式土器	壺 A	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	不明(剥離)	—	—	明茶褐色	—	口縁部
2/2層		弥生式土器	壺	—	—	(8.1) 在地	積上げ	タテハケ(7本/1cm)・底ナデ	不明(剥離)	—	明棕色	二次加熱 赤変	底部
3/2層		弥生式土器	壺	—	—	(8.1) 在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)・底ナデ?	平滑なナデ	—	淡茶褐色	—	底部

小迫江原 B区-27号 土壌: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1/1層一拵		弥生式土器	壺 日	—	頸径 (24.0)	39.2	—	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ→ラミガキ	黒斑	—	胎土に黒曜石・一条三角突帯刻目
2/1層一拵		弥生式土器	壺 A	—	(18.4)	(16.4)	—	砂粒多い 在地	積上げ	指圧痕→ナメタテハケ	—	二次加熱 スス付着	口縁部～胴部
3/2層		弥生式土器	壺 日	—	—	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	剥離・ヨコナデ	—	—	口縁部刻目・はりつけ一条三角突帯刻目
4/1層一拵		弥生式土器	壺	—	—	(7.4) 在地	—	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(12本/1cm)・底ナデ	—	二次加熱 赤変	底部 a,b 手法

小迫江原 B区-28号 土壌: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1/埋土中(層位不明)		弥生式土器	壺	—	—	(9.2) 在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)	平滑なナデ	—	にふい橙色	二次加熱 赤変	底部 a,b 手法

小迫江原 B区-29号 土壌: 弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位(cm))		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1/3層一拵		弥生式土器	壺 A	—	(15.8)	—	—	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ→ラミガキ	—	—	口縁部

2層一拵	弥生式土器	器A	—	(27.4)	—	砂粒多い 在地	横上げ	指圧痕→ナナメハケ(4.5本/1cm)	ヨコハラミガキ	—	淡褐色	—	口縁部 刻目 口縁部 刻目(短/甲タイフ)
3層一拵	弥生式土器	器D	—	(17.0)	—	砂粒多い 在地	横上げ	ナナメハケ(6本/1cm)・(口縁上面)ハラミガキ	タテハラミガキ	—	淡明褐色	—	—

D-N19-土432

小迫辻原 B区-30号 土壙:弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位:cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面				
1層一拵	弥生式土器	器A	—	20.7	—	砂粒多い 輸入	横上げ	タテハケ(9本/1cm)	丁寧なナデ	—	明褐色~ 暗褐色	二次加熱 スス付着	口縁部~胴部・一条沈線・金雲母・石英混入
2層一拵	弥生式土器	器C	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ	平滑なナデ	—	黒灰色	二次加熱 スス付着	口縁部~胴部片
3層一拵	弥生式土器	器C	—	(26.6)	(25.4)	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(6本/1cm)	平滑なナデ	—	淡茶赤褐色~ 黒灰色	二次加熱 スス付着	口縁部~胴部・一条沈線

D-N18-土433

小迫辻原 B区-31号 土壙:弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位:cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			外面	内面				
1層(上位一拵)	弥生式土器	器A	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(7本/1cm)	平滑なナデ	—	淡明褐色 黒褐色	二次加熱 赤変	口縁部~胴部片 一条沈線
2層(下位一拵)	弥生式土器	器A	—	(25.2)	(23.2)	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(7本/1cm)	指圧痕→平滑なナデ	—	茶褐色~ 暗褐色	二次加熱 スス付着	口縁部 一条沈線
3層(上位一拵)	弥生式土器	器A	—	(25.2)	(23.6)	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(7本/1cm)	指圧痕→ナデ	—	黒色	二次加熱 スス付着	口縁部 二条沈線
4層(下位一拵)	弥生式土器	器B	—	(28.2)	(27.6)	砂粒多い 在地	横上げ	指圧痕→タテハケ(11本/1cm)	ヨコ・ナナメハラミガキ	黒斑	淡灰褐色 暗褐色	二次加熱 スス付着	口縁部 はりつけ 一条三角突帯 刻目
5層(上位一拵)	弥生式土器	器C	—	(20.8)	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(7本/1cm)・(底)ナデ	ヨコハラミガキ	—	明褐色 黒褐色	二次加熱 スス付着	口縁部
6層(下位一拵)	弥生式土器	器	—	—	10.0	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(7本/1cm)・(底)ナデ	平滑なナデ	—	明褐色 黒褐色	二次加熱 スス付着	底面
7層(下位一拵)	弥生式土器	器	—	—	(7.3)	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(10本/1cm)・(底)平滑なナデ	不明	—	明褐色 内褐色	二次加熱 スス付着	底面

D-O1-土418

小迫辻原 B区-33号 土壙:弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位:cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考	
				器高	口径			外面	内面					
1層	下層	弥生式土器	器A	34.0	31.0	30.6	8.6	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(6本/1cm)	ナデ	黒褐色~ 褐色(内)淡 褐色	二次加熱 赤変	底面 a,b 手法
2層	上層一拵	弥生式土器	器A	—	(28.6)	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	指圧痕→タテハケ	ヨコ方向の平滑なナデ	色・黒灰色 色・明褐色 茶褐色~ 茶褐色	二次加熱 スス付着	口縁部~胴部
3層	上層一拵	弥生式土器	器A	—	(29.2)	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ナナメタテハケ	平滑なナデ	灰褐色~ 明褐色	—	口縁部刻目 一条沈線
4層	上層一拵	弥生式土器	器or壺?	—	—	9.3	—	砂粒多い 輸入	—	指ナデ→タテハケ(11本/1cm)・(底)指圧痕	不明(刺摩)	明褐色 明褐色	二次加熱 赤変	底面 a 手法・胎土に金雲母
5層	上層一拵	弥生式土器	器	—	—	(8.4)	—	砂粒多い 在地	横上げ	ハラナデ	ナデ	灰褐色	赤変	底面 b 手法
6層	埋土中	弥生式土器	器	—	—	(7.0)	—	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ・(底)指圧痕残ナデ	—	淡赤褐色	赤変	底面

D-O1-土401

小迫辻原 B区-34号 土壙:弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位:cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考	
				器高	口径			外面	内面					
1層	一拵	弥生式土器	器A	—	(25.7)	(23.6)	—	砂粒多い 輸入	横上げ	指圧痕→タテハケ(10本/1cm)	平滑なナデ	黒斑	二次加熱 赤変	口縁部~胴部 胎土に金雲母
2層	一拵	弥生式土器	器A	—	(27.9)	(24.6)	—	砂粒多い 輸入	横上げ	指圧痕→タテハケ(8本/1cm)	平滑なナデ	—	—	口縁部~胴部 一条沈線・胎土に金雲母
3層	一拵	弥生式土器	器A	—	(21.0)	21.8	—	砂粒多い 輸入	横上げ	タテハケ(6.7本/1cm)・指圧痕	平滑なナデ	—	—	口縁部刻目~胴部 一条沈線・胎土に金雲母
4層	一拵	弥生式土器	器A	—	(18.5)	(18.4)	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(8.9本/1cm)・指圧痕	平滑なナデ	—	—	口縁部 刻目 一条沈線

D-O19-土425

小迫辻原 B区-35号 土壙:弥生時代前期後半~中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位:cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考	
				器高	口径			外面	内面					
1層	一拵	弥生式土器	器	—	—	(6.6)	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(5本/1cm)・(底)指圧痕・未調整	ナデ	黒斑	二次加熱 赤変	底面 a,b 手法

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位:cm)		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1層一拵	弥生式土器	壺 D	-	(25.2)	砂粒多い 輸入	積上げ	ヨコハラミガキ	黒斑	黄白色(内) 乳白色	-	胎土に石英を多量に含む 胴部に格子状の條刻をつけた巾広の突帯	
2	1層一拵	弥生式土器	壺 or 蓋	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ・タテハラミガキ	黒斑	淡黄褐色	二次加熱 赤変	底部に胎土に黒曜石	
3	1層一拵	弥生式土器	壺 A	(18.8)	(20.0)	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ	黒斑	にぶい褐色	二次加熱 赤変	口縁部胎土に黒曜石	
4	1層一拵	弥生式土器	壺 A	-	28.0	砂粒多い 輸入	積上げ	ナナメタテハケ	-	にぶい褐色 (内)黒変	二次加熱 赤変	口縁部~胴部胎土に金雲母・一条沈線	
5	1層一拵	弥生式土器	壺 A	-	21.6	砂粒多い 在地	輪様み	タテハケ(7本/1cm)	黒斑	にぶい褐色 茶褐色	二次加熱 赤変	口縁部~胴部一条沈線	
6	1層一拵	弥生式土器	壺 or 蓋	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(10本/1cm)・底指匠痕・ナデ	-	褐色~ 茶褐色	-	底部 a 手法	
7	1層一拵	弥生式土器	壺	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(8本/1cm)・(底)ナデ	-	淡黄褐色	二次加熱 赤変	底部 a,b 手法	

小迫辻原 B区-37号 土壌:弥生時代中期後半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位:cm)		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1埋土中	弥生式土器	壺	-	-	砂粒多い 在地	-	タテハケ(6本/1cm)	-	淡褐色	-	底部	

小迫辻原 B区-38号 土壌:弥生時代中期後半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位:cm)		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1埋土中	弥生式土器	壺 A	-	(29.6)	砂粒多い 在地	積上げ ナゲナゲ	ナナメタテハケ・タテハケ(6本/1cm)	-	淡褐色	二次加熱 スス付着	口縁部	
2	1埋土中	弥生式土器	壺 or 蓋	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ後ヨココナデ・(6本/1cm)	-	淡褐色	-	底部	

小迫辻原 B区-39号 土壌:弥生時代中期後半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位:cm)		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1埋土中	弥生式土器	大型壺 E	-	(47.0)	砂粒多い 在地	積上げ	ヨココナデ	-	淡褐色	-	口縁部 二条三角突帯	

小迫辻原 B区-40号 土壌:弥生時代中期後半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位:cm)		胎土	成形	調面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1埋土中	弥生式土器	壺 A	-	(29.6)	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ・ヨココナデ	黒斑 (内)	淡黄褐色	-	頸部片 一条三角突帯	
2	1層(1+2層一拵)	弥生式土器	壺 A	(29.1)	-	砂粒多い 在地	積上げ	ナデ→不明(割離)	-	明褐色~ 淡褐色	二次加熱 赤変	口縁部 B-1号土器片とまりと接合	
3	1埋土中	弥生式土器	壺 A	(29.7)	-	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ	黒斑 (内)	淡黄褐色	-	口縁部	
4	1層(1+2層一拵)	弥生式土器	壺 A	(27.6)	-	砂粒多い 在地	積上げ	ナナメハケ	黒斑	淡褐色	-	口縁部	
5	1層(1+2層一拵)	弥生式土器	壺 A	(30.6)	-	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ	-	淡明褐色	-	口縁部	
6	1層(1+2層一拵)	弥生式土器	壺 A or B	(26.0)	-	砂粒多い 在地	積上げ	ナデ(割離)?	-	淡白褐色	-	口縁部	
7	1層(1+2層一拵)	弥生式土器	壺 A	(29.4)	-	砂粒多い 在地	積上げ	ナデ(割離)?	黒斑	淡褐色	-	口縁部片	
8	穴番			-	-								
9	1層(1+2層一拵)	弥生式土器	壺	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ・底ヨココナデ	-	淡黄褐色	二次加熱 赤変	底部 a 手法	
10	1層(1+2層一拵)	弥生式土器	壺	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ	-	にぶい褐色	-	底部 a 手法	
11	1層(1+2層一拵)	弥生式土器	壺	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ・底ヨココナデ	-	淡黄色	二次加熱 (内)スス付着	底部 a 手法	
12	1層(1+2層一拵)	弥生式土器	壺	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	不明	-	明褐色	二次加熱 赤変	底部 a 手法	

13)	1層(1+2層一括)	弥生式土器	壺	規格(つぎは復元径・単位cm)	口径	器高	胎土	成形	外面	内面	焼成	色調	使用痕	備考
14)	1層(1+2層一括)	弥生式土器	器台	口径	器高	胎土	成形	外面	内面	焼成	色調	使用痕	備考	

D-GO-土488

小迫立原B区-41号土壺・弥生時代中期後半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位cm)		胎土	成形	外面		内面		焼成	色調	使用痕	備考
				口径	器高			口径	器高	口径	器高				
1)	1層(不明)	弥生式土器	壺C	口径	器高	砂粒少ない在地	積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	黒斑	淡褐色	二次加熱赤変?	底部4~e手法		
2)	2層(上位一括)	弥生式土器	壺	口径	器高	砂粒少ない在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)・(底)タテハケ(1本)	平滑なナデ	黒斑	淡褐色・明褐色・黒灰色	二次加熱赤変?	底部A(内)底部に砂粒多土を充填		
3)	2層(上位一括)	弥生式土器	壺	口径	器高	砂粒多い在地	積上げ	ナデ	平滑なナデ	黒斑	淡褐色	二次加熱赤変?	底部A(内)底部に砂粒多土を充填		
4)	1層(1+2層(最下層))	弥生式土器	壺D	口径	器高	砂粒少ない在地	積上げ	ナデ	不明(剥離)	黒斑	淡褐色	二次加熱赤変?	底部A(内)底部に砂粒多土を充填		
5)	7層(下位一括)	弥生式土器	壺A	口径	器高	砂粒少ない在地	積上げ	タテハケ(7本/1cm)	平滑なナデ	(内)黒斑	淡褐色	二次加熱赤変?	底部A(内)底部に砂粒多土を充填		
6)	7層(下位一括)	弥生式土器	壺A	口径	器高	砂粒少ない在地	積上げ	ナメハケ	ナメハケ	黒斑	淡褐色	二次加熱赤変?	底部A(内)底部に砂粒多土を充填		
7)	7層(下位一括)	弥生式土器	壺A	口径	器高	砂粒少ない在地	積上げ	タテハケ(8・9本/1cm)	平滑なナデ	黒斑	淡褐色	二次加熱赤変?	底部A(内)底部に砂粒多土を充填		
8)	2層(上位一括)	弥生式土器	壺	口径	器高	砂粒多い在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)・(底)ヨコナデ	平滑なナデ	黒斑	淡褐色・明褐色	二次加熱赤変?	底部A(内)底部に砂粒多土を充填		
9)	2層(上位一括)	弥生式土器	壺	口径	器高	砂粒多い在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)・(底)ナデ	平滑なナデ	黒斑	淡褐色・黒灰色	二次加熱赤変?	底部A(内)底部に砂粒多土を充填		
10)	7層(下位一括)	弥生式土器	壺	口径	器高	砂粒多い在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)・(底)ナデ	平滑なナデ	黒斑	淡褐色・明褐色	二次加熱赤変?	底部A(内)底部に砂粒多土を充填		
11)	13層(最下層)	弥生式土器	壺	口径	器高	砂粒多い在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)・(底)ナデ	平滑なナデ	黒斑	淡褐色・明褐色	二次加熱赤変?	底部A(内)底部に砂粒多土を充填		
12)	7層(下位一括)	弥生式土器	壺	口径	器高	砂粒多い在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)・(底)ナデ	平滑なナデ	黒斑	淡褐色・明褐色	二次加熱赤変?	底部A(内)底部に砂粒多土を充填		
13)	7層(下位一括)	弥生式土器	壺	口径	器高	砂粒多い在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)・(底)ナデ	平滑なナデ	黒斑	淡褐色・明褐色	二次加熱赤変?	底部A(内)底部に砂粒多土を充填		
14)	7層(下位一括)	弥生式土器	壺	口径	器高	砂粒少ない在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)・(底)ナデ	平滑なナデ	(底)黒斑	淡褐色・明褐色	二次加熱赤変?	底部A(内)底部に砂粒多土を充填		
15)	7層(下位一括)	弥生式土器	壺	口径	器高	砂粒少ない在地	積上げ	タテハケ(8本/1cm)・(底)ヨコナデ	平滑なナデ	黒斑	淡褐色・明褐色	二次加熱赤変?	底部A(内)底部に砂粒多土を充填		
16)	7層(下位一括)	弥生式土器	壺	口径	器高	砂粒多い在地	積上げ	ナデ	平滑なナデ	黒斑	淡褐色・明褐色	二次加熱赤変?	底部A(内)底部に砂粒多土を充填		
17)	7層(下位一括)	弥生式土器	壺	口径	器高	砂粒多い在地	積上げ	ナデ	平滑なナデ	黒斑	淡褐色・明褐色	二次加熱赤変?	底部A(内)底部に砂粒多土を充填		
18)	7層(下位一括)	弥生式土器	壺	口径	器高	砂粒多い在地	積上げ	ナデ	平滑なナデ	黒斑	淡褐色・明褐色	二次加熱赤変?	底部A(内)底部に砂粒多土を充填		
19)	2・7層(下位一括)	弥生式土器	蓋	口径	器高	取手型砂粒多い8.0在地	積上げ	不明	不明	黒斑	淡褐色	二次加熱赤変?	上下層に分れて出土		
20)	7層(下位一括)	弥生式土器	蓋?	口径	器高	砂粒少ない在地	積上げ	タテハケ(7本/1cm)・ヨコナデ	平滑なナデ	(内)黒斑	淡褐色	二次加熱赤変?	底部A(内)底部に砂粒多土を充填		
21)	2層(上位一括)	弥生式土器	蓋D	口径	器高	砂粒少ない在地	積上げ	ナデ	平滑なナデ	黒斑	淡褐色	二次加熱赤変?	蓋B穿孔1		
22)	2層(上位一括)	弥生式土器	高杯D	口径	器高	砂粒少ない在地	積上げ	ナデ・軽いタテミガキ	しほり痕	黒斑	淡褐色	二次加熱赤変?	脚部丹塗り		
23)	2層(上位一括)	弥生式土器	器台	口径	器高	砂粒多い在地	積上げ	タテハケ(4本/1cm)	指ナデ	黒斑	淡褐色	二次加熱赤変?	脚部胎土に黒曜石混入		
24)	2層(上位一括)	弥生式土器	器台	口径	器高	砂粒多い在地	積上げ	タテハケ(10本/1cm)	ナデ	黒斑	淡褐色	二次加熱赤変?	脚部		

D-G5-土480

小迫立原B区-42号土壺・弥生時代中期後半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位cm)		胎土	成形	外面		内面		焼成	色調	使用痕	備考
				口径	器高			口径	器高	口径	器高				
1)	1層(上位一括)	弥生式土器	壺	口径	器高	砂粒少ない在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)・(底)ヨコナデ	ヘラナデ・指ナデ	黒斑	淡褐色	二次加熱赤変?	底部A(内)底部に砂粒多土を充填		
2)	7層(下位一括)	弥生式土器	壺	口径	器高	砂粒多い在地	積上げ	タテハケ(6本/1cm)	ナデ	黒斑	淡褐色	二次加熱赤変?	底部		
3)	7層(下位一括)	弥生式土器	壺	口径	器高	砂粒少ない在地	積上げ	不明(剥離)	ナデ	黒斑	淡褐色	二次加熱赤変?	底部		
4)	4層(上位一括)	弥生式土器	壺F	口径	器高	砂粒多い在地	積上げ	ヨコナデ	ナデ	黒斑	淡褐色	二次加熱赤変?	はりつけ三角突起(玉袋)		
5)	4・5・6層(上位・中位)	弥生式土器	壺A	口径	器高	砂粒多い在地	積上げ	ナメハケ(6本/1cm)・(口)ヨコナデ	平滑なナデ	黒斑	淡褐色	二次加熱赤変?	口縁部~脚部		
6)	1層(上位一括)	弥生式土器	壺A	口径	器高	砂粒多い在地	積上げ	タテハケ(4・5本/1cm)・(口)ヨコナデ	平滑なナデ	黒斑	淡褐色	二次加熱赤変?	口縁部~脚部		
7)	1層(上位一括)	弥生式土器	壺A	口径	器高	砂粒多い在地	積上げ	タテハケ(4・5本/1cm)・(口)ヨコナデ	平滑なナデ	黒斑	淡褐色	二次加熱赤変?	口縁部		

8	1・4層(上位一括)	弥生式土器	窯A	—	(28.4)	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(7・8本/1cm)・(口)ヨコナデ	平滑なナデ	—	淡褐色	—	口縁部
9	1・4・7層(上位・下位)	弥生式土器	窯A	—	29.7	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(6本/1cm)・(口)ヨコナデ	平滑なナデ	—	濃茶褐色	二次加熱 スス付着	口縁部
10	1・5層(上位・中位)	弥生式土器	窯A	—	(20.2)	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(7・8本/1cm)・(口)ヨコナデ	平滑なナデ	黒斑	淡褐色	—	口縁部
11	4層(上位一括)	弥生式土器	窯A	—	(25.6)	(22.6)	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(7本/1cm)・(口)ヨコナデ	平滑なナデ	—	淡褐色	—	口縁部～胴部
12	1・5層(上位・中位)	弥生式土器	窯A	—	23.0	21.2	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ナナメハケ(7本/1cm)・(口)ヨコナデ	平滑なナデ、部分的に削れる	黒斑	濃黄褐色	二次加熱 スス付着	口縁部
13	4・6層(上位・中位)	弥生式土器	窯A	—	(31.6)	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	不明剥離・(口)ヨコナデ	平滑なナデ	—	明褐色	—	口縁部
14	1・4・5層(上位・中位)	弥生式土器	窯A	—	(27.0)	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(8本/1cm)・(口)ヨコナデ	平滑なナデ	—	明褐色	—	口縁部
15	1層(上位一括)	弥生式土器	窯A	—	(19.9)	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ナナメハケ(5・6本/1cm)・(口)ヨコナデ	平滑なナデ	—	淡褐色	—	口縁部
16	6層(中位)	弥生式土器	窯A	—	(25.2)	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ナナメハケ(7本/1cm)・(口)ヨコナデ	平滑なナデ	—	淡褐色	二次加熱 スス付着	口縁部
17	4層(上位一括)	弥生式土器	窯A	—	(23.2)	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(6本/1cm)・(口)ヨコナデ	平滑なナデ	—	明褐色	—	口縁部
18	5層(中位)	弥生式土器	窯A	—	(31.0)	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ?・(口)ヨコナデ	平滑なナデ	—	淡褐色	—	口縁部
19	5・6・7層(中位・下位)	弥生式土器	窯A	—	(27.0)	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ナナメハケ(7本/1cm)・(口)ヨコナデ	平滑なナデ	—	淡褐色	—	口縁部
20	1・4層(上位一括)	弥生式土器	窯D	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ミガキ?・丁寧なナデ	平滑なナデ	黒斑	明褐色	—	口縁部 はりつけ一條三角突帯
21	4・5・7層(上・中・下位)	弥生式土器	窯D	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ・(口)ヨコナデ	平滑なナデ	—	淡褐色	—	胴部 丹塗りあり、同一個体(5・6層)
22	1・4・5層(上位・中位)	弥生式土器	窯D	—	(31.7)	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコハラミガキ・(口)ヨコナデ	平滑なナデ	黒斑	淡褐色	二次加熱 赤変	胴部片 はりつけ一條突帯
23	4層(上位一括)	弥生式土器	窯D	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコハラミガキ・(口)ヨコナデ	平滑なナデ	黒斑	赤褐色	二次加熱 赤変	胴部No.23と同一個体? はりつけ一條M字 突帯・丹塗り
24	5・6層(中位)	弥生式土器	窯B	—	—	7.0	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(6本/1cm)・(底)ヨコナデ	へらによる平滑なナデ・ナデ	—	赤褐色	二次加熱 赤変	口縁部No.22と同一個体?・丹塗り・(内)底部 に砂粒多きをはりつけ→底部A
25	1層(上位一括)	弥生式土器	窯E	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ	ナデ	—	淡褐色	—	口縁部 二条突帯
26	1層(上位一括)	弥生式土器	大型窯B	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ	平滑なナデ	—	黒灰褐色	—	口縁部片
27	5層(中位)	弥生式土器	窯	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ	平滑なナデ	黒斑	明褐色	—	二条突帯
28	3層(上位一括)	弥生式土器	窯	—	—	5.7	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(6本/1cm)・(底)ヨコナデ	ナデ	—	淡褐色	—	底部Aの手法・(内)底部に砂粒多きをはりつけ
29	4・7層(上位・下位)	弥生式土器	窯	—	—	6.1	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(6本/1cm)・(底)ヨコナデ	ナデ	小黒斑	淡褐色	—	底部Aの手法・(内)底部に砂粒多きをはりつけ
30	7層(下位一括)	弥生式土器	窯	—	—	6.8	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(6本/1cm)・(底)ヨコナデ	平滑なナデ	小黒斑	淡褐色	—	底部Aの手法・(内)底部に砂粒多きをはりつけ
31	1層(上位一括)	弥生式土器	窯	—	—	7.2	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(4本/1cm)・(底)ヨコナデ	平滑なナデ	—	明褐色	二次加熱 スス付着	底部Aの手法・(内)底部に砂粒多きをはりつけ
32	6層(中位)	弥生式土器	窯	—	—	6.9	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(4・5本/1cm)・(底)ヨコナデ	平滑なナデ	—	淡褐色	二次加熱 スス付着	底部Aの手法・(内)底部に砂粒多きをはりつけ
33	6層(中位)	弥生式土器	窯	—	—	8.0	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	不明剥離	平滑なナデ	—	淡褐色	赤変	底部A(内)底部に粘土充填
34	1・4層(上位一括)	弥生式土器	窯	—	—	7.8	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(4・5本/1cm)・(底)ヨコナデ	平滑なナデ・指ナデ	—	淡褐色	二次加熱 赤変	底部A(内)底部に粘土充填
35	1層(上位一括)	弥生式土器	窯	—	—	6.4	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(6・7本/1cm)・(底)ヨコナデ	ナデ	黒斑	淡黄褐色 ・黒灰色	—	底部A(内)底部に砂粒多きをはりつけ
36	6層(中位)	弥生式土器	窯	—	—	6.4	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ?・(底)ナデ	ナデ	黒斑	淡黄褐色 ・黒灰色	—	底部
37	1層(上位一括)	弥生式土器	窯	—	—	6.0	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(8本/1cm)・(底)ヨコナデ	平滑なナデ	黒斑	淡褐色	—	底部
38	4・5層(上位・中位)	弥生式土器	窯	—	—	8.2	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(8本/1cm)・(底)ヨコナデ	平滑なナデ	黒斑	淡黄褐色 ・黒灰色	—	底部
39	4・7層(上位・下位)	弥生式土器	窯	—	—	5.8	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(8本/1cm)・(底)ヨコナデ	平滑なナデ	黒斑	淡黄褐色 ・黒灰色	—	底部
40	1層(上位一括)	弥生式土器	甌・壺	—	—	6.0	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(6本/1cm)・(底)ナデ	平滑なナデ	黒斑	淡黄褐色	—	底部
41	7層(下位一括)	弥生式土器	高杯	—	(23.0)	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ	黒斑	淡黄褐色	二次加熱 赤変	底部 焼成部穿孔
42	7層(下位一括)	弥生式土器	高杯D	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテ方向のへらミガキorナデ	平滑なナデ・底しぼり痕	黒斑	淡褐色	—	底部 円筒状
43	4層(上位一括)	弥生式土器	高杯D	—	—	(19.2)	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ	ヨコナデ	—	淡褐色	—	胴部 丹塗り
44	5層(中位)	弥生式土器	鉢	—	(19.9)	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	浅いタテハケ	ヨコナデ	—	淡褐色	—	胴部 丹塗り
45	1層(上位一括)	弥生式土器	鉢	—	10.0	(21.6)	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	部分的にタテハケ	平滑なナデ	—	明褐色	—	口縁部～胴部
46	1層(上位一括)	弥生式土器	鉢	—	(17.0)	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(5本/1cm)	ナデ	—	淡褐色 (断)黒色	—	外形
47	1層(上位一括)	弥生式土器	鉢	—	—	—	—	—	砂粒多い 在地	横上げ	タテハケ(5本/1cm)	粗粒なナデ	—	淡茶褐色	—	口縁部

47	5・7層(中位・下位)	弥生式土器	器台	(上) 9.6 (下)11.1~12.0	15.5	16.0	16.0	砂粒多い 在地	?	タテハケ(7本/1cm)	指ナテ・部分的にヨコハケ・指圧痕・しほり痕	黒斑	淡褐色~淡黒灰色	—	壳形
48	5・7層(中位・下位)	弥生式土器	器台	(上)9.2 (下)10.3	—	—	砂粒少ない 在地	?	タテハケ(7本/1cm)	ナテ・しほり痕	小黒斑	灰褐色	二次加熱 赤変	壳形	
49	1層(上位・一括)	弥生式土器	器台	(13.0)	—	—	砂粒少ない 在地	—	指圧痕→タテ・ナメハケ(4.6本/1cm)	ナテ	—	淡褐色・明褐色	—	口縁部	
50	6層(中位)	弥生式土器	器台	—	—	(11.8)	砂粒多い 在地	—	タテ・ナメハケ(10本/1cm)	ナテ	—	淡褐色・明褐色	二次加熱 赤変	底部	
51	5層(中位)	弥生式土器	坏 (コップ型)	8.8~9.1	—	—	小砂粒多い 在地	—	ヨコタキ・タテの擦痕(ケズリorナテ?)	ハラケズリ風調整	黒斑	淡褐色	—	壳形 内面に赤褐色粘土が付着	

小迫古原 B区-43号土庫:弥生時代中期後半 D-H2-住35

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つきは標準寸法・単位(cm))			胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径	胴部最大径			底径	外面				
01	1層	弥生土器	壺D	—	19.1	頸部 14.8	砂粒多い 在地	ヨコナテ	—	—	明褐色	—	口縁部 壳形・丹塗りあり	
1	2層	弥生土器	壺E	—	—	—	砂粒多い 在地	タテハケ→ヨコナテ	(割離)	—	茶褐色	—	M字突帯	
2	1層集中+1層	弥生土器	大型壺A	(50.0)	(52.6)	—	砂粒多い 在地	ナテ→ヨコナテ・口縁部ヨコナテ	平滑なナテ	—	淡黄褐色	—	葉柄用胎土か?	
3	2層	弥生土器	大型壺A	—	(67.2)	—	砂粒多い 在地	ナテ・赤色顔料が残る	平滑なナテ	—	淡黄褐色	—	葉柄用胎土か?・胴部 三角突帯	
4	1層集中	弥生土器	壺A	(30.1)	—	—	砂粒多い 在地	ヨコナテ	—	—	明淡褐色	—	口縁部	
5	1層+2層	弥生土器	壺A	29.1	—	—	砂粒多い 在地	ナメハケ・口縁部ヨコナテ	平滑なナテ	—	淡褐色	—	口縁部	
6	1層集中	弥生土器	壺A	27.0	—	—	砂粒多い 在地	ナメハケ・口縁部ヨコナテ	(割離)	—	淡黄褐色	—	一部に丹塗り痕	
7	1層集中	弥生土器	壺A	(23.6)	—	—	砂粒多い 在地	不明	平滑なナテ	—	明褐色	二次加熱あり	口縁部 器壁薄い・No.21と同一個体?	
8	1層	弥生土器	壺A	—	—	—	砂粒多い 在地	ヨコナテ	ナテ	—	淡黄褐色	—	口縁部片	
9	2層	弥生土器	壺A	—	—	—	砂粒多い 在地	ヨコナテ	ナテ	—	緑色	—	口縁部片 外面に接合痕のある	
10	1層	弥生土器	壺A	(27.2)	(26.3)	—	砂粒多い 在地	平滑なナテ・口縁部ヨコナテ	—	—	暗茶褐色~褐色	二次加熱 スス付着	口縁部	
11	1層	弥生土器	壺A	(23.5)	(21.8)	—	砂粒多い 在地	割離・口縁部ヨコナテ	平滑なナテ?	—	茶褐色	赤変→二次加熱あり	口縁部	
12	1層集中	弥生土器	壺A	(24.9)	—	—	砂粒多い 在地	ナテ?・口縁部ヨコナテ	平滑なナテ	—	明褐色	二次加熱 スス付着	口縁部	
13	1層	弥生土器	壺A	—	—	—	砂粒多い 在地	ナメハケ・口縁部ヨコナテ	平滑なナテ	黒斑	にぶい褐色	—	口縁部	
14	2層	弥生土器	壺A	—	—	—	砂粒多い 在地	ナテ? (割離)	平滑なナテ	黒斑	淡黄色	—	口縁部 胴部片	
15	1層+2層	弥生土器	壺A	(25.8)	(30.0)	—	砂粒多い 在地	ナテ? (割離)・口縁部ヨコナテ	平滑なナテ	黒斑	淡褐色	—	口縁部 胴部	
16	1層+2層	弥生土器	壺A	(29.8)	—	—	砂粒多い 在地	タテハケ・口縁部ヨコナテ	平滑なナテ	黒斑	明褐色	—	口縁部 胴部	
17	1層	弥生土器	壺	—	—	(7.0)	砂粒多い 在地	ナテ? (割離)	(割離)	—	明褐色	—	底部の手法	
18	1層集中	弥生土器	壺	—	—	8.2	砂粒多い 在地	ナテ? (割離)	平滑なナテ	黒斑	明褐色	二次加熱による 赤変	底部の手法	
19	1層	弥生土器	壺	—	—	6.8	砂粒多い 在地	ナテ? (割離)	(割離)	—	明褐色	二次加熱による 赤変	底部の手法	
20	1層	弥生土器	壺	—	—	5.4	砂粒多い 在地	ナテ	—	—	茶褐色	—	底部の手法	
21	1層集中	弥生土器	壺	—	—	7.5	砂粒多い 在地	不明	ナテ	黒斑	褐色	二次加熱による 赤変	底部 器壁薄い・d.6手法・No.7と同一個体?	
22	1層	弥生土器	壺	—	—	6.0	砂粒多い 在地	ナテ? (割離)	(割離)	—	褐色	二次加熱による 赤変	底部の手法	
23	2層	弥生土器	壺	—	—	(9.5)	砂粒多い 在地	ナテ→ヨコナテ	—	—	明褐色	二次加熱による 赤変	底部の手法	
24	2層	弥生土器	壺	—	—	7.6	砂粒多い 在地	タテハケ・底ナテ	ナテ・窪み調整	—	褐色・黒灰	—	底部の手法	
25	1層集中	弥生土器	壺	(上) 6.2 (下)30.4~31.4	—	—	砂粒多い 在地	タテハケ→ナテ	ヨコナテ	—	淡黄褐色	二次加熱による 赤変	表面の割離痕あり	
26	1層集中	弥生土器	壺	(34.6)	—	—	砂粒多い 在地	ナテ(割離?)	不明	黒斑	淡黄褐色	二次加熱による 赤変	—	
27	1層	弥生土器	高坏D?	—	—	—	砂粒多い 在地	ヨコナテ・指圧痕	ヨコナテ	黒斑	淡黄褐色	—	—	
28	2層	弥生土器	高坏	—	—	—	砂粒多い 在地	ナテ	ナテ	—	褐色	—	表面丹塗り?	

小迫辻原 B区-45号 土壙:弥生時代中期後半

D-10-土478

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位:cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胸部最大径	底径				
1層	弥生式土器	壺 A		-	-	砂粒多い 在地	縁上げ	ヨコナテ・刺織	不明	-	黄褐色・突帯 暗褐色	-	頸部はつつけM字突帯

小迫辻原 B区-46号 土壙:弥生時代中期後半

D-10-土481

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位:cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胸部最大径	底径				
1層一括	弥生式土器	壺		-	-	小砂粒多い 在地	縁上げ	不明(刺織)	平常なナテ	-	淡褐色	二次加熱 赤変	底部
2層一括	弥生式土器	壺 A		38.6	-	砂粒少ない 在地	縁上げ	ヨコナテ		-	淡褐色	-	口縁部
3層一括	弥生式土器	壺 A		32.0	28.4	砂粒少ない 在地	縁上げ	不明(刺織)		-	淡褐色	-	口縁部
4層一括	弥生式土器	壺		-	-	小砂粒多い 在地	縁上げ	タテハケ(12本/1cm)・底ナテ	不明	-	明褐色 明褐色 淡褐色	二次加熱 赤変 二次加熱	底部Aの手法・(内底部に砂粒多量を充填)
5層一括	弥生式土器	壺		-	-	小砂粒多い 在地	縁上げ	不明(刺織)		-	淡明褐色	赤変	底部

小迫辻原 B区-47号 土壙:古墳時代前期前半

D-10-土486

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位:cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胸部最大径	底径				
1層	土師器	高杯 <small>com</small> 器台		-	13.2	小砂粒多い 在地	縁上げ	不明(刺織)		-	淡褐色	-	胴部
2層	古墳時代	鉢 A		15.2	-	小砂粒多い 在地	縁上げ	ヨコナテ・刺織		-	黒斑	-	口縁~胴部

小迫辻原 B区-49号 土壙:中世

D-10-土474

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位:cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胸部最大径	底径				
1型土中	土師質土器	中世	杯	-	-	砂粒多い 在地	口クロ→糸切り	不明(底)回転糸切り		-	明褐色	-	底部

小迫辻原 B区-53号 土壙:中世

D-10-土32

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位:cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胸部最大径	底径				
1層	土師質土器	中世	杯	-	-	砂粒多い 在地	縁上げ	回転糸切り・柄杓状痕	回転ヨコナテ	-	褐色	-	底部

小迫辻原 B区-54号 土壙:中世

D-12-土415

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位:cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胸部最大径	底径				
1層	中国製青磁壺	泉蓋		-	-	青磁	口クロ成形	釉がけ		-	灰青色	-	口縁部片(文蓮弁文)
2層	土師質土器	中世	杯	-	-	砂粒多い 在地	口クロ成形	回転糸切り・底・回転糸切り	回転ヨコナテ・不定方向ナテ	-	淡明褐色	-	底部 中世

小迫辻原 B区-1号 土器溜り:弥生時代中期後半

A-E3-SX-1

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは復元径・単位:cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胸部最大径	底径				
1SX-1	弥生式土器	壺 A		29.7	-	砂粒多い 在地	縁上げ	タテハケ・口ヨコナテ	平常なナテ	黒斑	淡明褐色	-	口縁部
2SX-1・周辺 P-6	弥生式土器	壺 A		32.0	-	砂粒多い 在地	縁上げ	ナナメハケ・口ヨコナテ	ナテ(刺織)	-	淡黄褐色	-	口縁部~胴部
3SX-1	弥生式土器	壺 A		29.4	-	砂粒多い 在地	縁上げ	タテハケ(6本/1cm)・口ヨコナテ	平常なナテ	-	淡褐色	二次加熱 又入付痕	口縁部
4SX-1	弥生式土器	壺 A		27.0	-	砂粒多い 在地	縁上げ	タテハケ(6本/1cm)・口ヨコナテ	平常なナテ	-	淡褐色	-	口縁部
5SX-1	弥生式土器	壺 A		24.6	-	砂粒多い 在地	縁上げ	タテハケ・口ヨコナテ	平常なナテ	黒斑	淡褐色 (外)淡褐色・ (内)黄褐色	-	口縁部
6SX-1	弥生式土器	壺?		-	-	砂粒多い 在地	縁上げ?	タテハケ(6本/1cm)・胴ナテ	ヘラ様の丁寧なナテ	黒斑	茶褐色	二次加熱 赤変	底部 手法

7SX-1	弥生式土器 蓋	—	—	—	砂粒多い (8.0)在地	精上げ	タテハケ(口ヨコナデ)	平滑なナデ	黒斑 (内)	黒褐色～ 茶褐色	二次加熱 赤変	底部○手法・B・40土 1層と接合
8SX-1	弥生式土器 器台	—	—	—	砂粒多い (12.0)在地	精上げ	タテハケ(6～7本/1cm)・(底)ヨコナデ	ナデ	—	淡褐色～ 茶褐色	—	側部
9SX-1	弥生式土器 器台	—	—	—	砂粒多い (外)10.2 (内)10.2	精上げ	タテハケ(14本/1cm)・(底)ヨコナデ	ヘラナデ	—	淡黄褐色	二次加熱 赤変	側部
10SX-1	弥生式土器 高杯	31.2	(25.6)	—	砂粒多い (18.3)在地	精上げ	平滑なナデ・タテハケ	平滑なナデ・(側)しぼり痕	—	淡褐色	—	口縁部・側部接合

D-NO-土421

小迫辻原B区-1号墓:弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは複元径・単位cm)		胎土	成形	調		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			器高	口径				
1	1層	弥生式土器	蓋C	—	(24.4)	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ(6本/1cm)・タテヘラミガキ	ナデ	黒斑	黒色 (内)明茶褐色	—	口縁部～側部
2	1層	弥生式土器?	蓋 <small>or</small> 壺?	—	—	砂粒多い 在地	精上げ	不明剥離	—	—	明茶褐色	—	底部

D-C2-8号墓棺

小迫辻原B区-2号墓:弥生時代中期後半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは複元径・単位cm)		胎土	成形	調		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			器高	口径				
1	1上墓	弥生土器	蓋A	—	(28.8)	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ(7・8本/1cm)・(口)ヨコナデ	平滑なナデ	—	淡黄褐色	二次加熱 スス付着	口縁部～側部
2	2下墓	弥生土器	蓋A	—	—	砂粒多い 在地	精上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	—	淡黄褐色	—	口縁部片 No.3と同一個体
3	2下墓	弥生土器	蓋	—	—	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ(6本/1cm)・(底)ヨコナデ	ナデ	底黒斑	淡黄色	—	底部 No.2と同一個体

D-H1-7号墓棺

小迫辻原B区-3号墓:弥生時代中期後半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは複元径・単位cm)		胎土	成形	調		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			器高	口径				
1	1上墓	弥生土器	蓋A	—	28.5	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ(6本/1cm)	平滑なナデ	黒斑	淡黄色	—	口縁部～側部
2	2下墓	弥生土器	蓋A	36.0	26.4	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ(6本/1cm)	平滑なナデ	黒斑	淡黄色	—	完形 底部に砂粒多い粘土を充填(底部A)

D-N18-5号墓棺

小迫辻原B区-5号墓:弥生時代中期後半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは複元径・単位cm)		胎土	成形	調		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			器高	口径				
1	1土器蓋	弥生土器	大型蓋A	47.9以上	(51.2)	砂粒多い 在地(精良土)	精上げ (内傾 接合)	タテハケ(5・6本/1cm)・(口)ヨコナデ	平滑なナデ	黒斑 (上下対 向位)	淡赤色彩色?	—	口縁部～側部貼付二条三角突帯・底部はなし
2	2下墓	弥生土器	大型広口壺A	65.5以上	—	砂粒多い 在地	タタキの可能性 有り	タテハケ・ナデ混し	平滑なナデ	—	白黄色～淡褐色	—	口縁部は埋裏用に打ち欠いている・貼付二条台形突帯
3	3土器蓋	弥生土器	大型蓋A	34.6以上	(44.8)	砂粒多い 在地	精上げ	ナデ・ヨコナデ	ナデ	—	白黄色	—	口縁部は埋裏用に打ち欠いている・貼付二条台形突帯

D-M18-4号墓棺

小迫辻原B区-6号墓:弥生時代中期後半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは複元径・単位cm)		胎土	成形	調		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			器高	口径				
1	1上墓	弥生土器	高杯(?)	—	(33.8)	砂粒多い 在地	精上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	—	淡褐色	—	口縁部 丹塗り・側部欠失
2	2下墓	弥生土器	蓋A	46.0	33.4～34.0	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ(6本/1cm)	平滑なナデ	—	淡黄色	二次精成 スス付着	(内)底部に砂粒多きを充填・口縁部を転用

D-N17-土444

小迫辻原B区-7号墓:弥生時代中期後半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは複元径・単位cm)		胎土	成形	調		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			器高	口径				
1	1上墓	弥生式土器	蓋A	43.1	37.3	砂粒多い 在地	精上げ	タテハケ(5・6本/1cm)・(底)ヨコナデ	平滑なナデ	—	明褐色	二次加熱 スス付着	完形 底部○:日常品を転用
2	2下墓	弥生式土器	大型広口壺A	51.0～ 57.0以上	—	砂粒多い 在地	—	ナデ	平滑なナデ	黒斑(上 下対向 位)	淡褐色	—	側部～底部 はりつけ二条台形突帯・成人用

小迫辻原 B区-8号墓: 古墳時代前期前半

D-U2-墓3

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	上葬	土師器	壺 A 下半	—	—	砂粒多い 在地	脩上げ タタキ成形	平行タタキ→タテヘ→ミガキ(下半)	ナナメハケ(4.0本/1cm)・タテハケ(0本/1cm)	黒斑	明茶褐色	—	貼付一条形突帯(タタキ体の刻目)・凸レンス状の平底
2	下葬	土師器	壺 A	—	—	砂粒多い 在地	脩上げ タタキ成形	脩上げ タタキ成形	—	黒斑・黒変	明茶褐色	—	M3の口縁部 大型の曇Aを裏箱に転用・口縁は打ち次いで一部ベンガラ使用(内面)
3	下葬	土師器	壺 A 下	52.0以上	21.8	頸部	—	ナナメ・ヨコタタキ→タテハケ	タテ・ナナメハケ	—	明茶褐色	—	—

小迫辻原 B区-9号墓: 中世

A-D2-1号中世墓

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	棺内副葬品	中国製青磁(竜泉窯)	碗	—	(13.6)	—	—	—	—	—	緑灰色	—	(文)横連弁文
2	棺内副葬品	土師質土器	杯	3.1~3.6	13.2	砂粒少ない	ロクロ成形(右回転)	回転ヨコナデ・(底)回転系切り	—	—	明茶褐色	—	宍形 正位に置かれる
3	棺内副葬品	土師質土器	杯	3.1	13.7	砂粒少ない	ロクロ成形(右回転)	回転ヨコナデ→(底)回転系切り・板状圧痕	—	—	明茶褐色	—	宍形 正位に置かれる
4	棺内副葬品	土師質土器	小皿	1.2	8.0	砂粒多い	ロクロ成形	回転ヨコナデ・(底)回転系切り	—	—	褐色	—	宍形 逆さに置かれる
5	棺内副葬品	土師質土器	小皿	1.2	7.9	砂粒多い	ロクロ成形	回転ヨコナデ→(底)回転系切り・板状圧痕	—	—	褐色	—	宍形 正位に置かれる
6	棺内副葬品	土師質土器	小皿	1.4	8.0	砂粒多い	ロクロ成形	回転ヨコナデ・(底)回転系切り	—	—	明茶褐色	—	宍形 逆さに置かれる

小迫辻原 B区-1号 溝: 中世

D-K19-溝28

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1層	中国製青磁	碗	—	—	淡褐色	ロクロ成形	袖がけ(全面貫入)	—	—	淡緑灰色	—	口縁部片・(文)横連弁文

小迫辻原 B区-2号 溝: 中世

D-溝26

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1埋土中	中国製青磁	碗	—	—	淡白色	ロクロ成形	袖がけ・(底)削り出し高台無袖	—	—	灰青色	—	底部片
2	2埋土中	中国製青磁	碗	—	—	5.8 淡白色	ロクロ成形	袖がけ・(底)削り出し高台無袖	—	—	淡緑色	—	底部片
3	3埋土中	泉窯	碗	—	—	明灰色	ロクロ成形	袖がけ	—	—	淡緑灰色	—	(文)横連弁文
4	4埋土中	常滑焼?	壺	—	—	砂粒多い 輸入	—	ナデ	—	—	赤褐色	—	胎土に石灰多い
5	5埋土中	土師質土器	杯	—	—	砂粒多い 在地	ロクロ成形	(底)回転系切り・板状圧痕	回転ヨコナデ	—	黒斑	—	底部

小迫辻原 B区弥生時代前期中世

D-弥前ピット

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	K1調査区 pit 2	弥生土器	壺 A	—	(26.4)	砂粒多い 在地	脩上げ	タテハケ(6.0本/1cm)・(口)ヨコナデ	—	—	茶褐色	—	口縁部→胴部
2	K1調査区 pit 2	弥生土器	壺 A	—	—	砂粒多い 在地?	脩上げ	タテハケ(4.0本/1cm)・(口)ヨコナデ	—	—	褐色	—	口縁部刻目片・(文)竹管文(三条沈線)
3	K1調査区 pit 3	弥生土器	壺	—	—	砂粒多い 在地	脩上げ	タテハケ・(底)ヨコナデ	ナデ	—	淡黄褐色	—	底部片

小迫辻原 B区弥生時代中期ピット

D-弥中ピット

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	F1調査区 pit 2-1 椀	弥生土器	壺 A	—	—	砂粒多い 在地	脩上げ	不明(割線)	—	—	淡褐色	—	口縁部片
2	G1調査区 pit 3	弥生土器	壺 A	—	(16.4)	砂粒多い 在地	脩上げ	タテハケ(0本/1cm)・(口)ヨコナデ	平滑なナデ	—	淡茶褐色	—	口縁部

小迫辻原 B区奈良時代ピット

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	F2調査区 pit 2	須臾器	坏身	—	—	(9.4)砂粒少い	ロクロ成形・精工	外面	内面	—	淡黒灰色	—	底部片
回転ナデ・回転へら切蹴し 回転ナデ													

小迫辻原 B区中世ピット

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	10調査区 Pit 6	中国製青磁	碗	—	—	灰色	ロクロ成形	軸がけ	—	—	明青緑色・薄茶色	—	口縁部(文)筋連弁文
2	10調査区 Pit 8	中国製青磁	碗	6.7	16.4	5.2灰色	ロクロ成形	軸がけ	—	—	淡青緑色	—	口縁部欠縁(文)筋連弁文・貫入
3	10調査区 Pit 9	中国製青磁	碗	—	—	(5.0)灰色	ロクロ成形	軸がけ	—	—	淡灰青緑色	—	削り出し高台
4	10調査区 Pit 11	土師質土器	坏	—	—	(8.2)精白胎土	ロクロ成形	ヨコナデ・(底)回転糸切り	ヨコナデ	—	橙色	—	底部
5	10調査区 Pit 7	土師質土器	坏	—	—	精白胎土	ロクロ成形	ヨコナデ・割蹴	ヨコナデ	—	淡青緑色	—	口縁部
6	117調査区 Pit 7	陶器	音炉壺	(2.5)	(7.2)	薄黄土色	ロクロ成形	ナメメハケ(8本/1cm)	平滑なナデ	—	緑胎色	—	文頭頂部に刻み葉ぼたん文様

小迫辻原 B区表面採集土器

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(つぎは複元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	旧A地区	深鉢	深鉢	—	—	砂粒多い	精工上げ	—	—	—	淡褐色	—	頸部片(文)半截竹管文
2	旧A地区	細文土器・後明土器	細文土器・後明土器	—	—	砂粒多い	精工上げ	細文・沈線・磨削	糸痕	黒斑	黒茶褐色~茶褐色	—	胴部
3	B-19土埋土中	土師器	浅鉢?	—	—	砂粒多い	—	不明	—	—	暗茶褐色	—	口縁部片
4	旧A地区	弥生中期土器	壺C	—	(11.6)	砂粒多い	精工上げ	タテハケ(7本/1cm)	指ナデ	—	淡褐色	—	口縁部
5	旧E地区	弥生後期土師器	壺D	10.0	(11.3)	4.4	精工上げ	ナデ	指ナデ・指圧痕	—	淡褐色	—	半壳形・丹塗リ口縁部に2穴1組の穿孔
6	B-33土埋混入	土師器	壺B	—	(16.0)	砂粒多い	精工上げ	右より平行タタキ(2本/1cm)	ナデ・指圧痕	—	淡褐色	—	口縁部
7	旧A地区	土師器	高杯	—	—	砂粒多い	精工上げ	タテハケ・ナデ	ハケ・ナデ	—	茶褐色	—	二次加熱茶変
8	旧A地区	土師器	高杯B	—	—	砂粒多い	精工上げ	タテハケ(4本/1cm)	指圧痕	—	淡褐色	—	胴部
9	旧A地区	土師器	高杯A	—	—	砂粒多い	精工上げ	タテハケ・タテヘラミガキ	ヘラミガキ・(内)ヨコナデ	—	赤茶褐色	—	胴部
10	旧A地区	土師器	小型器台D	—	(10.2)	砂粒多い	精工上げ	ヨコナデ	指圧痕・ナデ	黒斑	淡褐色	—	胴部
11	旧A地区	瓦(古代)	平瓦	長さ7.8以上	幅6.9以上	厚み2.9	タタキ成形	格子タタキ	布目	—	淡褐色	—	古代
12	旧A地区	瓦(古代)	丸瓦	長さ7.7以上	幅6.9以上	厚み1.7	タタキ成形	タタキ	布目	—	淡褐色	—	古代
13	旧A地区(養採)	土師質土器(中世)	小皿	1.4	(8.0)	6.4	ロクロ成形	ロクロナデ・(底)回転糸切り	ロクロナデ	—	明焼褐色	—	口はげ
14	旧A地区	中国製白磁	碗	—	(15.5)	—	ロクロ成形	軸がけ	—	—	淡黄褐色	—	(文)押し型「金玉酒壺」
15	旧D地区	中国製青磁	碗	—	—	6.4	ロクロ成形	軸がけ	—	—	オリーブ黄色	—	(文)押し型「金玉酒壺」

第 7 表 小迫辻原遺跡 B区 出土土製品観察表

小迫辻原 B区-4号竪穴住居：古墳時代前期前半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(口つきは復元径・単位(cm))			胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	径	厚さ			外 面	内 面				
33	2層	土製品	紡錘車	—	5.3	0.9	—	手づくね	ナデ(ナナメ、ハケ)		—	淡褐色～明橙褐色	—	半分におかれている

A-C4-3住

小迫辻原 B区-10号竪穴住居：古墳時代前期前半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(口つきは復元径・単位(cm))			胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	径	厚さ			外 面	内 面				
24	2層混入	土製品	紡錘車	5.5～6.0	1.0	0.6	—	手づくね	指圧痕・ナデ		—	淡褐色	—	

D-L1・K1-24住

小迫辻原 B区-31号土壇：弥生時代前期後半～中期初頭

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(口つきは復元径・単位(cm))			胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				長さ	厚さ	孔径			外 面	内 面				
8	3層(上位一括)	土製品	土鏝	3.1	1.6	0.3～0.4	—	手づくね	指圧痕・ナデ		黒斑	淡褐色	—	

D-N18-433土

小迫辻原 B区-53号土壇：中世

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(口つきは復元径・単位(cm))			胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				長さ	厚さ	孔径			外 面	内 面				
2	1層	土製品	土鏝	3.6 以上	1.1	1.5～3.0	—	手づくね	ナデ→ミガキ		黒斑	暗茶褐色	—	

D-K19-32住

小迫辻原 B区-2号溝：中世

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(口つきは復元径・単位(cm))			胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				長さ	厚さ	孔径			外 面	内 面				
6	埋土中	土製品	土鏝	5.6	1.8	16.9	0.4～0.5	手づくね	指圧痕・ナデ		—	明橙褐色・灰色	—	重さ16.9g

D-26溝

第 8 表 小迫辻原遺跡 B 区 出土石器観察表

出土遺構	No.	位置・層序	器種	石材	()つきは破片・単位(cm)			重量 (単位g)	備考
					長さ	幅	厚さ		
B区-2号竪穴住居 (弥生時代前後～中初)	13	1層	磨製石斧	砂岩	(10.4)	7.2	3.3	(444.2)	基部欠損
	14	1層	磨製石斧	硬質砂岩	(8.0)	(7.6)	4.1	(450.0)	刃部欠損
	15	1層	石皿	安山岩	28.2	13.0	9.6	5500.0	完形
	16	2層 中央土庫2層	磨石	ホルンフェルス	(8.6)	6.0	4.0	(354.7)	半折
	17	1層	磨石	安山岩	10.2	(7.8)	5.9	700.0	半分欠損
B区-4号竪穴住居 (古墳時代前期・前半)	18	1層	磨石	安山岩	(8.5)	(5.2)	5.7	(350.0)	加熱して割れている
	34	1～3層の廃棄	石皿	安山岩	(14.5)	(8.2)	(9.2)	(685.3)	破片
	35	4層上部廃絶時一括	砥石	砂岩質頁岩	(3.9)	2.4～5.2	1.6	(66.0)	破片
	48	2層・床面直上・廃絶時一括	石皿	安山岩	35.0	27.1	10.0	(14200.0)	一部欠損 加熱の為割れている
	49	2層 廃絶時一括	石皿？(台石)	安山岩	38.8	30.7	10.0	21000.0	完形
B区-5号竪穴住居 (古墳時代前期・前半)	50	南部屋土	石皿	安山岩	(13.0)	(10.0)	3.9	(808.0)	破片
	51	南中部埋土	小型石皿	安山岩	16.8	12.2	4.2	1310.0	ほぼ完形
	52	西南部埋土	小型石皿	安山岩	14.6	12.8	3.9	(1150.0)	一部欠損
	53	3～5層	磨石	安山岩	14.4	9.3	4.2	(817.2)	一部欠損
	54	3～5層	小型石皿	安山岩	15.8	13.0	4.5	1420.0	完形
	55	廃絶時一括	磨石	安山岩	12.8	9.0	4.6	886.0	完形
	56	2層 廃絶時一括	小型磨石	安山岩	8.0	6.4	2.8	214.0	完形
	57	2層 廃絶時一括	磨石	安山岩	19.1	6.7	3.6	1040.0	スズ付着
	58	中央部屋土	砥石	安山岩	(8.7)	7.5	7.8	(844.0)	破片
	59	2層 廃絶時一括	砥石	頁岩質砂岩	(16.6)	7.5	4.3	(868.0)	破片
	15	2層～4層	石皿？	安山岩	10.4	(11.1)	5.2	(578.0)	破片
	16	床面直上	磨石	安山岩	12.9	11.7	4.6	985.9	完形
	13	2層 廃絶時一括	石皿	安山岩	32.2	32.0	8.2	13000.0	完形
	14	1層	石皿	安山岩	(14.9)	(10.8)	6.5	(1750.0)	破片
	15	廃絶時一括	小型石皿	安山岩	(10.5)	(11.4)	4.6	(908.0)	加熱している半折
B区-10号竪穴住居 (古墳時代前期・前半)	25	3層 廃絶時一括 (上部)床土3 ～5cm	石皿？	安山岩	40.0	34.0	7.7	18000.0	離あり
	26	2層 混入	石皿	安山岩	(14.7)	(10.8)	4.2	(672.3)	破片
	27	3層 廃絶時一括(上部)	小型石皿	安山岩	14.1	4.0	4.2	1400.0	完形 炭化材の上にいる
B区-12号竪穴住居 (古墳時代前期・前半)	8	1～2層 土庫1上面	磨石	安山岩	13.5	6.6	3.0	336.0	完形
	3	1層	砥石	安山岩	(4.2)	3.3	2.5	—	破片
B区-13号竪穴住居 (古墳時代前期・前半)	5	柱穴 9	携帯用砥石	千枚岩	13.0	3.8	0.6～1.0	72.4	完形 画面穿孔・柱痕中
	3	中央部	鉄剣形磨製石剣	硬質頁岩	(8.4)	1.6～3.2	0.8	(22.3)	先端部割裂品？
B区-1号墓 (弥生時代前後～中初)	4	残留	鉄剣形磨製石剣	硬質頁岩	(10.0)	4.2～4.8	1.0	(68.7)	基部同一個体？
	3	1層	打製石鏃	姫島産黒曜石	1.8	1.5	0.5	1.2	未製品？
B区-2号土庫 (弥生時代前後～中初)	6	2層	打製石鏃	粘板岩	2.8	(1.7)	0.4	(0.9)	一部破損
	3	1層	磨製石斧(給刃)	硬質砂岩 (玄武岩？)	(10.8)	7.4	(4.5)	(570.0)	破片、今山産か？

B区-9号土壌 (弥生時代前後～中初)	1	2層	打製石鏃	壓岳産黒曜石	1.8	2.1	0.3	0.6	完形
B区-13号土壌 (弥生時代前後～中初)	6	2層一括	打製石鏃	姫島産黒曜石	2.4	(2.0)	0.4	(1.1)	一部破損
B区-22号土壌 (弥生時代前後～中初)	1	1ないし2層	打製石鏃	サヌカイ	2.3	(1.8)	0.4	(0.9)	一部破損
B区-27号土壌 (弥生時代前後～中初)	5	2層	磨製石斧(始刃)	優質砂岩	(12.3)	8.0	4.8	(974.0)	基部欠損 刃部幅 7.6cm
B区-42号土壌 (弥生時代中後)	52	7層(下位一括)	磨石	安山岩	13.0	5.3	3.9	330.0	完形
B区-43号土壌 (弥生時代中後)	29	2層	磨石	安山岩	(12.1)	(3.5)	4.4	(315.9)	破片 加熱して赤変

小迫辻原遺跡B区 表面採集石器

出土遺構	NO	位置・層序	器種	石材	()つきは破片・単位(cm)			重量 (単位g)	備考
					長さ	幅	厚さ		
B区-6号竪穴住居 (縄文時代)	16	残留	石斧	蛇紋岩	8.8	2.3	5.3		
B区-10号竪穴住居 (縄文時代)	17	残留	扁平打製石斧	結晶片岩	10.0	5.2	1.3	115	
B区-10号竪穴住居 (縄文時代)	18	残留	扁平打製石斧	安山岩	8.3	6.2	1.3	97	
旧A区採集 (縄文時代)	19		扁平打製石斧	安山岩	12.6	9.9	1.4	255	
B区-10号竪穴住居 (弥生時代)	20	残留	磨製片刃石斧	硬質頁岩	4.5	2.9	0.9	28	完形品

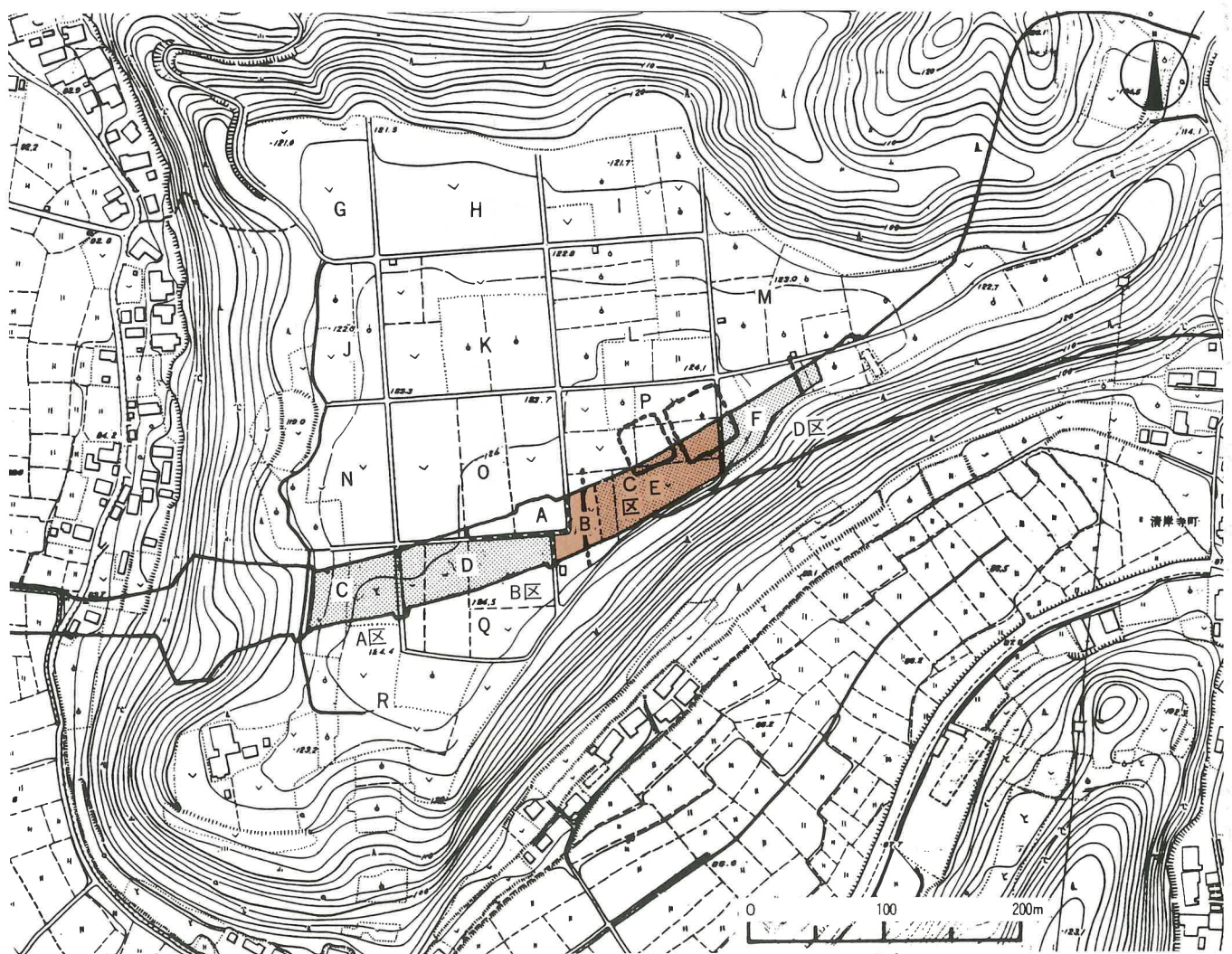
第9表 小迫辻原遺跡 B区 出土鉄器観察表

出土遺構	NO	位置・層序	器種	規格		重量 (単位g)	装着痕 分類	備考
				全長	刀部長/刀部幅/厚さ			
B区-4号竪穴住居 (古墳時代前期・前半)	36	4層下部・床面直上	定角式鉄鏃	7.5	3.8 1.65 0.1	7.2	なし A1	焼土炭の下に床面に密着して出土
B区-5号竪穴住居 (古墳時代前期・前半)	60	1層床面直上	鉄鏃、柳葉形	(3.6)	— 0.8 0.4	(4.2)	あり	—
B区-6号竪穴住居 (古墳時代前期・前半)	17	4層	鉄鏃、柳葉形	6.9	— 2.0 0.4	9.5	あり	木質残存
B区-11号竪穴住居 (古墳時代前期・前半)	10	3層上部流入	刀子	(11.9)	8.7 1.5 0.3	(17.0)	あり	床土 7cm
10調査区・ピット4 (古墳時代前期・前半)	1	—	鉄鏃、柳葉形	(11.0)	— 2.8 0.4	19.0	なし C1	先端部欠失
B区-2号掘立柱建物(中世)	1+2	柱穴5	刀子	—	— 0.4 0.4	(11.1)	—	目釘穴あり。同一個体
B区-9号墓(中世)	6	棺内	鉄刀	26.7	17.0 2.1 0.6	78以上	—	—

第6章 C区の記録

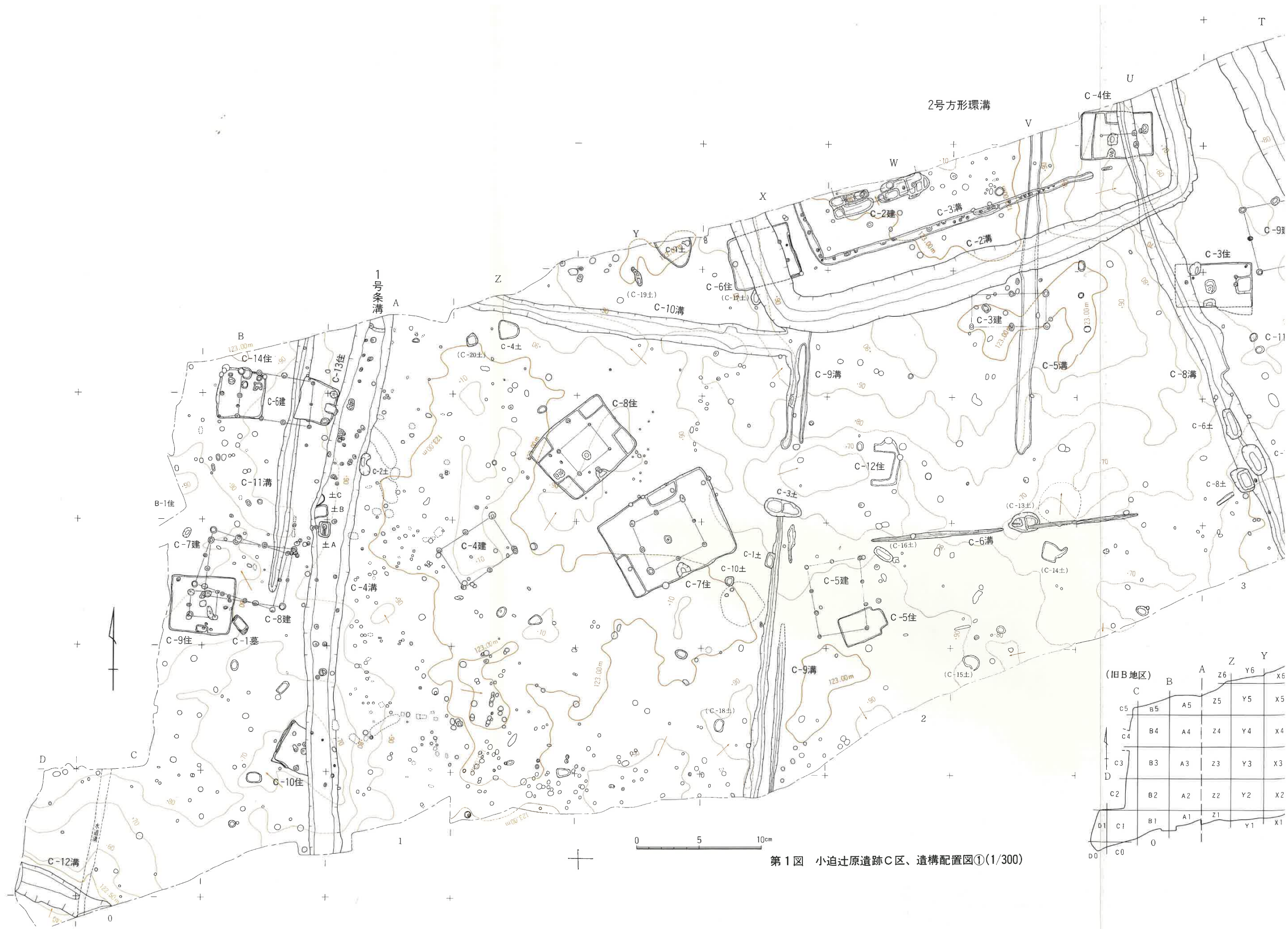


2号方形環溝付近調査風景（1987年）



C区的位置





第1图 小迫辻原遺跡C区、遺構配置図①(1/300)

(旧B地区)

			Z	Y	
		A	Z6	Y6	X6
C5	B5	A5	Z5	Y5	X5
C4	B4	A4	Z4	Y4	X4
C3	B3	A3	Z3	Y3	X3
D					
C2	B2	A2	Z2	Y2	X2
C1	B1	A1	Z1	Y1	X1
D0	C0	O			



第1節 C区の調査概要（第1図 →図版1・15）

C区は本調査時の旧B地区と旧E地区である。現状では辻原台地の中で最も高い位置にあたる。調査時点では大部分が畑であったが、1号方形環溝付近は牧場の牛糞置場になっていたため、少なからず調査に影響を与えた。全体に耕地整理などによる削平の影響は少なく、B区同様遺構の保存状態は比較的よかった。

遺構検出面のレベルは海拔123.0m付近で安定し、西部のC-4溝付近から西は次第に低くなる。小迫辻原遺跡全体の地形からみると、C-4溝から2号方形環溝を経て、1号方形環溝の東の段落ち（第7章で詳述）までが最も高く、かつこの付近は台地の南辺に位置することになる。

C区では現地地形の上面で、自然が生み出した凹みや現代の穴を除いて、竪穴住居跡14軒・掘立柱建物跡9棟、土壇20基、墓1基、溝12条とピット多数を検出した。そのうち溝と掘立柱建物が計画的に配置された2箇所の方型環溝遺構が存在する。以下に報告する遺構は、出土遺物・切り合い関係・土質等により時期の判定が可能であったもののみである。文章のない遺構は章末の遺構一覧表を参照されたい（第1～5表）。

遺構の時期別分布の特徴として、①高い位置であるにもかかわらず、弥生時代前中期の遺構はまったく検出できなかった。②古墳時代前期前半では、台地全体を東西に分割する1号条溝の一部を検出し、その東で東西に並ぶ2基の方型環溝遺構を発見した。また竪穴住居跡だけでなく、この時期の掘立柱建物跡を2棟検出している。③奈良時代の遺構、特に竪穴住居がC区全体に点在する。④中世の遺構は少ないが、中央でB-2溝と平行して南北に伸びるC-5溝と、その以西で掘立柱建物跡を検出した。⑤近世では畑地境界溝と方形区画の宅地を検出した。以上である。以上の時期以外の遺構が全く検出されないのはD区と同様であり、おそらく辻原台地は特定の歴史的条件が揃ったときにのみ遺跡が形成される場所であったと考えられる。

なお旧A・B地区においては全体の遺構掘り下げの後、5m方眼で1×1mの調査坑を設け、旧石器時代の遺跡検出を目的とした試掘をおこなったが、石片を数点検出したにとどまった。

第2節 古墳時代前期前半（第2図）

この時期にあたる遺構は調査区全体に分布するが、台地南端に近い調査区南半では遺構が少ない傾向にある。方形環溝を構成する遺構群を含めて掘立柱建物跡4棟・竪穴住居跡10軒・土壇2基と溝4条を確認した。そのほか多数のピットを検出したが、土器を含まないため時期の判定が困難であった。したがってさらにこの時期の遺構が存在した可能性は残されている。

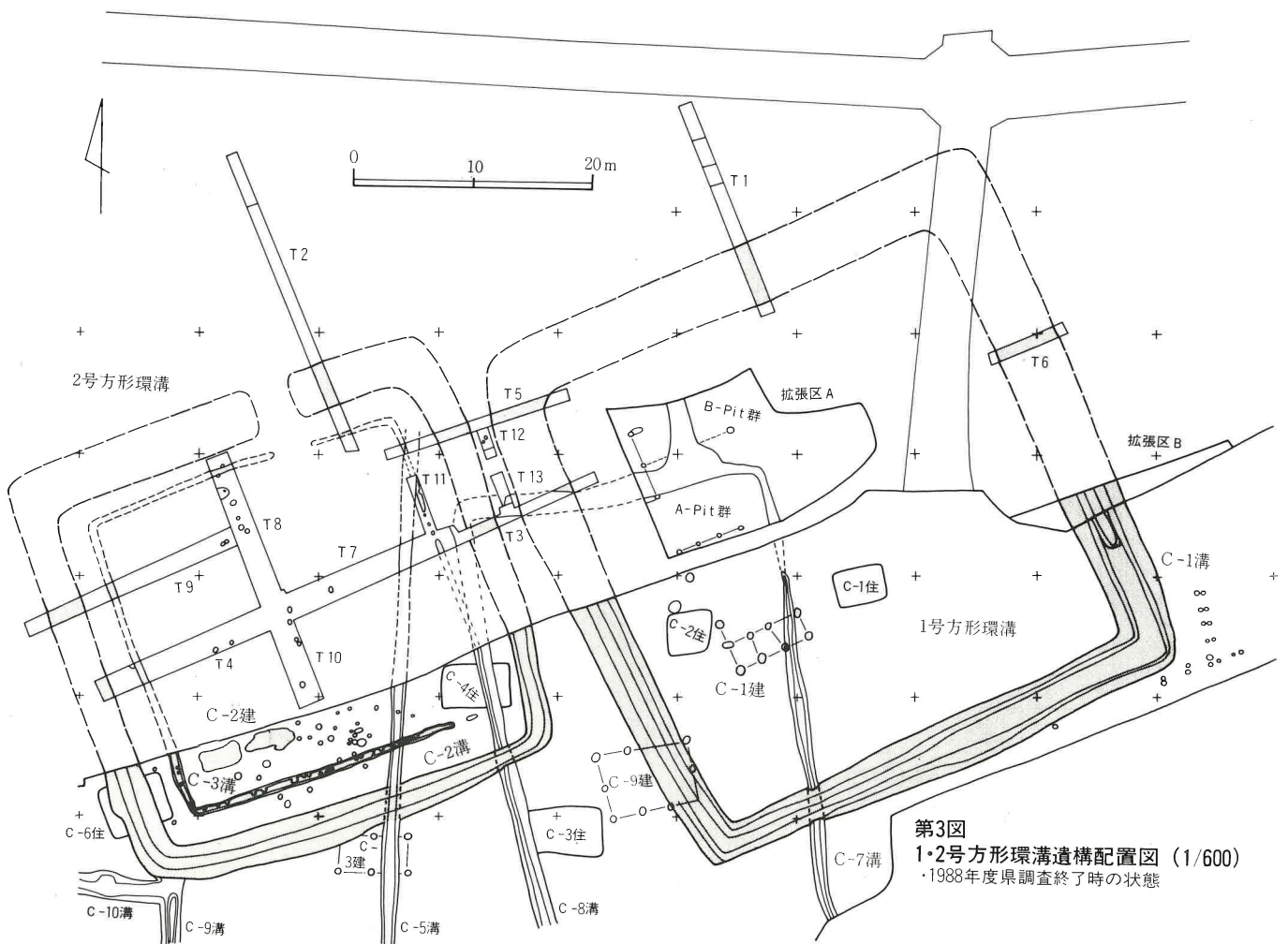
遺構の配置は、1号条溝の東西で異なり、以西はB区の竪穴方向と一致する竪穴住居跡が存在する。すなわちC-10住はB-6住と一致してB区の第1群の遺構と同じ方向であるから、小迫辻原1ないし2期となる。C-9住は、第3群の方向と一致するので小迫辻原4期となる。1号条溝はC-10住を切っているため、第1群の時期以後すなわち小迫辻原3期である。しかしその1号条溝は竪穴住居跡にも方形環溝の方向にも一致しない。一方1号条溝以東では別に方向の異なる遺構群がある。まずC-1住・2住・3住・4住とC-3建物が同一方向をとる一つのまとまりと認識でき、B区の第1群と比べて方位が大きく異なり、1号方形環溝築造以前の小迫辻原1ないし2期と推定される。次に1号方形環溝とC-5住・6住・7住が同じ方向で造られている。1号方形環溝の方向はB区の第2群とD-1住とほぼ一致していることから小迫辻原3期にあたる。同一方向のC-5住・6住・7住も同じ時期と推定される。さらに小迫辻原3期のC-6住を切って2号方形環溝が造られているので、2号は次の小迫辻原4期と推定される。また1号条溝と方形環溝群の間に位置するC-8住とC-4建物は、以上のような方位の変化と無関係な一群で、出土遺物の特徴からC-8住が小迫辻原2期と推定される。C-4建物は近接するC-6住かC-7住のいずれかと同じ時期であろう。

1) 方形環溝遺構 (第3図 →図版1)

東西に並立する二基の方形環溝遺構群を検出した。微妙に方向をずらして、切りあうことなく建設されている。1988年におこなった北側の試掘調査の結果とあわせて示したのが第3図である。以下県の調査とその後の日田市の調査成果をあわせながら記述する(註1)。1号と2号の環溝は検出面の最も近いところで約2mまで接近しており、削平の程度を考えれば、建設時にはさらに接近していたことは想像に難くない。方位と位置の微妙なずれを考慮すれば、同一時に建設されたとは考えがたく、時期を異にして順に造られていったと推定される。その順序を決める手がかりの一つは1号方形環溝の周囲に造られた竪穴住居跡と2号方形環溝との関係である。というのは1号方形環溝の周囲には、方向を同じくして同時期に建設されたと推定される竪穴住居跡が、衛星状に分布する。D-1住・C-6住・L-1区1号竪穴住居跡(註2)・P区2・3号住(註1)などである。そのうちC区の調査において、C-6住を切って2号方形環溝が造られたことが確認されているので、1号方形環溝→2号方形環溝の順に建設されたことが判明する。その際、環溝の埋没土を検討したかぎりでは、1号方形環溝のC-1溝のなかに、後から造られた2号方形環溝の掘削土が投棄された確実な形跡はない。この点は疑問な点であるが、2号建設時に1号には触らないように注意深く工事がおこなわれた結果と推測される。

註1、土居和幸「小迫辻原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報』VI、1991、日田市教育委員会

註2、土居和幸『日田地区遺跡群発掘調査概報』VII、1988、日田市教育委員会





第4図 1号方形環溝① -遺構群の平面配置と断面形態- (1/160)



第5図 1号方形環溝② -1988年県調査時の内部遺構群- (1/200)

1. 1号方形環溝（第4・5図、写真1 →巻頭図版7・9、図版2～10・35～37）

2号方形環溝の東側で検出されたもので、方形にめぐる環溝C-1溝の南半分と、その内部で検出されたC区-1号掘立柱建物跡からなる遺構群である（第4図）。方形環溝を検出した場所は、現状において牛糞置場になっていたため、遺構の検出面を下げざるをえず、浅い遺構を消失させた可能性が高い。

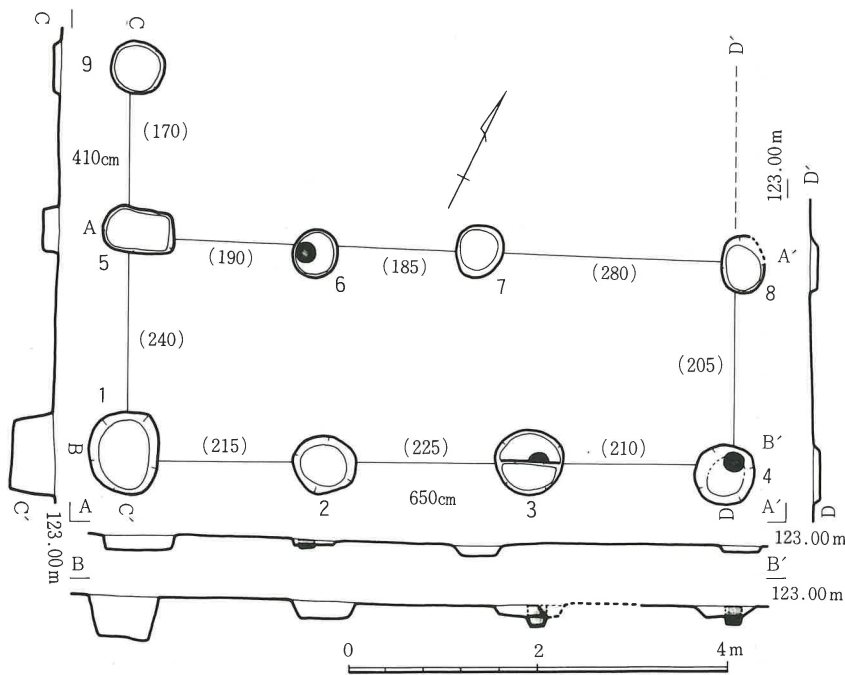
内部の遺構配置として、まずC-1建物が環溝C-1溝の方向と一致して、中央西寄りに検出された。また北側の試掘により、1号方形環溝の北半分にも柱穴列が検出されている（第5図）。その試掘拡張区では、掘り下げはおこなっていないものの、C-1建物の柱穴埋土の質と色調が同じ円形ピットを8本確認した。そのうちA-ピット群は東西に4本並ぶもので、柵ないし掘立柱建物の一部であると推定される。B-ピット群は南北の3本と、さらにピット2の直角線上にあたるピット4の計4本を検出している。このピット群は東西棟の掘立柱建物跡と推定される。いずれもC-1建物同様西側に位置している。さらに日田市のその後の調査によって（註1）、環溝の内側にピット列を伴う小溝が検出されており、2号方形環溝と同様に、方形環溝内部の四囲を方形に区画する布堀が存在したことが明らかになっている。同時に環溝には陸橋が存在しないことも明らかになり、小溝の配置から方形環溝の北辺には入り口施設はないと推定される。したがって入り口の位置と構造は2号方形環溝と異なることになる。ほかに明確な遺構は存在しないので、おそらく二棟の掘立柱建物の東側は広場として機能したと推定され、その点は2号方形環溝と同じである。

なお環溝内部にはC-1住・C-2住が存在するが、C-2住はC-1建物と接近しすぎている。同時に両竪穴住居跡は、いずれもC-1溝とC-1建物の方向とずれているので、方形環溝に伴う可能性はなく、1号以前の遺構であると推定される。この1号方形環溝の建設をもって、小迫辻原3期の指標としている。（旧E・F地区1号環壕居館）

註1、土居和幸「小迫辻原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報』VI、1991、日田市教育委員会



写真1. 1号方形環溝拡張区A（東北から）



第6図 1号方形環溝③ - C区-1号掘立柱建物跡 - (1/80)

は円形で径は20cmほど大きい。東西長軸の方位角は64度で、C-1溝の方向と一致する東西棟の掘立柱建物となる。床面積がそれほど広くないにもかかわらず、柱穴が大きくかつ東柱を備えていることから、背の高い床を備えた掘立柱建物であったと推定される。

柱穴埋土中からは遺物は出土しなかったが、環溝の方向と一致するところから1号方形環溝にともなう掘立柱建物跡と推定した。(旧E地区掘立柱建物20)

C区-1号溝 (第4・7~16図、写真2・3 →図版3・5~10・35~37)

周辺調査の結果と考えあわせると、環溝外端中央で測って約47×47mのほぼ正確な正方形となる方形環溝である。C区ではその南半分を完掘した。C-1溝の南辺にあたる東西溝の長さは外端コーナーで測ると約43mで、内端コーナーでは約36mである。中央の軸線で測った長さよりやや短く、方形環溝の四辺はわずかに胴張り状となる。また検出した二隅のコーナーは、斜面に稜がつくほど角を立てて直角に折れるのを特徴とする。この南辺

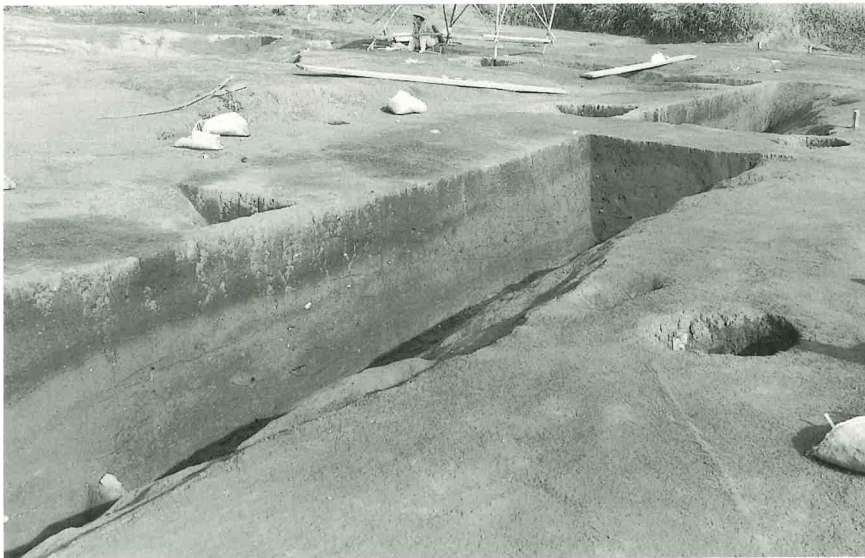


写真2. 1号方形環溝C-1溝C~E地点の縦断面(南西から)

C区-1号掘立柱建物跡 (第4・6図 →図版4)

環溝C-1溝の内部で検出された3間×2間以上の掘立柱建物跡である。かなり削平を受けており、そのため北側の柱穴は発見されず、残された柱穴もわずかの深さを検出するにとどまった。検出できた柱穴の掘形はすべて円形で径60から80cm前後と大きく、深さは柱穴1を除きよく揃っている。また床を支える東柱とみられる柱穴6・7を検出した。3間×2間で完結する場合の規模は、心心距離で東西長軸長650cm、南北短軸長410cm、床面積が25.9㎡の建物となる。柱間距離がいずれも2mをこえ、柱穴3・4・6で検出された柱痕跡

東西溝の軸で方位を測ると方位角64度である。また調査部分には橋桁となる柱穴あるいは陸橋のような施設は検出されなかった。

次に溝の形態を述べる(第16図)。溝の幅は全体に検出面の最も広いところで4.5m、狭いところで2.5mとなりかなり変化する。その変化に対応して溝の断面形にも変化がつく。まず東辺南北溝の中央に近いA地点(断面①以北)では、底部に段がついて急に深くなり、断面形

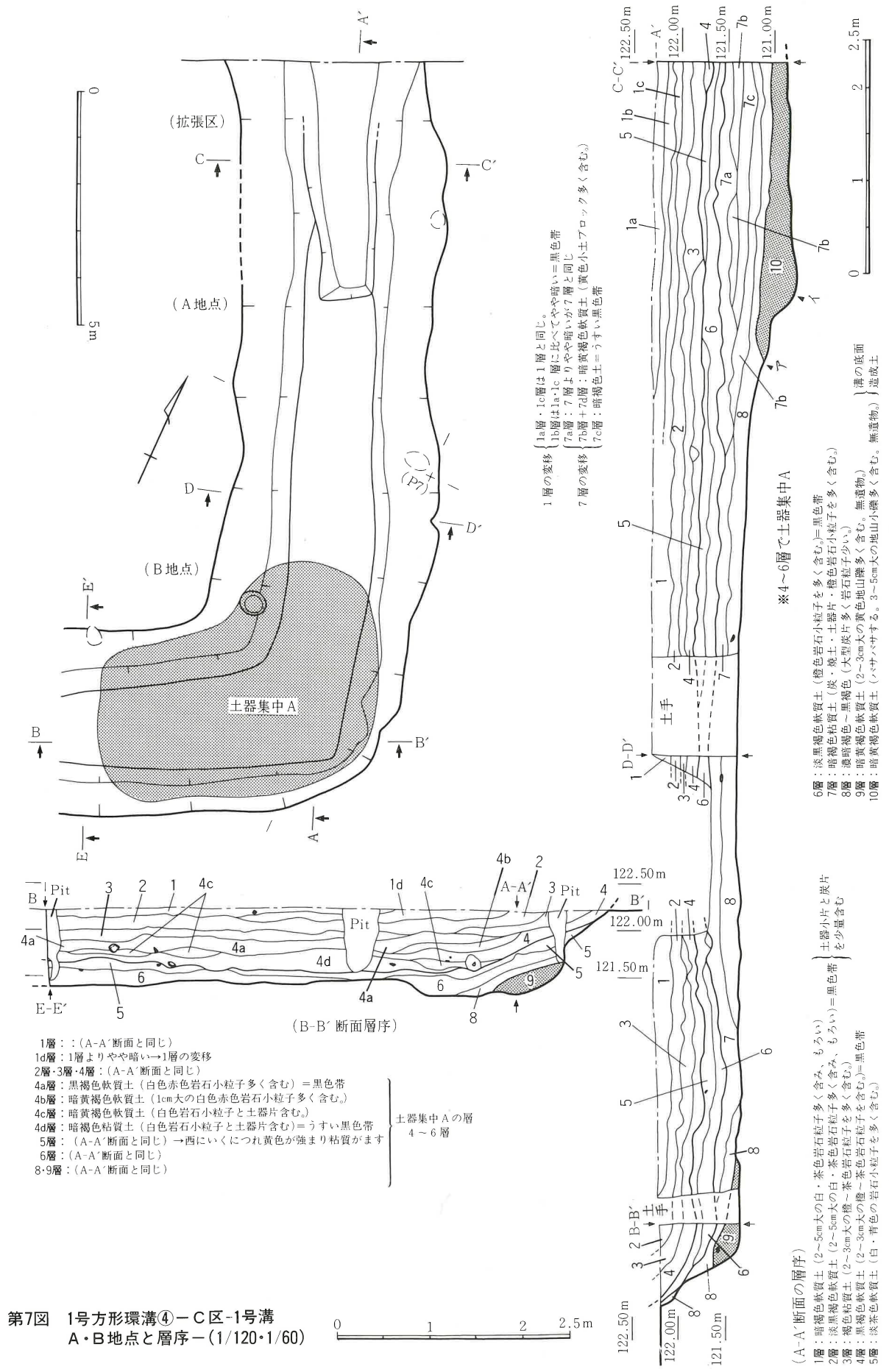
は底面U字形である。その検出面の幅は450cm前後、底面の幅は100cm前後、検出面からの深さは150cmを測る。東辺南北溝から南辺東西溝の東半にかけて（断面①-②間）は、幅広の逆台形に変化する。その検出面の幅は350~400cm、底面の幅は150~180cmと広くなり、検出面からの深さも90~100cmと浅くなる。それが南辺東西溝の西半から南西コーナーにかけて（断面②-③間）は上面幅280~300cm、底面幅50cmと狭まりV字形に近くなる。そして西辺南北溝（③以北）はふたたび逆台形になり、検出面での幅350~380cm、底面の幅80~100cm、検出面からの深さは110~140cmをはかる。

調査は以上の溝を横断する土層観察用土手を境界にA~I地点に分割し、さらに縦断面を観察するために、各地点を縦に半裁して半分ずつ掘り下げた（第7・9・11図、写真2）。その結果、A）溝の構築状況、B）溝の埋没過程、C）その際の遺物廃棄状態が、次のように判明した。

A）溝の構築状況について（第16図）。さきにふれた溝の形態の変化は、実はこの構築の状況と関連している。第16図断面①以北のU字形溝を仮にI区、断面①-②間の逆台形溝をII区、②-③間のV字形溝をIII区、③以北をIV区とする。断面観察の結果次の状況が判明した。I区では、その底面に堆積した10層（第7図）はパサパサした暗黄褐色土で、3~5cm大の基盤層に由来する小礫を多量に含み、その土は溝が掘られた地山の土およびその内容物そのものであった。この10層が遺物を含まずII区の底面と同じ高さまで堆積していることから考えて、おそらくI区は設計面より深く掘りすぎたことに気付いて掘削を中止し、そこに掘り出した地山の土砂を戻して、溝の底面をII区の高さに揃えたものと考えられる。同じ状態はIII区（第9図）でも認められ、V字形溝の底面に10層と同じ内容の11層が堆積し、両側のII区とIV区の底面と同じ高さに整えられている。ほかにII区ではコーナーを深く切り込みすぎたと判断したらしく、同質の9層（第7図）で埋めたり、IV区では12層（第11図）を底面に敷いて高さを揃えている。以上のように設計面よりも深く掘りすぎた場所では、掘り出した土砂を使って埋め戻し、溝の形態を整えているのである。完掘した状態をみると一見不揃いな断面形態の溝に見えるが、完成時には溝全体を逆台形の形態に整えていたわけである。またこのようにIからIV区の間で形態が変化するのは、I区からIV区にわけて異なる工事集団が溝の掘削を担当した結果であると推定される。同時に最終的には同じ高さの逆台形の溝に完成しているのであるから、全体を統一して設計・指揮監督した施工者がいたことになる。しかしなぜI区とIII区は掘りすぎ、III区とIV区は設計とおりのような食違いが生じたのだろうか。おそらく同時に工事が進行したのではなく、I~IV区を担当した集団は日時を異にして工事に参加したためにこのようなことになったと考えられる。一方各区で埋め戻された9~12層はいずれも一気に埋められた同質の土砂であるから、全体を同じ埋土で埋め戻したと考えられ、最終工程の工事は最後に同時におこなわれたとみられる。そしてその9~12層の断面観察時の所見では、この層はほとんど汚れていない黄色土からなっていた。ということは先に逆台形のII区とIV区がほられ、後からより深いI区とIII区が掘られたことを示唆する。なぜなら深い場所が先に掘られたのなら、後の浅い部分の工事中に当然深い部分が工事作業のために使われ、底面が硬化したり汚れたり、あるいは汚れた土砂が堆積する可能性が高いはずである。しかし例えば11層などでは、底面にそういう痕跡はなく逆に下部の11b・11c層の方がきれいな堆積土であった。したがってII区とIV区が先に掘られ次にI区とIII区が掘られたと推定され、I・III区を掘削した工事集団は断面形の設計を誤解していたか、あるいは周溝を掘るのにV字溝の経験しかなかった集団であったとおもわれる。

以上の溝の構築過程をまとめると、①方形区画の設計をもとに掘削前に「縄張り」がおこなわれ、②まずII区とIV区から溝の掘削がはじまる。このII区とIV区にそれぞれ南東と南西のコーナー部分が含まれているのは、コーナー部の掘り下げが施工上優先されたためであろう。③II・IV区掘削終了後、I区とIII区の工事がおこなわれる。④最後に掘り出した土砂を使って、深い部分を埋め戻し逆台形に整形し完成する。以上である。

B）埋没過程について（第7・9・11図）。土層観察の結果、掘り直しの痕跡はないことを断っておいた上で、埋没過程を記述する。まず東辺南北溝のA・B地区に炭片を多く含むが土器片は含まない黒褐色の8層が堆積する。その広がり南東コーナーにとどまる。その上に炭と焼土の小粒子を多量に含む暗褐色の7層が、北にいくほど厚く堆積し、色調の濃淡でさらに細分される。色の薄い黄色が強くなる層（7b・7d層）は黄色土ブロックを多く含み、色の濃い黒色が強くなる層（7c層）は炭が多く汚れている。前者は急速に堆積し、後者はゆっ



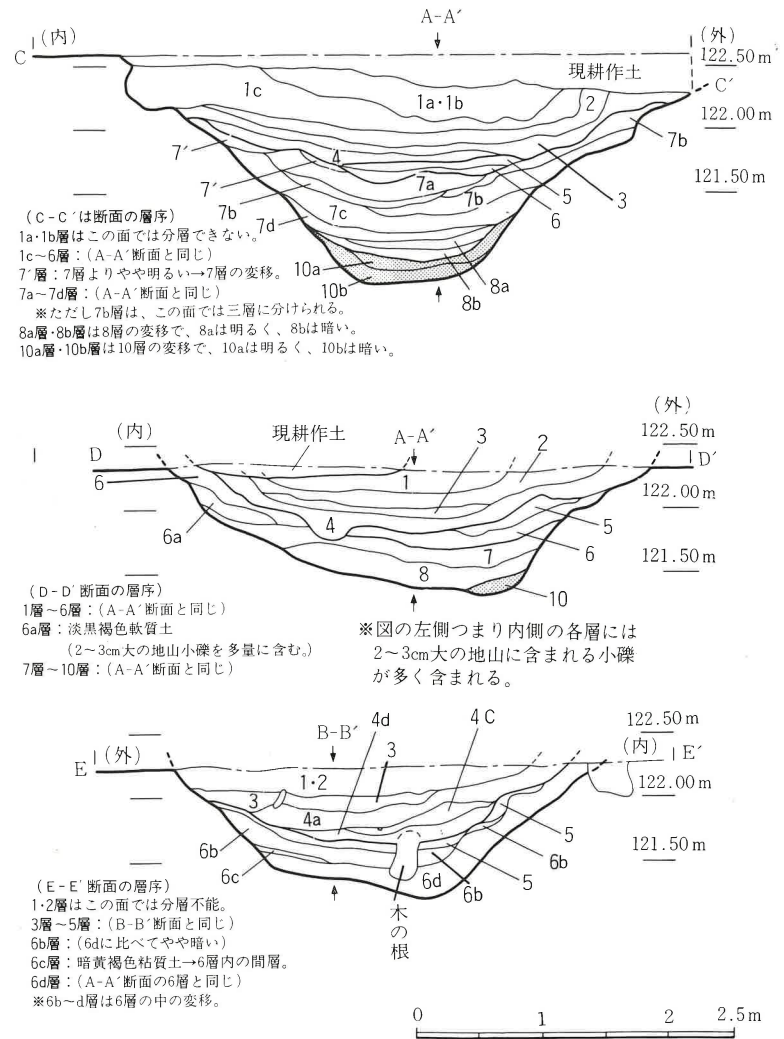
第7図 1号方形環溝④-C区-1号溝
A・B地点と層序一(1/120・1/60)

くりと長時間かけて堆積した層である。以上の7層は8層の上にかぶり、南東コーナーより西には堆積していない。したがって溝の埋没はまず東辺南北溝からさきにはじまったのであって、8・7層堆積中でも南辺東西溝と西辺南北溝は底面が維持されていたと推定される。土器はわずかにコーナーに近いB地点の7層上部で検出されたのみで、この土器は後述する土器集中Aの一部と見られる。

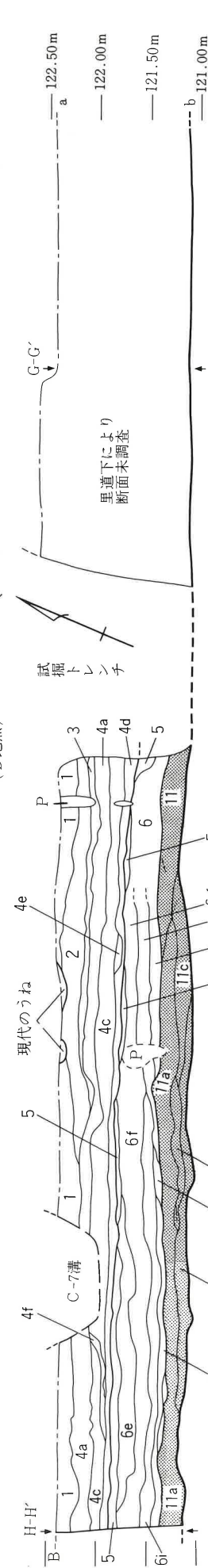
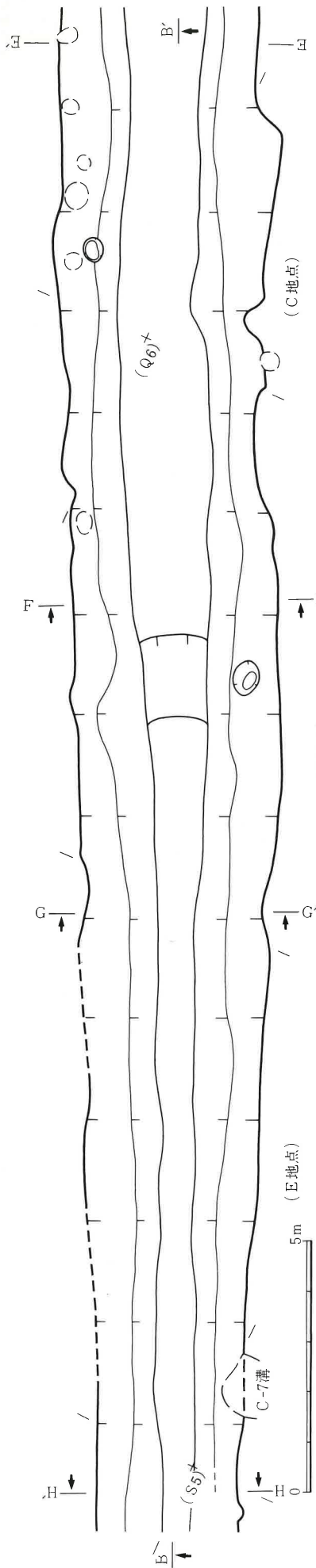
次に東辺南北溝では黒褐色の6層が堆積し、この層は南辺東西溝では底面の直上に堆積する。南東コーナー付近ではこの6層からその上の4層にかけて土器片が大量に廃棄されていた。これを土器集中Aとする。さらに南辺東西溝中央のD地点付近から6層は厚さをまして分層可能な状態になり、7層と同様の黒色帯(6i層)と黄色帯に細分できる。そしてその状態は西辺南北溝でも変わらず、溝埋土の下半はこの6層に占められる。その中のG・H地点を中心に黒色帯の上(D層)で炭片と焼石および土器片が集中的に廃棄された場所があり、そこを土器集中Bとする。土器集中Bは明らかに

6層堆積途中に廃棄されたもので、遺物はD層からその上下の6l層と6f層で検出された。土器集中Aが層位的に土器集中Bとどのような関係にあるかは、土器集中A付近の6層の堆積が薄いためにはっきりしない。実際調査では6層を中心に一部下の7層と、上の5層および4層からも出土した。しかし上層にいくにつれて遺物が少なくなる状況と、溝の外側斜面に張りつくように出土した土器が多かった点から考えて、土器集中Aの大部分は6層堆積中に廃棄されたものと考えられる。したがって両者の土器廃棄は同時とまでは断定できないが、比較的近い時期におこなわれたと推定される。そしてその時期は溝が埋没を開始してからある程度の時間が経過した6層堆積途中であった。

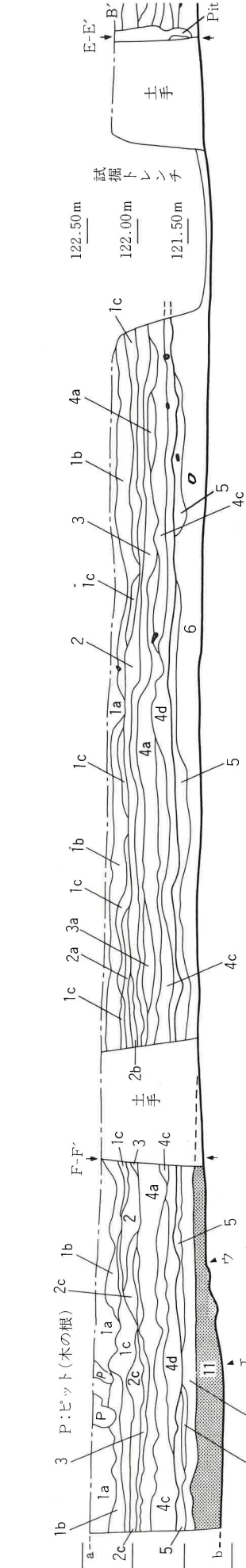
次に暗茶褐色から黄褐色に変化する5層がほぼ溝全体に堆積する。5層は地点によっては黄色土ブロックの堆積としてあらわれ、溝の層単位の中では最も明るい黄色帯となる。おそらく基盤層から掘り出された地山の土が溝全体に廃棄されたと推定される。そしてこの層を境に遺物の出土状態が変わり、4層以上では土器片は流れこんだ小片が散在する状態となり、土質もやわらかくなる。5層以下でとところろ観察された黄色土ブロックの堆積(6f層中に多い)も、4層以上では認められなくなる。5層を境として4層以上を上層、5層以下8層までを下層とした。以上のように6層堆積途中に遺物一括廃棄(土器と炭および焼石)がおこなわれ、その上の6f層から黄色土ブロックの小粒子が増え、黄色土ブロックの多い5層が堆積することからみて、この埋め戻しは廃棄遺物に封をするように土をかぶせたものと推定される。したがって下層の堆積は1号方形環溝使用中の堆積で、土器集中AとBの遺物一括廃棄は1号方形環溝廃絶時におこなわれた可能性が高い。以上の堆積状態は他の堅穴住居跡の廃絶状況とほとんど同じである。違うのは炭化材がほとんどないことと、焼却廃棄物が少ないことである。しかし炭片や焼石を伴い土器を廃棄する点と、廃棄後ある程度埋め戻す点は基本的に一致しており、お



第8図 1号方形環溝⑤ - C区-1号溝C・D・E断面の層序-(1/60)



1層：(A-A'断面と同じ)→この面では分層できない。
 2層：(A-A'断面と同じ)→次第に黒くなって黒色帯になる。
 3層：淡褐色-黄褐色粘質土(明るい)
 4a層：(第7図B-B'断面と同じ) 4e層：4c層の中でとくに明黄褐色が明瞭な層。
 4f層：暗茶褐色土→4e層の間層。
 5層：淡茶色-黄褐色軟質土(A-A'は断面と同じ)
 6層：淡黒褐色軟質土(第7図B-B'断面と同じ) →次第に黒くなって黒色帯になる。
 6e層：暗褐色粘質土(黄色粘土小アロック・地山小礫多く含む)
 6f層：暗褐色粘質土(2~3cm大の黄色粘土小アロックのみ多く含む)
 6g層：明褐色軟質土
 6h層：暗褐色軟質土



1a1b1c層：A-A'断面と同じ)
 2層：淡黒褐色粘質土(A-A'断面と同じ) →西(左方)にいくほど黒色がうすれ、暗褐色になる。→2c層に変化。
 2a層：淡黒褐色粘質土=2層。
 2b層：暗褐色粘質土→2層の間層。
 2c層：暗褐色粘質土→2層の変化の明るい層に変化。
 3層：褐色粘質土(A-A'断面と同じ) →F-F'土手より西では3層は明るく黄褐色。
 4a-4c-4d層：(第7図B-B'断面と同じ)
 5層：(A-A'断面と同じ) →F-F'土手より西では、淡茶色から黄褐色の明るい層に変化。
 6層：A-A'の6層に対応するが、淡茶色粘質土で、2~5cm大の地山小礫と、黄色粘土を多く含む。
 11層：暗黄褐色軟質土(地山礫を少し含む) →溝の底面連成土。

第9図 1号方形環溝⑥-C区-1号溝・C・D・E地点と層序(1/120・1/60)

そらく1号方形環溝廃棄時の廃絶祭祀の痕跡であると考えられる。

さてその後上層(4~1層)は黒色帯と黄色帯が交互に堆積する典型的な自然埋没の状態を示す。遺物も廃棄されたと考えられるものはなく、また埋め戻しの痕跡もない。したがって1号方形環溝廃絶後は、そのまま放置されて自然に任されたものと推定される。同時にこの場所にその後新たな施設が建設された痕跡もないので、放置されたといってもそれは意図的な放置である。いかえれば聖域として、さわってはいけない場所とされていた可能性が高い。



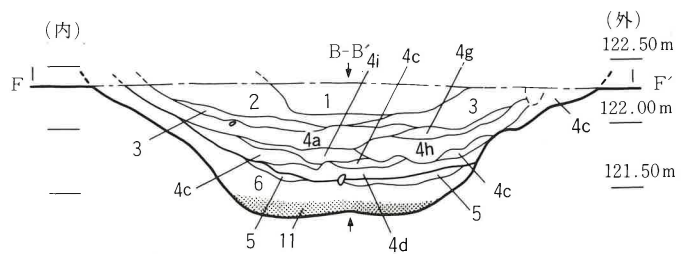
写真3. 1号方形環溝C-1溝F地点縦断面(西から)

以上をまとめると①8層から6層下部までが1号方形環溝使用中の堆積で、②6層上部で廃絶祭祀に伴う遺物一括廃棄がおこなわれ、③6層最上部と5層は故意に埋め戻され、④4層から1層はその後の自然埋没ということになる。

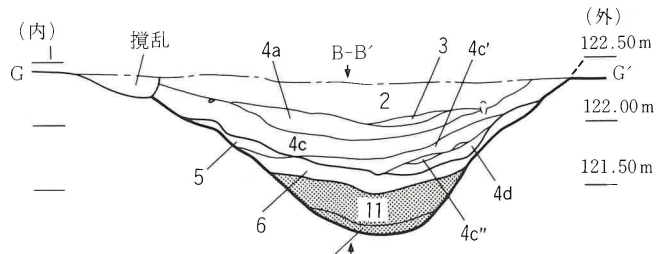
ところで埋没状態の観察、特に横断面の観察時に土塁の存否に留意したが、土塁の痕跡や土塁崩壊土の明瞭な堆積は認めることができなかった。中でも基盤層に由来する黄色土ブロックがかなり含まれる5層と6層上部の堆積の方向に注目したが、内側あるいは外側からの偏った流入は認められなかった。したがって、C-1溝の両側には土塁は築かれていなかった可能性が高い。では黄色土はどこから流入したのだろうか。掘削時にでた基盤層の黄色土が1号方形環溝内部の方形空間の整地に使われることが当然予想されるので、おそらくC-1溝の内側の肩にもその整地土が及んでいたと考えられる。6f層に含まれる黄色土は2~3cm大の粒子が多い点からみて、廃絶祭祀後に埋め戻された土砂の由来は方形環溝の内側にあると思われ、また5層の黄色土ブロックもそこに由来するか、あるいは2号方形環溝の掘削土の一部かもしれない。

C) 遺物廃棄状態について。以上のような埋没過程の途中で廃棄され、あるいは混入した土器が大部分を占める遺物の出土状態を、層位的に古いものから記述する。

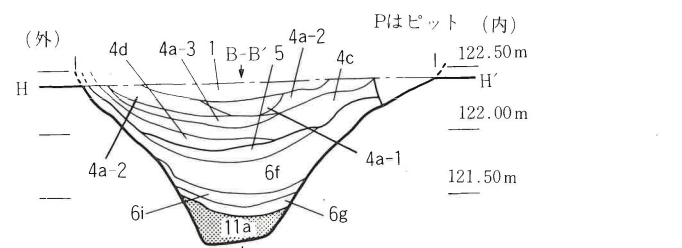
まず東辺南北溝A地点下層の5~8層から出土したもの(第14図)は、43の壺の口縁部片、44の甕口縁部片、45の高坏頸部片、46と47の高坏脚部片、48



(F'-F'断面層序)
 1層:(前図と同じ)→この面では細分できない。
 2・3・4a層:(前図と同じ)
 4g層・4h層:4a層に比べて明るく黄色が弱い →4a層の変移。
 4i層:暗褐色軟質土(4c層より暗い) →4c層の変移。
 4c層・4d層・5層:(前図と同じ)
 6層と11層:(前図と同じ) ※ただし6層と11層のラインは不明確。

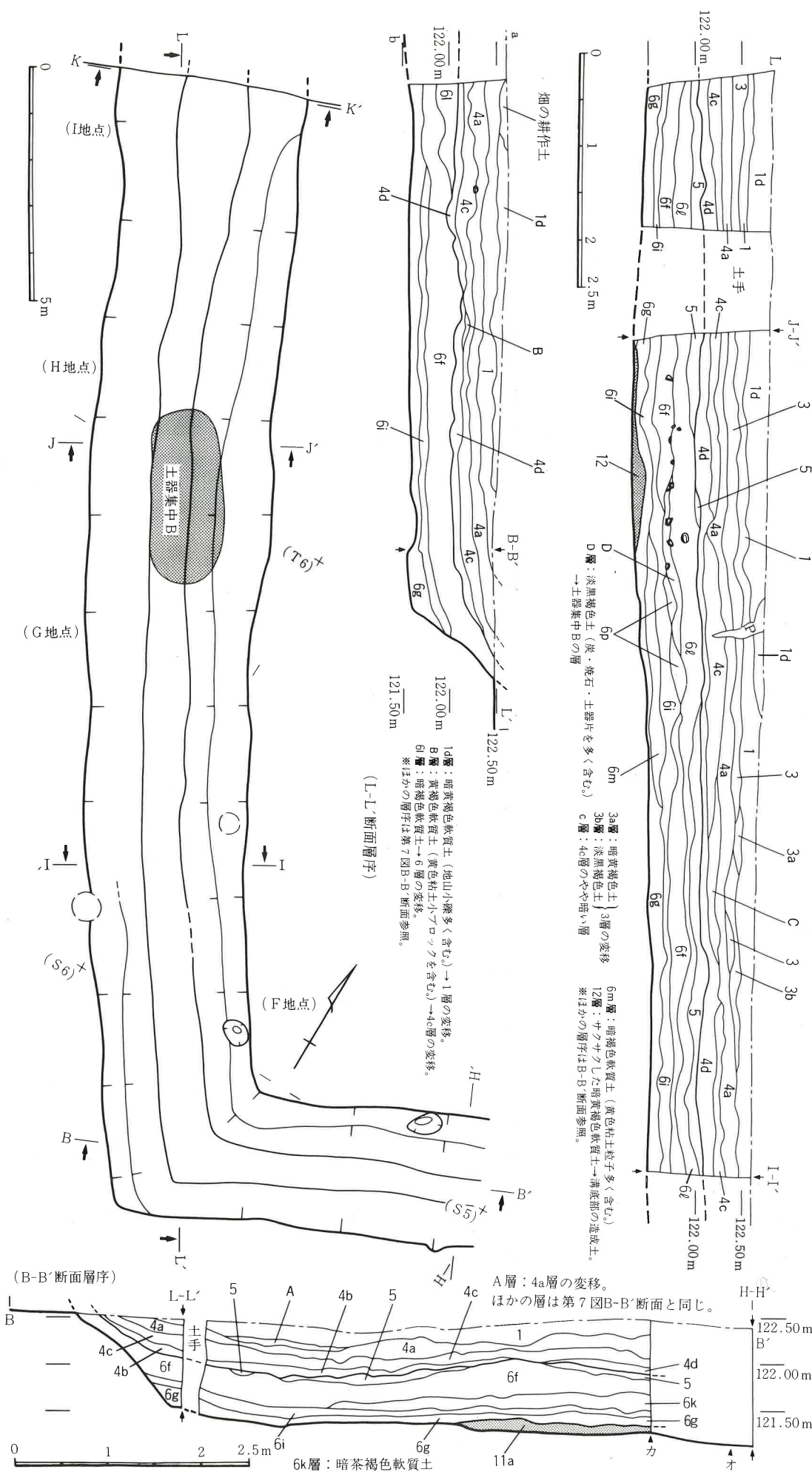


(G-G'断面層序)
 2層・3層・4a層・4c層:(前図と同じ)
 4c'層・4c''層:4c層の変移で、4c'層はやや暗い。
 4d層・5層・6層・11層:(前図と同じ)
 11'層:11層よりやや暗い。



(H-H'断面層序)
 4a-2層は4a層と同じ(ほかの層は前図と同じ)
 4a-1・3層は黒色が強い。
 ※6f層と11a層には、黄色粘土ブロックを多く含む。

第10図 1号方形環溝① -C区-1号溝F・G・H断面-(1/60)

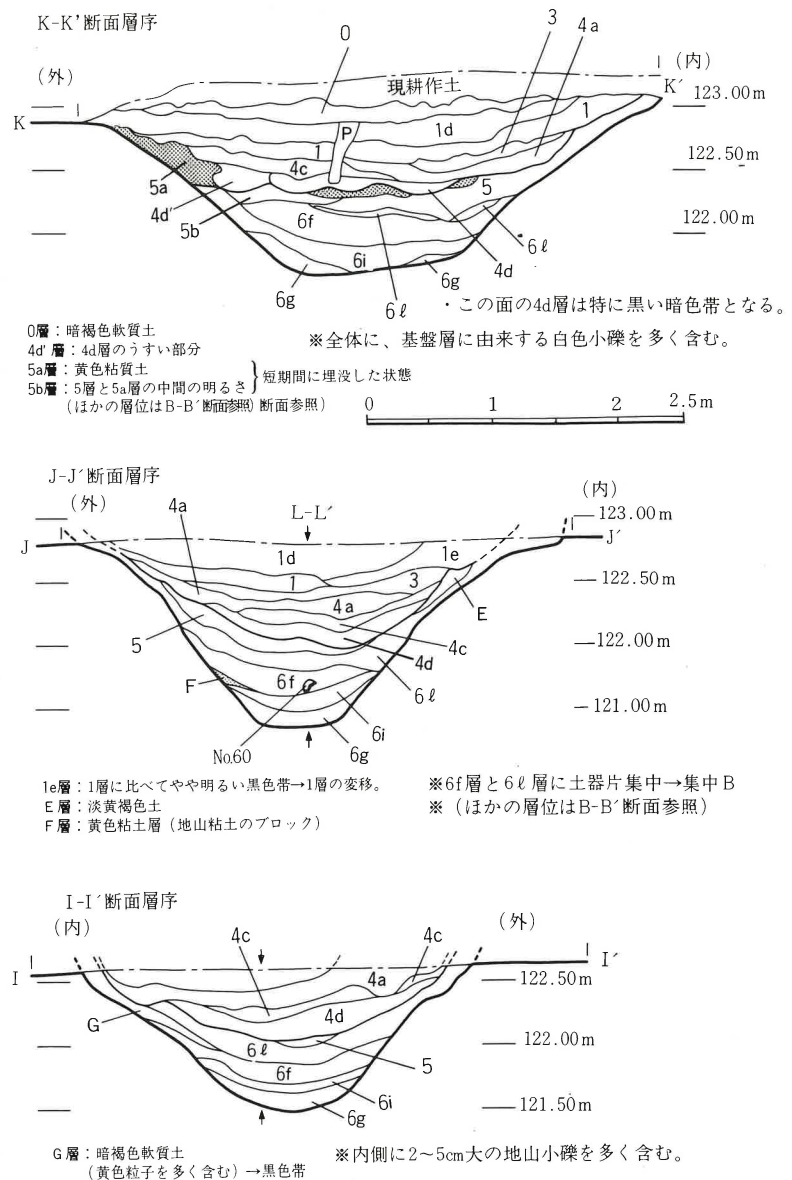


第11図 1号方形環溝⑧-C区1号溝F~I地点と層序(1/120・1/60)

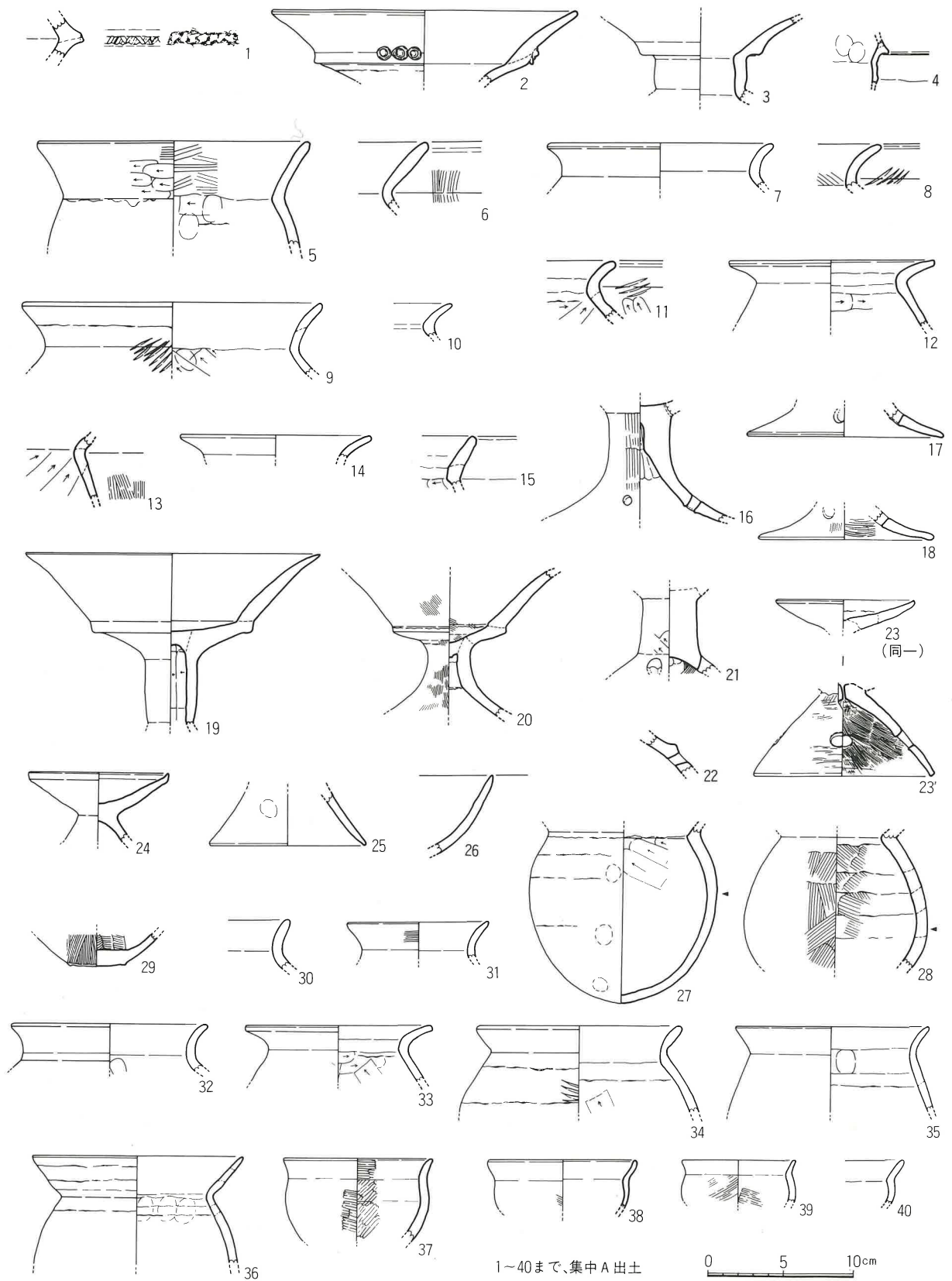
の小型甕、49の小型鉢片、50のミニチュア高坏の頸部片である。いずれも小破片で散在し、48のみが大型破片で出土し、被熱していた。A地点では6層の堆積が薄いため、以上の土器の中に土器集中Aと同時に廃棄されたものが含まれている可能性があるが、分離できなかった。

次にB地点の土器集中Aから大量の土器が出土した(第13・14図)。その出土状態は①完形品のまま、あるいは完形品が潰れた状態のものではなく、②割られたり一部を折り取られた土器の破片が一括して廃棄されて、③溝南東コーナーの外側斜面に接触するように検出された例が多く、おそらく一括廃棄は溝の外側からおこなわれたものと考えられる。出土土器には、1・2の壺口縁部片、3・4の壺頸部片、5～15の甕口縁部片、16～22の高坏片、23～25の小型器台の破片、26の鉢口縁部片、27～31の小型壺と甕の小破片、32～36の小型甕の口縁部片、37～40の小型鉢口縁部片、41と42の碗片がある。そのうち3の壺は口縁端部と体部を失い頸部のみ完形のもので、おそらく折り取られたものであろう。19の高坏は口縁部と頸部が分離し、口縁部は溝の外側斜面に張りつくように検出されたが、脚部は出土しなかった。故意に割られて廃棄されたものである。20の高坏は口縁端部と脚端部を打ち欠かれており、土器集中部の最下部で逆さに置かれた状態で検出された。23の小型器台は受部と脚部が分離し、脚部は溝の外側斜面に張りつくように出土した。24の小型器台も受部のみほぼ完形のまま廃棄され、脚部は出土しなかった。27の小型壺は破片が散在した状態で出土したが、接合すると口縁部を除き完形に復元できた。その口縁は打ち欠かれたと考えられる。36の小型甕は逆に胴部を失い口縁部のみ完形である。そのほかの土器はいずれも部分的な破片で、比較的大型の破片が多いことが指摘できる。また8・9・11の甕口縁と27・32・34の小型の壺甕および39の小型鉢と42の碗には二次加熱による赤変と煤の付着がみられる。小型土器に被熱が認められる点が注目される。以上の出土状態から見て、土器の大部分は方形環溝の外から廃棄されたもので、その際小型器種を中心に故意に割られて投棄したものと推定される。

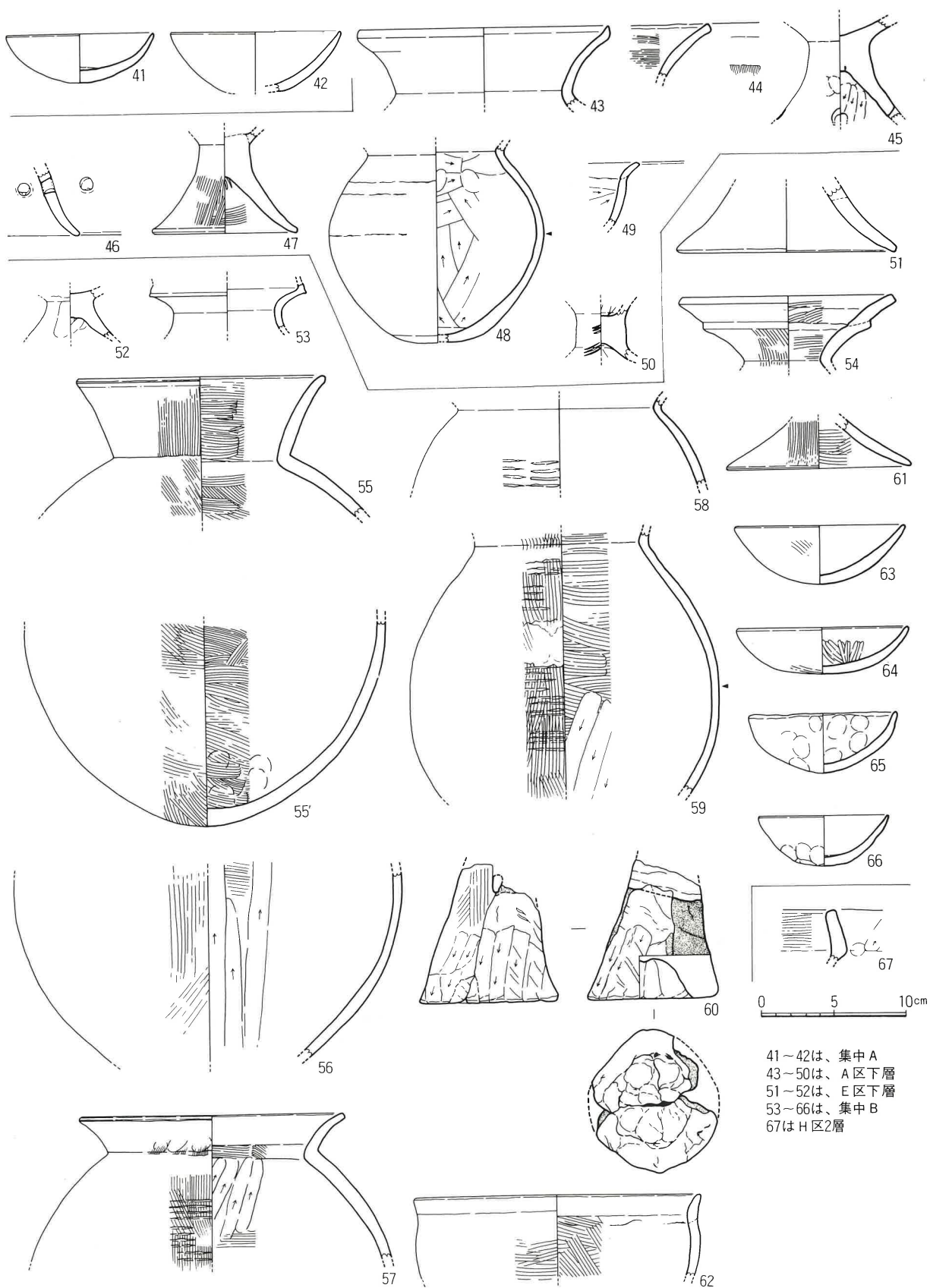
H・G地点の土器集中Bからもまとめて土器が出土した(第14図)。その出土状態は①完形品のまま、あるいは完形品が潰れた状態のものではなく、②大型の土器破片が一括して溝の中央部に廃棄され、③炭片や焼石とともに廃棄されていることにある。出土土器には、53～55の壺口縁部片、55の壺下半、56～59の甕片、60の支脚下半、61の脚部片、62の鉢口縁部片、63～66の碗片がある。そのうち55の壺は口縁部と体部下半が分離して検出されたが、破片はかなり不足する。56・57・59の甕も大型破片で出土した。60の支脚は上部を失い、残りは縦に割れている。故意に割られて廃棄されたものである。63と66の碗は破片が散在した状態で出土したが、接合するとほぼ完形に復元できた。以上の土器の内56・57・59の甕には二次加熱による赤変と煤の付着がみられる。以上の出土状態からみて、土器の大部分は廃棄されたもので、故意に割られて投棄したものと推定される。このほかに



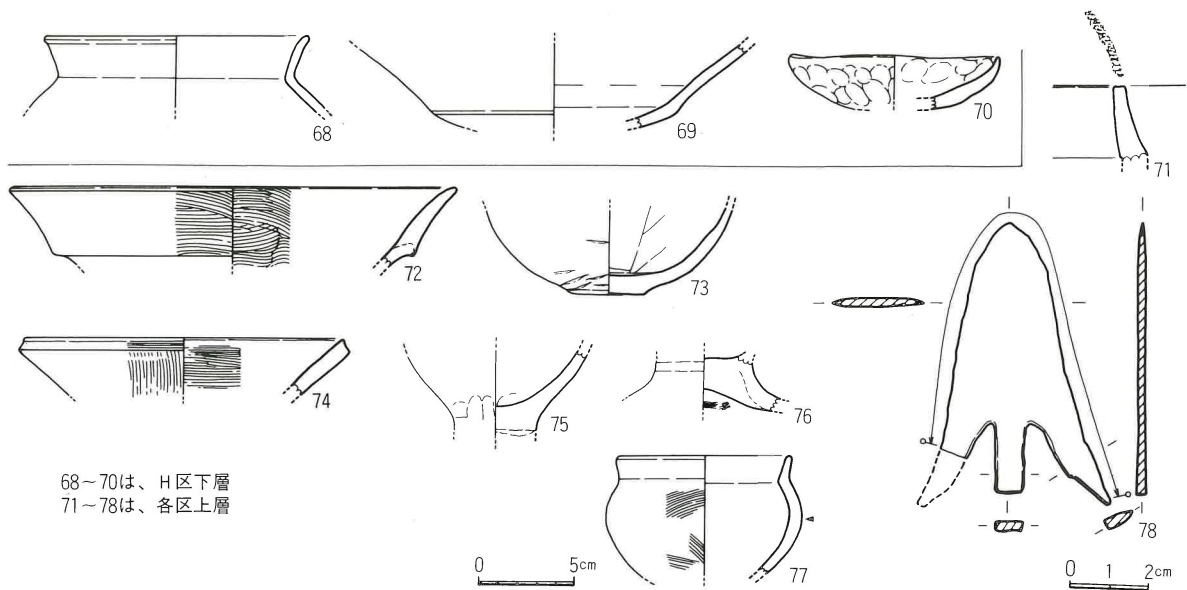
第12図 1号方形環溝⑨ - C区-1号溝K・J・I断面層序-(1/60)



第13図 1号方形環溝C区-1号溝出土遺物①(1/4)



第14図 1号方形環溝C区-1号溝出土遺物② (1/4)



第15図 1号方形環溝C区-1号溝出土遺物③ (1/4、78=1/2)

67の壺口縁片、68の甕口縁、69の高坏片、70の手づくね碗が土器集中Bに含まれる可能性が高いが、層位を確認できなかった。

最後に4層以上の上層からは、東辺南北溝のA地点から78の大型鉄鏝が出土し、南辺東西溝のC地点から77の小型壺片が、D地点から75の台付鉢頸部片が、E地点から51の脚部片、52の台付鉢の脚部片が下部で、またその上部から72と73の壺片が出土し、西辺溝のF地点から74の甕口縁片と76の台付鉢頸部片が、H地点から71の壺口縁片が出土した。いずれも破片で上層中に破片が単独で見つかったもので、鉄鏝も例外ではない。

最後に出土遺物をまとめる。A地点下層(43~50)の土器は、胎土に石英と金雲母を含む搬入品の43を除いて、すべて在地産の胎土をもちいる。43は外来系の影響を受けた壺D、44は在地系の甕A、45と47は伝統的V様式系の作りの高坏B、46は在地系の高坏か、48の小型甕は内面ヘラケズリだが、外面の調整を省略したまま未完成の段階で焼成した土器であり、ここでは「不完全品」と呼ぶ。49は小型鉢、50はミニチュアの小型高坏。以上外来系の技術で作られたものが目立つ点が注目される。

土器集中A(1~42)の土器はすべて在地の胎土を用いているが、例外は23の小型器台で、砂粒を含まずきめの細かい精製した胎土を用いた畿内系精製器種の搬入品である。1と4は在地系の複合口縁壺Aで、1の端部にはX字形に刻みを施す。2は庄内・布留系の二重口縁壺Cで、3個一単位の円形浮文を貼りつけその上から竹管文を施す。3は布留系の小型二重口縁の壺Dで、頸部がやや膨らむ。5と6は在地系の甕Aで、5の内外面には粗雑なケズリが認められる。7~11は右上がりの平行タキ痕があり、口縁端部が薄く外湾する伝統的V様式系の甕Bで、10と11にはヘラケズリがあり布留系の影響も認められる。12は布留系の甕D。13と15もヘラケズリがあり布留系の影響が認められる甕。16は頸部中実に近い伝統的V様式系の影響のある高坏B。19は布留系の高坏Dで、2の壺の口縁部の作りと似ている。軸部内面はヘラケズリ。20は坏部の形態に布留系の影響が強い在地系の高坏A。21は軸部が中実の、22は脚部が屈折する伝統的V様式系の高坏B。23はすでに触れた搬入品の布留系小型器台Dで、外面に横方向のヘラミガキを施す。24と25も同じく布留系の小型器台D。26は在地系の鉢A。27は不完全品の小型甕。28は内面に接合痕を残してハケ調整する甕。29は平底を作り内面に崩れた簾状ハケを施す伝統的V様式系の小型甕B。30~32は口縁端部が薄く外湾する伝統的V様式系の小型壺B。33は布留系の小型甕D。34~36は内外面に接合痕が残る不完全品で、34には外面にタキ痕内面にヘラケズリが認められる。37~40は畿内系の小型鉢で、37はヘラミガキが顕著。41と42は在地系の碗A。以上の土器集中Aの一括廃棄土器群には、伝統的V様式系の形態と技術を備えたB類と、外来系特に布留系の形態と技術を備えたD類が多く、同時に土器製作時の習作ともいえる「不完全品」が目立つ。

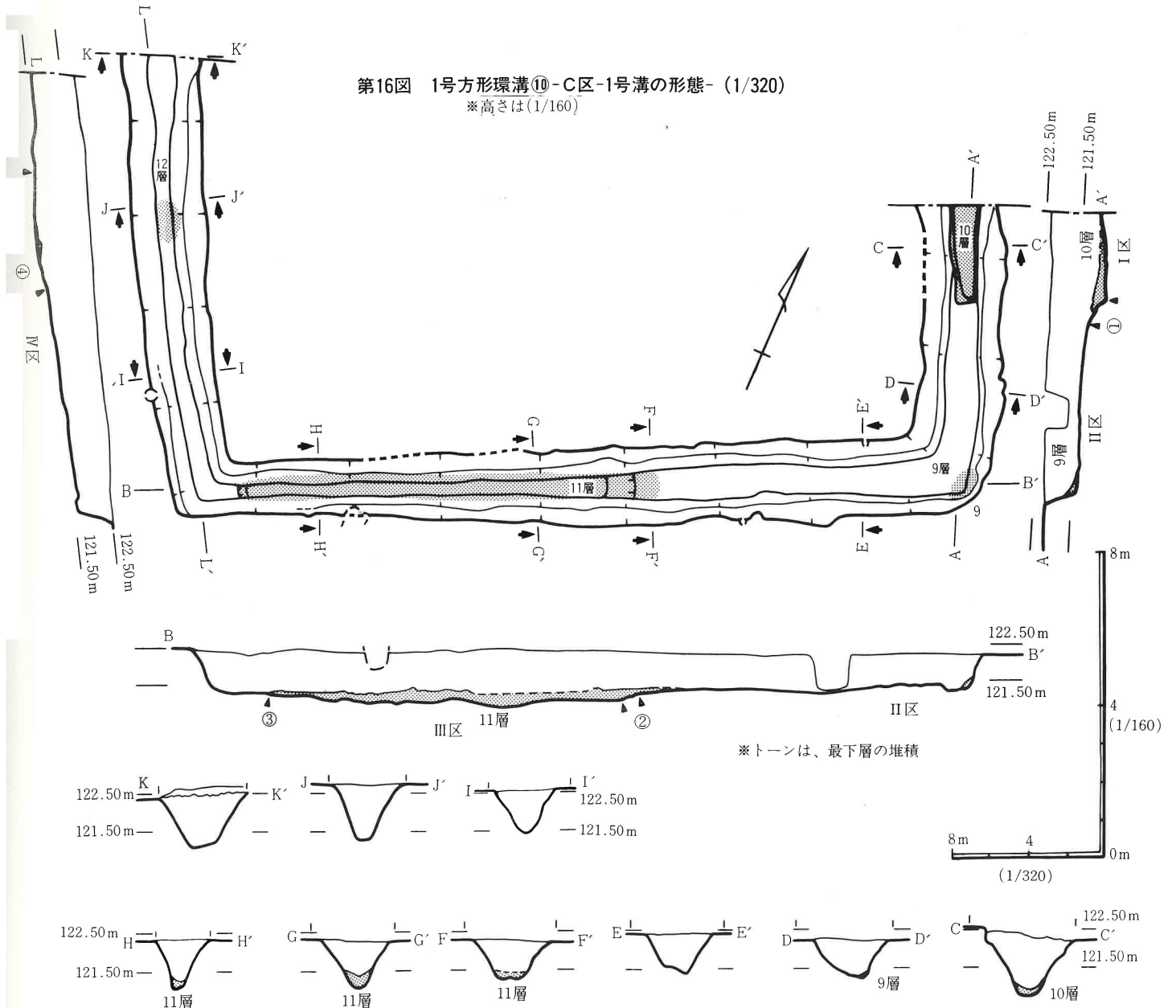
土器集中B(53~66)の土器はすべて在地の胎土を用いている。53は小型複合口縁壺A。54は外来系の二重口

縁壺D。55は布留系の単口縁壺Dだが、内面にはヘラケズリが無くハケ仕上げである。製作者は在地系の技術を下地に布留系の壺を作ったものと推定される。56~59は在地系の甕Aだが、内面にヘラケズリが認められる。60は1本の穿孔のある支脚Dで、形態から見て外来系。61は台付鉢の脚部片、62は在地系の鉢A。63~66は在地系の碗Aで、64には丁寧なヘラミガキが施され、65は手づくねである。以上のように甕と鉢と碗は在地系のA類だが、壺と支脚には布留系のもが入っている。なお67は在地系の複合口縁壺A、68の甕は単口縁の壺かもしれない。69は在地系の高坏A、70は在地系の手づくね碗である。

最後に、上層出土遺物(51・52・71~78)のうち、土器はすべて在地の胎土を用いている。51の正体不明の脚部、52は頸部が厚い小型台付鉢。71は在地系の複合口縁壺A。72は在地系ではない二重口縁壺。73は伝統的V様式系の甕B。74は在地系の甕A。75と76は在地系の台付鉢A。77は在地系の小型壺A。78はかえりが長くのびた大型鉄鏝で、全長7.4cm重さ18gで実用品ではない。

以上の土器群のうちA地点下層の土器は1号方形環溝使用中の小迫辻原3期に混入し、土器集中AとBの土器は小迫辻原3期末の1号方形環溝廃絶時の一括廃棄遺物と評価される。したがって上層の遺物は小迫辻原4期以後の混入であると推定される。(旧E地区溝17)

第16図 1号方形環溝⑩-C区-1号溝の形態 (1/320)
※高さは(1/160)



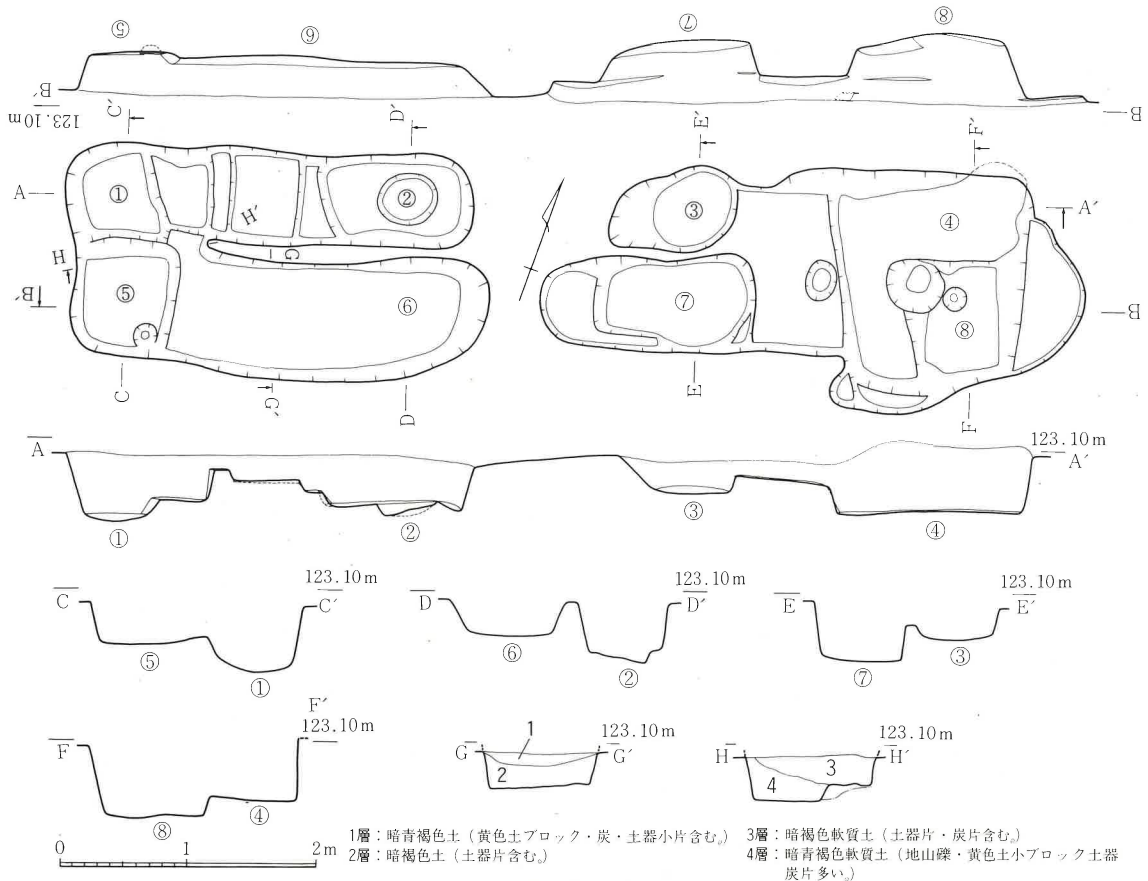
2. 2号方形環溝 (第18図 → 巻頭図版8・9、図版2・10~14・37・38)

1号方形環溝の西隣に方向をわずかに異にしながら検出されたもので、環溝C-2溝の南三分の一と、その内部で検出されたC-2建物と布堀C-3溝からなる遺構群である。東半分は削平のため検出面が低くなっており、すでにC-3溝の東部分は消失していた。内部の遺構配置として、第1にC-2建物の南側柱穴列を検出した。この柱穴列は、環溝C-2溝と布堀C-3溝の方向とほぼ一致し、内部の西寄りに位置する。日田市のその後の調査によって(註1)、このC-2建物の北側柱穴列が確認されている。さらにC-2建物の北に平行して、ほぼ同規模の掘立柱建物跡が検出されている。第2に環溝C-2溝の内側に平行して、ピット列を伴う布堀C-3溝が検出されている。直角に曲がる南西のコーナーは検出できたが、東のコーナーは削平のためすでに消失していた。その延長は日田市の調査によってさらに確認されており、1号方形環溝と同様に環溝内部の四囲を区画して、方形にめぐる布堀であることが判明している(註1)。同時に環溝の北辺に陸橋の存在が明らかになっており、その陸橋に対応する地点では布堀が途切れることも判明した。入り口の位置と構造は1号方形環溝と異なることになる。ほかに明確な遺構は存在しないので、おそらく西側に並列する二棟の掘立柱建物の東側の空間は、広場として機能したと推定される。この点は1号方形環溝と共通する特徴である。なお2号方形環溝と重複してC-4住・C-6住が存在するが、C-4住は想定される布堀C-3溝の位置と重なり、C-6住は環溝C-2溝に切られているので、いずれもこの方形環溝に伴う可能性はなく、2号以前の遺構である。この2号方形環溝の建設をもって、小迫辻原4期の指標としている。(旧E地区2号環壕居館)

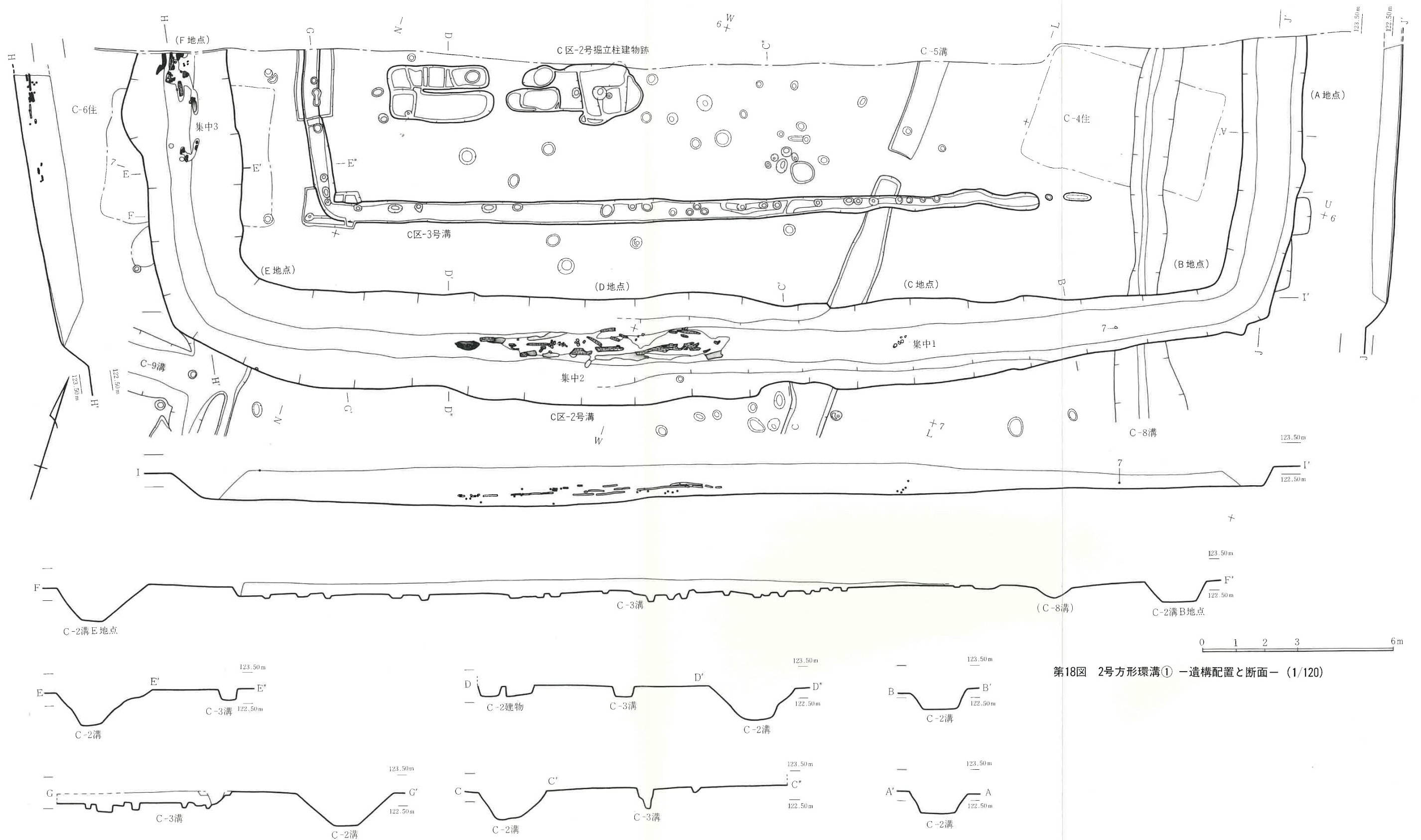
註1、土居和幸「小迫辻原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報』VI、1991、日田市教育委員会

C区-2号掘立柱建物跡 (第17図 → 図版14)

方形環溝内部で検出された3間×1間以上の掘立柱建物跡であるが、調査当時、掘立柱建物跡の一部と認識しないまま「土壇」として掘り下げたために、明確な柱の配置を確認することができなかった。その後日田市の調査でこの「土壇」群に対応する掘立柱建物の布堀掘形が検出されるにおよんで、調査記録を再検討し、掘立柱建

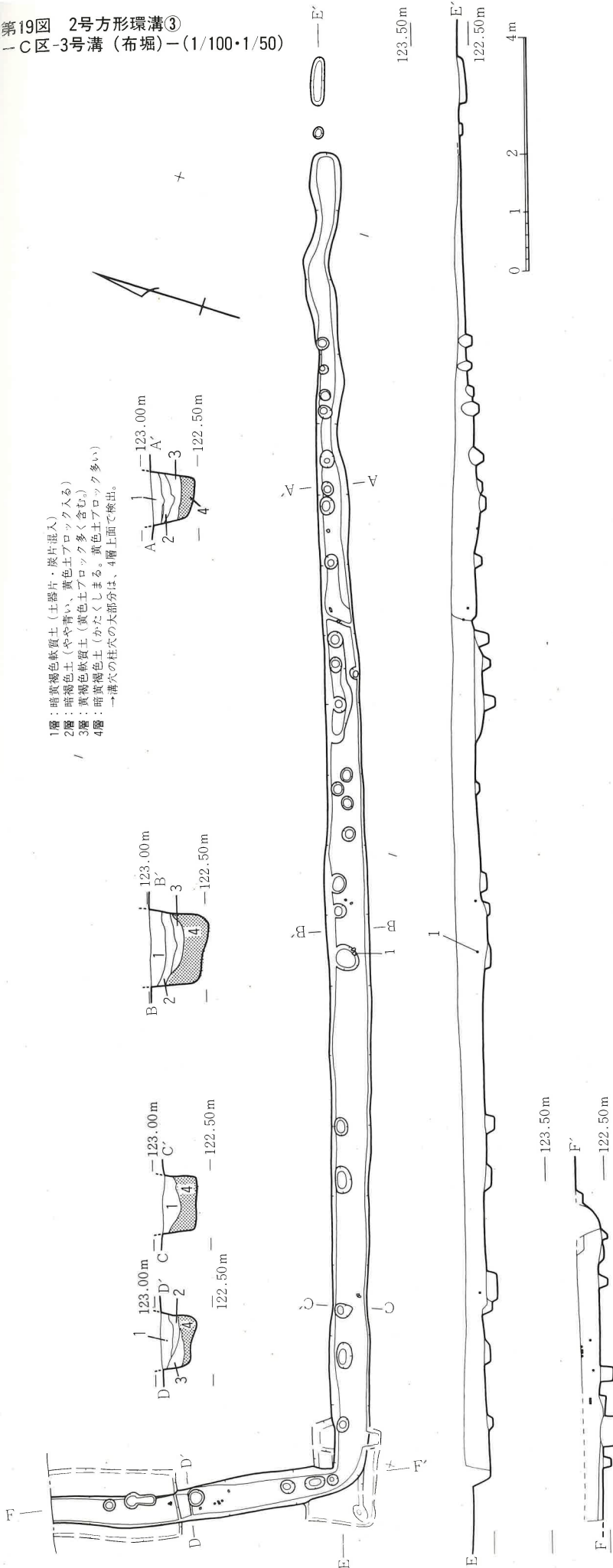


第17図 2号方形環溝②-C区-2号掘立柱建物跡-(1/60)



第18図 2号方形環溝① -遺構配置と断面- (1/120)

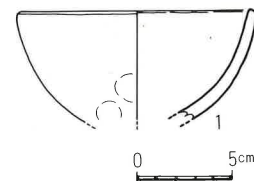
第19図 2号方形環溝③
 -C区-3号溝(布堀)-(1/100・1/50)



物跡と認定したものである（註1）。

遺構として東西に長い溝状の「土壇」が4基、二列に並ぶように検出された。各「土壇」の底部には二箇所ずつ円形あるいは方形に一段深くなる部分が存在した。第18図の①・②・③・④・⑤・⑦・⑧である。その内部の土壇はほぼ等間隔にならび、①～④がひとつの柱穴列を表わし、⑤・⑦・⑧と、その間にあったと推定される⑥とをあわせてもうひとつの柱穴列が復元される。柱穴の立て方は、まず桁行方向に長さ3m強、幅80cmほどの溝を一列に2箇所掘り、その内部の両端におそらく円形の柱穴を2箇所、あわせて4本の柱を立てるように掘ったものと推定される。内部の柱穴は径60～80cm前後と大きく、深さはおおよそ揃っている。したがって全く同規模の桁行き3間となる柱穴列を、二列検出したことになる。どちらもその東西長は心距離で約700cmとなり、その長軸の方位角は75度で、C-2・3溝の方向とほぼ一致する。日田市の調査で検出された対応する柱穴列から判断して、この建物は東西棟となる。また同規模の柱穴列が近接して存在していることと、対応する北側の柱穴列が一行しか検出されていない点からみて、このC-2建物は南の桁行き柱穴列の位置をかえて改築されたと見られる。

布堀埋土中から土器の細片が数点出土しているが、細片で図示できない。柱穴埋土中からこの土器破片以外の新しい遺物が出土しない点と、環溝の方向と一致する点からみて、1号方形



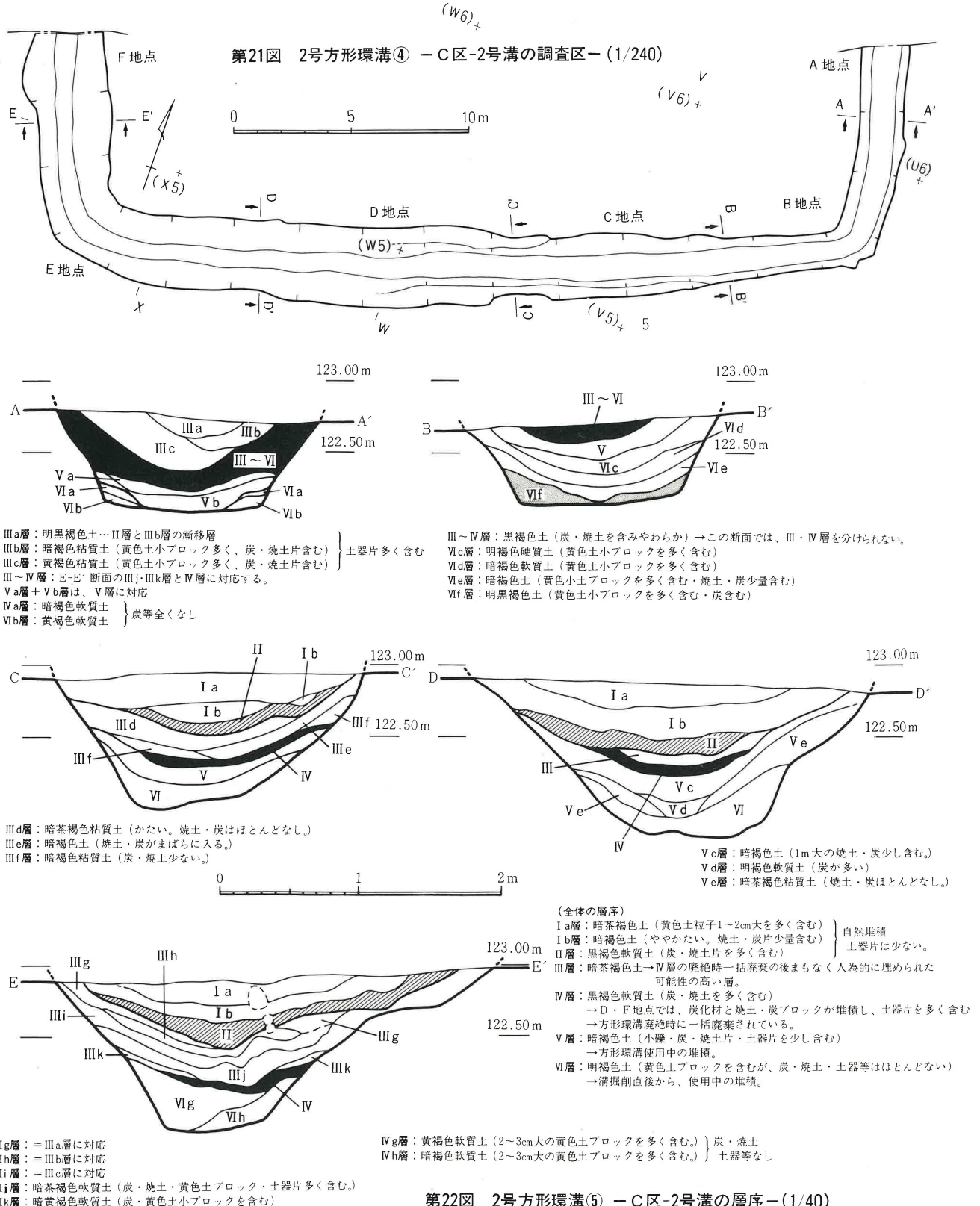
第20図 2号方形環溝C区
 -3号溝出土遺物(1/4)

環溝にともなう掘立柱建物跡と推定した。(旧E地区土壌321~326)

註1、土居和幸「小迫辻原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報』VI、1991、日田市教育委員会

C区-3号溝(第19・20図 → 図版14)

環溝C-2溝の内端から約2mほど内側に平行して検出された布堀である。東部が削平のため消失しているが、

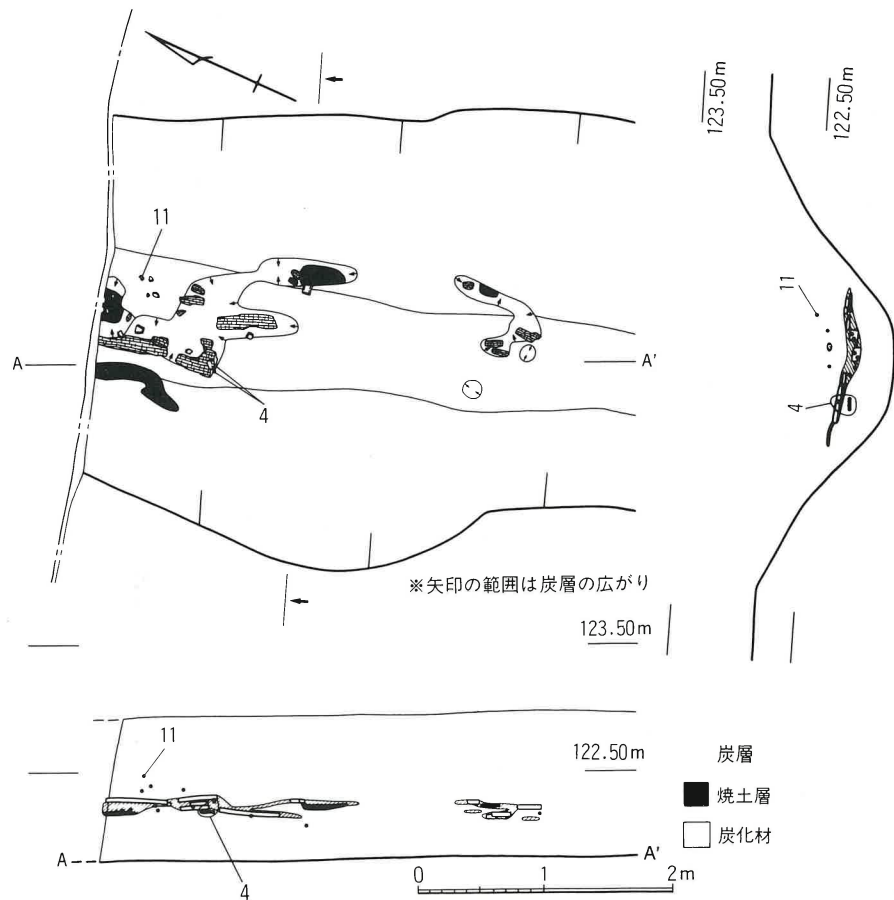


西部では直角に曲がって北に伸びることを確かめることができた。また試掘の結果、環溝内の四囲に方形にめぐ
ることを確認している。削平を考慮すると、かつてはまだ深いものであったと考えられる。断面形は方形で、壁
は垂直に落ちる。幅約50cm、深さ30~60cmで、東西部分の長軸の方位角は71度である。溝内の内側の壁に沿う小
ピット列が、不規則な間隔で検出された。そして埋土下層（4層）は叩き締められたように硬くしまっていた。
小ピットの大部分はこの4層の上面で検出されているから、4層の土は柱を立ててから埋め戻したものと考
えてよい。上層埋土もふくめて黄色土ブロックを多量に含んでいるので、人為的に埋め固めたものとみてよい。以上
の点から推して、この布堀C-3溝は、組み立て済みの柵状構造物を溝内に立てて土を入れ、よく叩き締めて固
定した柵状施設の基底部分と考えられる。なおこのC-3溝に囲まれた方形環溝内部の寸法は約25×25mで
ある。

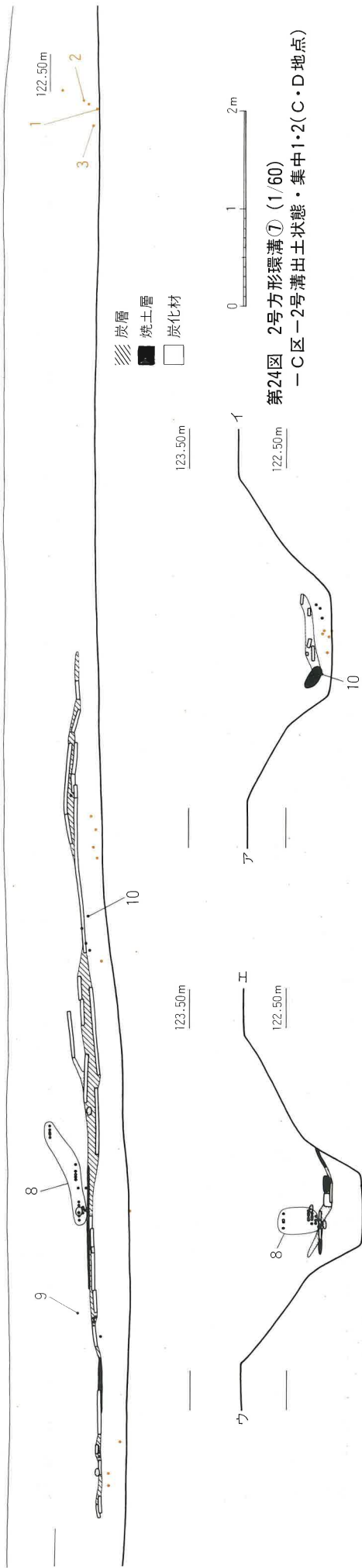
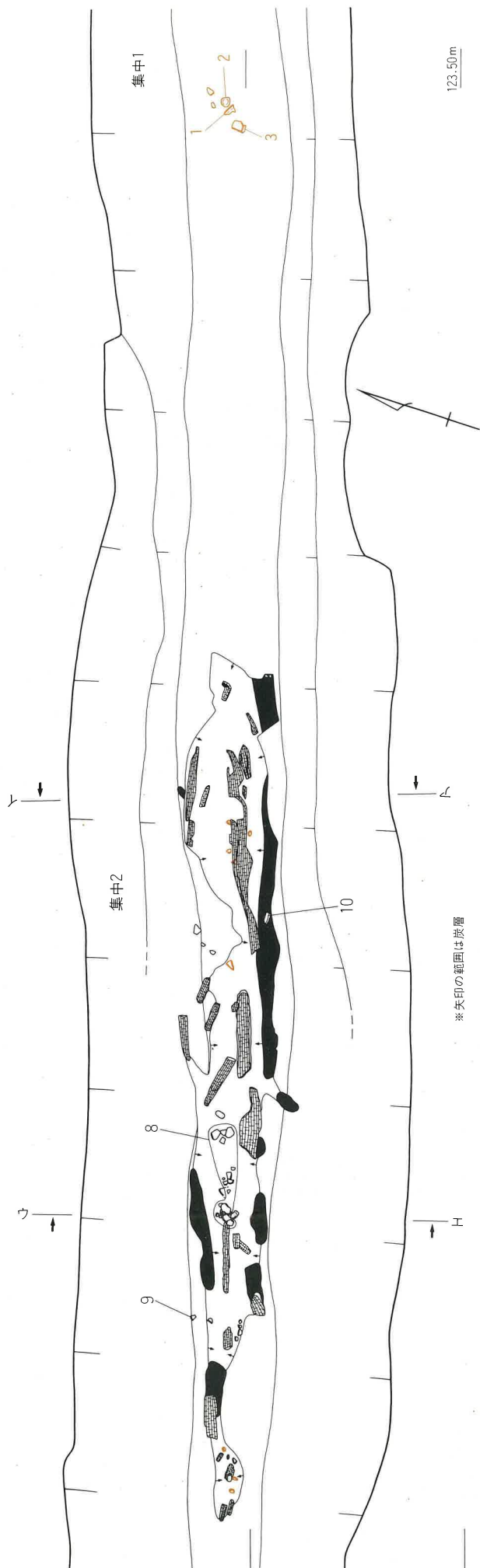
布堀埋土は四層に別れ、最下層の4層は硬く締まった黄褐色土で、基盤層に由来する黄色土ブロックを多量に
含む。硬化しているので当初この層の上面を底面と考えていた程である。またこの布堀底部のピットのほとん
どはこの4層の上面で検出した。柵の柱を建てた後に地山から掘り出した黄色土を詰めて、さらに撞き固めた
と考えられる。その上の3層から1層も黄色土ブロックを多量に含み、上層になるほど少なくなる。この層も埋めた
土である。埋土中からはあわせて十数点の土器細片が出土したが、いずれも細片で布堀構築時に偶然混入した
ものと推定される。そのうち4層からは1の碗の口縁部片が出土した。（旧E地区土壙319=柵列溝）

C区-2号溝（第21~25図 →図版11~13・37・38）

試掘調査とその後の日田市の調査結果と総合すると、環溝外端中央で測って約37×36mのほぼ正方形をなし、
北辺に陸橋が存在することが判明している。C区の調査ではその南三分の一を完掘した。西辺ではC-6住を切
り、C-5溝（中世）とC-6溝（近世）に切られている。C-2溝の南辺にあたる東西溝の長さは外端コー
ナーで測ると約35mで、内端コ
ーナーでは約31mである。こ
の南辺東西溝の軸で方位を測
ると、方位角72度で1号方形
環溝よりややずれる。東半は
削平を受けているために、一
見環溝は狭くなっているよう
に見えるが、それはその後の
削平によるもので、1号方形
環溝C-1溝のように溝の形
態が変化しているわけでは
ない。溝はどこで切っても逆
台形で、底面の途中に段差な
どはなく、1号方形環溝に比
べて掘削の工程に計画性があ
る。全体に1号方形環溝より小
規模で、コーナーが丸くなる
点
が異なっている。溝の幅は
検出面で、最も幅の広いと
ころで3.5m、狭いところで
1.5mである。底面の幅は西
半分が60~80cm、東半分が
80~100cmと、東にいくほ
どやや広く



第23図 2号方形環溝⑥-C区-2号溝出土状態・集中（F地点）-（1/60）



第24図 2号方形環溝⑦(1/60)
 -C区-2号溝出土状態・集中1・2(C・D地点)

なる。

調査は溝を横断する土層観察用土手を境界にA～F地点に分割し（第21図）掘り下げた。土層断面の観察の結果、溝の埋没過程と廃絶時の遺物廃棄状態が、次のように判明した。

土層観察の結果（第22図）、掘り直しの痕跡はないことを断っておいた上で、埋没過程をたどりながら遺物出土状態を記述する。まず黄色土ブロックを多量に含むが、炭・焼土と土器片をほとんど含まない明褐色のVI層が底部に堆積する。その上に炭と焼土小粒子と小礫や土器片を含む暗褐色のV層が堆積する。このVI・V層中にはところどころで土器片が検出される（第17・24図）。中でもC地点のVI層で、土器の破片がまとまって廃棄されていた（集中1）。そこから1の甕口縁部片、2の壺底部、3の口縁部を失った脚部完形の台付鉢が出土した。この他に単独で出土したものに、B地点VI層出土の7の高坏軸部片、D地点VI層から出土の5の甕口縁部片と6の甕頸部片がある。

次に炭・焼土を多量に含む黒褐色のIV層が堆積し、地点によって堆積の厚さと内容物に違いがみられる。それぞれ溝の中央部にあたるD地点とF地点ではこのIV層が厚く、両地点では大量の炭化材と焼土ブロックと炭層が検出され、特にD地点では焼土ブロックと炭層が下部に、炭化材が溝の内側の壁にもたれかかるように検出された。この堆積状況からみて少なくともD地点の堆積は、2号方形環溝の内側から投棄されたものと考えられる。以上のD地点を集中2、F地点を集中3として取り上げた。この焼却廃棄物に伴って少量だが土器が廃棄されている。D地点集中2（第24図）からは、8の壺と9の壺底部片が焼却廃棄物の上から、10の大型甕の口縁部片が下から出土した。特に8の壺は小さく割れた破片がまとまって検出され、それが完形に復元できたので、おそらく焼却物を投棄した直後に破碎して廃棄したものと考えられる。なおD地点のIII層から出土した12の高坏軸部もこの廃棄に伴う可能性がある。F地点集中3（第23図）からは、4の甕が焼却廃棄物の上下に分かれて出土した。少し破片が足りないがほぼ完形に復元でき、破碎されて焼却廃棄物の投棄と同時に廃棄されたものである。なお11の甕口縁部片もやや浮いているが、この廃棄に伴う可能性がある。

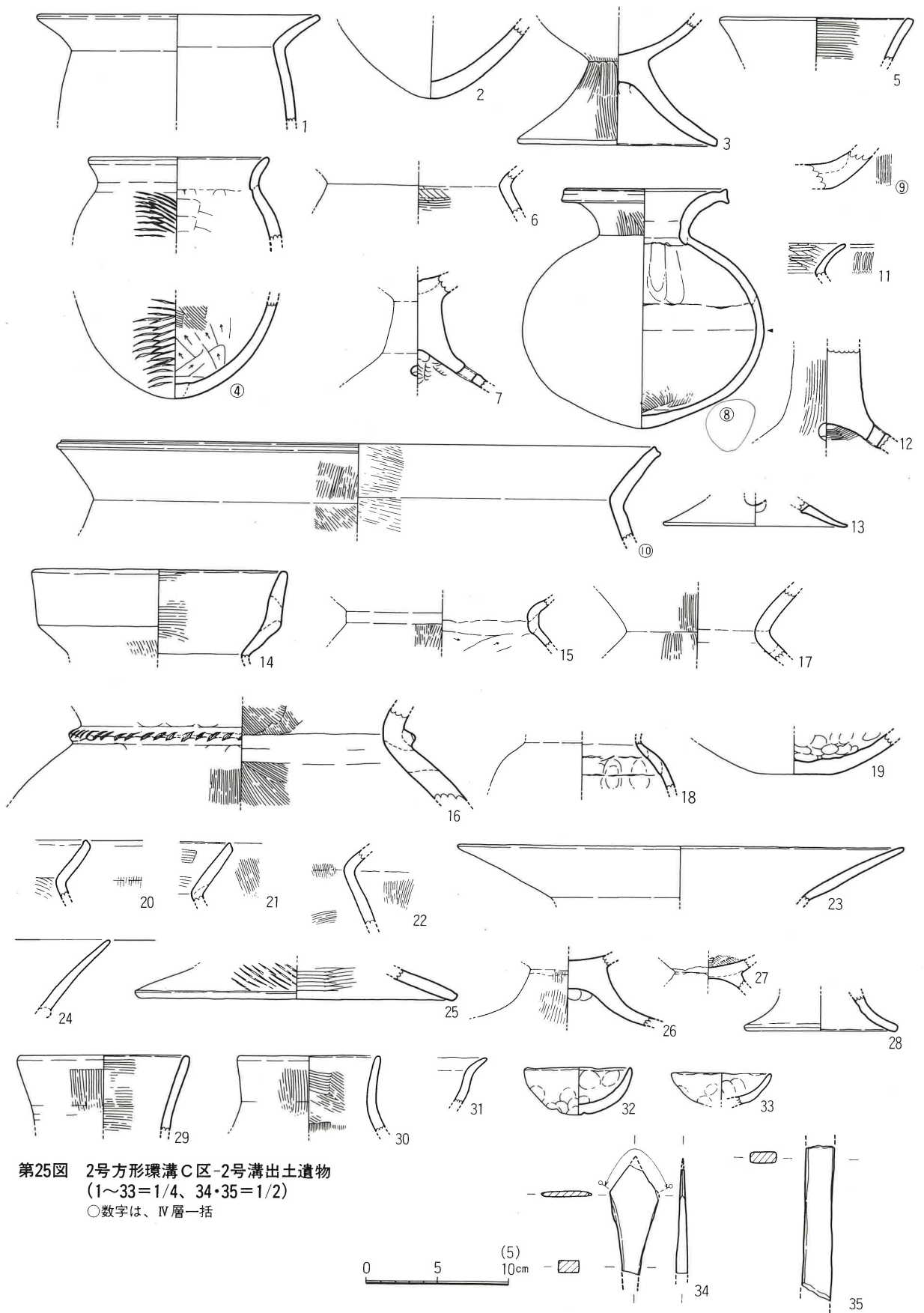
さらに以上の遺物一括廃棄層の上に、暗茶褐色から黄褐色に変化するIII層が、厚さを異にしながほぼ溝全体に堆積する。全体に黄色土ブロックを多量に含む、基盤層から掘り出された地山の土が溝全体に廃棄されたと推定される。埋め戻すというよりは廃棄遺物に封をするために土をかぶせたと言ったほうが適切である。その後のII層以上が自然堆積の状態を示すところからみて、集中AとBの遺物一括廃棄は2号方形環溝廃絶時におこなわれたものと推定される。この堆積状態は他の堅穴住居跡の廃絶状況とほとんど同じである。違うのは土器が少ないことである。方形環溝の内側から投棄されている点を考慮すると、おそらく2号方形環溝廃絶時の廃絶祭祀の痕跡であると考えられる。最後にII～I層は黒色帯と黄色帯が堆積する自然埋没の状態を示す。遺物も当然ながら少なくなる。2号方形環溝廃絶後は、そのまま放置されて自然に任されたものと推定される。II層からは13の高坏脚部片が出土した。

以上をまとめると①VI層とV層が2号方形環溝使用中の堆積で、②IV層で廃絶祭祀に伴う遺物一括廃棄がおこなわれ、③III層が故意に埋め戻され、④II層からI層はその後の自然埋没ということになる。

ところで横断面の観察時に土塁の存否に留意したが、土塁の痕跡や土塁崩壊土の明瞭な堆積は認められなかった。中でも黄色土ブロックがかなり含まれるIII層の堆積の方向に注目したが、偏った流入は認められなかった。したがって、溝の両側には土塁は築かれていなかった可能性が高い。

なお各地点から14～33の土器片と、34と35の鉄器が出土したが、D・F地点以外では層位的に取り上げることができなかったのが帰属は不明である。ただ32と33の手づくね碗は祭祀遺物と考えられるので、IV層一括廃棄に含まれる可能性が高い。

最後に出土遺物をまとめる（第25図）。VI・V層出土（1～3・5～7）の土器は、すべて在地産の胎土を用い、被熱の痕跡はない。集中1検出の1は内外面ともナデ仕上げの甕、2は内面をナデで仕上げた壺の底部、3は在地系の台付鉢Aである。単独出土の5と6は在地系の甕A、7は軸部が中実の伝統的V様式系の高坏Bである。D地点集中2出土の8は内面に接合痕が残り、底部内面に崩れた簾状のハケ調整がある伝統的V様式系の技



術で製作された壺B。9はレンズ状の平底が残る大型の在地系の壺A。10は復元口径が40cmを越える在地系の大型の甕A。12は軸部が中実の伝統的V様式系の高坏Bである。F地点集中3出土の、4は外面に平行タタキ痕が残り、内面はヘラケズリの後にハケと板ナデ調整を施し、底部に輪台技法の痕跡を残す伝統的V様式系の技法の系譜をひく甕B。11は口縁内外にミガキを施し、端部が尖りつつ外湾する伝統的V様式系の甕Bである。以上使用中および廃絶時に一括廃棄された土器には、伝統的V様式の技術で作られた在地産の土器が多い点が指摘できる。

層序不明の遺物として、14は在地系の複合口縁壺Aの口縁部片。15～19の壺のうち、15は内面ヘラケズリが明瞭な壺の頸部片。16は在地系の壺Aの頸部破片で、ハケの工具で突帯に刻みをつけている。17はおそらく単口縁の壺Dの頸部片。18は小型壺の肩部破片で、19の壺は底部が平底で内面に指圧痕が顕著に残る。20～22は在地系の甕Aの口縁部片と頸部片。23から25は高坏で、23は在地系の高坏Aの坏部口縁片。24は布留系の高坏Dの坏部口縁片。25は高坏脚部片。26から28は在地系の台付鉢Aである。29と30は在地系の直口壺Aの口縁部片である。31は小型鉢の口縁部片。32と33は手づくねの小型碗である。鉄器として、34は定角形の鉄鏝で、先端と基部が欠けている。35はヤリガンナの可能性がある鉄片である。

以上の土器をみると全体に古い印象を与える。特に伝統的V様式系のB類が目立って、布留系のD類が少ない点が気になる。しかし遺構の切り合い関係と方向からみて2号方形環溝が小迫辻原4期の築造であることは疑えないので、土器群は小迫辻原4期の末に廃棄されたと考えざるを得ない。問題は古い様相の土器がなぜ残るのかという観点から提起されるべきであろう。(旧E地区溝20)

2) 1号条溝(カラー図版上、第26・27図 →巻頭図版10、図版15～18・38～51)

辻原台地全体を東西に両断する長大な溝で、その後の日田市の調査によって、ゆるく蛇行しながら250m以上にわたって伸びることが判明している(註1)。C-4溝はその1号条溝全体の南端に近い部分にあたる。

註1、日田市調査のP区・L-2区・I区で検出されている。

土居和幸「小迫辻原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報』VI、1991、日田市教育委員会

土居和幸「小迫辻原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報』VIII、1993、日田市教育委員会

C区-4号溝(第28～44図、写真4 →図版15～18・38～51)

C区西部で長さ約43mにわたって検出された溝状遺構である。C-10住とC-2土塋を切り、C-13住(奈良時代)に切られている。溝はA1調査区からまっすぐに北上し、B3杭付近から緩やかに東に湾曲する。断面は基本的に幅の広い逆台形である。検出面での幅は約2.0～3.6mをはかる。底面の幅は1.5～2.2mをはかり、検出面からの深さは80～100cmである。底面は平坦でほぼ水平だが、北端の付近(第26図断面ア・イ点)で、段がついて浅くなる。なお後述するように遺物一括廃棄をおこなう前に、改修というほど大規模ではないが、掘りなおしか、または丁寧な底浚いがおこなわれた可能性がある。また周辺では溝に関連する柱穴列等の遺構は検出されず、土塁等の痕跡もないが、溝のそばに盛土がおこなわれていた可能性がある。

内部の遺構として、埋没以前の柱穴と考えられるピットがかなり多く検出された。これらの多くは遺物一括廃棄の際に掘られた可能性があり、ピットに切り合いが認められる場合もあるので同時に掘られたものではない。このピットは、橋あるいは柵等の施設の可能性もあるが、遺構を推定できるまともには示さない。しかし、後述するように遺物の出土状態などから勘案してD断面付近に、橋がかかっていた可能性が高い。他に溝の底面から土塋が3基近接して検出されている。

調査は溝を横断する土層観察用土手を境界に(第26図)掘り下げた。土層断面の観察の結果、A)溝の埋没過程、B)遺物廃棄状態、C)橋の存在が、次のように判明した。

A)溝の埋没過程について(第27図)。まず下層にC-4溝が機能していた時期に流入したと考えられる3層が堆積する。3層は黄褐色系の軟らかい層で、1～2cm大の黄色土粒子を大量に含み、その中には流れこんだ土器片が混入しているほかには、炭片や焼土片はほとんど含まない。しかし基盤層に由来する黄色土の小粒子が混入

する点が注目される。この粒子が混じるのは、溝掘削時に掘り出した土を溝の片方あるいは両側に盛っていたためと考えられ、その盛土が少しずつ自然に流れ落ちて3層が堆積したと推定される。概報4では、その流れ込みの方向が東に偏り、溝の東側に土壘があったのではないかと記述したが、今回再検討した結果、東側に盛土があったとは断定できないことが判明した。しかし盛土の位置と形態は不明なものの、溝のそばに何らかの土盛りがおこなわれていたことは3層の内容から確実である。さて3層に混入した土器としては、1の在地系の甕A頸部片と2の軸部が厚く伝統的V様式系の技法をとどめた高坏Bの頸部片のみが図示可能なものである。他に260の土錘の完形品が22群の西側で出土しており、下層堆積時の混入とみられる。ところで先述の溝底のピットのなかには、この3層で埋まっているものもあり、溝使用中に何らかの目的の柱が建てられた可能性がある。

次の中層には大量の遺物一括廃棄がみられる2層が堆積し、廃棄された土器は完形に近い個体が多く、ところどころ炭層のブロックや焼土ブロックが混在している。単なる土器廃棄の場所ではなく、小迫辻原遺跡の集落内でおこなわれた祭祀行為の累積と評価される層である。詳しくは次項でのべる。2層は細かく細分されるが、全体に土器とともに炭片・焼土片を多量に含み黒色化している。同時にA断面の2b・2d層や、B断面の2b・2c層のように黄色土をかなり含む層が混在しており、土器や焼却物の廃棄に伴って土砂も廃棄された可能性がある。おそらく方形環溝や竪穴住居跡と同じ行為が繰り返されたと考えられる。またA断面では2層の堆積に先立って溝底を掘削したと考えられる不整合のAラインを認めた。そしてその面から掘込まれたピットを検出している。その際、遺物一括廃棄の前にピットを掘り、柱を建てていた可能性も指摘できる。2層の遺物一括廃棄に先立って部分的に掘りなおしあるいは丁寧な底浚いがおこなわれたと推定され、溝の底で検出された土壘Aもこの2層遺物一括廃棄の際の部分的な掘直しの結果である可能性が高い。なおこの2層中の遺物一括廃棄は29箇所の廃棄単位に分かれ、あわせて3～198・220～258・260の土器と261・262の石器と263の鉄器が出土した。

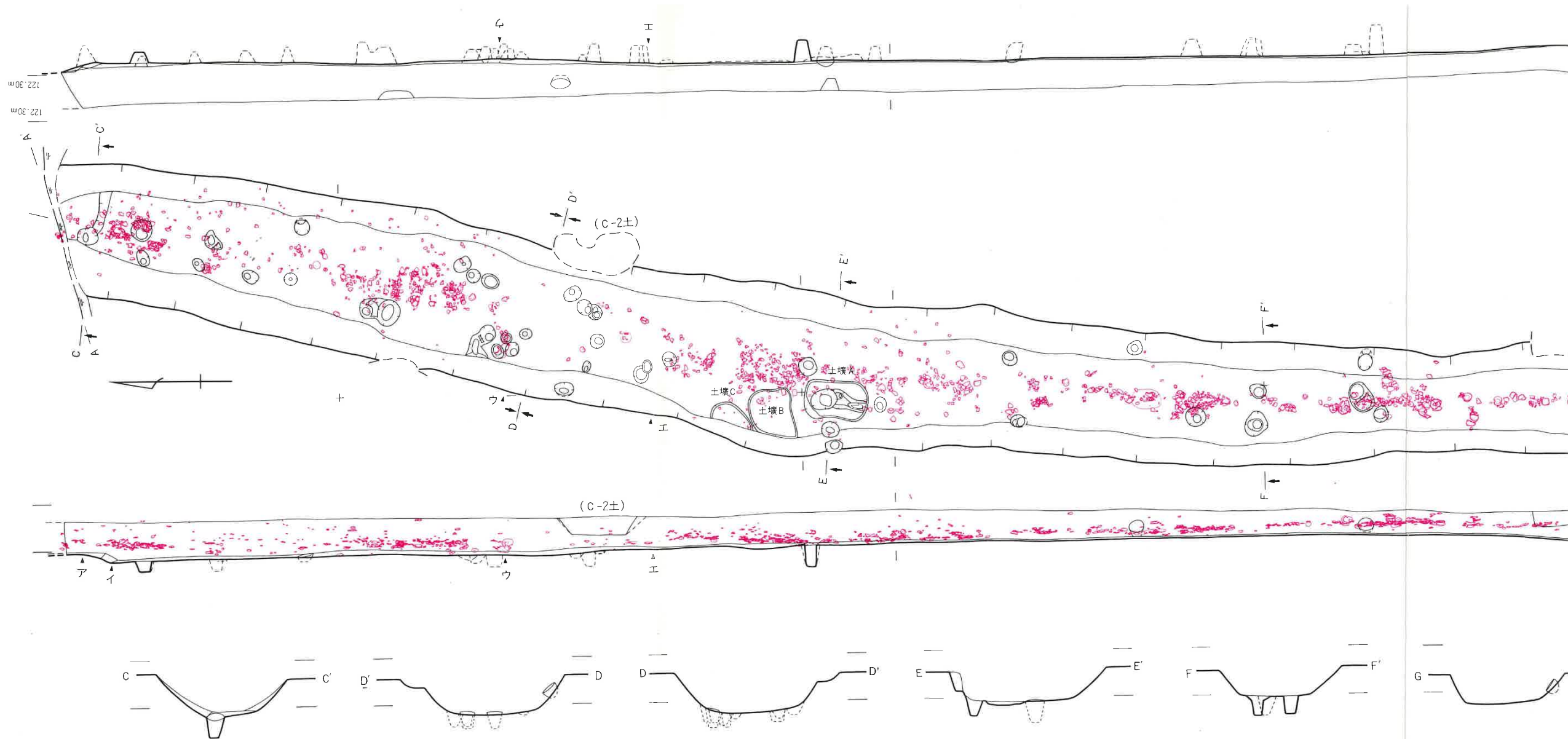
最後にこの中層の堆積後もなお溝は埋没しきっておらず、上層＝1層の堆積をまってその機能を失うものと考えられる。1層は炭・焼土と土器片を含むが黄色土はほとんど含まず、2層遺物一括廃棄後はそのまま放置され自然埋没していったものと推定される。この上層からは自然埋没時に流れこんだ土器と、2層の廃棄土器の一部が遊離した土器が混じりあって出土した。199から219の土器である。

以上をまとめると①下層＝3層がC-4溝使用中の堆積で、②中層＝2層で29単位に分かれた遺物一括廃棄と土砂の廃棄が繰り返しおこなわれ、③その際廃棄する場所を掘り直したり、あるいはピットが掘られている。④上層＝1層はその後の自然埋没、ということになる。

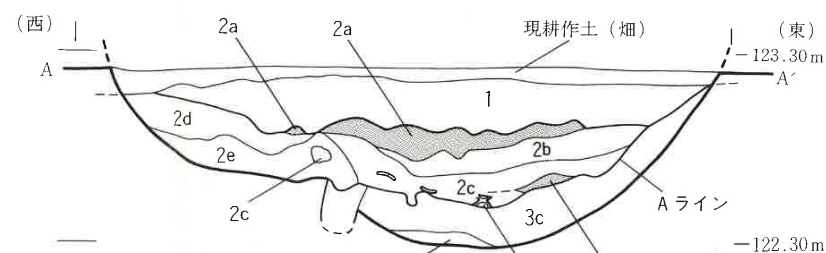
B) 中層の遺物廃棄状態について(第26・28～30図)。以上のような埋没過程の途中で廃棄された2層の一括廃棄遺物は、平面的にみると一斉に廃棄された大量の土器群に見えるが、溝の縦断面にあわせて遺物の出土した高さや平面分布をあわせながら検討していくと、遺物群は多くの単位に分かれ、その単位は斜めに堆積したり、高さを異にして重なっていることが判明した。廃棄された場所も同様ではなく、特定の場所では廃棄が繰り返されて溝が早く埋まるのに対して、廃棄の少ない場所はほとんど埋没していないという様子が判明した。したがって必ずしも低い位置の廃棄が古いわけではない。そのようにして廃棄の単位は少なくとも29箇所の群に分かれることが判明した。以下その廃棄単位をC-4溝の北から順に次のように説明する。①廃棄単位とその内容、②遺物出土状態と接合関係、③土器の解説、④まとめ、⑤その他、以上の順で記述する。

1群(第28図)①、溝の北断面から南に向かって斜めに堆積した廃棄単位で、円礫を伴って3の壺頸部片と4の台付碗が出土した。②、3の破片は5群でも見つかり、4はほぼ完形のままで2層最下部に逆さに置かれていた。③(第31図)、3は在地系の壺Aで、頸部突帯にハケ工具による斜めの刻みを施す。4は在地系の台付碗A。④、まず最初に4の台付碗を廃棄場所の最下部に逆さに置いてから廃棄をおこなったものと推定される。

2群(第28図)①、廃棄単位の北端が1群の上に重なって堆積したもので、多量の土器と礫が廃棄されている。5～7の壺口縁片、8～17の甕、18と19の支脚、20と21の台付碗、22の小型壺、23と24の碗が出土した。②、5の口縁破片は2群と5群および6群から出土したものが接合した。8の甕は胴部下半がそのまま正位で検出され、上半は割れて破片は2群を中心に周辺に分散していた。おそらく完形のままで置かれていたものと考えられる。9

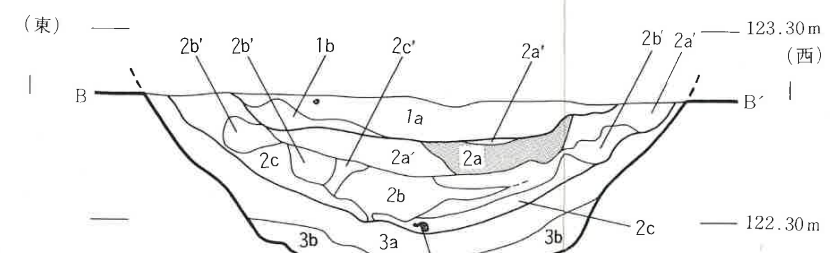


第26図 1号条溝 (C区-4号溝)① -遺構配置と遺物の分布- (1/100)



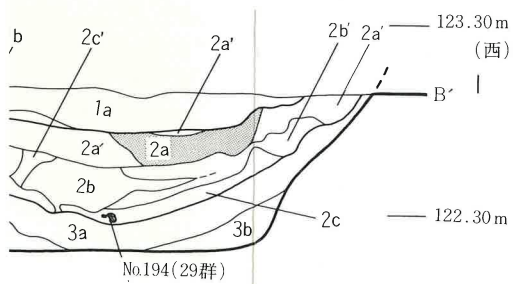
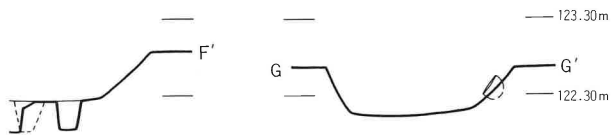
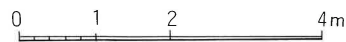
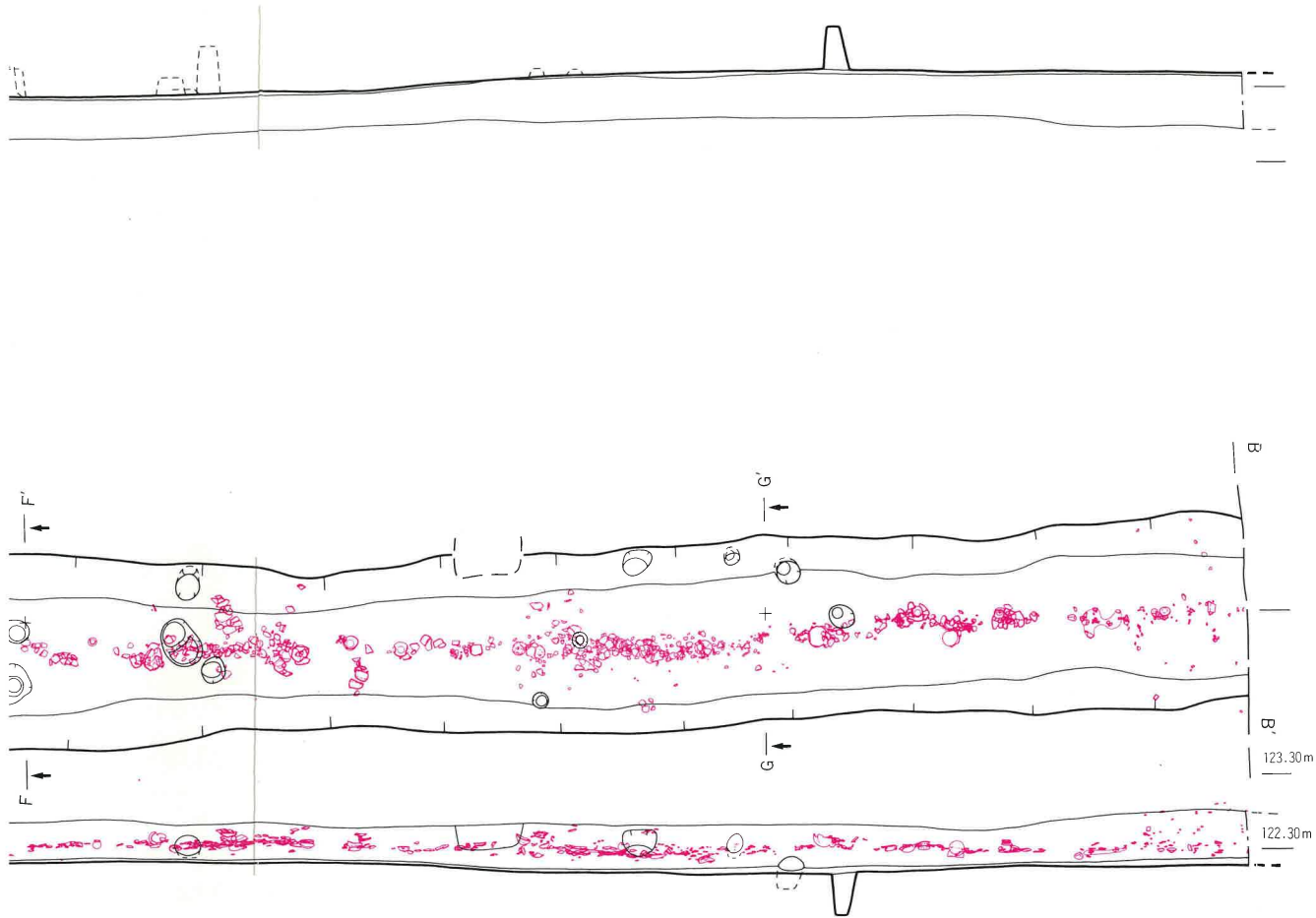
(A-A断面の層序)
 1層：暗褐色硬質土（粘質強く、地山小石礫・炭片・焼土・土器片含む）＝上層
 2a層：黒褐色軟質土（もろい。炭片・焼土粒子・土器片少し含む）
 2b層：暗黄褐色粘質土（ややかたい。焼土・炭片を土器片多く含む）
 2c層：暗褐色粘質土（ややかたい。焼土・炭片を多く含む。土器投棄はこの層が中心。）
 2d層：暗黄褐色粘質土（ややかたい。焼土・炭・土器をほとんど含まない。）
 2e層：暗褐色粘質土（ややかたい。焼土・炭・土器をほとんど含まない。）
 2f層：黒褐色粘質土（ややかたい。焼土粒子・炭片を非常に多く含む）
 ※2d・2e層は、溝の西側から短時間に流入した土層。
 ※2f層は、溝の使用・土器廃棄以前の堆積。
 →2c層中の間層で、火を利用した土をすてている。

第27図-1 1号条溝 (C区-4号溝)② -断面土層図-(1/40)



(B-B断面の層序)
 1a層：暗褐色土（ややかたく、炭・焼土・土器片を少し含む。）
 1b層：淡褐色軟質土（炭・焼土・土器片少し含む。）
 2a層：黒褐色軟質土（炭でよごれた黒色。しかし焼土・土器は非常に少ない）
 2a'層：淡黒褐色土（焼土・炭片は含むが、土器片は少ない）
 2b層：暗褐色軟質土（0.5cm大の細かい黄色粘土粒子を多く含む。炭・土器・土器片を含む）
 2b'層：暗黄褐色軟質土（炭・焼土・土器等は少ない）
 2c層：暗黄褐色軟質土（0.5cm大の細かい黄色粘土粒子を多量に含む。最下部に、土器片・炭・焼土を多く含む）
 2c'層：2c層の変移。
 3a層：暗褐色軟質土（1～2cm大の黄色粘土小ブロックを多く含む。炭等は少ない。）
 3b層：暗黄褐色軟質土（1～2cm大の黄色粘土小ブロックを多く含む。炭等は少ない。）
 ・3層＝下層＝溝使用中・土器廃棄以前の堆積。
 ・2c層と3a層間に不整合はみとめられない。
 土器が集中するブロック、炭が集中するブロックなどが混在している。
 →短時間に投棄された土層群の集積。

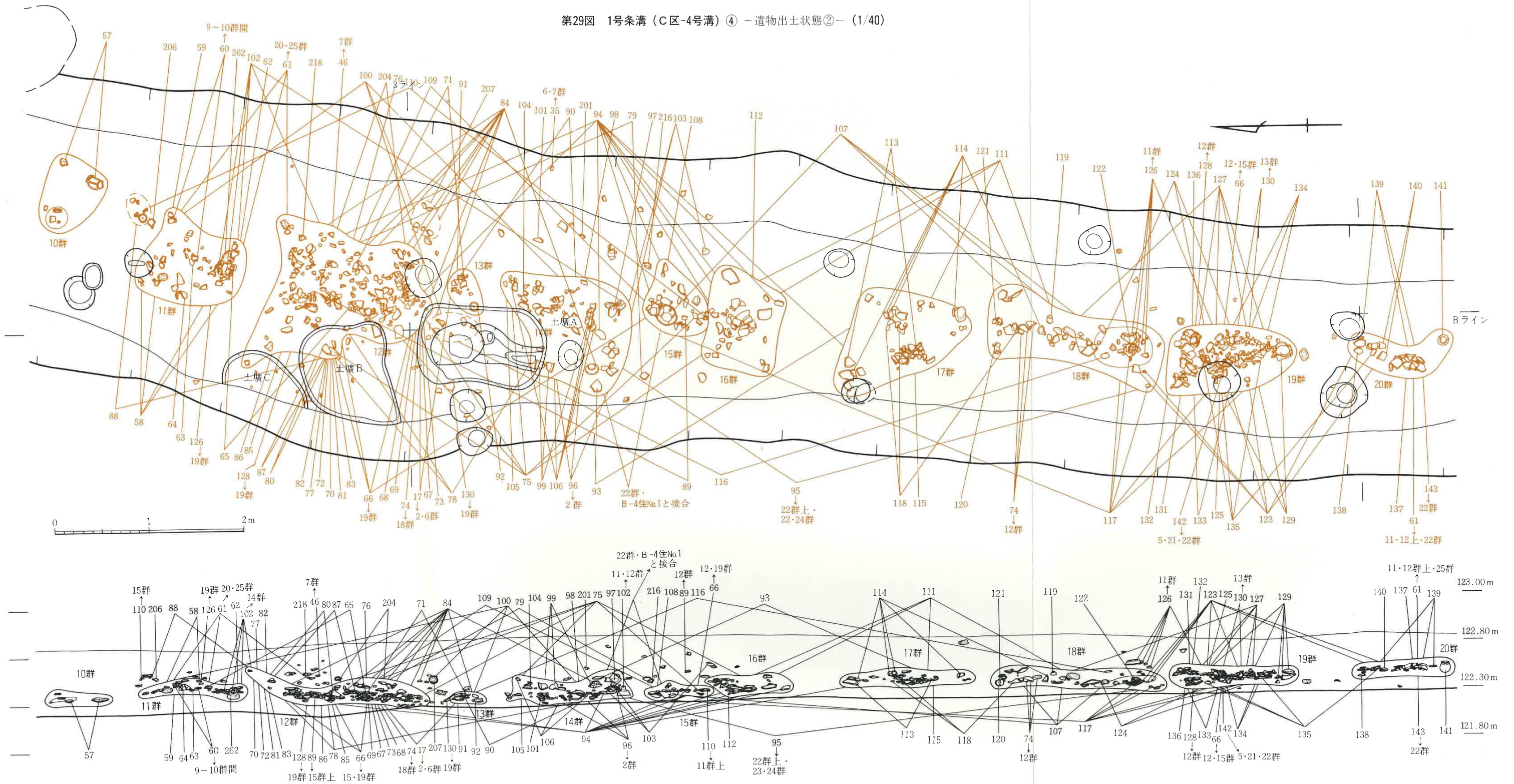
第27図-2 1号条溝 (C区-4号溝)② -断面土層図-(1/40)



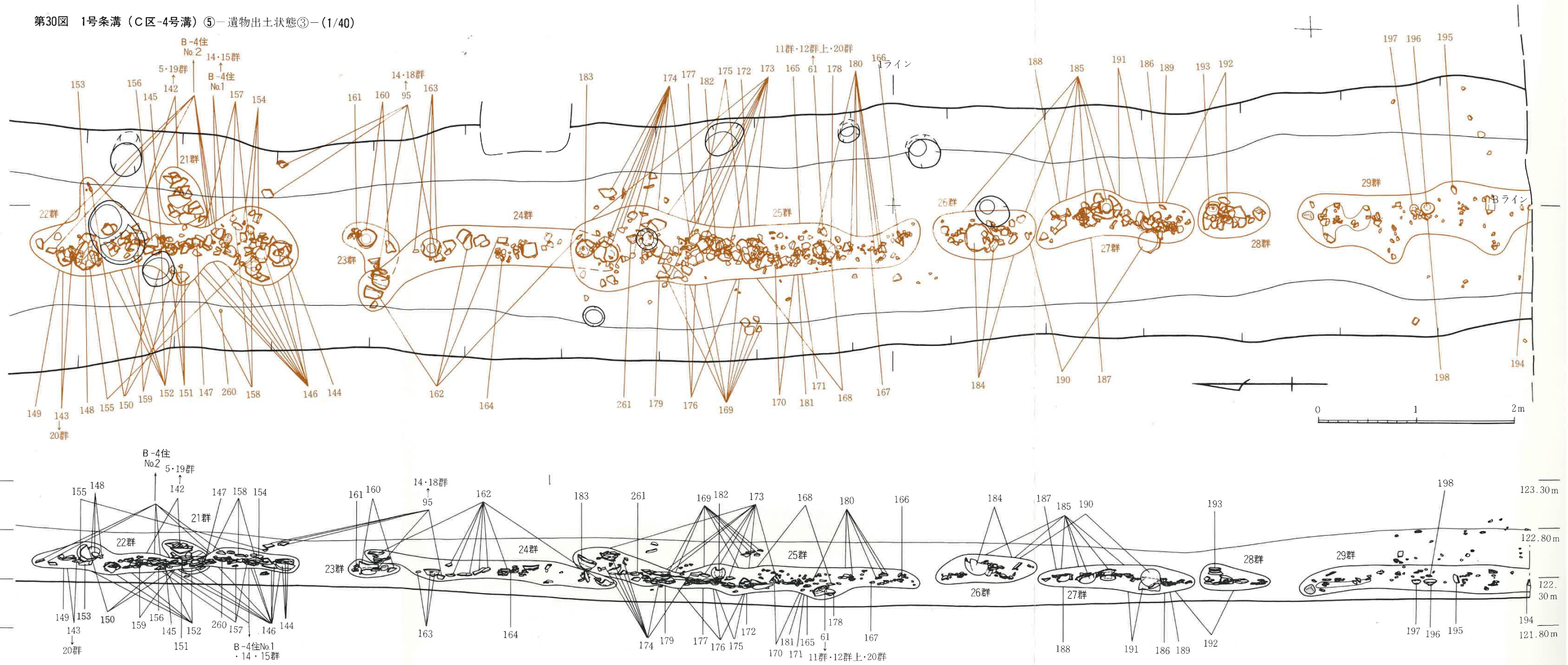
- 器
含 } = 上層
層群廃棄後
かし焼土・
器片は少い
土粒子を多
少い。
粘土粒子を
焼土を多く
- 3a層：暗褐色軟質土（1~2cm大の黄色粘土小ブロックを多く含む。炭等は少い。）
3b層：暗黄褐色軟質土（1~2cm大の黄色粘土小ブロックを多く含む。炭等は少い。）
・3層=下層=溝使用中・土器廃棄以前の堆積。
・2c層と3a層間に不整合はみとめられない。
- 土器が集中するブロック、炭が集中するブロックなどが混在している。
→短時間に投棄された土層群の集積。

溝② - 断面土層図 - (1/40)

第29図 1号条溝 (C区-4号溝) ④ - 遺物出土状態②- (1/40)



第30図 1号条溝 (C区-4号溝) ⑤-遺物出土状態③-(1/40)



の甕は破片が分散し、その一部は6群でも出土した。10の甕は胴部上半のみが潰れた状態で出土している。下半を割り取って上半のみを廃棄したとみられる。14~16の甕は潰れた状態で出土し、ほぼ完全に復元でき、14と16は底部の破片が不足する。以上の三点は完形品に近い形で廃棄されたとみられる。17の甕は2群・6群・12群と13群に破片が分散していた。18と19の支脚はいずれも打ち欠いたような痕が観察され、故意にわられて廃棄されたと考えられる。20の台付碗は他の土器片の堆積の下、すなわち2群最下部で検出されたもので、口縁が一部破損していたがほぼ完形のまま正位で検出した。21の台付碗は脚部のみ完形で、おそらく坏部は打ち欠かれたと考えられる。22の小型壺は大型破片がまとまりとなって出土した。破碎されて廃棄されたものである。23の碗は完形のまま逆位に伏せられて潰れていた。③(第31・32図)、5と6は布留系の二重口縁の壺Dで、5は屈折部外面に粘土を貼りつけて強調する。7は在地系の単口縁の壺Aで、頸部に突帯と刻みがある。8・9・11・12は在地系の甕Aで外面にタタキ痕が残りに、8の内面にはヘラケズリが一部に施される。10は外面ヨコハケ仕上げ、内面ヘラケズリの山陰系の甕E。13は外面下半にヘラケズリを施す在地系の甕Aの底部。14は布留系の甕の形態を模倣した在地系の甕A。15は内面にヘラケズリが施された甕A。16と17は内面ヘラケズリ仕上げの布留系の甕Dで、17の肩部にはヨコハケがめぐる。18と19は牛角状に屈折し横方向に焼成前の穿孔を施した外来系の支脚で、いずれも中実の手づくねによる製作である。20は頸部が厚く伝統的V様式系の製作技術の影響が残る在地系の台付碗A。21は在地系の台付碗A。22は内面ヘラナデ仕上げの小型甕。23は在地系の碗A。24は外面のヘラケズリを施す碗。以上の土器は在地系と外来系ともに、すべて在地の胎土を用いた在地産の土器である。このうち8・13~17の甕と17・18の支脚には二次加熱による赤変と煤の付着が認められた。在地系のA類を主体に布留系D類の甕と支脚が加わる器種構成である。④、最初に20の台付碗を廃棄場所の最下部に正位に置き、次に完形品の8の甕を正位で据え、23の完形の碗を伏せてから、さらに下半を打ち欠いた10の甕の上半と14・15・16の甕をそのまま廃棄し、その周囲に破碎した他の土器の破片を廃棄したものと推定される。

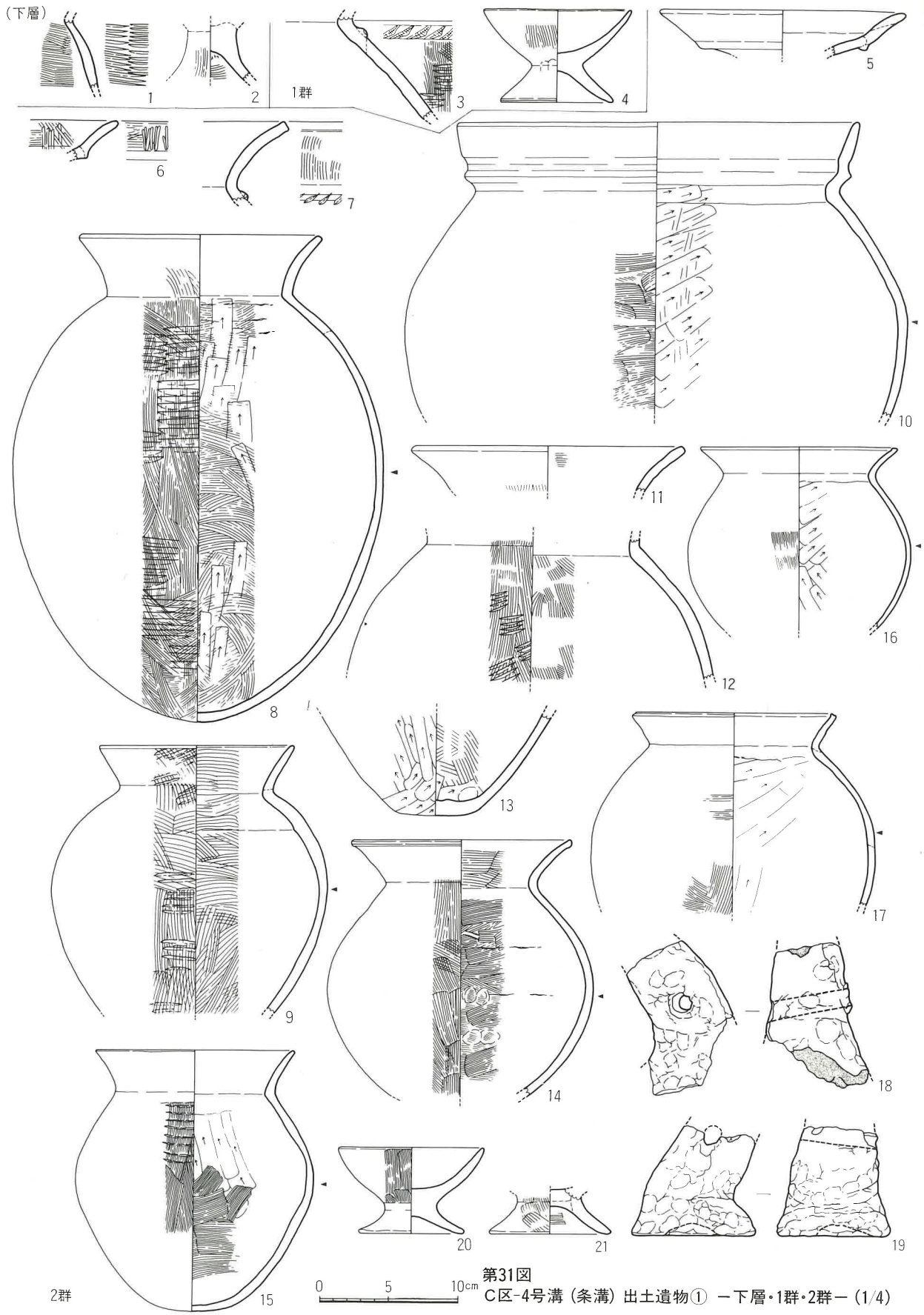
3群(第28図)①、2群の傾斜の延長に堆積した廃棄単位で、4群より先に廃棄されている。円礫が多く、それに土器片が加わる一括廃棄で、25と26の高坏軸部片が出土した。②、高坏はどちらも軸部のみが残存して、坏部と脚部を失っている。破碎してその一部がここに廃棄された可能性が高い。③(第32図)、25は頸部が中実気味に厚く伝統的V様式系の製作技術の影響かと推定される高坏。26は中実の軸部から製作する伝統的V様式系の高坏B。どちらも胎土は在地産で、25は激しく被熱している。④、破碎された土器片が多量の礫とともに廃棄されたものと推定される。

4群(第28図)①、3群の斜め上層に土器1個体と円礫1個が単独で出土した廃棄単位で、27の甕が出土した。3群より後に廃棄されている。②、甕は割れた破片が折り重なるように出土し、復元すると上半は完形に復元できたが、底部は失われていた。③(第32図)、27は内面ヘラケズリ仕上げで、外面はヨコハケが卓越する布留系の甕Dだが、在地系の技術を身につけた土器製作者が、布留系の技術を習得して製作した土器、という印象を与える。胎土は在地産で、二次加熱による煤が付着している。④、甕の底部を打ち欠き、その残りを破碎して、円礫とともに廃棄した可能性が高い。

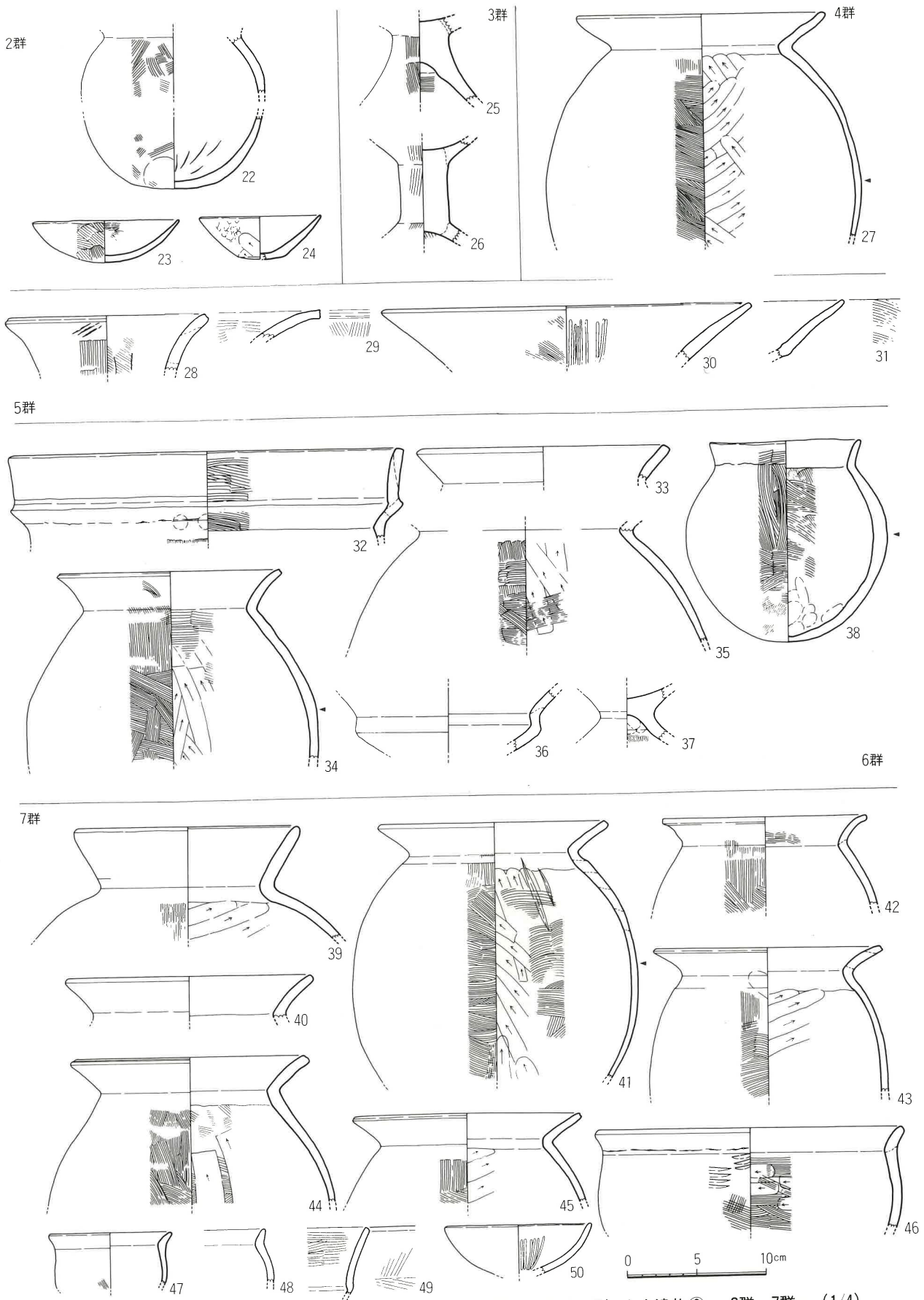
5群(第28図)①、溝底面に近い2層最下部に堆積した廃棄単位で、全体に山なりに埋まり、土器片を中心に円礫と炭層がくわわる。28の壺口縁部片、29の甕口縁部片、30と31の高坏坏部片が含まれる。②、土器はいずれも小破片が分散して広がる。③(第32図)、28は口縁外面にタタキ痕が残る在地系の技術で作られた単口縁の壺A。29は在地系の甕A。30と31は高坏で、30の内面にはタテ方向のヘラミガキが施される。④、1群と同時期に廃棄された単位で、最初の廃棄単位のひとつである。⑤、なお5群には、1群の3の壺の破片と21群を中心に分布する142の甕の破片が含まれてい



写真4. 1号条溝.29群最下部の土器出土状態(左:No.196, 右:No.197)



第31圖 C区-4号溝(条溝)出土遺物① 一下層・1群・2群一(1/4)



第32图 C区-4号溝(条溝)出土遺物② -2群~7群- (1/4)

た。ほかに5群の最上部には2群の5の壺の破片も出土しているが、後の廃棄の時に混入した可能性がある。

6群(第28図)①、北端が5群の上に重なり、南端は7群の下に潜り込むように堆積した廃棄単位で、多量の土器と礫が廃棄されている。32の壺口縁片、33の甕口縁片、34の甕上半、35の甕肩部片、36の高坏片、37の台付碗頸部片、38の小型甕が出土した。②、32から35の壺と甕の破片は6群のみならず7群からも出土している。38の小型甕は完形品のまま横倒して潰れた状態で出土した。38以外はすべて破片が分散して出土した。③(第32図)、32は山陰系の甕E。33・34・35は外面のタタキ痕を丁寧にハケ消し、内面にヘラケズリを施す在地系の甕A。36は坏部が二段に屈折する外来系の高坏。37は在地系の台付碗A。38は内面底部下半に指圧痕が顕著で、内外ハケ調整の小型甕。以上の土器は在地系と外来系ともにすべて在地の胎土を用いた土器である。このうち34の甕と38の小型甕には、二次加熱による赤変と煤の付着が認められた。在地系の甕A類を主体に、山陰系E類の甕と外来系の高坏が加わる器種構成である。④、まず完形品の38の甕を横位に置き、その周囲に破碎した他の土器の破片と礫を廃棄したものと推定される。

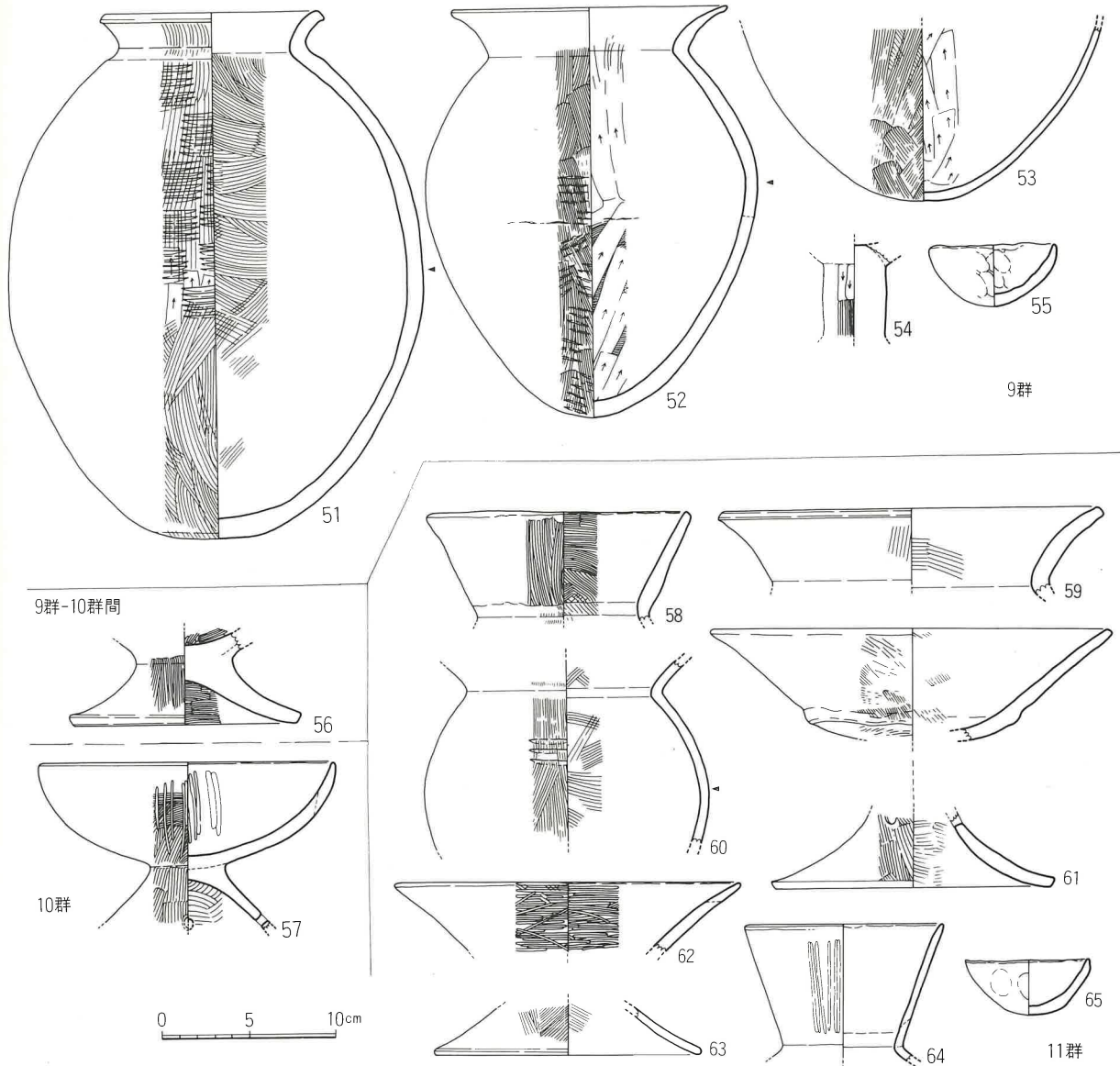
7群(第28図)①、6群と8群の上に跨がるように重なって堆積した廃棄単位で、多量の土器片が廃棄されている。39の壺口縁部、40～45の甕上半片、46の鉢、47～49の小型鉢口縁片、50の碗片が出土した。②、各土器とも大型の破片が散乱した状態で出土し、その中で50の碗のみがほぼ完形に復元できた。③(第32図)、39は布留系の単口縁壺D。40・41・43・44は在地系の甕Aで、43は未熟な在地系の土器製作者が、おぼえたての布留系の技術(ヘラケズリ)で作ったような印象をあたえる。44は逆に在地系の土器製作者が上手に布留系の土器を作ったと考えられる甕。42は内面をナデ消し口縁が外湾する伝統的V様式系の系譜をひく甕B。45は布留系の甕D。46は在地系の鉢A。47・48・49はいずれも外来系の小型鉢。50は在地系の碗A。以上の土器は在地系と外来系ともにすべて在地の胎土を用いた土器である。このうち42の甕には二次加熱による煤の付着が認められた。器種構成は在地系の甕A類を主体に、布留系のD類の甕と折衷的な甕が認められ、それに小型器種が一定量加わる。④、全体に破碎された土器の破片の一部を一括廃棄したものと推定される。⑤、6群出土の土器の破片が7群にも含まれることは先に指摘したが、このことはおそらく7群が廃棄された時点では、6群に廃棄された土器がまだ表面に散乱した状態であったと推定される。

8群(第28図)①、7群と9群の下で検出された廃棄単位で、人頭大から拳大の礫が十数個廃棄され、土器は含まない。④、1群および5群と同時期に廃棄された単位で、最初の廃棄単位のひとつである。

9群(第28図)①、8群の礫群にむかって、溝の西側から流れこむように斜めに堆積した廃棄単位である。51の壺、52の甕、53の甕下半、54の高坏軸部、55の碗が出土した。②、土器片が散在するなかで、51の壺は半個体分の大型破片が9群に置かれ、他の破片は6群と7群に散在していた。接合すると完形になり、破碎して廃棄されたことがわかる。52の甕は51の破片の上に重なるように完形のまま置かれていた。53の甕の底部下半の大型破片が正位で置かれた状態で出土した。55の碗は、53の甕下半のそばに正位で完形のまま置かれていた。③(第33図)、51は在地系の短口縁壺A。52の甕は胴部中央の内外に対応する明瞭な接合痕が残り、タタキ成形の段階で分割成形が行なわれている。口縁部も外湾して先端が細くなる。この点から伝統的V様式系の甕Bといえる。ただしタタキの方向はくずれ、内面はヘラケズリ仕上げで布留系の影響を強く受けている。53は上手なヘラケズリで器壁を薄く仕上げた布留系の甕D。54は中実で軸部がやや膨らむ伝統的V様式系の高坏B。55は手づくねの小型碗。以上はすべて在地の胎土を用いた土器である。このうち51の壺と52・53の甕および54の高坏に二次加熱による赤変と煤の付着が認められた。伝統的V様式系のB類と布留系のD類が目立ち、高坏と碗などの小型器種が加わる器種構成である。④、以上のように完形品の碗と、甕の下半を鉢のよう見立てて両者を正位に並べ置き、その横に破碎した甕の破片と完形の甕を置いたと推定される。

9群-10群間(第28図)56の台付鉢の脚部が、10群とほぼ同じ高さで単独に出土した。脚部のみ完形で逆さに検出された。単独で置かれた可能性が高い。56は在地系の台付鉢Aである(第33図)。

10群(第29図)①、溝底面に近い2層最下部に堆積した廃棄単位で、土器片に炭化材と炭層が加わる。57の台付碗が出土した。②、台付碗は破片が分散して出土したが、接合すると脚端を除き完形に復元できた。おそらく



第33図 C区-4号溝(条溝)出土遺物③ -9~11群- (1/4)

脚端部を故意に打ち欠き、残りを破砕して廃棄したものと考えられる。③(第33図)、57は在地系の台付碗Aで、坏部内外にタテ方向のヘラミガキが施される。④、高さの同じ11群と前後して廃棄されたと考えられる。

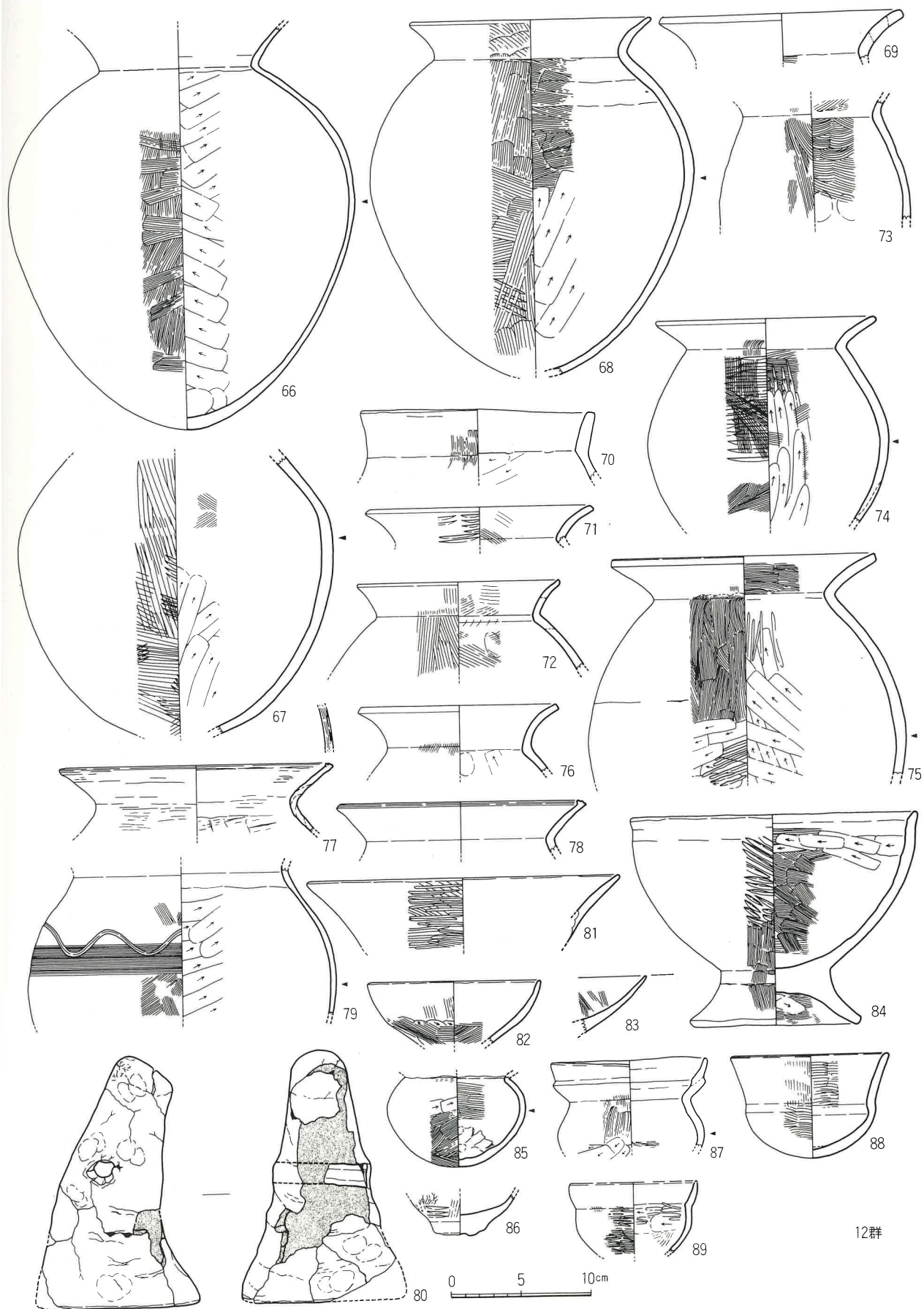
11群(第29図)①、南の12群の下になって堆積した廃棄単位で、円礫と多量の土器片が廃棄されている。58の壺口縁部、59と60の甕片、61~63の高坏片、64の長頸壺の口縁部片、65の碗、および262の磨石が出土した。②、各土器とも大型の破片が散乱した状態で出土し、65の碗のみがほぼ完形に復元できた。その内61は同一個体と考えられる高坏の坏部と脚端部破片で、軸部がない。接合した破片の一部は20群と25群でも出土した。他の廃棄例では高坏の軸部のみが出土するケースが多くあり、それに対して61は欠き取られた破片の方が別な場所に廃棄される例である。64の壺は口縁部の四分之三の破片が逆さまの状態で見出された。65は完形に復元できたが、破片の一部は12群からも出土した。さらに11群の中で破片が最も集中するところから262の磨石が完形で出土した。③(第33・44図)、58は布留系の単口縁の壺A。59と60は在地系の甕A。61は在地系の高坏A。62はヨコヘラミガキを密に施した高坏の口縁部。63は高坏の脚部片。64の布留系の長頸壺Dで、外面にタテ方向のヘラミガキを施すが精製胎土ではない。65は手づくねの碗で、内面に赤色顔料が付着している。262の磨石は在地産の安山岩製。以上の土器はすべて在地の胎土を用いたものである。このうち60の甕と63の高坏には二次加熱による煤の付着が

認められた。在地系のA類を主体に布留系のD類が加わる器種構成で、高坏などの小型器種が多い。④、破碎された土器の破片の一部を、磨石や円礫とともに一括廃棄したものと推定され、廃棄に先立って高坏を火にかけている点が注目される。

12群（第29図）①、北端が11群の上に重なるように、南端は溝の底面に接してやや斜めに堆積した廃棄単位で、多量の土器片が含まれている。66と67の壺、68～79の甕、80の支脚、81～83の高坏口縁部片、84の台付鉢、85～87の小型壺、88と89の小型鉢が出土した。②、各土器とも大型の破片が散乱した状態で出土した。なかでも66の壺は半完形に復元でき、破片の一部は15群と19群でも出土した。68は縦に割れた半分が完全に復元した。71の甕口縁部の破片の一部は13群からも出土した。74の甕も半完形に復元でき、破片の一部は18群からも出土した。75の甕は上半部が完形に近く復元され、破片の一部は12群の他に14群・15群・16群と広い範囲に分散して出土した。78の甕口縁部片は破片の一部は14群からも出土した。80の支脚はバラバラに破碎されて廃棄されていた。84の台付鉢は破片が分散して12群を中心に13群と14群からも出土した。中でも脚部は14群の堆積の上部に正位で置かれたように検出された。この鉢は復元すると完形になった。85は口縁と周辺の一部を欠いた小型壺で、おそらく打ち欠かれた残りの胴部をそのまま廃棄したものと考えられる。88は二つに割れて廃棄された復元完形の小型鉢。以上に触れたもの以外は破片で出土した。すべてを、完形のまま廃棄された土器はなく、いずれも破碎されている。③（第34図）、66は布留系の単口縁の壺D、熟達した内面ヘラケズリが施され器壁が薄く仕上がる。67はヘラケズリを取り入れ、撫で肩の形態を模倣した在地系の壺A。68はヘラケズリの技法と伝統的V様式系の特徴を備えた在地系の甕A。69・71と76は在地系の甕Aの口縁部。70は在地系の短頸の甕A。72は口縁端部が小さく肥厚する布留系の影響を受けた甕。73は在地系の甕Aの肩部片。74はヘラケズリと器形に布留系の影響が認められる在地系の甕A。75はヘラケズリと器形に布留系の影響が認められるが、外面に接合痕が残る分割成形の痕跡と右上がりのタタキ技法の伝統的V様式系の技術で作られた甕B。77と78は布留系の甕D。79は布留式甕の胴部片で、肩部に一単位のヨコハケの後一条の波状文を施した甕D。胎土に金雲母と石英を多量に含む搬入品である。80は横一本の焼成前穿孔のある牛角状の外来系の支脚D。81は11群の62と同一個体の可能性のある布留系の高坏Dで、ヨコ方向のヘラミガキが丁寧に施されている。82は在地にない器形の高坏で、外面にヘラケズリが認められる。83は高坏あるいは台付碗の口縁部片、84は在地系の台付鉢Aで、内面の一部にヘラケズリが認められる。85は布留系の小型壺D。86は伝統的V様式系の小型壺Bの底部。87は山陰系の可能性もある外来系の小型壺。88は布留系の小型鉢D。89は精製した胎土を用い赤褐色の布留系の小型鉢D。これは外面に細かいヨコヘラミガキが施された、おそらく搬入品の精製小型丸底壺である。以上の土器のうち、79と89以外はすべて在地の胎土を用いたものである。このうち66の壺と、甕の大部分と80の支脚には、二次加熱による赤変あるいは煤の付着が認められた。甕と小型鉢に搬入品があり、在地系のA類よりむしろ布留系のD類をはじめとする外来系の土器が多く、壺と甕以外に小型器種が多く加わる器種構成である。④、あらかじめ破碎された土器や、その破片を一括廃棄したものと推定される。

13群（第29図）①、12群と14群の間に、溝の底面に接するように堆積した小規模な廃棄単位である。90の壺口縁片、91の小型壺下半、92の完形の碗等が出土した。②、90の壺と91の小型壺は大きく割れて一ヶ所に破片が集まり、そのうち90の破片は14群からも出土した。92の碗は、両者のそばの13群でも最も低い位置に、完形のまま正位に置かれていた。③（第35図）、90は布留系の単口縁の壺D。91は内面にヘラケズリの後ナデ消しをおこなう小型壺の下半部。92は手づくねの完形の碗。以上はすべて在地の胎土を用いた土器で、二次加熱の痕跡は認められない。④、完形品の碗を最初に正位で置いて、その後そばに破碎した土器の一部の破片を廃棄したものと推定される。⑤、この13群の分布域から南北の12群南端と14群北端の真下に、後述する土壌Aが存在し、そこでは二回ほどの掘直しが認められる。12群から14群の土器廃棄は溝の底面近くに及んでいるので、以上の三群を廃棄するに先立って、掘り込みがおこなわれた可能性が高い。

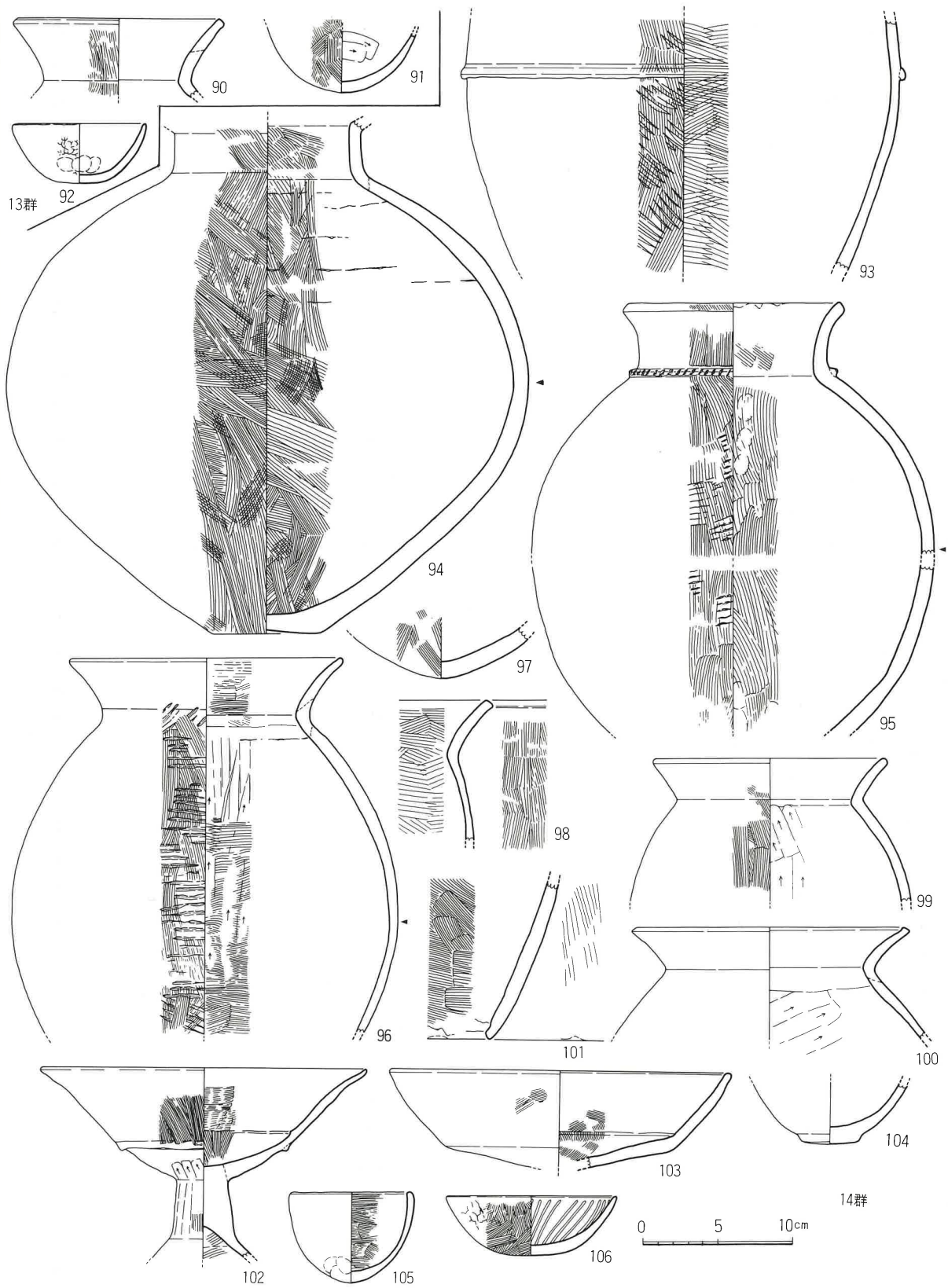
14群（第29図）①、溝の底面に接するように堆積した廃棄単位で、円礫と多量の土器片が廃棄されていた。93～95の壺、96～100の甕、101の甕底部片、102と103の高坏、104の小型壺底部片、105の小型鉢、106の碗が出土



第34图 C区-4号沟(条沟)出土遗物④-12群-(1/4)

した。②、各土器とも大型の破片が散乱した状態で出土し、中には置かれたと思われる例もある。93の壺胴部の大型破片は、その一部が17群からも出土した。94の壺は大型破片が分散し、この14群を中心に12群・15群・16群・17群の広い範囲から破片が出土した。分散した破片を接合すると口縁部以外は完全に復元できたので、おそらく口縁部を故意に打ち欠いた上で、土器全体を破砕し、広範囲に廃棄されたものと考えられる。95の壺も大きく割れて広範囲に廃棄され、14群を中心に12群・18群・23群・24群からその破片が出土した。復元すると底部がなく胴部以上もかなり破片が不足する。96の甕は大きく割れて14群内に破片が散布し、その一部は2群からも出土した。復元すると底部がなく胴部以上もかなり破片が不足する。100の甕の破片は14群からも出土した。102の脚部と口縁部の半分を失った高坏は、14群南端の最下部に逆さまに置かれて検出され、そばから円礫が出土した。失われた口縁部の破片は11群と12群から出土し、復元すると脚部以外はほぼ完形となった。脚部を打ち欠いた状態で使用され、廃棄する時にさらに口縁部を打ち欠き、その上で14群の廃棄に先立って逆さに置かれたものと推定される。105の小型鉢は14群の北端で潰れた状態で破片がまとまって出土し、復元すると口縁の一部が欠けていた。106の碗は割れた破片が14群内に散布し、復元すると完形になった。なお12群の84の台付鉢の脚部の完形品が、この堆積の上部において正位で検出されている。③（第35図）、93は在地系の壺Aで胴部中央に貧弱な突帯をはりつけ、その後にはハケ調整をおこなう。94は胴部中央の割れ口が明瞭な分割成形による伝統的V様式系の壺Bである。底部は平底の輪台技法で、ヘラケズリは用いない。しかし頸部は直立しているので、口縁部形態は布留系の二重口縁になるものと予想される。95は在地系の単口縁の壺Aで、頸部突帯は白色の異なる胎土を使用し、その刻目はハケ工具を利用している。96は在地系の甕Aで、内面はヘラケズリの後ヨコハケを施す。97は甕の尖り底の底部。98は在地系の甕A。99はヘラケズリの技法を取り入れた在地系の甕A。100は布留系の甕Dで、胎土に金雲母と石英を多量に含む搬入品。101は甕の底部片と推定される破片で、胎土に5mm大の大型石英粒を含む搬入品。102は軸部が中実の伝統的V様式系の高坏Bで、坏部外面に三角突帯を貼りつけて屈折を表現する。また軸部を中心に高坏全体が二次加熱を受け、煤が付着している。103は高坏の坏部と思われる口縁部破片で、半製品を焼成したような印象を与える「不完全品」と思われる。104は伝統的V様式系の小型壺Bの底部片で、胎土が異なり搬入品の可能性がある。105は在地系の小型鉢Aで、底部は被熱している。106は在地系の碗Aで、内面に放射状のヘラミガキを施す。以上の土器の内、100・101・104を除くほかは在地の胎土を用いた土器である。このうち96・97・99の甕と102の高坏および105の小型鉢には、二次加熱による赤変と煤の付着が認められた。在地系のA類の壺と甕を主体に、伝統的V様式系のB類と布留系のD類と、高坏と碗などの小型器種が加わる器種構成である。④、被熱した高坏と小型鉢から推して、廃棄以前に土器の一部を打ち欠いた上で、火にかける祭祀行為がおこなわれ、その土器を含めてその祭祀に使用された土器が破砕されて廃棄される。その際、まず初めに高坏が逆さに置かれ、その直後に土器片が一括廃棄されたものと推定される。⑤、なお14群中の土器片の中にはB-4住出土の1の壺の破片が含まれ、その破片は15群と22群にも見いだされた。

15群（第29図）①、北の14群と同じ高さの溝底面に接するように堆積した廃棄単位で、南端は16群の下に潜り込み、土器片が集中する小規模な単位である。107の壺胴部、108の甕口縁片、109の甕上半、110の碗片が出土した。②、各土器とも大型の破片が散乱した状態で出土し、中でも107の壺胴部は分割成形時の接合面で三つに割れ、ドーナツ状の真中の部分がそのまま正位で検出され、上下は割れて周辺に散在していた。復元すると頸部以上が欠け、その破片の一部は18群でも出土した。109の甕は大型破片が散在し、復元すると上半部が完形に近くなった。その破片の一部は12群からも出土した。③（第36図）、107は接合痕が明瞭な分割成形による伝統的V様式系の壺Bで、底部もその名残りを止め、内面ヘラケズリは用いない。108は甕の口縁片。109は布留系の甕D。110は手づくねの碗。以上の4点の土器はすべて在地の胎土を用いた土器で、いずれも二次加熱による煤の付着が認められた。ことに110の碗まで被熱しているのが注目される。外来系のB類とD類の甕が主体の器種構成である。④、被熱した土器を破砕し、その破片の一部を一括廃棄したものと推定される。その際107の甕の胴部の一部が置かれたと考えられる。⑤、なお15群中の土器片の中にはB-4住出土の1の壺の破片が含まれ、その破片は14群と22群にも見いだされた。



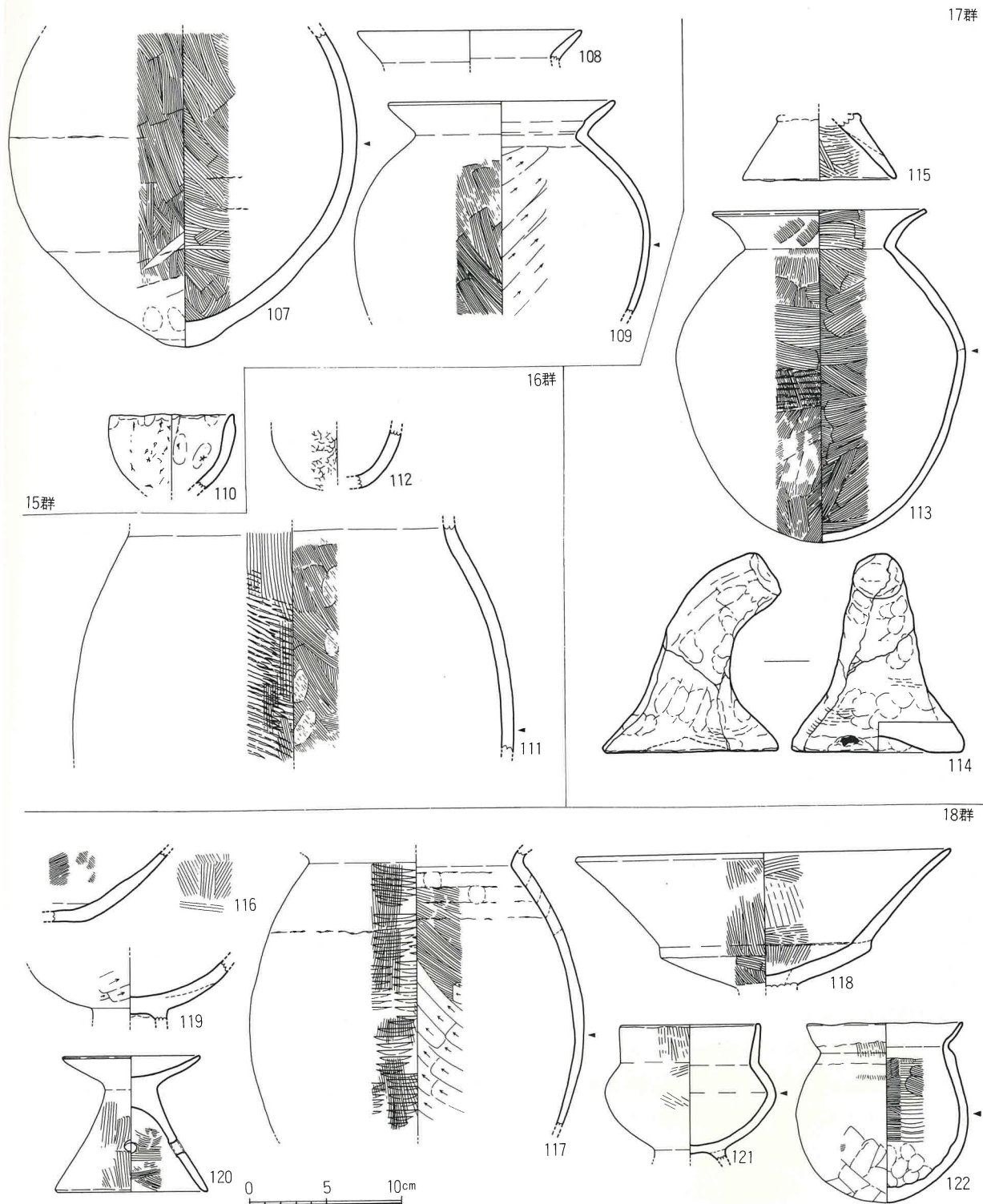
第35图 C区-4号溝(条溝)出土遺物⑤ -13·14群- (1/4)

16群（第29図）①、北端が15群の上に重なり、全体に溝底面に接するように堆積した廃棄単位で、南の17群との間に1mほどの空白がある。土器の大型破片が集中する単位で、111の甕胴部片と112の小型壺片が出土した。②、各土器とも大型の破片が散乱した状態で出土し、中でも111の甕胴部片は中央部で破片が折り重なり、その一部は17群と18群でも出土した。しかし破片は接合しても胴部の一部に限られ、大部分は別の場所に廃棄されていると考えられる。③（第36図）、111は在地系の甕Aで、被熱している。112は手づくねの小型壺Aの破片で、内面を丁寧にナデる。以上の2点はともに在地の胎土を用いた土器で、在地系のA類が主体である。④、破碎された破片の一部を一括廃棄したものと推定される。

17群（第29図）①、16群との間に空白をおいた廃棄単位で、北の15～16群に比べてやや高い位置に堆積する。土器の大型破片が何箇所かに分散した単位で、113の甕、114の支脚、115の異形の脚部片が出土した。②、各土器とも大型の破片が散乱した状態で出土し、中でも113の甕は完形品のまま潰れた状態で出土し、114の支脚は五つの破片に破碎されて廃棄され、破片の一点は隣の18群からも出土した。③（第36図）、113はヘラケズリを用いず製作技術的には在地系の甕Aだが、器形は布留甕を模倣している。114は牛角状に屈折した手づくね中実の外來系の支脚Dである。穿孔が無く底面が上げ底になるのが特徴で、被熱して実際に使用されていたことがわかる。115の正体不明の異形の脚部片で、在地系ではない。以上の3点は在地の胎土を用いた土器である。④、甕一個体をそのまま廃棄した上で、他の土器を破碎して一括廃棄したものと推定される。

18群（第29図）①、北側の17群と同じ高さで始まり、南にゆるく下がって溝底面に接するようやや斜めに堆積した廃棄単位である。多量の土器片が集中するとともに、円礫と炭層がいっしょに廃棄されている。116の壺底部片、117の甕胴部片、118の高坏坏部、119の台付碗頸部片、120の小型器台、121の台付小型壺、122の小型甕が出土した。②、各土器とも大型の破片が散乱した状態で出土し、117の甕の破片は炭層中でまとまって出土し、18群を中心に15群と19群にも破片が散布していた。118の高坏の破片の一部は17群からも出土した。また口縁部と脚端部の一部が打ち欠かれた120の小型器台は、18群の北端に単独で横倒しの状態で検出された。おそらく端部を故意に打ち欠いた上で、破碎する事無く廃棄したものと推定される。121の台付小型壺は割れて一箇所に破片がまとまって出土した。復元すると完形に近くなったが、口縁の一部と脚部の全部がなかった。この土器も故意に打ち欠いた上で使用され、後に破碎して廃棄されたと考えられる。122の小型甕は炭層中から117の甕破片の上に完形品のまま潰れた状態で出土した。③（第36図）、116は在地系の壺Aの底部片で、平底である。117は在地系の甕Aで、内面調整の最後にヘラケズリを施す。118は外來系の高坏坏部で、二次加熱による赤変が認められる。119は在地系の台付碗Aで、坏部外面にヘラケズリがなされ、二次加熱による赤変が認められる。120は軸部が中実気味の伝統的V様式系の技術を用いて、布留系の小型器台を製作したと思われる小型器台B。121は在地系の台付小型壺Aで、口縁部の途中から胴部全体の外面に丹塗りがおこなわれている。122は粗雑な作りの在地系小型甕Aで、外面下半にヘラケズリを用い、内底面には指圧痕が顕著である。以上の土器はすべて在地の胎土を用いた土器で、117の甕と122の小型甕以外に、117の高坏と119の丹塗りの台付壺に二次加熱による赤変あるいは煤の付着が認められた。高坏や台付壺まで被熱しているのが注目される。在地系のA類を主体に外來系のB類が加わる器種構成で、小型器種が多い点に特徴がある。④、高坏と台付壺の被熱から推して、廃棄以前に土器の一部を打ち欠いた上で、火にかける祭祀行為がおこなわれ、焼けた土器と焼却廃棄物およびその祭祀に使用された土器が、あるものはそのまま、あるものは破碎されて廃棄されたと推定される。

19群（第29図）①、18群と連続するように堆積した廃棄単位で、溝の底面に近い高さに水平に広がる。土器片が大量に集中して重なる単位で、123の壺胴部、124～126の壺口縁、127～134の甕、135の台付碗、136の小型甕が出土した。②、各土器とも大型の破片が散乱し積み重なるような状態で出土し、中でも123の壺は口縁と底部を欠くが、胴部の三分の二の大型破片に接合した。その破片の一部は18群の炭層中と20群からも出土した。124の壺口縁部の破片は18群からも出土した。126の壺上半は、大半の破片が18群の上に位置する上層で出土したが、破片の一部はこの19群と11群から出土している。127の甕は大型破片に割れて散在し、破片の一部は18群からも出土した。接合すると胴部はほとんど完形になったが、口縁部はなかった。口縁を打ち欠いて使用されたのちに



第36図 C区-4号溝(条溝)出土遺物⑥ -15~18群- (1/4)

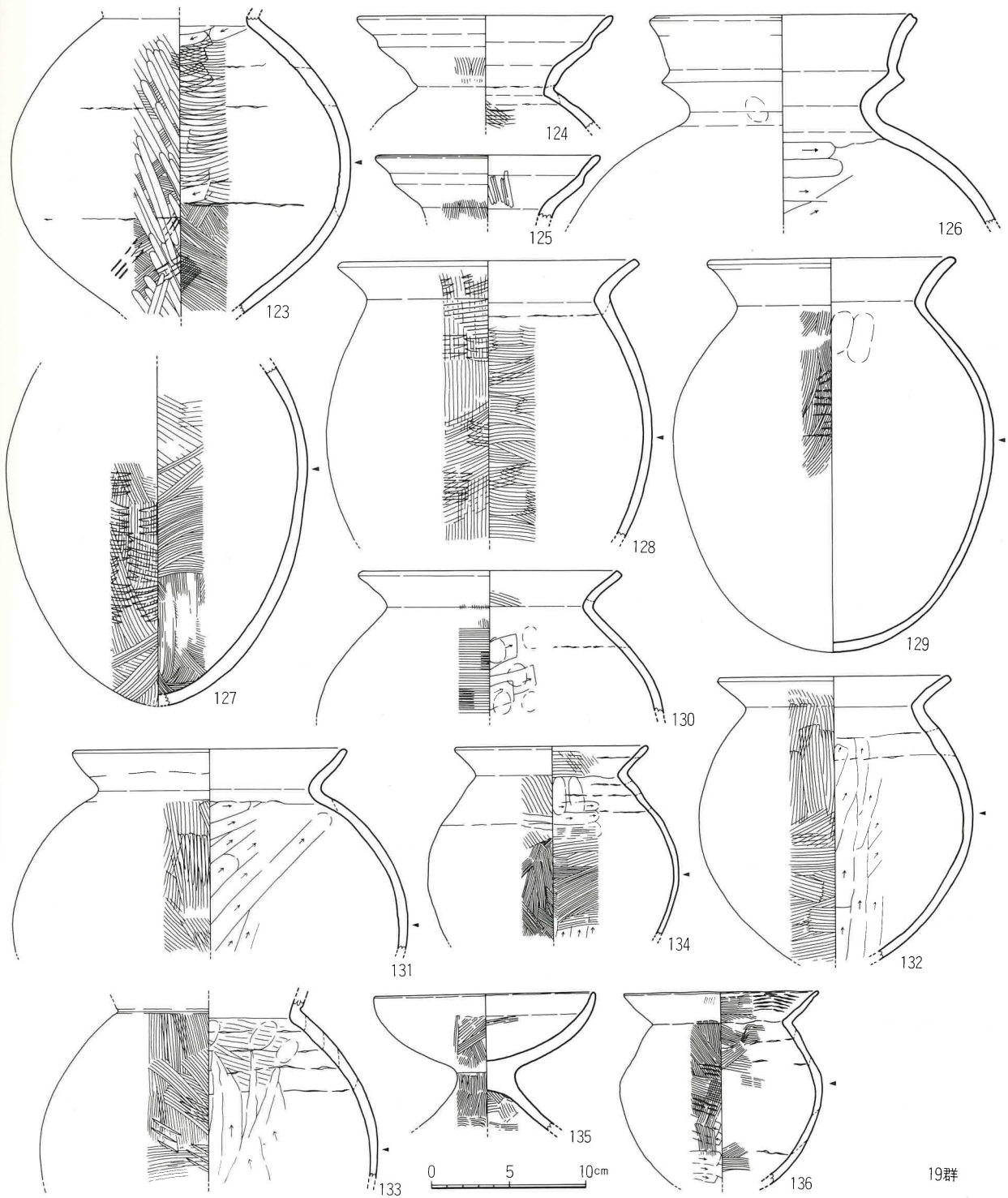
破碎して廃棄されている。128の甕は19群の北端の最下部で破片が折り重なって出土し、復元すると底部以外は完形になり、破片のごく一部は12群からも出土している。129の甕は19群の南端に完形品が逆さに置かれてそのまま潰れた状態で出土した。130の甕の口縁部の破片のひとつは13群の東側から出土している。131の甕上半は19群北端の上部から破片がまとまって出土し、復元すると上半のみ完形に近くなった。132の甕は131と同じ位置に

破片が混じって出土し、これも復元すると上半部が完形に近くなったが、底部を失っていた。133の甕は破片が19群全体に散在していた。134の甕は中央で潰れた状態で出土し、復元すると底部以外がほぼ完形になった。135の台付碗は、坏部のみが土器片集積の最下部に逆さに置かれ、脚部の破片と口縁の一部は19群を中心に20群からも出土した。復元すると脚の端部がきれいに取り除かれ、おそらく脚端を打ち欠いた上で使用され、その後破砕して、坏部は19群の土器廃棄に先立って逆さに置かれたと推定される。136の小型甕は128の甕の破片と混じって出土し、復元すると底部を除きほぼ完形になった。③（第37図）、123は右上がりのタタキ痕に分割成形の痕跡が明瞭な伝統的V様式系の壺Bで、外面にはヘラミガキが顕著。124と125は伝統的V様式系の二重口縁の壺Bで、同一個体かもしれない。126は山陰系の壺E。127と128は在地系の甕A。129は布留甕の形態を模倣した在地系の甕Aで、内面は丁寧なナデ仕上げ。130は布留系の甕Dで、肩部にヨコハケを施すが、内面には接合痕が残りヘラケズリも浅い。おそらく布留甕製作技術を半ば身につけた在地工人によるものと考えられる。131は布留系の甕Dで、こちらはかなり習熟している。132と133は在地系の甕Aだが、内面に浅いヘラケズリがある。これは技術の一部にヘラケズリを取り入れ初めの段階と考えられる。134は外面に分割成形の痕跡が残る伝統的V様式系の技術を下地に、ヘラケズリを取り入れて布留甕の器形を模倣しながらも、内面ヘラケズリの痕をハケで消す在地系の特徴をも残す甕B。135の器形は在地系の台付碗だが、頸部を中実で厚く作る点に伝統的V様式系の特徴が残っている。136は分割成形の痕跡を残し、内面をナデ消す伝統的V様式系の技術を下地に、布留甕の形態を模倣した小型甕B。以上の土器はすべて在地の胎土を用いた土器であり、甕のほとんどには二次加熱による赤変あるいは煤の付着が認められたが、壺と台付碗と小型甕は被熱していない。壺は伝統的V様式系のB類と山陰系のE類からなり、甕は在地系のA類と在地工人の作った布留系のD類からなる。そしておそらく在地工人の中には伝統的V様式系の技術を身につけた人が含まれていたと考えられる。その他に小型器種がほとんど無い点が特徴である。④、多くの土器が口縁部のみであったり、底部を欠いている復元状態からみて、まず壺と甕を中心とする祭祀行為がおこなわれ、その場で各土器の打ち欠きがなされ、残された大型破片をそのまま廃棄したり、さらに破砕したりして廃棄している。その際まず135の台付碗の坏部が逆さに置かれたものと推定される。

20群（第29図）①、19群と22群の間にそれぞれ空白をおいた廃棄単位で、ほぼ水平に堆積する。土器の大型破片が分散し、137の壺頸部片、138の壺底部、139の甕、140の高坏口縁片、141の小型甕などが出土した。②、大型の破片が散乱した状態で出土し、中でも138の壺は、分散した破片を接合すると底部がボール状に復元できた。139の甕は20群の北端で一ヶ所に破片がまとまり、底部を欠くが、その上半は三分の二がひとつに復元できた。141の小型甕は他の土器片からやや離れて単独で出土し、口縁の半分を欠いた完形品のまま潰れることなく正位で検出された。あるいは20群とは別に単独で埋置された可能性もある。③（第38図）、137は在地系の壺A。138は右上がりのタタキ痕に、内面に崩れた簾状ハケが施された伝統的V様式系の壺B。139は在地系の甕A。140の坏部内側が内湾する在地系の高坏A。141は在地系の小型甕Aで、形態とヘラケズリの採用に布留甕の影響が認められる。以上の土器はすべて在地の胎土を用いたものである。在地系のA類からなり、一部に伝統的V様式系のB類を含む。139の甕と141の小型甕は二次加熱が激しく、表面が剝離するまで焼かれている。④、底をぬかれたり大きく割られた破片を、さらに破砕して廃棄し、141の小型甕のみは口縁を打ち欠いた上で、埋置したものと推定される。

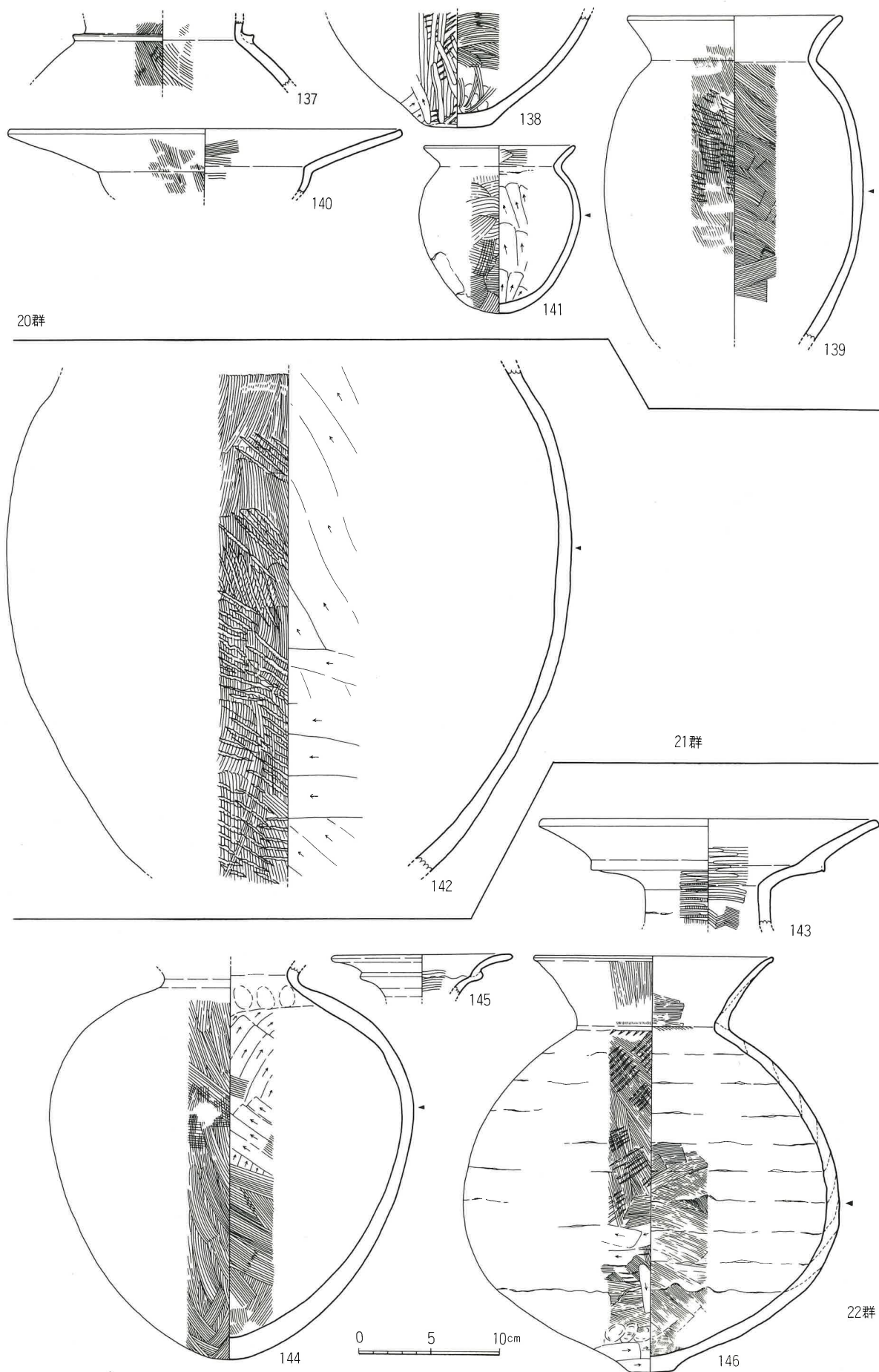
21群（第30図）①、22群の中央付近で、その下に潜り込んで斜めに堆積した1個体の大型甕の破片の集積である。明らかに22群の廃棄がおこなわれる以前に、溝の東側から流れ込んでいる。142の大型甕の大きく割れた破片が重なりながら溝の斜面に沿って斜めに堆積していた。②、甕は復元しても底部と口縁部を欠き、胴部の破片も半分は不足していた。破片の一部は、5群と19群と22群からも出土した。後の廃棄である19群と20群から破片が出土したことは、廃棄後も長らく表面に露出していたことを示唆する。③（第38図）、142は在地系の大型甕Aだが、内面はヘラケズリで仕上げている。胎土は在地産で、二次加熱を示す煤の付着が認められる。④、破砕された大甕の破片の一部を溝の東側から廃棄したものと推定される。この単位は最初の土器廃棄のひとつである。

22群（第30図）①、21群の上に南北に長く堆積した廃棄単位で、土器の位置は上下しながらもほぼ水平に堆積



第37図 C区-4号溝(条溝)出土遺物① -19群- (1/4)

する。大量の大型破片が南北に細長く堆積しているのは、廃棄当時の溝の底に集まったものと考えられる。143～147の壺、148～154の甕、155の高坏、156の小型器台の脚部、157と158の小型甕、159の小型鉢片などが出土した。②、大型の破片が複雑に重なりあう状態で出土し、その中で143の壺口縁部は頸部以上が折り取られて、さらにそれが破碎されて廃棄されたと推定される。接合する破片の一部は20群からも出土している。144の壺は22群最南端に、底部の大型破片を正位に据え、その上と周囲に胴部の大型破片が積み重なるように出土し、潰れた



第38图 C区-4号沟(条沟)出土遗物⑧ -20~22群- (1/4)

ような破片の割れ方ではなかった。接合すると頸部以下は完形になったので、口縁部は折り取られたものと考えられる。また胴部中央に1箇所、焼成後に内側から突いた穿孔あることが判明し、また壺であるにもかかわらず二次加熱の痕跡が明瞭であった。おそらく祭祀行為に伴って火にかけられ、その後口縁部を除去されて穿孔が施され、最後に打ち割られて廃棄されたものと考えられる。146の壺は144の壺のそばを中心に22群の南半に破片が散乱していた。接合するとほぼ完形に復元できた。148の甕は22群の北端に近い位置で横倒しになってそのまま潰れた状態で出土した。復元すると頸部以下は完形になり、おそらく口縁部は故意に除去されたものと考えられる。150の甕も破片となって散乱していたが、復元すると底部を除いて半完形になった。151の甕も一ヶ所に破片がまとまり、復元すると上半は完形に近くなったが底部は失われていた。152の甕は大型破片に割れて22群中央の散らばり、復元すると完形となった。155の高坏は148の甕の下敷きになって出土したもので、口縁端部が打ち欠かれ脚端部も失っていた。156の脚部完形の小型器台は22群中央の土器片堆積の最下層から、正位で置かれたように検出された。脚端部の一部を欠いている。おそらく折り取った脚部を土器廃棄に先立って置いたものと考えられる。157の小型甕は南部に大型破片が散布し、復元すると半完形となった。③(第38・39図)、143は布留系の二重口縁の壺Dで、内外面にヨコヘラミガキが施される。144は器壁が全然薄くならない形だけのヘラケズリをハケで消すという在地系の技術を用いて、山陰系の壺Eを作ったもの。145は伝統的V様式系の可能性のある二重口縁の壺。146は外面右上がりのタタキ痕に、底部・胴部・口縁部を分割成形した痕跡が明確な伝統的V様式系の壺Bで、外面下半に最終調整のヘラケズリが認められる。胎土は角閃石を含まず、1～5mm大の石英粒を多く含む搬入品である。147はヨコナデで丁寧に仕上げた山陰系の壺E。148は外面にタタキ痕が残り、底部にわずかにレンズ底の面影がある長胴で在地系の甕A。149は在地系の甕Aの口縁部。150は在地系の甕Aで、内面ヘラケズリが一部取り入れられている。151も在地系の甕Aだが、外面のタタキ痕はハケで消され、内面もヘラケズリで仕上げている。152は口縁が外湾して先端が細くなり、器形に伝統的V様式系の特徴を残す甕Bで、内面にヘラケズリを取り入れ、外面のタタキ痕がハケ消された最終段階のものである。153も伝統的V様式系の可能性のある甕。154は布留系の甕D。155は在地系の高坏Aで、坏部内面にはタテ方向のヘラミガキを施し、脚部内面はヘラケズリをおこなう。156は軸部が厚い伝統的V様式系の影響の残る小型器台Bの脚部で、外面にタテ方向のヘラミガキを施す。157と158はよく似た在地系の小型甕Aで、器壁が薄くならないヘラケズリをハケで消している。159はナデで丁寧に仕上げた布留系の小型鉢D。以上の土器は146の壺を除き、すべて在地の胎土を用いたものである。また144の壺と甕および小型甕の大部分には、二次加熱による赤変あるいは煤の付着が認められた。また在地系のA類を主体に伝統的V様式系のB類と、布留系のD類・山陰系のE類が加わり、全体に壺甕が多く、小型器種は少ない。④、まず廃棄に先立ち155の高坏坏部と、156の小型器台脚部が置かれ、その上に口縁部を除去した144の壺や148の甕が置かれ、そこに破碎した大量の土器片をまとめて廃棄したものと推定される。⑤、なお22群中の土器片の中にはB-4住出土の1の壺の破片が含まれ、その破片は14群と15群にも見いだされた。しかしこの土器以外は大半が22群のなかでのみ接合し、群をこえて廃棄されたものは少ない。

23群(第30図)①、22群と同じ高さにならずな空白をおいて堆積した廃棄単位で、24群の下に潜り込んでいる。160の甕と161の小型甕の上半などが出土した。②、160の甕は肩部以上が完形のまま逆さまに置かれ、胴部破片は周囲に散乱していた。接合すると胴部以上はほぼ完形になったが、底部は無かった。161の小型甕は160の甕の口縁のそばに破片が重なり、復元すると上半部はほぼ完形になった。③(第39図)、160は口縁形態に伝統的V様式系の影響が残る甕Bで、肩部の形態は布留系に似る。161も伝統的V様式系の影響の残る器形の小型甕B。二点とも胎土は在地産で、ともに二次加熱を示す煤の付着が認められる。④、底部を抜いた甕160を逆さまに置き、その周囲に破碎された土器片を廃棄したものと推定される。

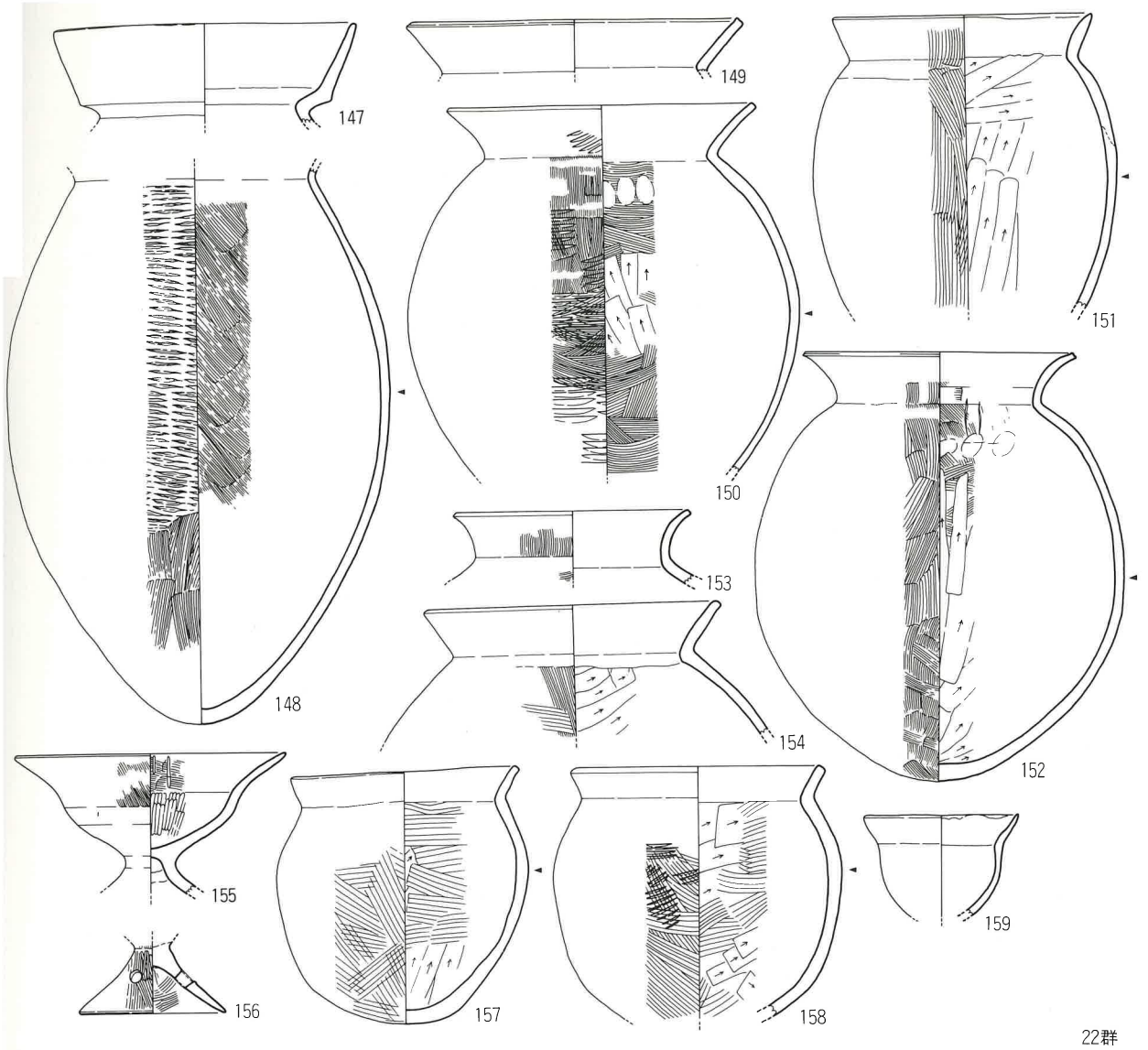
24群(第30図)①、北端が23群の上に重なり、南端は反対に25群の下に潜り込む廃棄単位で、南北に長く、全体に緩く斜めに堆積している。162の壺胴部、163の高坏坏部、164の台付碗などが出土した。②、162の壺は大きく割れて大型破片が24群全体に散布し、接合すると胴部の半分がひとつになった。軸部の途中で折られた163の高坏の坏部は、正位で置かれた状態で出土した。164の台付碗はばらばらに割れた小片が中央部で一ヶ所に集まっ

て出土した。復元しても脚部の破片は見当らなかった。③（第39図）、162は分割成形の痕跡ではないかと思われる接合痕が残る壺で、調整技法はヘラケズリを取り入れた在地系のもの。163は軸部中実の伝統的V様式系の高坏Bで、軸部の途中できれいに折れ、二次加熱による赤変が激しい。164は器形は在地系だが、軸部中実の伝統的V様式系の台付碗Bで、坏部外面はヨコヘラミガキを、内面にはタテ方向のヘラミガキを施す。三点とも胎土は在地産である。④、まず廃棄に先立つ祭祀に脚部を折り取られた高坏と台付碗が使用され、その際高坏は被熱する。次にその高坏坏部が正位に置かれ、その周囲に他の土器が破砕されて廃棄されたものと推定される。

25群（第30図）①、北端が24群の上に重なって南北に長く堆積した廃棄単位である。大量の大型破片が南北に細長く堆積している。廃棄当時の溝の底に集まったものと考えられる。165～169の壺、170～180の甕、181の高坏、182と183の小型甕と、261の半分に割れた磨石などが出土した。②、大型の破片が上下に複雑に重なりあう状態で出土した。中でも168の壺は大型破片が中央部に集中し、口縁端部が欠き取られた上に、さらにそれが破砕されて廃棄されたと推定される。169の壺も破片が中央部に散乱し、その一部は25群西側の斜面に残り、この甕の破片は西側から廃棄されたことを示唆する。復元すると底部以外は完形になった。173と176の甕は破片が中央部に散乱し、復元すると完形になった。174の甕も破片が北半部に散乱し、復元すると完形になった。175の甕は中央部に破片が散乱し、復元すると胴部下半が完形となった。177の甕は中央部に完形品のまま潰れた状態で出土した。178の甕は土器片堆積の最下部で潰れた状態で出土したが、接合すると底部を欠いていた。179の甕は完形品のまま潰れた状態で出土した。180の甕は破片が南部に散乱し、復元すると頸部以上が完形になった。182の小型甕は土器片堆積の最上部に乗るように完形品がわずかに潰れた状態で横倒しに検出された。183の小型甕は25群の最北端でボール状になった胴部下半が正位で置かれ、その周囲に破片が重なる状態で出土した。完形品が潰れたというよりむしろ、そのように割られた上で置かれたと考えられる。③（第40・41図）、165は在地系の複合口縁の壺Aの口縁部片で、屈折部にハケ工具による斜めの刻目を施す。166も在地系の複合口縁の壺Aの口縁部小片である。167は外来系の二重口縁壺の口縁部片。168は二重口縁と推定される外来系の形態の壺だが、胴部には分割成形の痕跡が残り、内面底部にはヘラケズリが施されるという製作技法が混淆したものである。169は在地系の単口縁の壺Aで、形態と内面下半のヘラケズリに布留系の影響が認められる。170は布留甕の形態を模倣した在地系の甕Aの口縁部。171と172は在地系の甕Aの口縁片。173と174は在地系の甕Aだが、内面にヘラケズリが認められる。175は在地系の甕Aだが、おそらくヘラケズリを丁寧なヘラ状工具でナデ消したもの。176はおそらく伝統的V様式系の系譜をひく甕B。177と178は布留式の甕Dで、胎土に金雲母と石英粒を多く含む搬入品である。どちらもの肩部にはヨコハケが施された上に波状文がめぐる。179は右上がりのタタキ痕が施された伝統的V様式系の技法を残した布留系の甕D。180も布留系の形態を模倣した在地系の甕A。181は在地系の高坏Aだが、内外面にヘラケズリが施される。182はおそらく伝統的V様式系の系譜をひく小型甕B。183は在地系の小型甕Aで、内面を大きな単位のヘラミガキで仕上げる。261は安山岩製の磨石である。以上の土器は177と178の搬入品の布留甕を除き、ほかはすべて在地産の胎土を用い、甕と小型甕の大部分は二次加熱を示す赤変や煤の付着が認められる。器種構成は壺と甕が主体で、小型器種が極めて少ない。また在地系のA類を主体に搬入品のD類が伴っている。④、口縁部や底部を故意に取りのぞかれた一部の壺と甕に加えて、完形の甕が、そのままあるいは破砕されて廃棄されている。⑤、これほど多量の土器片が出土し、しかも破砕されていながら、他の群に破片が散布するものは極めて少ない。

26群（第30図）①、南側の27群の上に重なった少量の廃棄単位で、北側の25群とは高さが連続する。184の壺などが出土した。②、184の壺は完形品が横倒しで潰れた状態で検出された。しかし接合しても底部の破片が見当らない。③（第41図）、184は在地系の技法で作られた壺Aで、明らかに布留系の二重口縁壺の影響を受けている。胎土には凝灰岩に由来する3～4mm犬の白色粒子を多量に含み、日田盆地内の別の場所あるいは周辺地域からの搬入品と推定される。二次加熱の痕跡はない。④、おそらく廃棄に先立つ祭祀の際に底部が抜かれ、その後そのまま廃棄されたものと推定される。

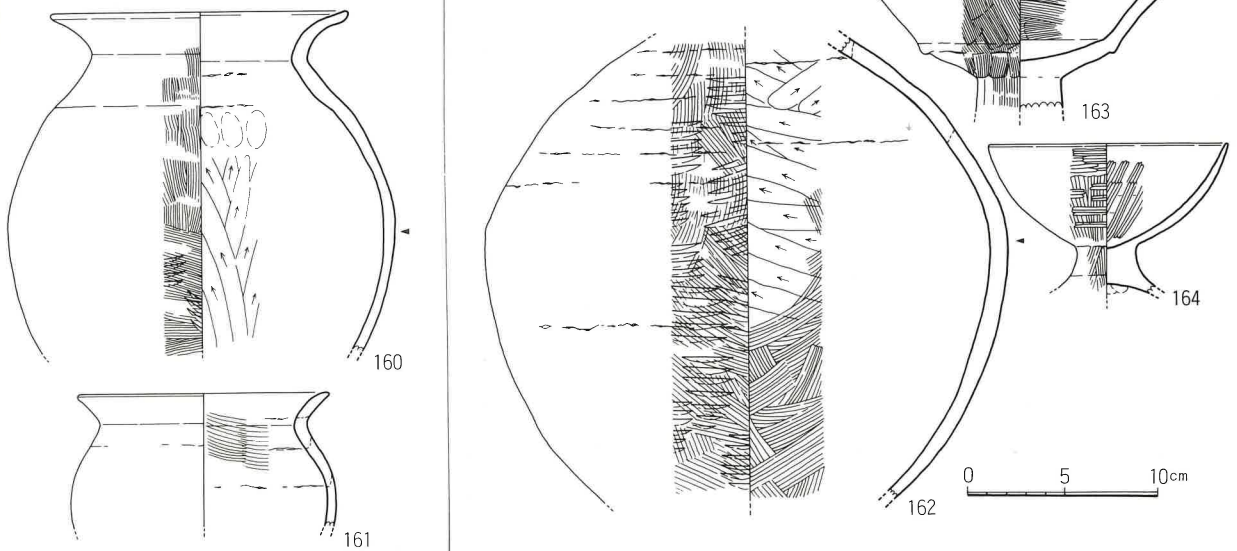
27群（第30図）①、北側の26群の下に潜り込んだ廃棄単位である。185と186の壺、187の壺、188～191の甕な



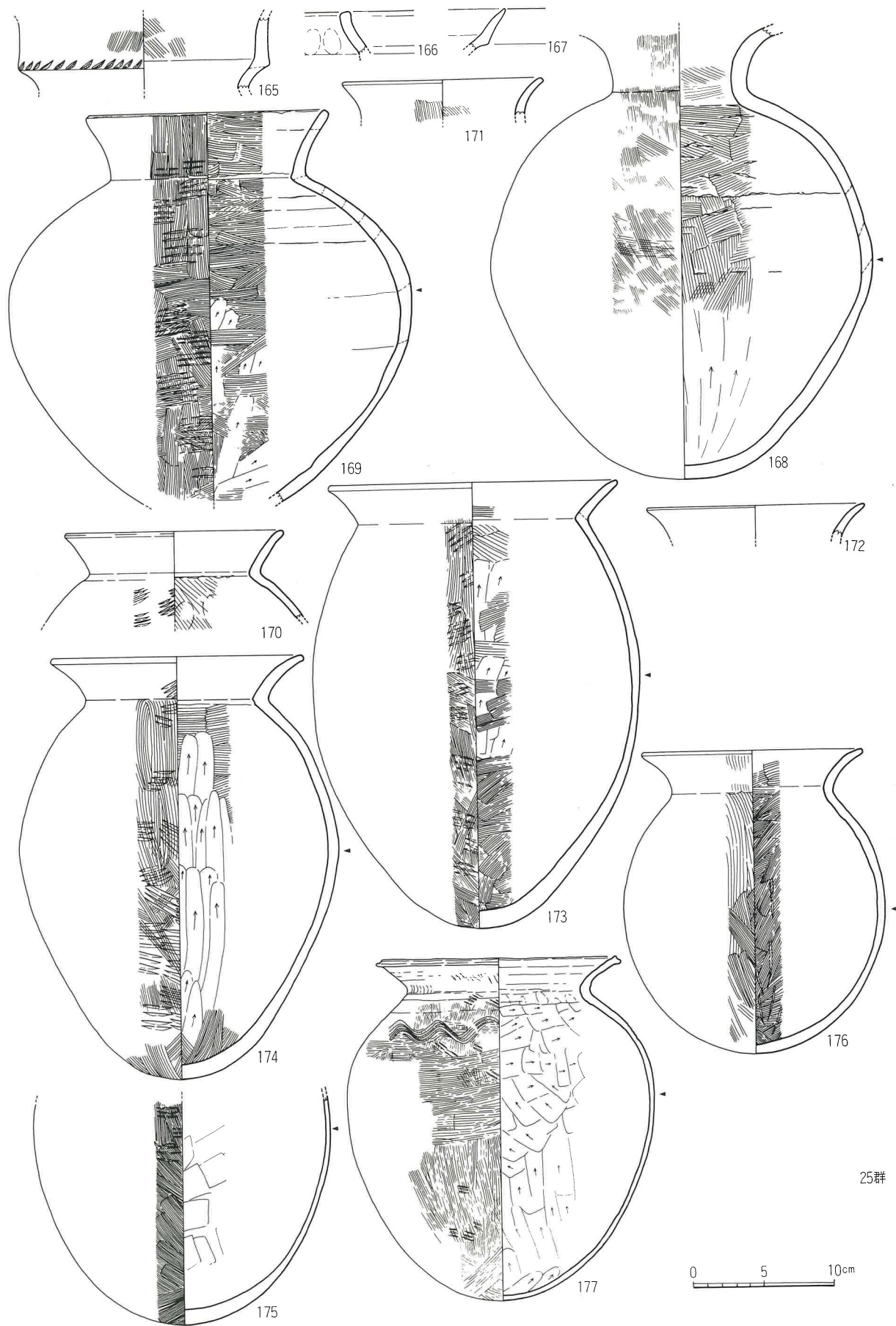
22群

23群

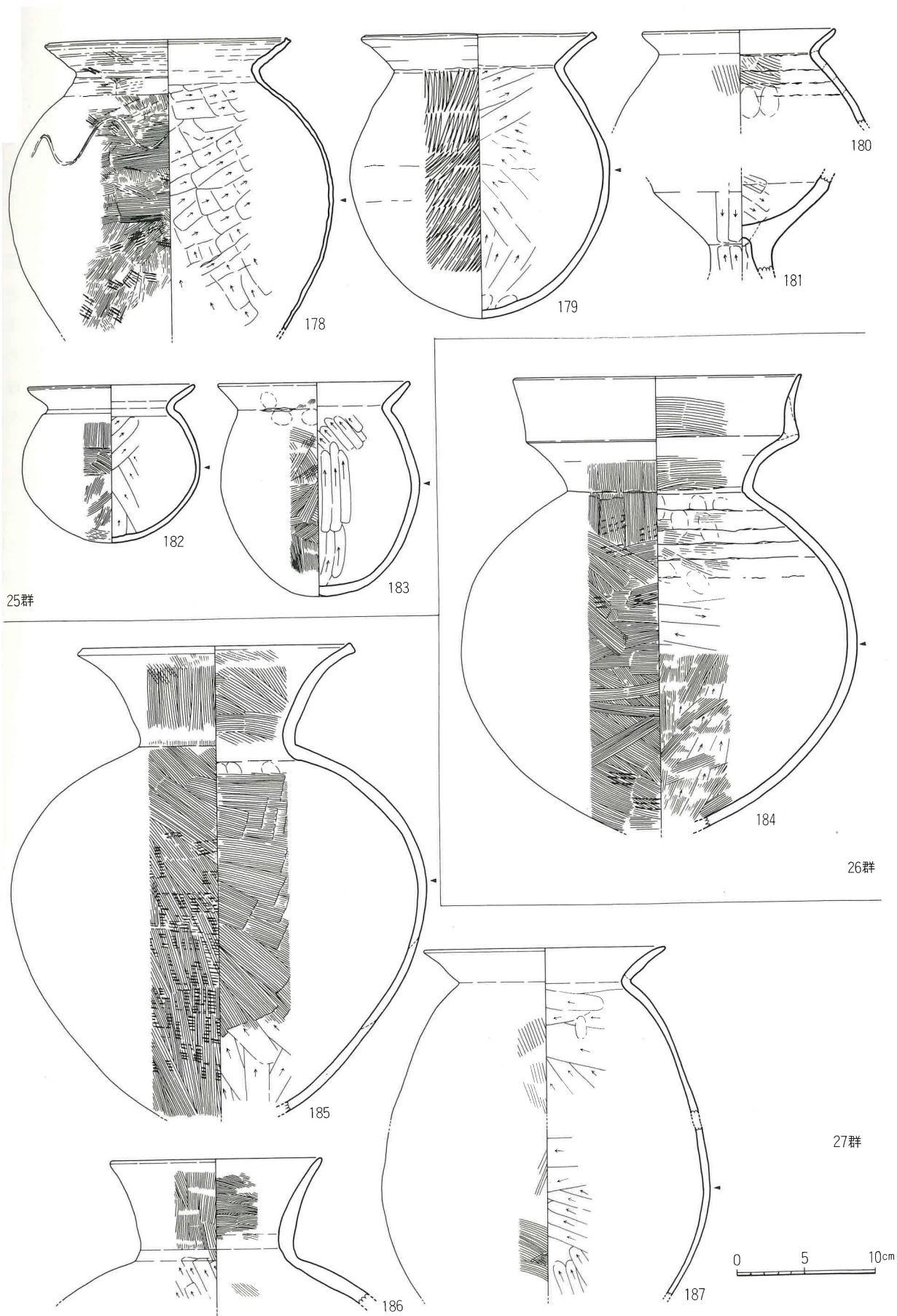
24群



第39图 C区-4号溝(条溝)出土遺物⑨ -22群~24群- (1/4)



第40图 C区-4号溝(条溝)出土遺物⑩ -25群- (1/4)



第41图 C区-4号溝(条溝)出土遺物① -25~27群-(1/4)

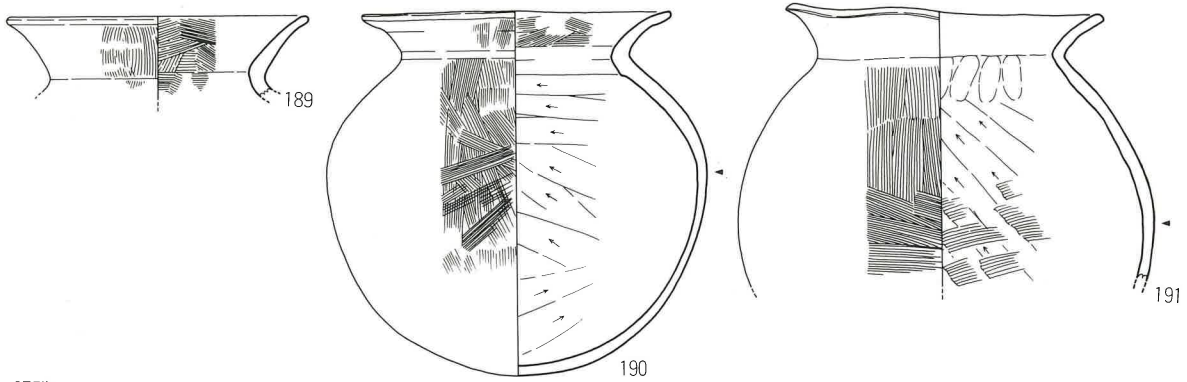
どが出土した。②、185の壺は逆さまに置かれた完形品がその場で潰れた状態で検出され、割れた破片の一部は26群からも出土した。接合すると底部の破片が不足した。186の壺は27群の南部に割れた破片がまとまって出土し、頸部以上が完形に近くなった。187の甕は一ヶ所に破片がまとまって出土した。実測図はないが188は北端で割れた破片がまとまって出土した。190の甕は口縁の一部が打ちかかれた完形のもので、そのまま逆さに近い状態で検出された。胴部下半を取り除いた191の甕の上半部完形品が、そのまま190の甕の隣に、正位で置かれてその半分が潰れていた。③（第41・42図）、185は在地系の技術で製作された布留系の単口縁壺で、底部内面にはヘラケズリが認められる。186は布留系の単口縁の壺Dで、肩部外面にヘラケズリで細部調整をおこなう。187は在地系の甕Aだが、内面はヘラケズリで仕上げる。188の甕は整理中に行方不明になったもので、おそらく他の甕に接合した可能性が強く、現在探索中。189は在地系の甕Aの口縁部片。190はおそらく伝統的V様式系の系譜をひく甕Bで、内面はヘラケズリで仕上げる。191は在地系の甕Aで、内面は器壁が薄くならないヘラケズリの後にハケを施す。以上の土器はすべて在地産の胎土を用い、190と191の甕は二次加熱を示す赤変や煤の付着が認められる。器種構成は壺と甕のみで、壺は布留系、甕は在地系が主体である。④、底部を抜いた185の壺と、口縁を打ち欠いた190の甕を逆さに置き、胴部下半を除去した191の甕を正位に置いて、その周囲にほかの土器破片を廃棄したものと推定される。

28群（第30図）①、北側の27群に連続するように堆積した小規模の廃棄単位で、二個体の土器の破片の集合である。192の壺と193の鼓形器台が出土した。②、192の壺はばらばらに割れた破片がまとまって検出され、その一部は27群の南部からも出土し、接合すると完形になった。193の鼓形器台は口縁端部と脚端部をうしなった頸部完形品が、192の破片より高い位置に正位で置かれたように出土した。③（第42図）、192は底部が平底で胴部に分割成形の痕跡がある伝統的V様式系の技術で製作された布留系の単口縁壺。193は在地系の技法で製作された山陰系の鼓形器台で、上下の屈折部を突帯で表現し、その上に刻目を施す。どちらも在地産の胎土を用い、192の壺は二次加熱により煤が付着する。④、破碎した壺を廃棄して、そのそばに端部を打ち欠いた鼓形器台を置いたものと推定される。

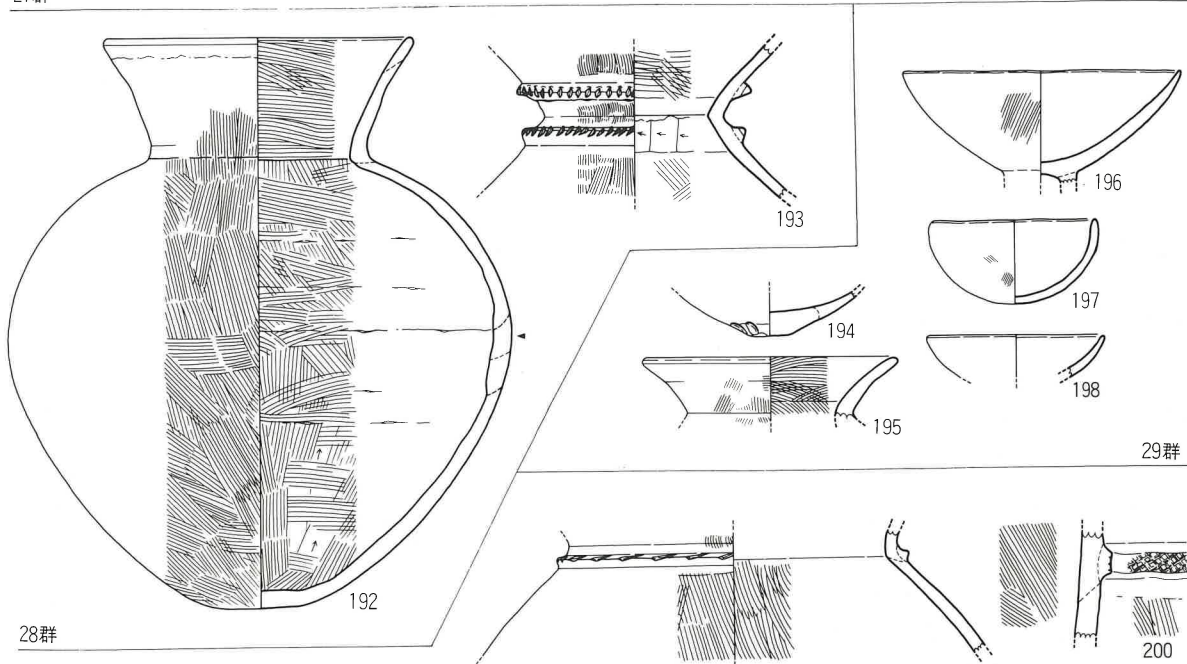
29群（第30図）①円礫と炭層を伴い土器が散漫に分布する廃棄単位で、南端は未調査区に続く。194の甕底部片、195の甕口縁片、196の台付碗の坏部、197と198の碗などが出土した。②、小破片を中心に散漫に土器片が広がり北端で炭層の堆積と円礫が出土した。中でも196の台付碗は脚部が無く、碗部が完形品のまま中央部に正位に検出され、その横の同じ高さに197の碗の完形品が同じく正位で出土した（写真4）。おそらく台付碗の脚を折り取った上で、碗部と完形の碗のふたつを並べて置いたと考えられる。③（第42図）、194は伝統的V様式系の甕B。195は在地系の甕A。196は在地系の台付碗A。197と198の在地系の碗A。どれも在地産の胎土を用い、被熱したものはなかった。④、台付碗の坏部と碗の二個体を最下部に並べて置いた後に、土器片と炭・礫等を一括廃棄したものと推定される。

小結。以上のようにC-4溝の中層には大量の土器の堆積が検出され、その出土状態からみて遺物の大部分は故意に廃棄されたものであることが明らかになった。さらにその堆積は29の廃棄単位からなることが判明した。ひとつひとつの廃棄単位の内容と土器の器種構成、および土器の割れ方・破碎という点を、竪穴住居の廃絶祭祀の内容と比較すると、ほとんど同じことに気付く。異なる点は炭化材・焼土・炭等の焼却廃棄物が少ないことと、廃棄遺物のなかに石皿と鉄鏟が無いことである。おそらく竪穴住居の廃絶祭祀とは性格の異なる祭祀の廃棄物の可能性が高い。ともあれB-4住との接合例からみて、竪穴住居の廃絶祭祀の廃棄物の片われである可能性も否定できない。

廃棄単位の重なり方と接合関係から、およそ次のような廃棄の順序が想定される。最も古く廃棄されたのは、1群・5群・8群と21群である。これをA期とする。次に廃棄されたのは2群・3群・6群・7群と9群で、この中で6群と7群の前後関係だけが判明し前者が古い。以上の廃棄と同時期に11群～19群と22群～24群までが廃棄され、その中で11群→12群、15群→16群、23群→24群という順序が判明している。以上をB期とする。10群と29群はA期かB期のいずれかである。最後に4群・19群・20群・25群～28群が廃棄される。以上をC期とする。

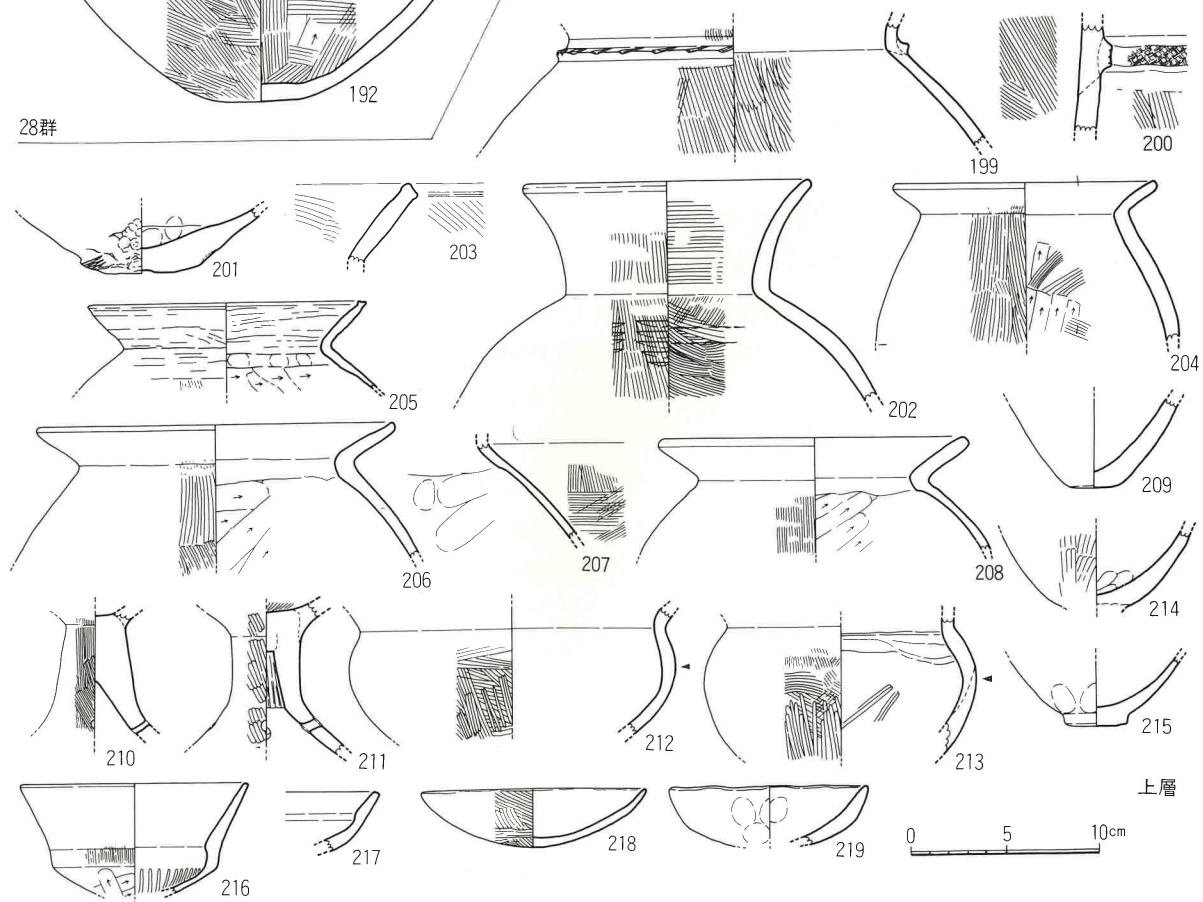


27群



28群

29群



上層

第42图 C区-4号溝(条溝)出土遺物⑫ -27~29群・上層- (1/4)

ところでB期とC期の区別は堆積の状態だけでなく、土器の器種構成からも区別される。A・B期の廃棄単位には小型器種を最下部に置く行為がおこなわれる事が多く、小型の鉢や碗がかならず含まれるのにたいし、C期には小型器種がなくなり壺と甕がほとんどを占めるようになる。

さて以上のA・B・C期の区別は、小迫辻原の遺構のどの時期に対応するだろうか。B期の廃棄単位すなわち14群と15群と22群からB-4住の廃絶祭祀の際に廃棄された壺の破片が出土している。そしてその土器群は小迫辻原3期末と考えられるので、B期が小迫辻原3期末から4期への変り目の時期に接点をもち、A期の廃棄はそれに先立つ小迫辻原3期に始まり、C期は小迫辻原4期に対応すると考えられる。

上層出土遺物(第42図)。この中には中層から埋没過程で遊離した遺物と上層堆積中に混入した遺物が含まれ、その両者は区別できない。出土位置は挿図と観察表にゆずり、遺物の説明だけに止める。以下特に記さないかぎり在地産の胎土で製作された土器である。

199は在地系の壺Aの頸部片。200は在地系の壺Aの胴部片で、突帯上に格子目を刻む。201は伝統的V様式系の壺Bの底部片。202は在地系の製作技法による布留系の単口縁壺。203は在地系の甕Aの口縁片。204はヘラケズリを取り入れた在地系の技法で製作された布留系の甕で、被熱している。205は布留甕の口縁部で、搬入品の可能性もある。206・207・208は布留系の甕Dで、207は被熱している。209は平底の甕Aで残留遺物か。210は軸部中実の伝統的V様式系の高坏B。211は在地系の高坏Aで、外面にタテ方向のヘラミガキを施す。212と213は在地系の台付鉢Aの坏部片で、どちらも外面にタテ方向のヘラミガキを施し、同一個体の可能性がある。214は台付壺の破片か。215は伝統的V様式系の甕Bの底部。216は布留系の小型鉢Dで、底部内面に放射状のヘラミガキを施し、外面にはヘラケズリが認められる。217は口縁内面が肥厚する他に例のない碗の口縁片。218は在地系の碗A。219は手づくねの碗。

中層出土の出土状態不明遺物(第43・44図)中層の調査中は冬期にあたり、霜柱や急激な乾燥のため遺物の多くが位置不明になった。そのような遺物は土手を境に北一括・中央一括・南一括と注記して取り上げた。廃棄単位との対応を記せば北一括は1群から16群に、中央一括は17群から24群に、南一括は24群から29群にあたる。その中で注目される遺物について説明する。以下特に記さないかぎり在地産の胎土で製作された土器である。

北一括。220・221・222は在地系の複合口縁の壺Aで、221と222は屈折部に刻目を施す。224と225も在地系の壺Aで、224は頸部に、225は胴部に突帯を貼りつけ刻みを施す。226は在地系の単口縁の壺Aで、内面にはヘラケズリが認められる。227・229は伝統的V様式系の甕Bの底部。228は壺または甕の平底の底部で、底部外面は丸底をヘラケズリで削って作る。230は口縁形態から伝統的V様式系と思われる甕Bで被熱している。231と232は布留系の甕D。233は内面をナゲた伝統的V様式系かと思われる甕。234は内外に接合痕が残る成形途中で焼成した可能性の高い「不完全品」の甕。235は軸部中実の伝統的V様式系の高坏B。236は坏部が折れ違いに屈折する高坏。237は在地系の大型の高坏A。238・239・240は布留系の小型鉢Dで、238の外面にはヨコ方向のヘラミガキが顕著。そのうち240は胎土に金雲母と石英が含まれる搬入品。241は手づくねの輪状の器台の一部で、用途不明。242は土器片を半円形に加工した二次利用品。以上の土器の他に263の器種不明の鉄器片がある。

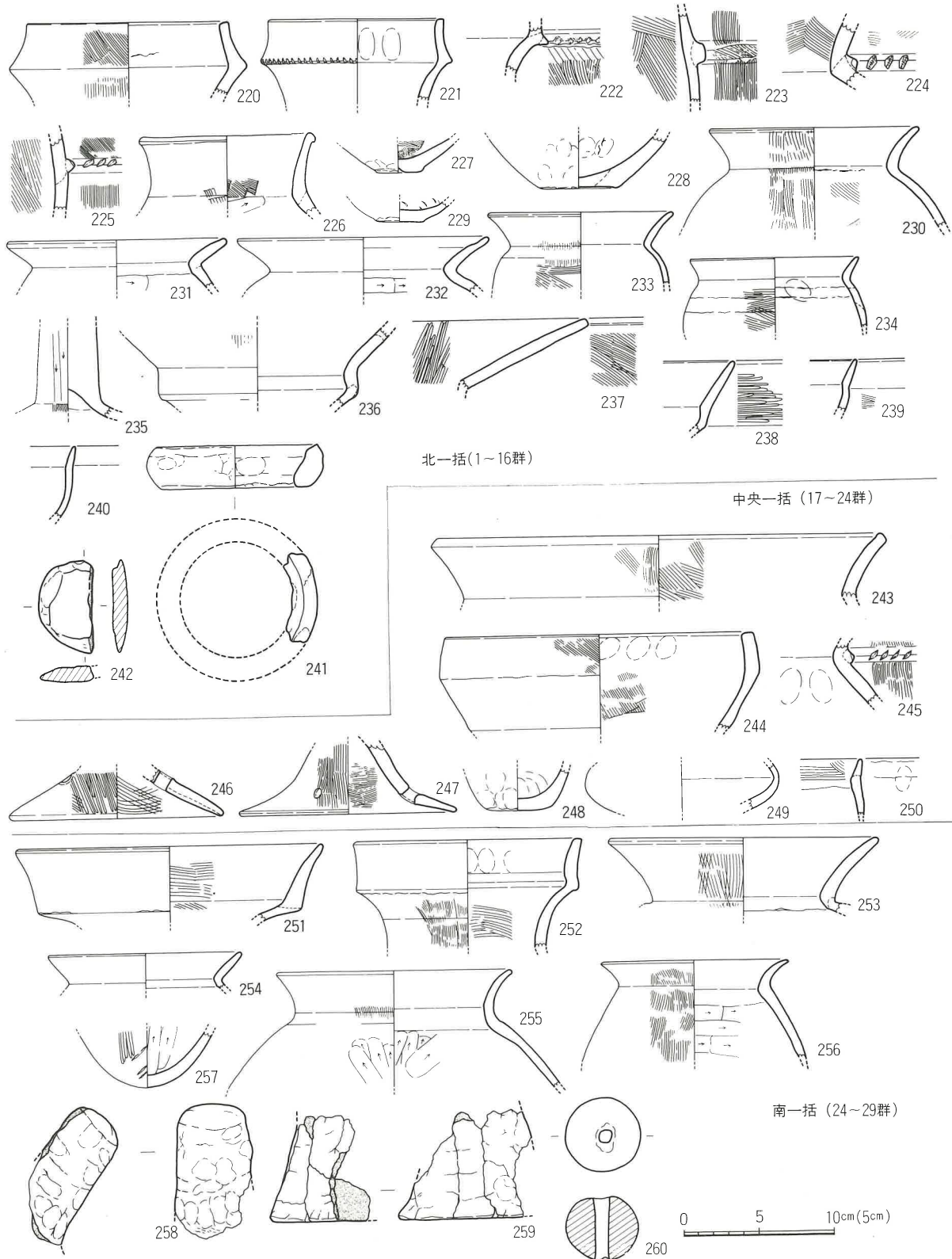
中央一括。243は在地系の甕A。244は内側に屈折する在地系の壺A。245は在地系の壺Aの頸部。246は高坏の脚部片。247は在地系の台付鉢Aの脚部。248は正体不明の底部で手づくねに近い。249は台付鉢かと推定される胴部片。250は在地系の技法の布留系小型鉢D。

南一括。251は布留系の二重口縁の壺D。252は在地系の二重口縁の壺A。253は在地系の単口縁壺A。254と255は甕口縁部片。256は口縁部に伝統的V様式系の影響の残る甕B。

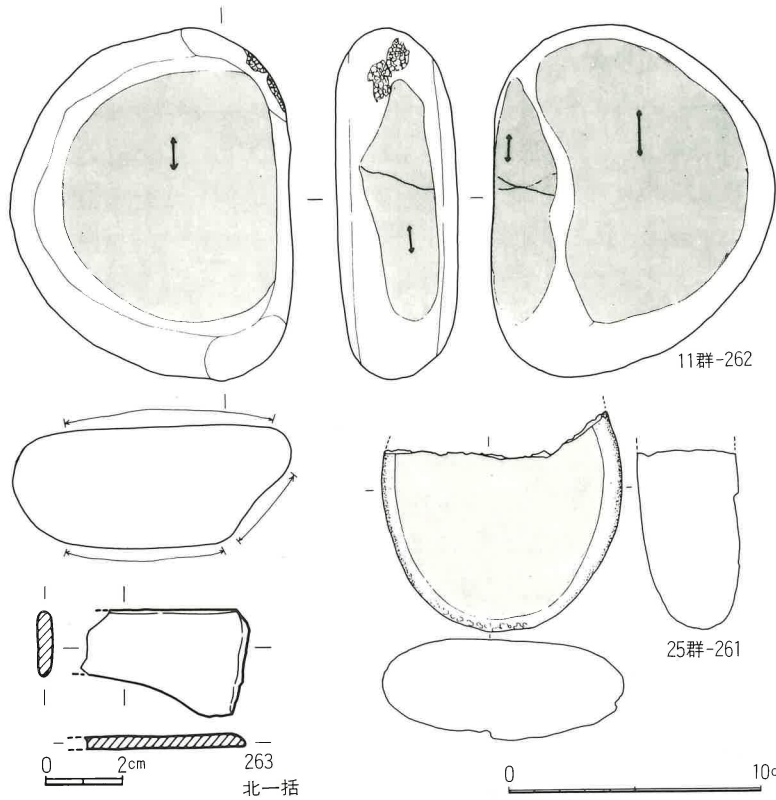
この他に出土位置不明のものとして、258と259の外来系に支脚の破片がある。ともに被熱の痕跡が顕著である。後者は12群出土の可能性はあるが、確認できない。

C) 橋の存在について(第26図)。前述したようにC-4溝の内部には、幾度となくおこなわれた祭祀遺物の廃棄による土器の堆積が、ほとんど空白なく認められる。各廃棄単位間の遺物の少ない空白は、せいぜい1m前後が普通である。ところが9群と10群の間のみ3~4mの遺物の少ない廃棄の空白が認められる(第26図断面ウー

エ間)。そしてその空白部分の底面は、ピットが最も数多く発見された場所である。橋桁の構造を復元することは難しいが、おそらく柱で支えた木製の橋がこの付近にかかり、土器廃棄が継続していた期間、その橋が機能していたために、その場所には土器の廃棄がおこなわれなかったと推定される。



第43図 C区-4号溝(条溝)出土遺物⑬ -北~南- (242・260=1/2、それ以外は1/4)



第44図 C区-4号溝出土遺物⑭ -石器・鉄器- (261・262=1/3、263=1/2)

C-4溝の総括。以上のような切り合い関係と廃棄遺物の時期から総合的に考えて、1号条溝は小迫辻原3期には機能しており、溝の東西を連絡する橋も設けられていた可能性が高い。小迫辻原3期の途中から祭祀遺物の廃棄が始まり、それは小迫辻原4期まで継続する。その間溝と橋は埋没しながらも機能していたと推定される。溝が作られた時期については少なくとも小迫辻原3期当初には存在していたと考えられるが、1号方形環溝建設に先立つ小迫辻原2期に掘削された可能性を検討する余地も残されている。(旧B地区溝1)

C区-4号溝内土壌A (第45・46図 →図版17)

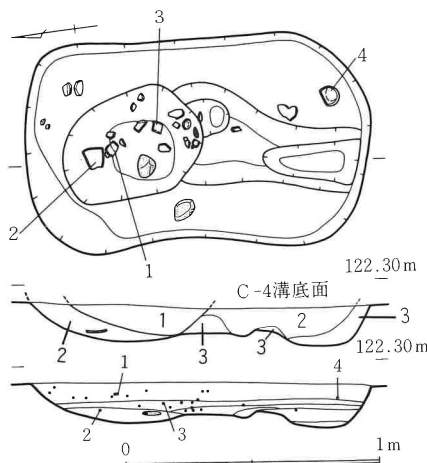
中層廃棄単位の13群の真下で検出された不定形の土壌で、規模は長軸長約135cm、短軸長約80cm、底面からの深さは15cmである。底面は凸凹しており、中央の2箇所に掘りくぼみがある。

層序観察の結果、さらに二回掘り込みが重なることが判明している。この付近の廃棄単位はほとんど溝底に接するように堆積しているので、おそらく土器廃棄の際に掘られた可能性が高い。1回目掘削時の埋土である2層中から2の在来系の甕Aの胴部破片と4の小型壺の底部が出土し、2回目掘削時の埋土である1層から1の伝統的V様式系の系譜をひく甕Bの口縁部片と3の布留系の甕Dの口縁片が出土した。3は胎土に金雲母を含む搬入品である。(旧B地区土壌11)

C区-4号溝内土壌B・土壌C (第47図)

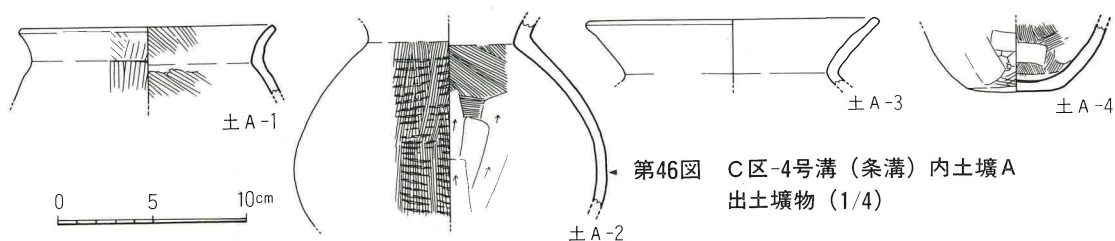
土壌Aのすぐ北で検出された不定形の浅い土壌で、底面は平坦である。下層の3層堆積以前に埋没しているので溝掘削時の凸凹の一部であろうか。埋土中からは土師器の細片が数点ずつ出土したが、図示できるものはない。

(旧B地区土壌12・13)

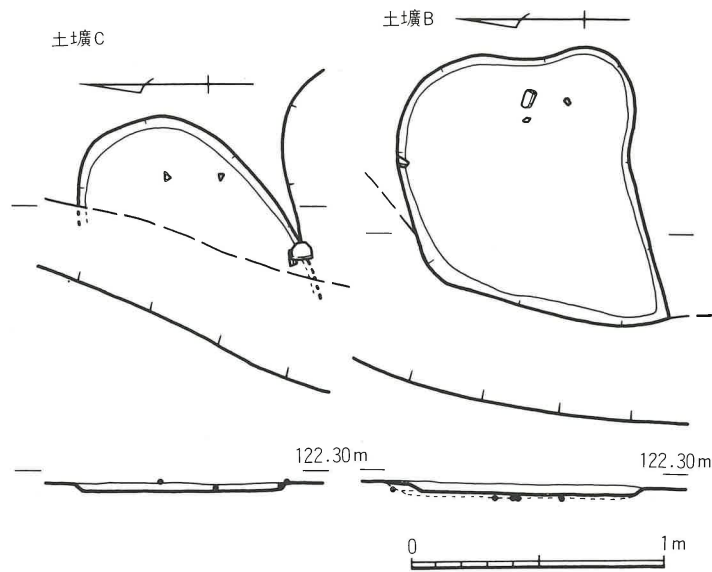


1層：褐色軟質土（土器・炭片多く含む） → 2回目掘り込みの埋土
 2層：暗褐色砂質土（土器片・地山小礫・炭片多く含む） } → 1回目掘り込みの埋土
 3層：黄褐色粘質土（炭含むが、土器はない。）

第45図 1号条溝 (C-4溝) 内土壌A (1/30)



第46図 C区-4号溝 (条溝) 内土壌A 出土土物 (1/4)



第47図 1号条溝 (C-4溝) 内土壌B・C (1/30)

3) 竪穴住居跡 (第1・6～9表)

C区の竪穴住居跡の埋没状態には、他の調査区と同様の次のような共通の特徴がある。それはいずれも床面直上に炭化材・炭化物・焼土が堆積し、土器片が多量に含まれる点である。遺物の出土状態からみて、火災による焼失ではなく、住居廃絶時に意図的な一括廃棄がおこなわれたと考えられる。

C区-1号竪穴住居跡 (第48～50図、写真5 →図版19・20・51)

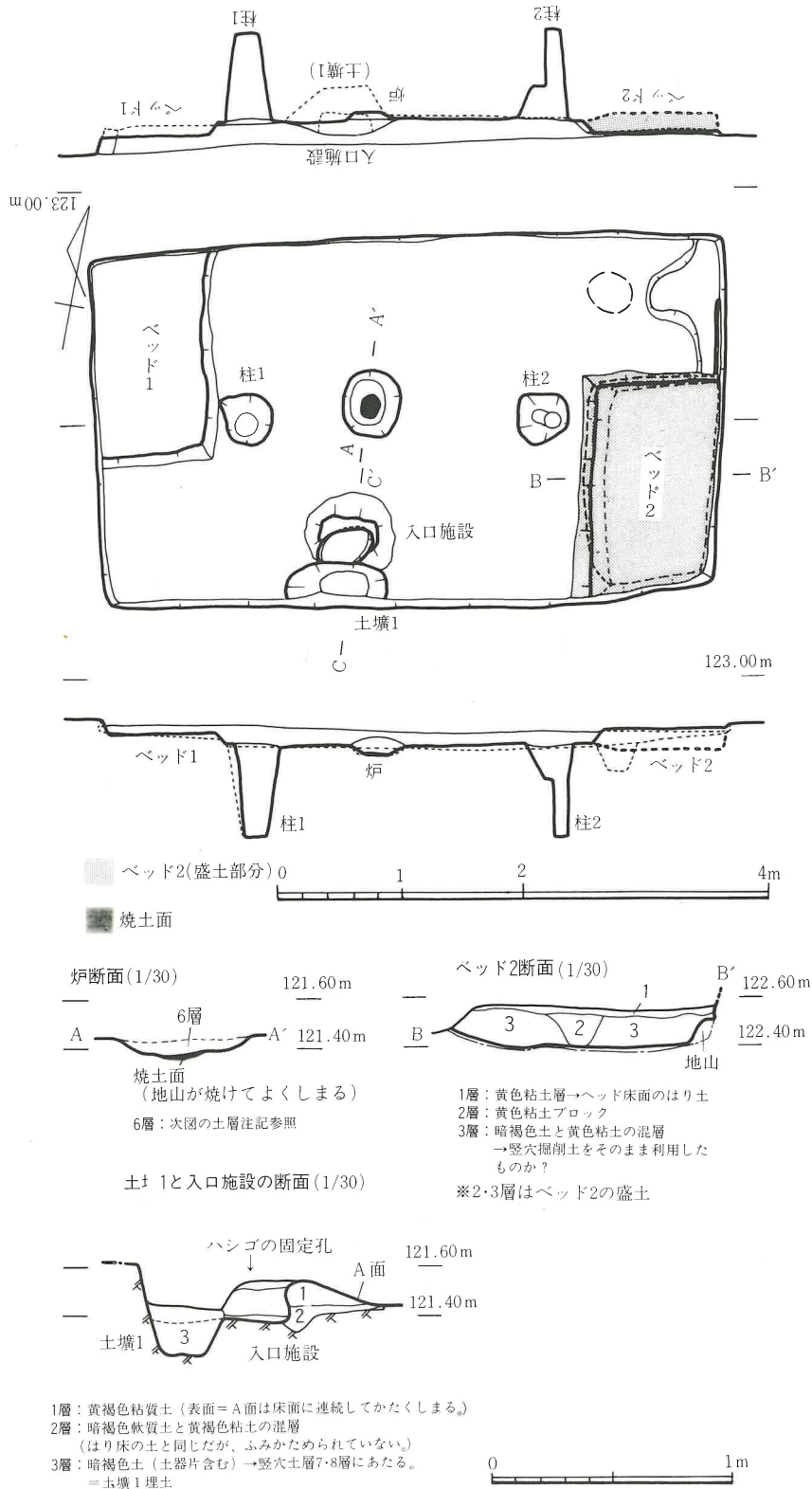
1号方形環溝の中央で検出された長方形の竪穴建物で、規模は東西520cm、南北310cmと東西に長く、残存部の深さは約15cmである。床面積は14.8㎡の小型竪穴である。東西長軸の方位角は79度で、重複する1号方形環溝遺構群の方位とは異なっている。竪穴の長軸に配置された2本柱の構造であり、柱穴の大きさと深さはよく揃っている。周溝はなく、床面は踏みしめられて硬化したものだが、ベッド2の床は貼り床である。ベッド2の下には建設時に掘られた浅い床下土壌が存在した。その土壌はベッド2の範囲に対応するように掘られているので、ベッドの除湿あるいは軟弱な地盤を硬い土に張替えるベッドの床構造の強化等のためにおこなわれたのではないかと思われる。

竪穴内部の遺構は次のとおり。ベッド状遺構は2箇所あり、東西両辺の対角線上に配置されている(第48図)。ベッド1は削り出して構築され、ベッド2は前述したように床下土壌を掘った後に盛り土と貼り床をおこなって造っている。炉はほぼ中央に1箇所あり、床面を皿状に掘り凹め、底面中央に焼土面が形成された地床炉である。土壌は1箇所あり、南壁中央の壁に接して設けられた土壌1は半円形で、炉の南側に設けられる「対面土壌」にあたる。底が平坦でやや深い点が通常の対面土壌と異なっている。廃絶直後に竪穴の隅に堆積した土(7・8層)の一部が内部に落ち込んでいるので、廃絶時まで開口していたことは明らかである。その土壌の北側に連続して、梯子を固定するための入口施設の基礎が残されていた(写真5)。その構造は、梯子の固定孔と推定される深いくぼみを壁の方向に残したまま、残りの三方に黄褐色の粘土混じりの土(2層)をかぶせて固め、さらにベッド2の貼り床の土と同じ黄褐色粘土(1層)を盛り上げて固めるというものである。表面(A面)は床面に連続して硬化しているから、梯子を登り降りする際に踏み締められたものであろう。この入口施設は竪穴建設時に作り付けられたもので、梯子は土壌1をまたいで壁の方向に斜めに立て掛けられたと推定される。B-10住やB-5住でも同じ位置に、入口施設と推定される小土壌が検出されたが、その構造は異なっている。以上の構造および炉とベッドの存在からみて、この竪穴建物は居住用の竪穴住居とみられる。

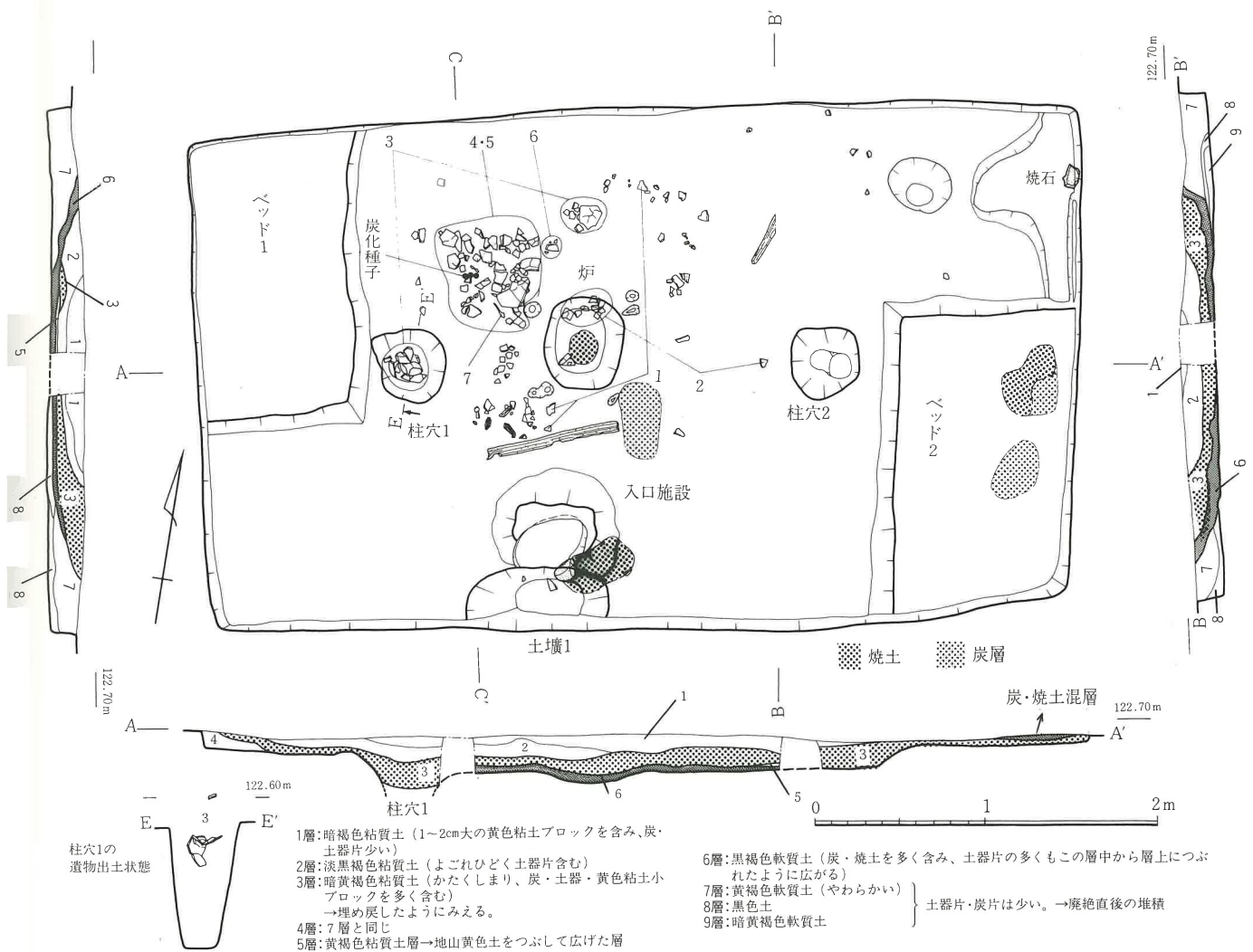
廃絶時にはまず建物の取り壊しがおこなわれたことが、柱穴1の抜取後に3の甕の破片が柱穴をふさぐように

廃棄されていることからわかる（第49図左下）。おそらく上屋と柱および入口の梯子が取り払われたとみられる。次に焼却廃棄物の廃棄を伴う祭祀行為がおこなわれている（6層）。それに先立って堅穴の南北の壁ぎわに9～7層が堆積する。この層は土器片や炭をほとんど含まず、基盤層と内容の同じ黄褐色土からなるので、遺物一括

廃棄の前に周堤あるいは壁の一部を崩して、堅穴内への出入りを容易にしたものと推定される。類似した現象は、B-5住とB-10住でも観察された。そして床面上に炭片・焼土片と土器片を多量に含む黒褐色の6層が床面全体に広がる。この層中には焼土層・炭層と焼けた礫が点在し、炭化材を多量に含む。同時にこの層中からその上面にかけて黄色土ブロック（5層）の堆積と遺物一括廃棄がおこなわれている。床面そのものには被熱の痕跡は認められず、焼却行為は別な場所でおこなわれたと考えられる。この6層中では柱穴1と炉の周辺を中心に、2の甕片が炉の内部に破片となって集中し、3の甕底部は破片がニヶ所にわかれ、一方は柱穴1の抜き取り跡に廃棄されていた。4と5の甕は同一個体で完形品になる量の破片があり、2もこの個体の破片である可能性が高く、一ヶ所に破片をまとめて床面上に廃棄している。さらこの甕の破片群の下に7の柳葉形の鉄鏃の完形品が床面に貼りつくように、先端部を堅穴の中心に向けた状態で検出された。この鏃には装着痕がなく、鉄鏃のみが置かれたものと推定される。また同じくこの甕の破片の下の床面直上で炭化種実が検出されている。以上の出土状態からみて、別な場所でおこなわれた祭祀後にこのような片付け方をしたものと推定される。そしてその上に基盤層に由来する黄色土小ブロックを多量に含む3層が堆積する。硬く締まっている点と黄色土ブロックの量からみて短期間の埋没であり、廃棄物を封じるために埋め戻された



第48図 C区-1号堅穴住居跡①-堅穴内遺構-(1/60・1/30)



第49図 C区-1号竪穴住居跡② -遺物出土状態と層序- (1/40)

可能性が高い。そして最後に2・1層が堆積して埋没する。この層中には1の甕口縁部片や6の台付鉢頸部片が混入していた。

以上の竪穴廃絶時の状況をまとめると、①竪穴建物の柱を含む構造物が取り払われ、その際周堤などが崩されて竪穴の一部を埋める。②この竪穴住居の外で焼却行為を伴う祭祀がおこなわれ、③その祭祀の際の焼却廃棄物と遺物群が竪穴内に廃棄され、④祭祀および廃棄終了後、竪穴は埋め戻される。以上の祭祀は竪穴住居廃棄時に際しておこなわれる廃絶祭祀であると推定される。

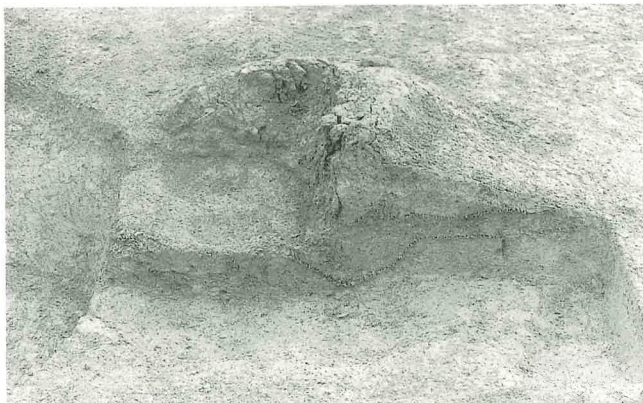
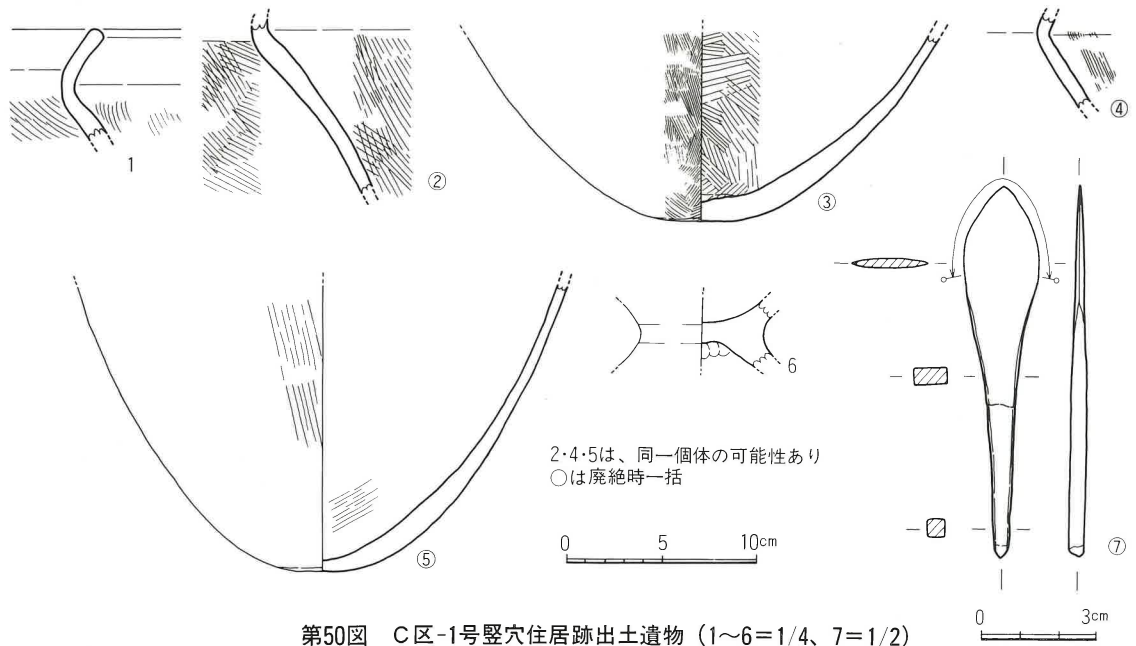


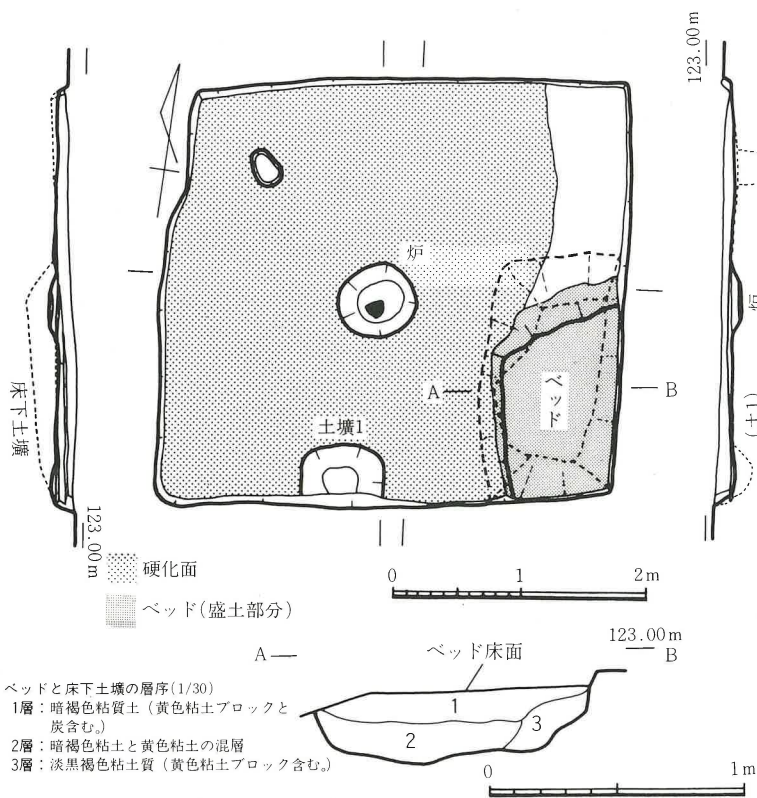
写真5. C区-1号竪穴住居入口施設の断面土層 (東から)

出土遺物のうち土器は胎土からみてすべて在地産である。2・5の甕は被熱している。1~5は在地系の甕Aで、3と5の底部はわずかに平底気味で、内面はすべてハケ調整である。6は在地系の台付鉢Aである。また7の柳葉形の鉄鏝は全長10cm足らずの完形品で、木質等の装着痕は観察できない。土器のすべてが在地系のA類で、外来技



第50図 C区-1号竪穴住居跡出土遺物 (1~6=1/4、7=1/2)

術の影響は認められない。竪穴住居の時期は1号方形環溝以前で、土器の特徴からみて小迫辻原2期と推定される。(旧E地区竪穴住居22)



第51図 C区-2号竪穴住居跡①-竪穴内遺構- (1/60)

C区-2号竪穴住居跡 (第51~53図、写真6 →図版20・21・52)

1号方形環溝の内部、C-1建物のそばで検出された方形の竪穴建物で、その規模は東西長軸長370cm、南北短軸長330cmでやや東西に長く、残存部の深さは約10cmである。床面積は11.2㎡の小型竪穴である。東西長軸の方位角は85度で、1号方形環溝の方位とは異なっている。柱穴はなく無柱穴の構造の上屋であったと推定される。ベッドの下には建設時に掘られた床下土壌が存在した。ベッドのコーナーを掘り間違えて削ってしまったので、一見床下土壌とベッドの形が対応しないように見えるが、実際にはベッドの範囲にあわせて掘られていたものと推定される。この床下土壌はベッドの除湿、あるいは軟弱な地盤を硬い土に張替えるために掘られたのではないかと推測

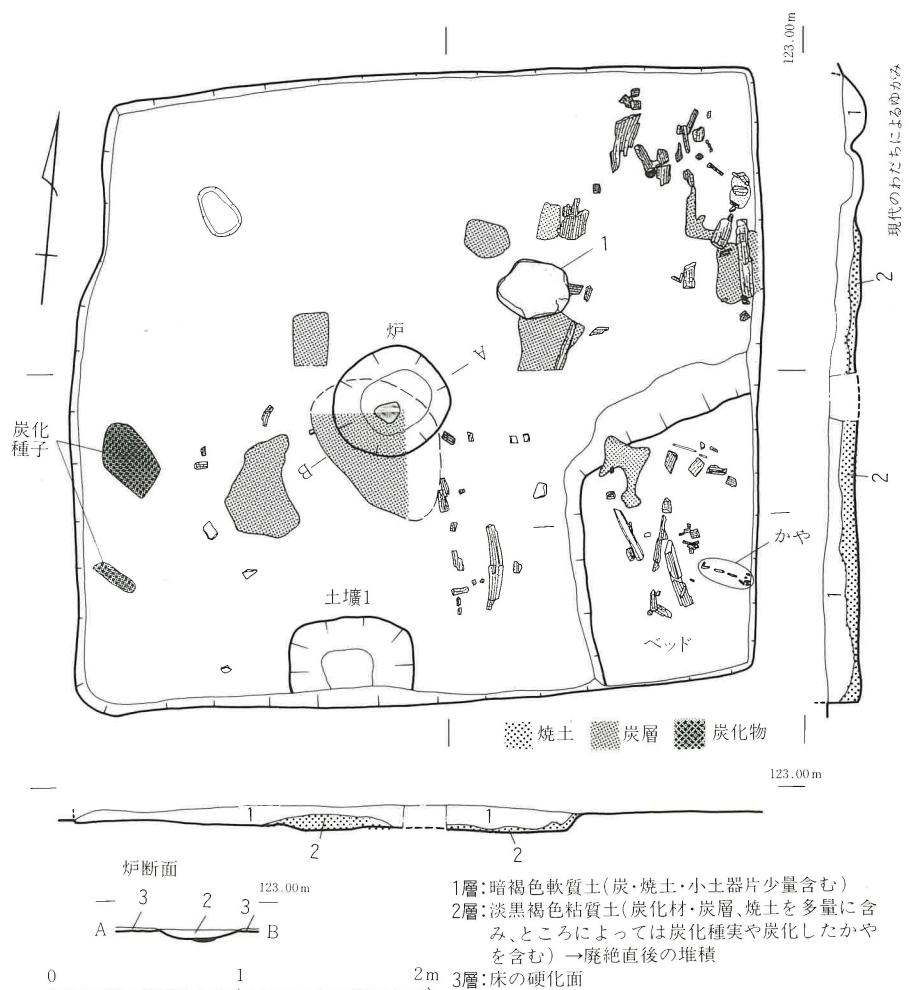


る。ベッド状遺構は南東隅に1箇所あり、床下土壙を掘った後に盛り土して造っている。前述したようにやや不整形になるのは調査の間違いによるものである。炉はほぼ中心に1箇所あり、床面を皿状に掘り凹め、底面中央に焼土面が形成された地床炉である。土壙は1箇所あり、南壁中央の壁に接して設けられた土壙1は、炉の南側に設けられる「対面土壙」にあたる。その底面は皿状である。以上の構造および炉とベッドの存在からこの竪穴建物は居住用の竪穴住居とみられるが、その規模と構造からみて一世帯が住むにはあまりにも狭く、単身者用の住居の可能性もある。

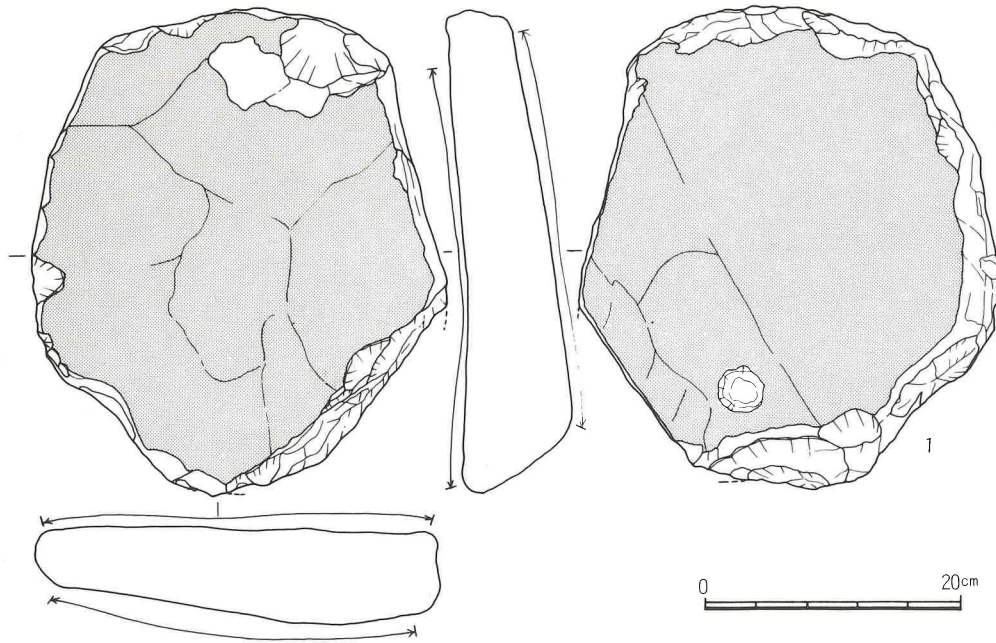
廃絶時には建物の取壊しがおこなわれたと思われるが積極的な痕跡はない。次に焼却廃棄物の廃棄を伴う祭祀行為がおこなわれている(2層)。床面上に炭片・焼土片を多量に含む黒褐色の2層が床面全体に広がる。この層中には焼土層や炭層とが点在し、炭化材を多量に含む。炭化材の中に茅が含まれ上屋構造物の名残と思われる。またコナラ属のドングリ類が少量床面直上で検出された(分析試料4)。そして1の石皿が完形のまま炭層の上にはまりこんで検出された。しかしこの石皿そのものは焼けていない。以上のように焼却廃棄物と遺物の一括廃棄がおこなわれている。

床面そのものには被熱の痕跡はなく、廃棄された石皿も焼けていないので、焼却行為は別な場所でおこなわれたと考えられる。この2層の上に炭・焼土と土器小片を含む1層が堆積する。土器片はいずれも細片で図示できない。残存部が浅いので埋め戻されたかどうかは不明である。以上の焼却廃棄物と遺物の一括廃棄行為は、竪穴住居廃棄に際しておこなう廃絶祭祀であると推定される。

出土遺物のうち土器細片は、胎土からみてすべて在産地で、被熱した破片はない。外面タタキ痕・内面ハケメ調整で、ケズリのある破片はない。この特徴は隣のC-1住の甕と同じである。石器は1の石皿のみで、これは安山岩製で重さ約14kgである。竪穴住居の時期は1号方形環溝以前で、



第52図 C区-2号竪穴住居② -遺物出土状態と層序- (1/40)



C-1住など他の住居跡との方向の一致と土器の特徴からみて小迫辻原2期と推定される。
(旧E地区竪穴住居21)

第53図 C区-2号竪穴住居跡出土遺物 (1/6)

C区-3号竪穴住居跡 (第54~56図 →図版21・52)

C-4住と方向を同じくして検出された長方形の竪穴建物で、C-8溝(近世)によって西側を大きく削り取られている。その規模は東西長軸長の残存部で470cm、南北短軸長340cmで東西に長く、検出面からの深さは10cm不足である。東西が対称形であると仮定して復元すると東西長軸長は660cmとなる。床面積は16.9㎡以上で、先ほどの復元で計測すると22.4㎡となり、中型の竪穴規模といえる。東西長軸の方位角は89度である。竪穴の長軸にあわせて配置された2本柱の構造であり、柱穴は円形で大きさは揃うが、深さは柱穴2が浅い。周溝・床下土壇・ベッド状遺構はなく、床面は踏みしめられて硬化したものである。

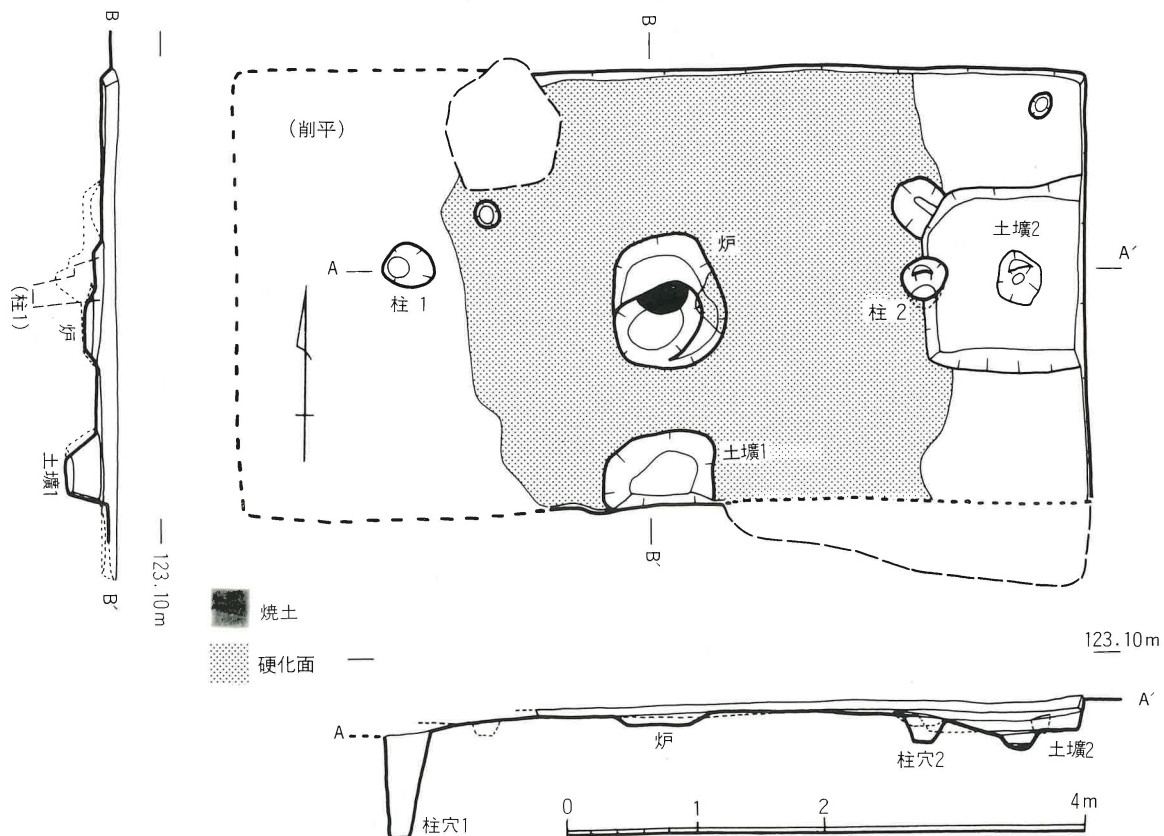
竪穴内部の遺構は次のとおりである。炉はほぼ中央に1箇所あり、床面を皿状に掘り凹めたもので、底面には焼土面がなく、かわりに焼土粒子と炭片を多量に含む3層が堆積し、北側に焼土の堆積が認められた。通常地床炉ではなく、おそらく焼土と灰を混ぜて炉床とした「灰床炉」と推定される。B-6住・D-1住などに類例がある。土壇は2箇所あり、南壁中央の壁に接して設けられた土壇1は半円形で、炉の南側に設けられる「対面土壇」にあたる。その底が平坦でやや深い点で、通常の対面土壇と異なっている。そしてその内部に廃絶直後に堆積した土(2層)が流れ込んでいるので、廃絶時まで開口していたことは明らかである。東壁中央の壁に接して設けられた土壇2は、方形で竪穴内遺構としてはかなり大きく長さ幅とも1mをこえるが、深さは浅い。その底面は平坦で、中央に浅いピットがある。土壇1と同様に廃絶直後に堆積した2層が内部に流れ込んでいるので、廃絶時まで開口していたとみられる。以上の構造および炉とベッドの存在からみて、この竪穴建物は居住用の竪穴住居とみられる。

廃絶時には建物の取壊しがおこなわれたと思われるが、積極的な痕跡はない。次に焼却廃棄物と遺物の廃棄がおこなわれている。床面上に炭片・焼土片と土器片を多量に含む黒褐色の2層が床面全体に広がる。この層中には焼土層や炭層と焼けた礫が点在し、炭化材と土器片を多量に含む。床面そのものには被熱の痕跡は認められず、焼却行為は別な場所でおこなわれたと考えられる。この2層中では柱穴2周辺に遺物が集中し、1の壺胴部片が破片となって集中し、そばには焼けた礫が集まっていた。ほかに2の壺底部片が炭層の中で検出され、3の無茎柳葉形の鉄鏝の完形品が床から3cm浮いて見つかった。この鏝には装着痕がなく鉄鏝のみが置かれたものと推定される。炭層中よりモモの炭化種実が1点検出されている(分析試料1)。ほかに炭層や焼土層中から土錘1点と鉄器片1点を検出したが、調査中の不注意により紛失した。以上の出土状態からみて、別な場所でおこなわ

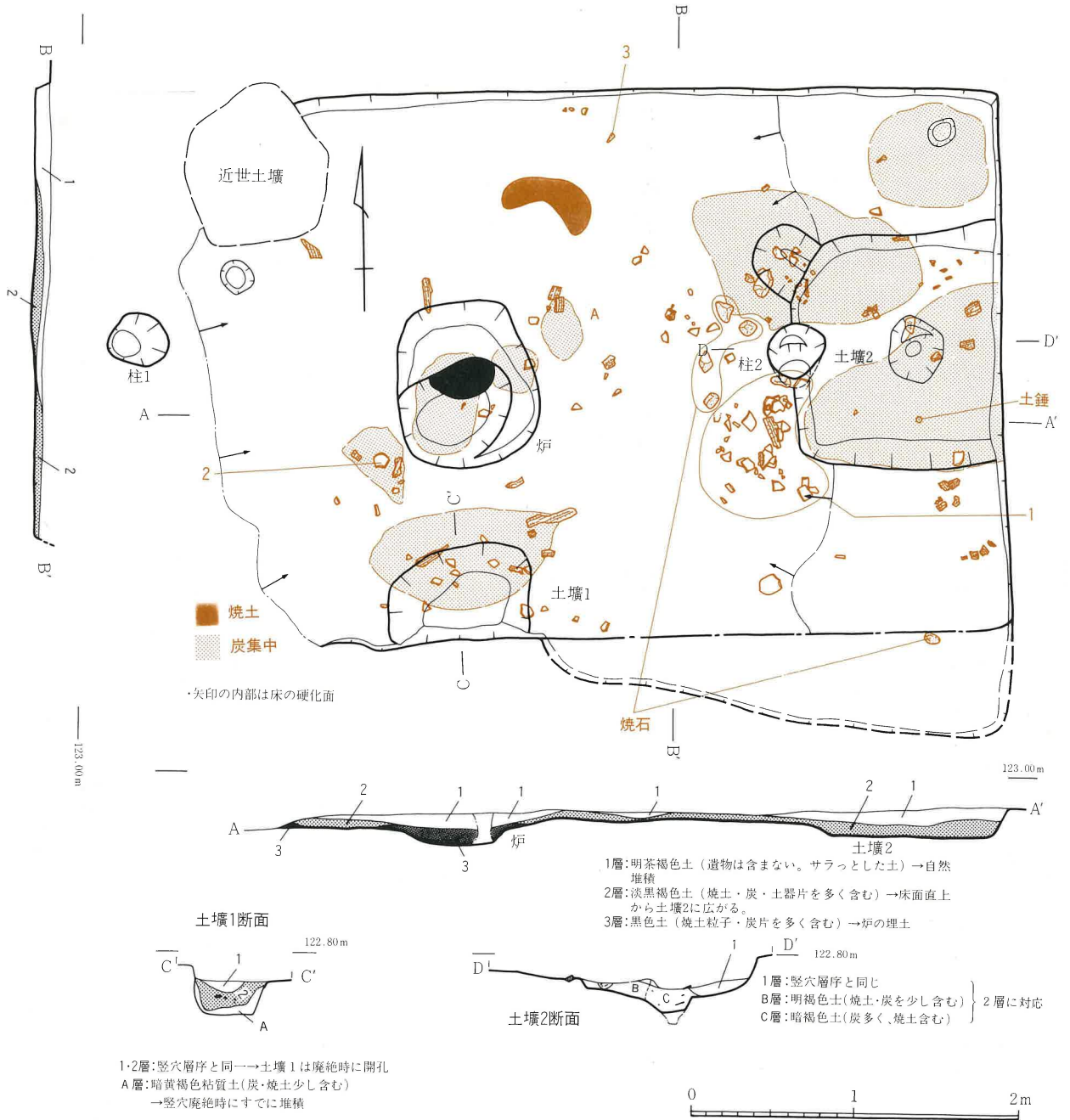
れた祭祀後にこのような片付け方をしたものと推定される。そしてその上に遺物を含まずサラッとした1層が堆積する。残存部が浅いので埋め戻されたかどうかは不明である。以上の焼却廃棄物と遺物の一括廃棄行為は、堅穴住居廃棄に際しておこなう廃絶祭祀の結果であると推定される。その廃棄の状態はC-1住とよく似ている。

出土遺物のうち土器は胎土からみて在地産である。2の壺は被熱している。1は在地系の壺Aで、タタキ痕をハケで消し、内外面の下半にヘラケズリが認められる。2の壺はあるいは甕かもしれないが、わずかに平底を残す。また3の無茎柳葉形の鉄鏝は全長4cmあまりの完形品で、木質等の装着痕は観察できない。土器は在地系のA類で、壺に外来技術の影響が認められる。

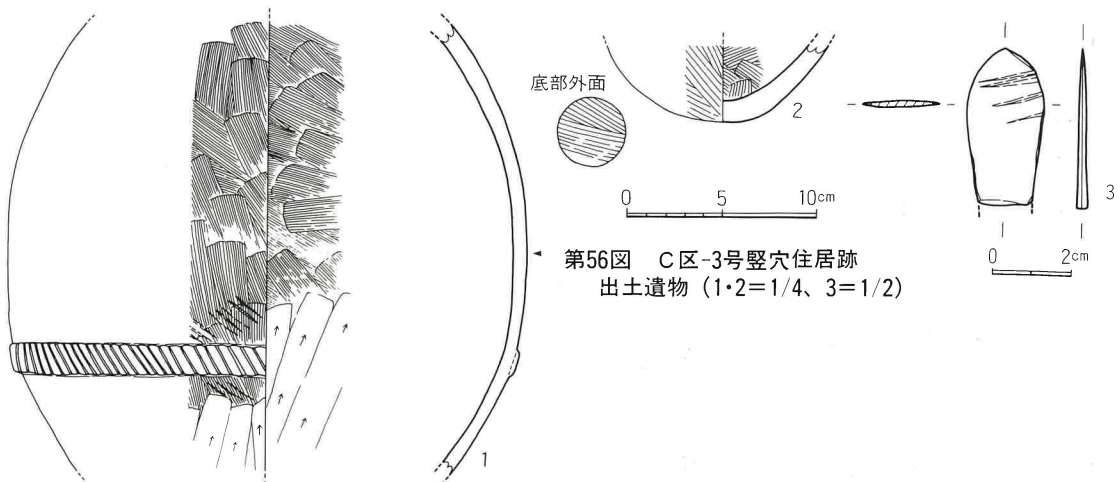
堅穴住居建設の時期は、C-1住・C-2住の方向との一致から1号方形環溝以前の小迫辻原2期、廃絶の時期は土器の特徴からみて小迫辻原2期末の1号方形環溝建設直前と推定される。(旧E地区堅穴住居17)



第54図 C区-3号堅穴住居跡①-堅穴内遺構- (1/60)



第55図 C区-3号竪穴住居跡② 一遺物出土状態と層序一 (1/40)



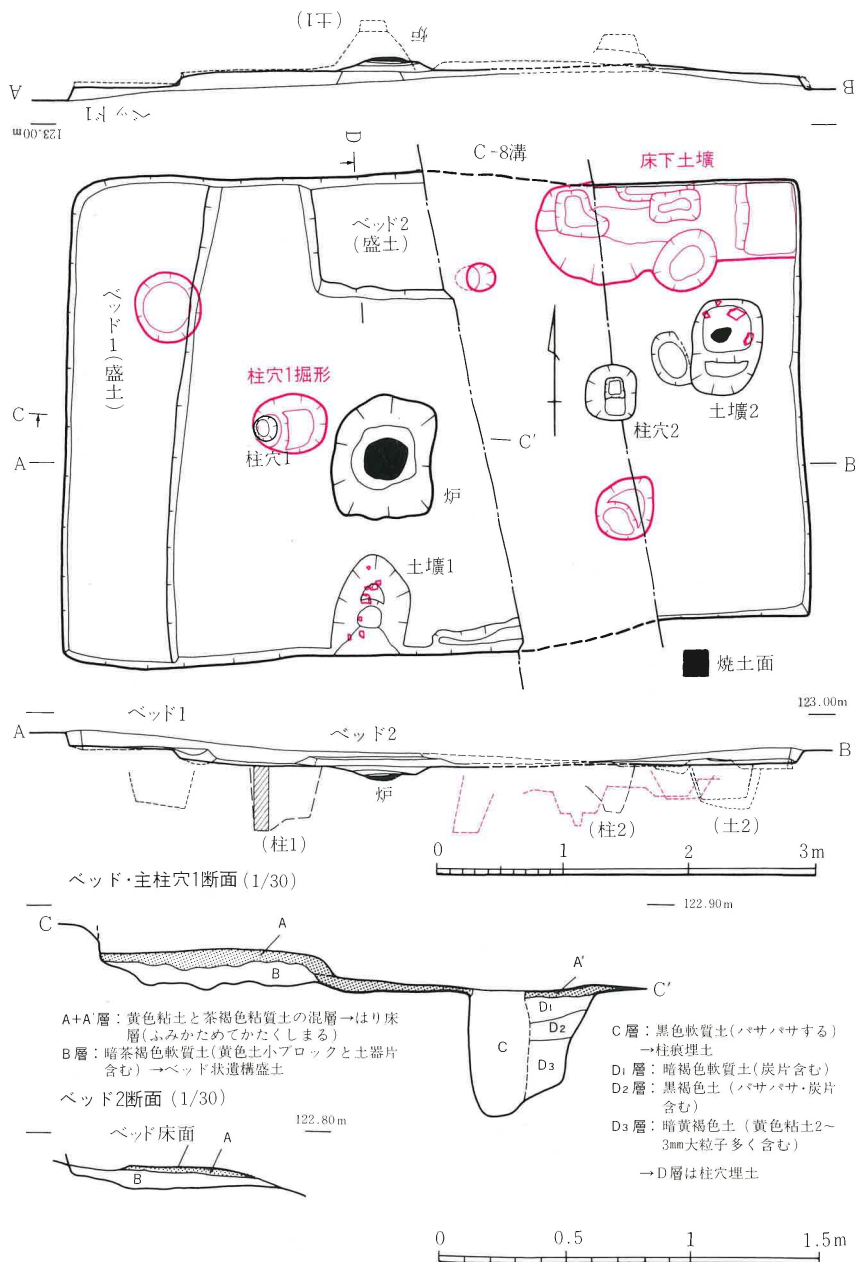
第56図 C区-3号竪穴住居跡
出土遺物 (1・2=1/4、3=1/2)

C区-4号竖穴住居跡 (第57~59図 →図版22・23・52)

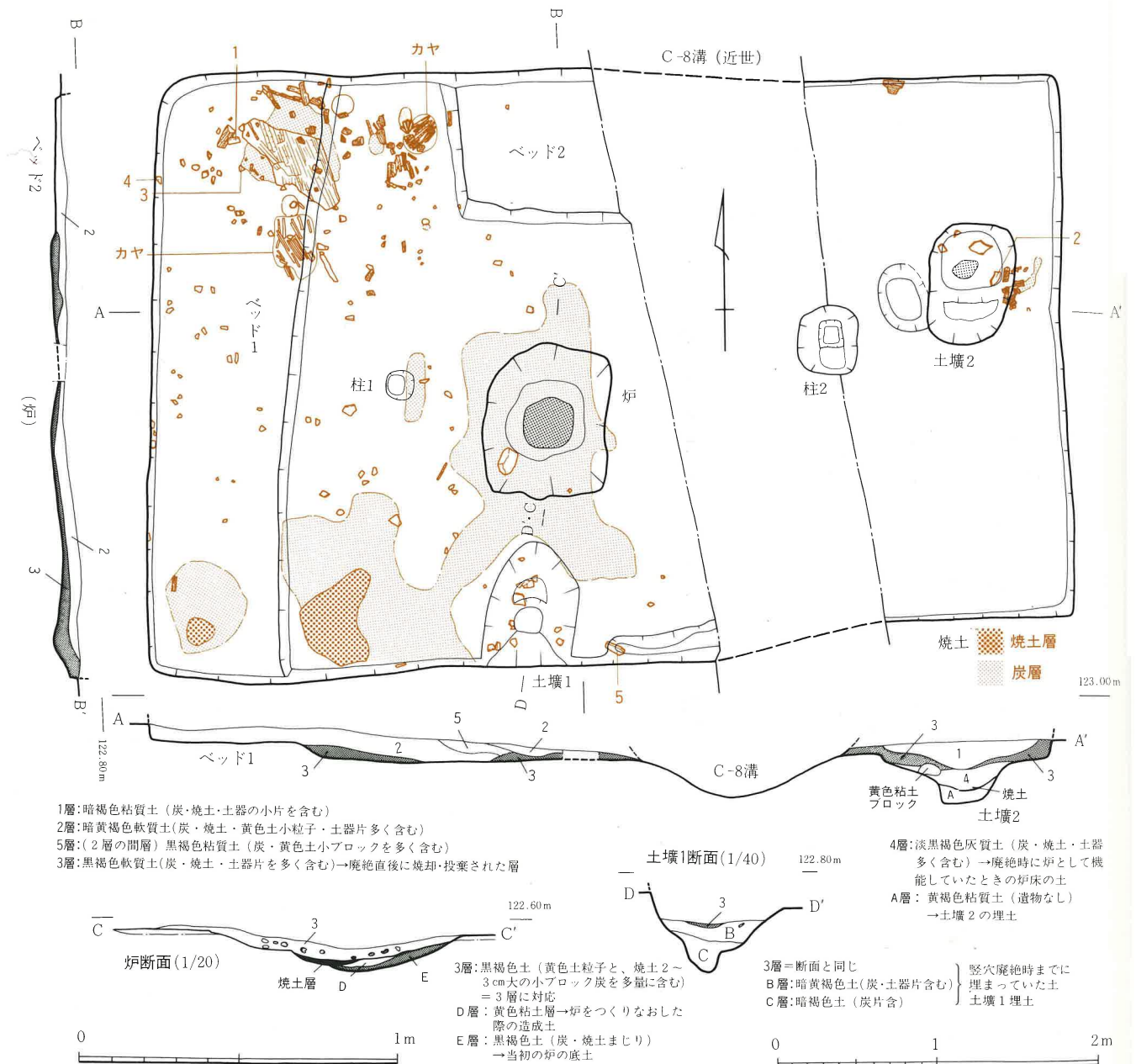
2号方形環溝の東で検出された長方形の竖穴建物で、C-8溝(近世)によって大きく切られている。その規模は東西長軸長580cm、南北短軸長390cmで東西に長く、検出面からの深さは約10cmである。平面形はややいびつで、床面積は20.0㎡の中型竖穴である。東西長軸の方位角は89度で、2号方形環溝の方位とは異なっているが、C-3住とは一致する。竖穴の長軸方向に配置された2本柱の構造であり、柱穴の大きさと深さはよく揃っている。柱穴1では、柱痕が明瞭に残り径20cm弱の丸柱が用いられたと推定される。周溝はわずかに検出されたものの、全周はしない。床面は黄色粘土を混ぜた土(A層)を用いた貼り床で、ベッドの床まで丁寧に貼られている。北東隅に床下土壌が存在し、その底面は凸凹であった。

竖穴内部の遺構は次のとおりである。ベッド状遺構は2箇所あり、西辺と北面に配置されている(第57図)。ベッド1・ベッド2ともに、いったん水平に掘り下げた竖穴底面から、盛り土と貼り床をおこなって造っている。炉は中央に1箇所あり、床面を皿状に掘り凹めている。断面観察の結果(第58図左下)、炉床を造り直していることが判明した。当初の底面には

焼土面がなく、焼土粒子と炭片を多量に含むE層が堆積し、それを最初の炉床とする。次に黄色粘土(D層)を貼って炉床を作り替え、その底に焼土が堆積し、その上には黄色土小粒子と2~3cm大の焼土粒子と炭片を多量に含む層が堆積している。この二つの炉はともに通常の地床炉ではなく、おそらく焼土と灰を混ぜて炉床とした「灰床炉」と推定される。C-3住と同じ炉である。土壌は2箇所あり、南壁中央の壁に接して設けられた土壌1は半長円形で、炉の南側に設けられる「対面土壌」にあたる。その底が摺り鉢状に深い点がある、通常の対面土壌と異なっている。そして廃絶直後に堆積した土(3層)が上部に堆積しているので、少なくとも上半は最後まで開口していたと見られる。東壁近くで検出した土壌2は、いったん掘りこんだ後、黄褐色粘土(A層)を埋め、その上面に焼土面が形成されている。その上に淡黒褐色の炭・焼土混じり層(6層)が堆積して埋没している。その後廃絶直後の堆積層(3層)が上部に堆積しているので、おそらく竖穴使用中に一時的に設けられたものであっ



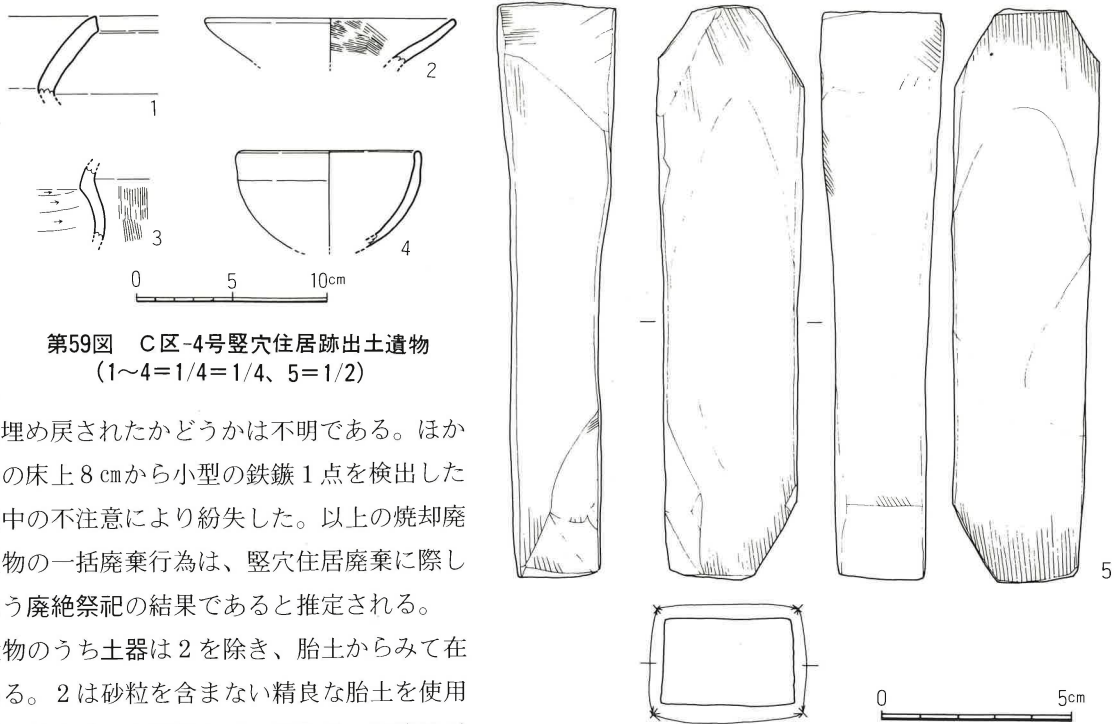
第57図 C区-4号竖穴住居跡① - 竖穴内遺構 - (1/60・1/30)



第58図 C区-4号堅穴住居跡②—遺物出土状態と層序—(1/40・1/20)

て、炉として使われた可能性が高い。土壌2の6層中からは2の小型器台の口縁片が出土している。以上の構造と炉とベッドの存在からみて、この堅穴建物は居住用の堅穴住居とみられる。

廃絶時には建物の取壊しがおこなわれたと思われるが積極的な痕跡はない。周溝内から、まだ十分に使用可能な5の砥石の完形品が出土しており、取り壊し時に埋めた可能性もある。次に焼却廃棄物と遺物の廃棄がおこなわれている。床面上に炭片・焼土片と土器片を多量に含む黒褐色の3層が床面全体に広がる。この層中には焼土層や炭層と焼けた礫が分布し、炭化材と土器片を多量に含む。床面そのものには被熱の痕跡は認められず、焼却行為は別な場所でおこなわれたと考えられる。この3層中ではベッド1と2の間に遺物が集中し、大型の炭化材や大量の炭化した茅と1の甕口縁片、3の小型鉢片などが検出され、1は炭層の上に廃棄されていた。以上の出土状態からみて、別な場所でおこなわれた祭祀後にこのような片付け方をしたものと推定される。そしてその上に炭・焼土・土器片と黄色土小ブロックを含む2・1層が堆積する。2層からは4の碗片が出土した。残存部が



第59図 C区-4号竪穴住居跡出土遺物
(1~4=1/4=1/4、5=1/2)

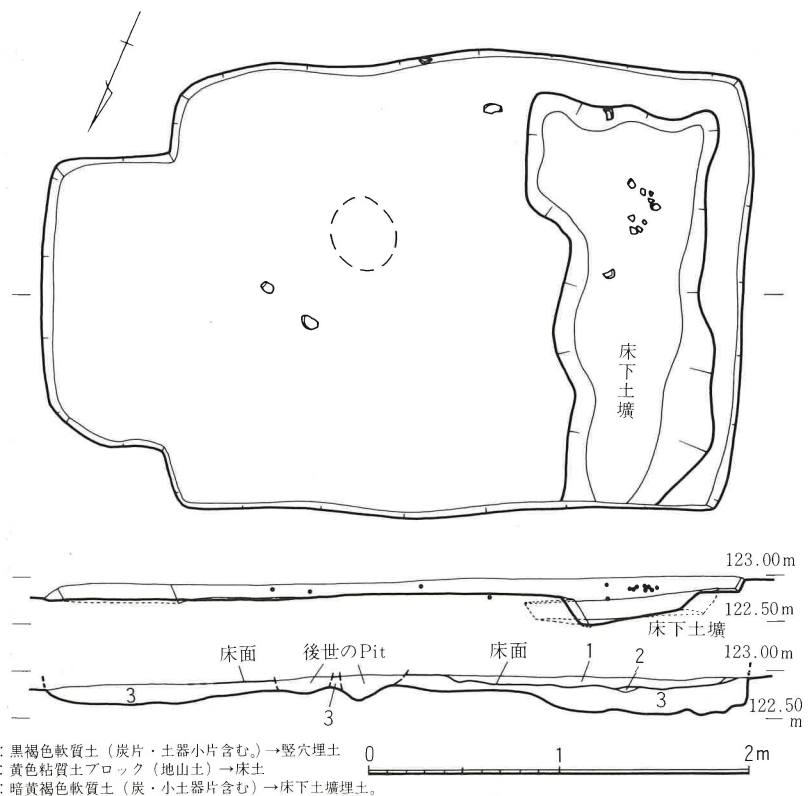
浅いので埋め戻されたかどうかは不明である。ほかに壁ぎわの床上8cmから小型の鉄鏝1点を検出したが、調査中の不注意により紛失した。以上の焼却廃棄物と遺物の一括廃棄行為は、竪穴住居廃棄に際しておこなう廃絶祭祀の結果であると推定される。

出土遺物のうち土器は2を除き、胎土からみて在地産である。2は砂粒を含まない精良な胎土を使用した精製の外来系の小型器台で、搬入品の可能性がある。また2・3の小型器種はともに被熱しており、焼却祭祀の際に焼かれた可能性がある。1は在地系の甕Aで、3は内面ヘラケズリで外来系の技法による小型鉢D、4は在地系に碗Aである。ほかに甕胴部の小片が多量にあり、その特徴は外面タタキ痕が目立ち、内面はハケ調整で、ヘラケズリの破片は認められない。また5の砥石は砂岩質頁岩の完形品である。土器、特に甕は在地系のA類で、外来系の影響があるのは小型器種に限られる。

竪穴住居建設の時期はC-1住~C-3住の方向と一致することから1号方形環溝以前の小迫辻原2期、廃絶の時期は土器の特徴からみて小迫辻原2期末の1号方形環溝建設直前と推定される。(旧E地区竪穴住居20)

C区-5号竪穴住居跡 (第60図
→図版23)

C区中央南寄りに単独で検出された長方形の竪穴建物で、その規模は東西長軸長370cm、南北短軸長245cmと東西に長く、検出面からの深さは約10cmである。東側は張り出し状に方形に突出する。入り口の可能性もあるが、定かではない。床面積は7.7㎡の超小型の竪穴である。東西長軸の方位角は67度で、1号方形環溝の方位と近似する。柱穴はなく無柱穴の構造の上屋であったと推定される。周溝もなく、床面は



第60図 C区-5号竪穴住居跡 (1/40)

床下土壌の埋土（3層）をそのまま底面に敷いた貼り床である。西辺にそって不整形の床下土壌が存在し、その上面には貼り床がなされている。床下土壌と貼り床の存在から竪穴建物と認定した。

竪穴内部には他に遺構はなく、小型である点と、炉と対面土壌が造られていない点からみて、この竪穴建物は居住用とは考えがたいが、その用途は不明である。

埋土中からタタキ痕のある破片を含む土器の小片が、10点ほど出土したが細片なので図示できない。この竪穴

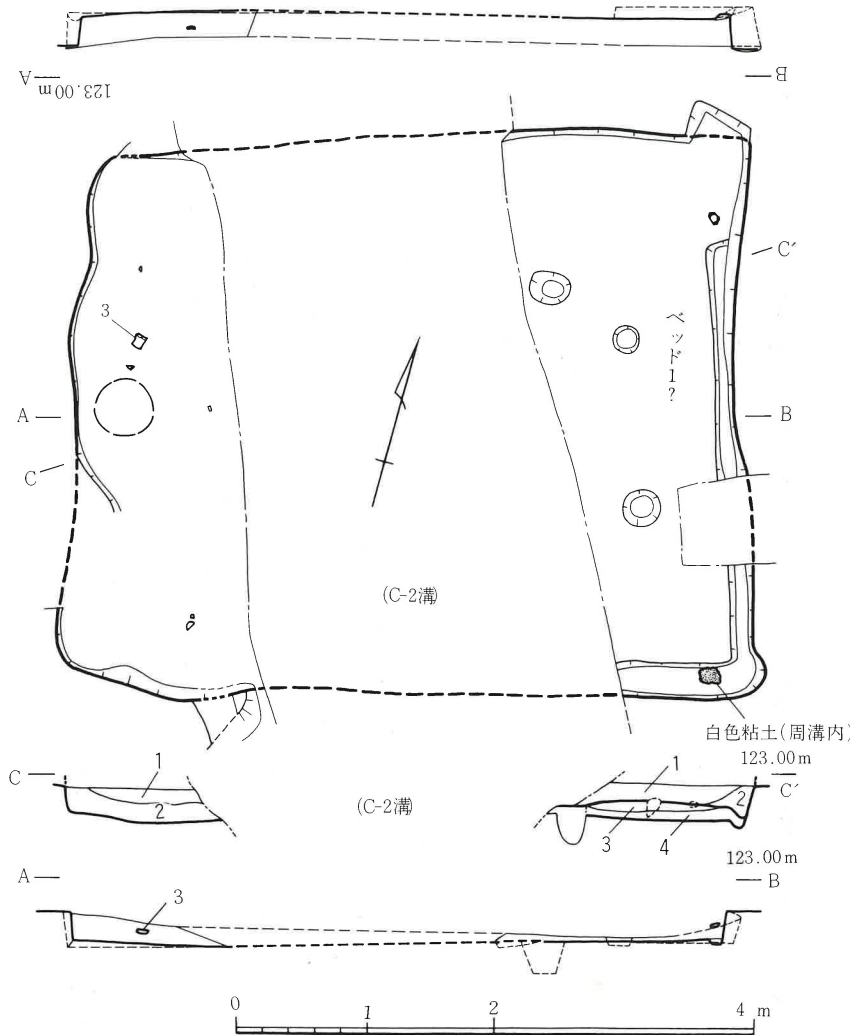
住居の時期は、竪穴の方向が1号方形環溝と一致するので1号方形環溝と併存した可能性が高く、それゆえ小迫辻原3期と推定される。（旧E地区土壌309）

C区-6号竪穴住居跡（第61・62図 → 図版23・52）

2号方形環溝のC-2溝に大きく両断された長方形の竪穴建物で、規模は東西550cm、南北440cmと東西に長く、残存部の深さは約25cmである。床面積は22.6㎡の中型竪穴で、東西長軸の方位角は76度である。柱穴は検出できず、その構造は不明である。周溝は東壁に沿って検出されたが、全周はしない。床面は踏みしめられて硬化したもののだが、ベッドかと推定される3層上面はそれほど硬化していない。床下土壌はなく内部の遺構は中央を大きく削り取られているので不明な部分が多い。残された西側と東側の床面の高さが異なるので、東側はベッド状遺構である可能性が強く、その場合、土層観察からみて盛土ベッド（4・3層が盛土）だと推定される。

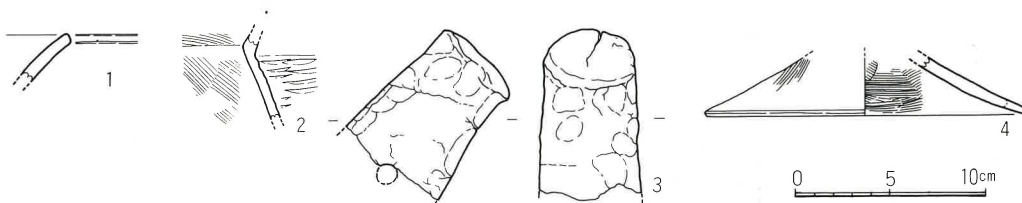
埋土は二層に分かれ、炭片・黄色土小ブロックをわずかに含む軟らかい黄褐色系の土である。遺物はきわめて少なく、土器片数点と周溝内で白色粘土が検出されたのみである。

廃絶祭祀による遺物一括廃棄の痕跡はなく、遺物のきわめて少ない点を考慮すると、埋め戻さ



- 1層：暗黄褐色軟質土（炭・土器片含む。）
 - 2層：暗褐色軟質土（炭・土器片、黄色粘土小ブロックを少し含む。）
 - 3層：黄褐色粘質土（土器片含む。）
 - 4層：暗褐色粘質土（土器片含む。）
- } 廃絶後の埋土
} 盛土か→盛土ベッドの可能性あり

第61図 C区-6号竪穴住居跡（1/60）



第62図 C区-6号竪穴住居跡出土遺物（1/4）

推定される。(旧E地区竪穴住居30)

C区-7号竪穴住居跡(第63~66図、写真7 →図版24・25・52~54)

2号方形環溝と1号条溝の間に位置する長方形の竪穴建物で、その規模は東西960cm、南北740cmと東西に長く、残存部の深さは約20~30cmである。床面積62.6㎡の小迫辻原遺跡では最大規模の大型竪穴である。東西長軸の方位角は65度で、1号方形環溝の方位と一致している。竪穴の平面形にあわせて配置された7ないし8本柱の構造である。柱が7本か8本か判断できないのは、土壌1の内側の柱筋の通る位置にピット1を検出したが、その位置には入口施設がおかれた可能性が高くやや不自然である。そのためP1を柱穴とは判断しにくいからである。8本柱とした場合、柱穴は2間×2間に配置され、コーナーの柱穴1・3・5・7が広く大きく掘られている。これに対し中間に位置する柱穴2・4・6・P1はより小さい。柱穴の深さは揃っているのに、この違いは立てられた柱の太さの違いを表わしていると考えられる。本来前者の柱穴を支柱とする4本柱構造で上屋を支えるはずであったものが、梁と桁の間が長すぎ、その間を支えるために後者の脇柱を入れたものと推定される。おそらく大型の竪穴建物を建てる技術に習熟していない集団による4本柱構造の建築であると思われる。ちなみに同規模の竪穴建物であるB-5住は、脇柱なしの4本柱構造で建てられている。周溝はなく、床面は踏みしめられて硬化したものである。不整形の床下土壌が3ヶ所検出されたがベッドとは対応していないので、竪穴掘削時の掘りすぎの可能性がある。なお床下土壌2の埋土中には23の高坏または台付鉢の脚部片が混入していた。

竪穴内部の遺構は次のとおりである。ベッド状遺構は2箇所あり、南西隅のベッド1は削り出しで造られ、北面中央のベッド2は床下土壌1を掘った後に、盛り土をおこなって造っている。炉はほぼ中心に1箇所あり、床面を皿状に掘り凹め、その中央に焼土面が形成された地床炉である。土壌は1箇所あり、南壁中央の壁に接して設けられた半円形の土壌1は、炉の南側に設けられる「対面土壌」にあたる。大型で底が平坦な点が通常の対面土壌と異なっている。層序の観察から廃絶時にはほぼ埋没していたと考えられる。この土壌1の埋土(6層)中から29の小型壺の破片が出土している。竪穴廃絶以前の住居使用中に混入したものである。以上の施設、特に炉とベッドの存在からみて、この竪穴建物は居住用の竪穴住居とみられる。ところで以上の内部遺構の他に、多数のピットや土壌状の掘り込みが検出された。それらは後世の遺構ではなく、廃絶時の遺物一括廃棄がおこなわれて後、その上部から掘り込まれたことが土層観察から明らかになった。これらとは別に後世のものであることが判明した掘り込みを除いたものを第64図に図化した(破線で下バのないものが後世のピット)。



写真7. C区-7号竪穴住居跡東北部遺物出土状態(北東から)

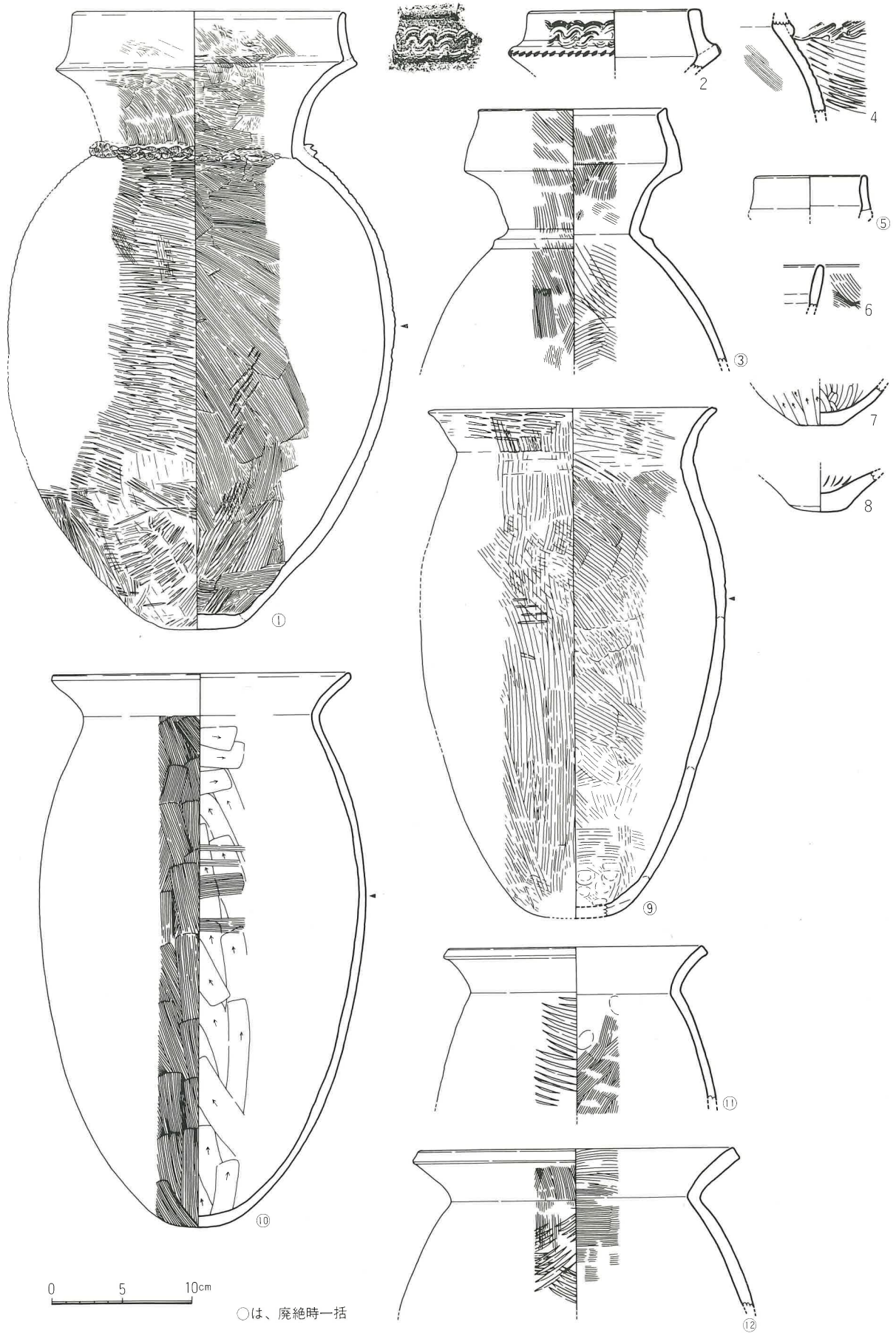
廃絶時にまず建物の取り壊しがおこなわれたことが、柱穴の上に土器あるいは焼土が廃棄されていたことからわかる。特に柱穴3の位置には40のミニチュア碗が完形で置かれていた。また柱穴1・2・3・5・7では抜取りのため柱穴が掘り広げられていた。次に焼却行為を伴う祭祀行為がおこなわれている(第64図)。そして床面上に炭片・焼土を多量に含む暗褐色の4層が、竪穴の床面全体に広がる。この層には焼土層・炭層と炭化した木材や茅を



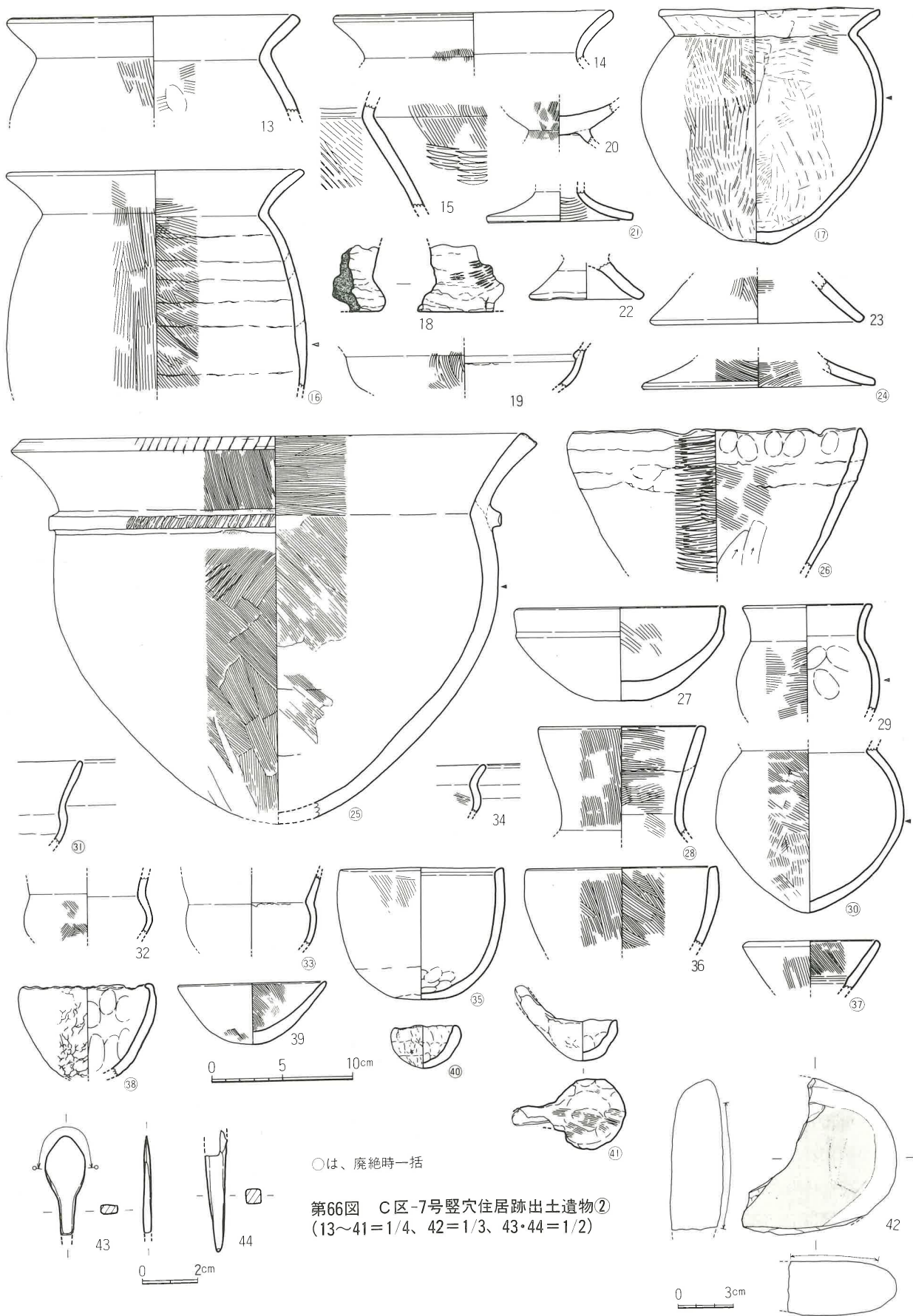
多量に含み、堅穴の周縁部を中心に廃棄されている。この焼却廃棄物はおそらく取り壊された建物構造物の名残であろう。同時に多量の遺物一括廃棄が認められる。床面そのものには被熱の痕跡は認められないので、堅穴内部で焼却がおこなわれたとは考えられないが、この堅穴廃絶時の焼却行為の片付けが、この堅穴を対象に行なわれた点を指摘できる。また床面上では柱穴以外の多数の不定形の掘込みが認められ、その埋土中の土器片が4層の一括廃棄土器と接合する例が多い。土層断面を観察すると、4層を切って掘り込まれ内部に2層の土が堆積する掘込み、2層を切って1層土が堆積する掘込みや、あるいは1層上から掘込まれて床面に達するものなど様々である。遺物一括廃棄の後の埋め戻しの段階や、その後の埋没後などに、意図的に掘込みがおこなわれていると推定される。出土遺物や埋土の状態からみて、古墳時代前期前半の間におこなわれた掘込みである。さてこの4層の焼却廃棄物とともに廃棄された遺物の出土状態は、堅穴の床面に完形のまま置かれたものと、4層廃棄と同時に一括して大型破片のまとまりとして廃棄されたものに分けることができる。完形のまま置かれたものは、さきにふれた40のミニチュア碗1点である。一方大型破片のまとまりで廃棄されたものは1～3の壺、5の小型壺、9～12・16・17の甕、21の台付鉢、24の高坏、25・26の鉢、28の直口壺、30の小型甕、31・33・35・37・38の小型鉢、41の把手付き碗などがある。そのうち1の壺は大型破片で重なった状態で出土し、復元すると完形となった。3の壺の上半は破片が散在し、9の甕は一ヶ所に大型破片がまとまるが、復元すると破片が足りない。10の甕は1の近くで一ヶ所に大型破片がまとまるが、完形にはならない。11・16の甕も上半部のみの破片が一ヶ所でまとまって出土し、17の甕は9のそばではほぼ完形に近い破片がつぶれた状態で出土した。25の大型鉢も大型破片が分散して出土した。30の小型甕は頸部を失った胴部完形品で、破片となって散乱していた。35の小型鉢は1と10の間に破片がまとまりほぼ完形に復元できた。また41は完形品のまま廃棄されていた。他に42の半分に割れた磨石と、43の鉄鏃も土壌1の上部から出土して一括廃棄遺物に含まれる。以上の出土状態からみて、堅穴の外でおこなわれた祭祀後にこのような片付け方をしたものと推定される。その上に基盤層に由来する黄色土の小ブロックを多量に含む3～1層が堆積する。ところどころに黄色土ブロックの単位があり、明らかに焼却廃棄物と遺物の一括廃棄の後に埋め戻されている。その3～1層からは2・6の壺口縁片、4の壺頸部片、7・8の甕底部片、13・14の甕口縁部片、15の甕頸部片、18の支脚片、19の高坏片、20・22の台付鉢片、27の精製の鉢の破片、32・34・36の小型鉢片、39の碗片などが含まれていた。ただし3～1層出土遺物と4層出土の小破片の土器は、埋没後の掘込み時に混入した可能性が残るが、取り上げ時には区別できなかった。

以上の堅穴廃絶時の状況をまとめると、①柱を含む堅穴建物の構造物が取り払われ、②この堅穴住居跡の外で焼却行為を伴う祭祀がおこなわれ、③その祭祀の焼却廃棄物と遺物群が廃棄されている。④祭祀および廃棄終了後、堅穴は埋め戻される。⑤その後この堅穴は繰り返し掘込みがおこなわれる。以上の祭祀は堅穴住居廃棄時に際しておこなう廃絶祭祀であると推定される。しかもその後もこの堅穴跡に掘込みが繰り返されるのは、他に小迫辻原遺跡では類例がない。

出土遺物のうち土器は胎土からみて大多数は在地産であるが、7・17の甕Bと33の小型鉢は胎土に石英粒を多く含み、搬入品の可能性が高い。27は砂粒をほとんど含まない精良な胎土を使用した精製品である。また9～17の甕の多くは被熱している。ほかに33と35の小型鉢が被熱しているのが注目される。さて1～5は在地系の複合口縁壺A、1は平底風のレンズ底で、外面にタタキ痕が顕著で下半の一部にケズリ調整が見える。2の口縁外面には櫛描波状文が施される。3は豊後沿岸部の安国寺式の壺に似る。6は単口縁の壺A、7と8は伝統的V様式系の壺Bの底部で、7は外面にヘラケズリがみえ、8は内面にくずれた簾状のハケ痕がみえる。9～16は在地系の甕Aで、9は平底気味である。外面タタキが残り内面はハケメ調整の9・11～13・15・16とタタキを完全にハケ消し内面にヘラケズリが施された10の甕がある。17は平底が残り、外面をハケで仕上げる伝統的V様式系だが、内面はヘラケズリをナデ消した庄内・布留系の影響が認められる甕Bである。18は外来系の支脚D。19は在地系の高坏A。20～22は在地系の台付鉢A。23と24は高坏または台付鉢の脚部。25は在地系の大型鉢A。26は接合痕がよく残り外面はタタキのままで内面の下半にヘラケズリが施された粗製の鉢Aで、製作途中の半製品を焼成したようにみえる。27は精製胎土の鉢で外面は丁寧なナデ仕上げ。28は在地系の直口壺A、29も在地系の小型壺A。



第65図 C区-7号竪穴住居跡出土遺物① (1/4)



30は外来品の器形を模倣した小型甕で、内面はナデ仕上げ。31～34は布留系の小型鉢D。35と36は在地系の小型鉢A。37は器種不明の小型土器の口縁部。38は手づくねの鉢A。39は在地系の碗A。40と41は手づくねのミニチュア碗Aで、41には把手がついている。以上の土器の他に、42は凝灰岩質安山岩製の磨石、43は茎部を一部欠失した柳葉形の鉄鏝で実用品である。44は大型の鉄鏝の茎部と思われる鉄器片である。土器のうち壺と甕の大半は在地系のA類であるが、小型器種の中には外来技術の影響は認められる土器が多い。

この堅穴住居建設の時期は、堅穴の方向が1号方形環溝とほぼ一致しているので1号方形環溝と併存した可能性が高く、小迫辻原3期と推定される。廃棄の時期は、在地系の壺・甕に古い型式の土器がかなり含まれるとはいえ、10や17の甕や小型器種の特徴から小迫辻原3期でも古い時期と推定される。(旧E地区堅穴住居19)

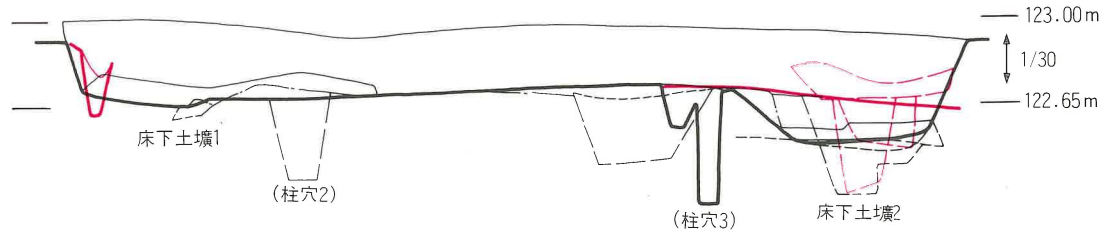
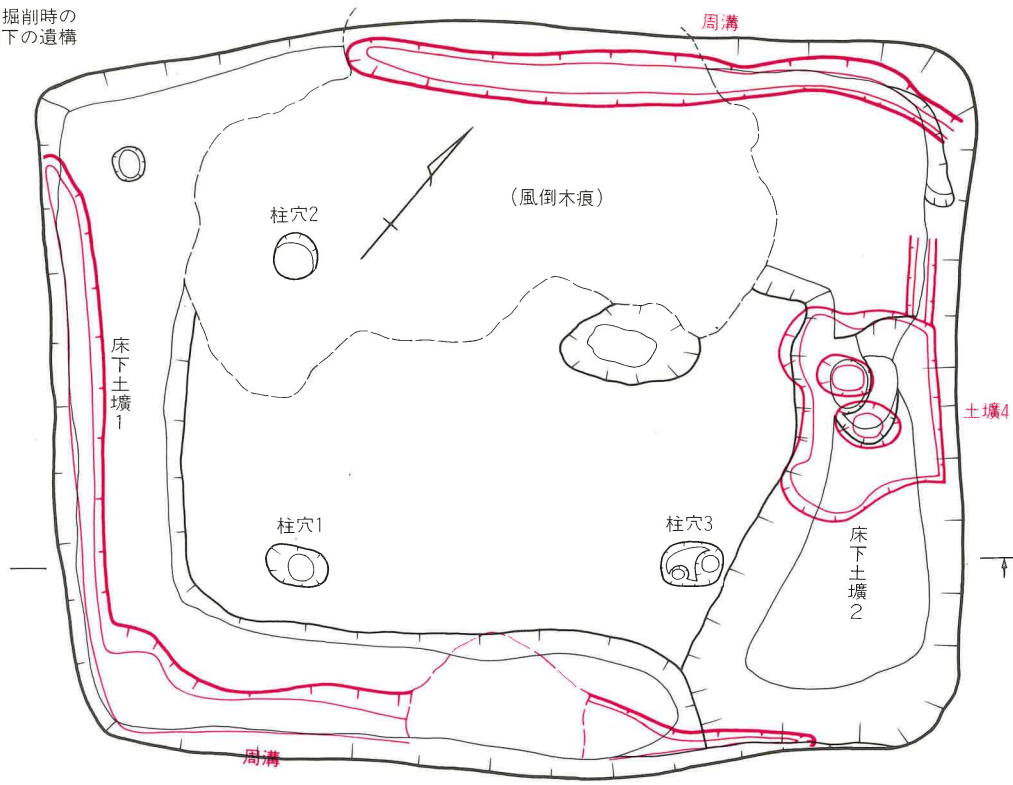
C区－8号堅穴住居跡(カラー図版下、第67～72図、写真8 →図版24・26～29・54)

C-7住の東北に位置する長方形の堅穴建物で、その規模は東西長軸長730cm、南北短軸長580cmと東西に長く、検出面からの深さは約30cmである。床面積は36.4㎡の比較的大型の堅穴である。東西長軸の方位角は49度で、ほかの同時期のどの遺構とも方向が合わない。堅穴の平面形にあわせて配置された4本柱の構造である。柱穴の深さはよく揃っている。周溝はほぼ全周し、土層の観察からみて建設時に掘られた壁材固定用の溝である。床面は黄色粘土を混ぜた土(10層)を用いた貼り床で、ベッドの床まで丁寧に貼られている。堅穴の四周をめぐるように床下土壌が検出されたが、ベッドとは対応していない。このような床下土壌は類例がなく、ある深さまで堅穴を掘ったところで掘りすぎに気づき、床面の高さを調整した可能性がある。もしそうだとすれば、堅穴建物の掘削方法についての興味深い例となる。すなわち、まず堅穴の輪郭を決定し、次にその輪郭の内部を方形周溝状に溝を掘り、最後に残された内部の方形の高まりを削り取って、底面の高さをあわせていくのである。堅穴を深くする場合には、おそらくこの過程を繰り返すと考えられる。

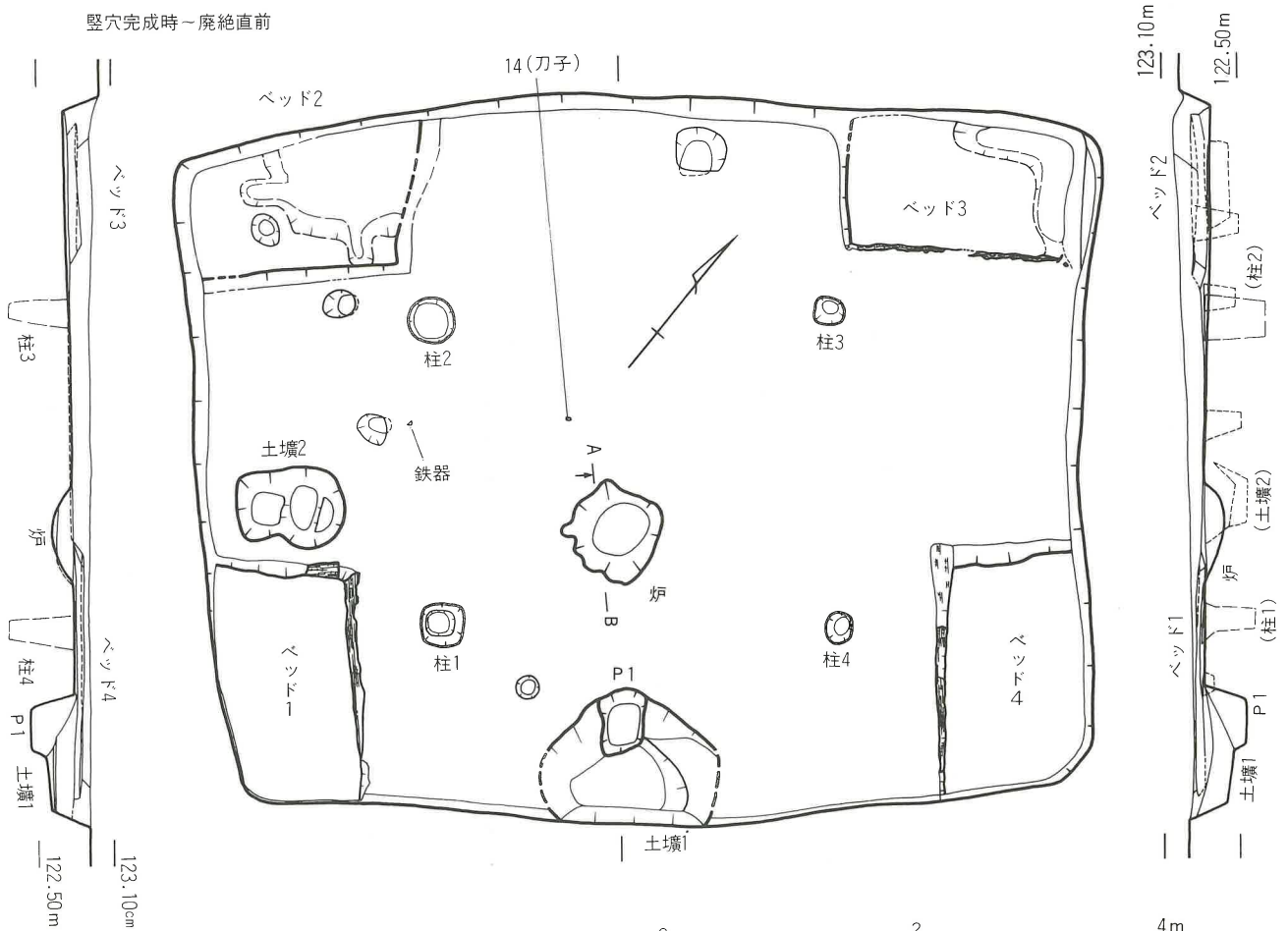
堅穴内部の遺構は次のとおりである。ベッド状遺構は四隅に1箇所ずつ計4箇所あり、北辺のベッド2と3は東西に長く、南辺のベッド1と4は南北に長く構築されている(第67図)。ベッドはすべて床下土壌を埋めてから盛り土によって整形されたものである。ところでベッド1・3・4では、後述する廃絶時の焼却行為のために、ベッド状遺構を固定した枠板の木材が炭化して残っていた(第68・69図)。ベッド1では長辺と短辺の二枚の板材が、ベッド3・4では長辺の板が検出された。いずれもベッドの高さ以上には伸びず、ベッドの枠を固めた板と推定される。したがってベッド状遺構はまさに作り付けられた土の段なのであって、間仕切りで小部屋になっていたのではないことが明らかになった。その構築方法は、まず盛り土をベッド状に盛り、同時にベッドの高さと長辺と短辺の長さにあわせた二枚の木製の板を用意し、次にその板をベッドの壁に取り付け、さらに外側に粘土をはって固定するものであった。同時にベッドと板の隙間には粘土を詰めている。ベッドのコーナー部の板の結合方法は観察できなかったが、その部分で板がしっかりと結合されていたことは疑いない。またベッドの床面は貼り床がなされているので土の床と考えられるが、ベッド4ではその壁からベッドの床面に伸びる炭化材の一部を検出している。そのことからベッド4の床には板を張っていた可能性がある。なおベッドの炭化材は切り取って保存している(写真8)。炉は中央からやや南東に偏った位置に1箇所あり、床面を皿状に掘り凹めているが、底面には焼土面がない。炉床の土がなくなっているのは削り取られたためとも考えられるが、はじめから内部に灰をつめる構造の「灰床炉」である可能性もある(第69図下)。土壌は2箇所あり、南壁中央の壁に接して設けられた半円形の土壌1は、炉の南側に設けられる「対面土壌」にあたる。廃絶直後に堆積した土(3層)がその上部に堆積しているので、少なくとも上半は最後まで開口していたと見られる。西壁近くで検出した土壌2も性格は不明だが、廃絶直後の土で埋没している。また土壌1に重複してピット1が掘られている。おそらく梯子を固定するための入口施設の基礎と考えられる。なお床面下で、床下土壌と重複する土壌4を検出している。おそらく堅穴使用中一時的に掘られたものであろう。以上のような構造および炉とベッドの存在からみて、この堅穴建物は居住用の堅穴住居とみられる。

使用時の状況を推察させるものとして、貼り床にはまりこんだ遺物が検出されている。4の土師器脚部片、14の刀子の破片と図示していない小鉄片の2点である。使用中に偶然床に落ちて踏み込まれたものと推定される

竪穴掘削時の
床面下の遺構

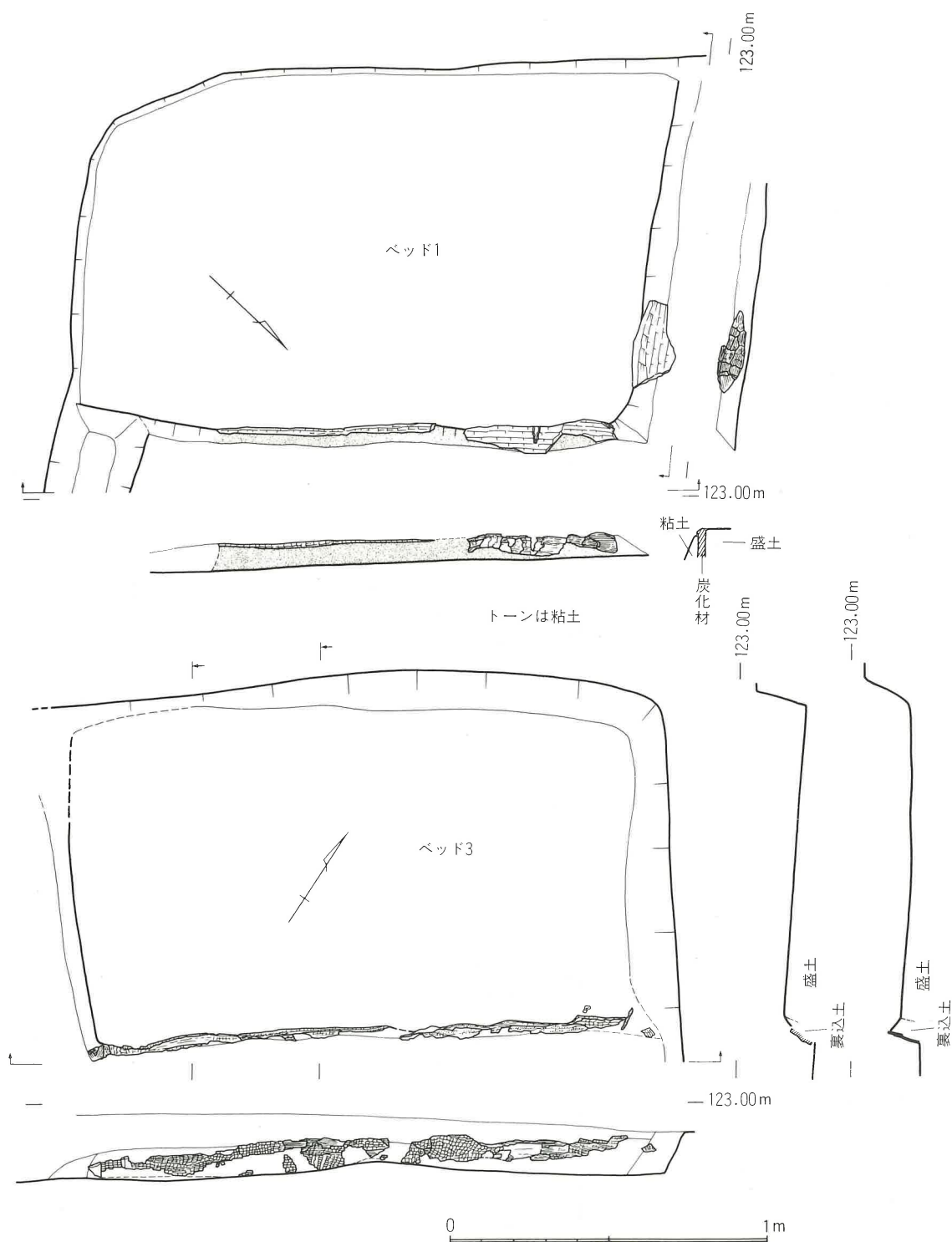


竪穴完成時～廃絶直前



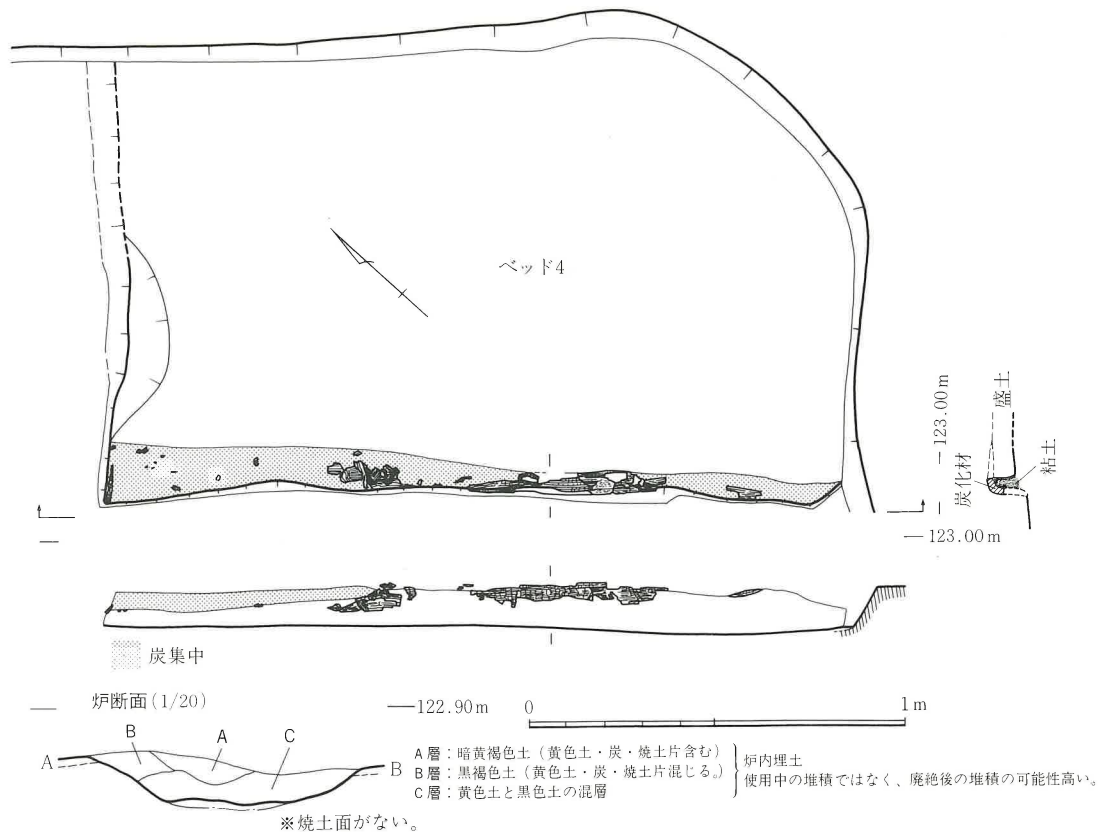
第67図 C区-8号竪穴住居跡①-竪穴内遺構-(1/60)

(第67図下)。また廃絶時に建物の取り壊しがおこなわれたことが、柱穴の柱痕内に3の甕の破片の一部が検出されたことからわかる。ただし柱が抜かれているので上屋の構造物は取り払われたであろうが、ベッドの枠板が焼け残っていたので、竪穴の壁やベッドに使われた板材はそのままにしていたものと推定される。遺物の出土状態(第71図)は、一見火災にあった住居のように見えるがそうではない。多くの遺物は炭化材や焼土などの焼却廃棄物の上に重なって出土し、たとえば13の石皿は炭化材の上に乗ったまま焼けてはじけているし、火事でそのまま残されたと推定される出土状態の遺物はなく、第一焼却廃棄物と伴出した土器の破片には被熱の痕跡がない。したがって多量の焼却遺物は、次のような焼却行為を伴う祭祀行為がおこなわれた痕跡であると考えられる。ま



第68図 C区-8号竪穴住居跡② -ベッド1・3-(1/20)

ず焼却に先立って遺物を含まない9～7層が堆積する。この層は竪穴の北西側からベッド1・2のあたりにのみ認められ、おそらくベッド2で枳板の炭化材が検出できなかったのは、以上の層が被っていたために焼けなかったからであると推定される。その類例はB-5住とB-10住でも認められ、焼却物を持ち込むための出入口と



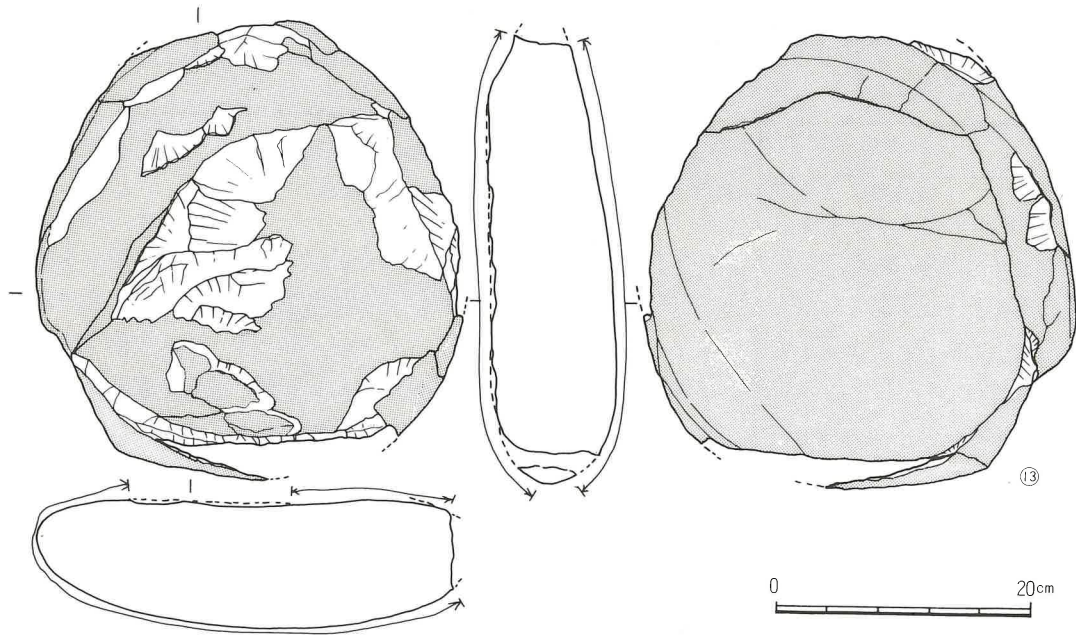
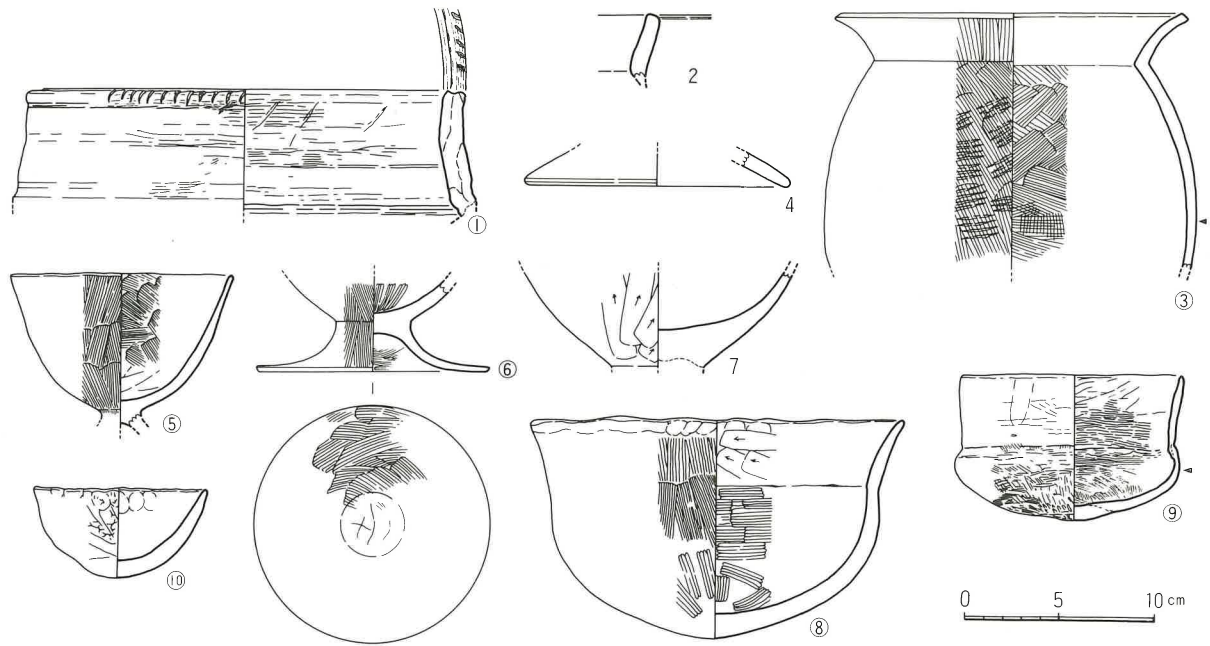
第69図 C区-8号竪穴住居跡③-ベッド4と炉の層序(1/20)

して「斜面」を設けた可能性が高い。そして次に床面上に炭片・焼土を多量に含む黒褐色の4層と3層が竪穴の床面全体に広がる。この層には焼土層・炭層と茅を多量に含み、特に炭化材が竪穴中央を中心にきわめて多かった(C区カラー図版下)。ベッドの枳板がそのままの状態炭化している点からみて、竪穴内部で焼却がおこなわれたことは確実である。同じ状態はB-5住でも認められた。さらに同時に遺物一括廃棄が認められる。その遺物の出土状態には、①焼却直前に廃棄されたもの、②焼却時にいっしょに焼かれたもの、③焼却後に置かれたもの、④焼却後に破片として廃棄されたもの、⑤特殊な出土状態を認めた鉄鏃群に分けることができる。①の焼却直前に廃棄されたものは8の鉢1個体で、床面上に破片が散在しその上に炭化材がかぶさっていた。ほぼ完形に復元でき、破片の一部は隣のC-7住の上層からも出土した。②の焼却時に焼かれたものは13の石皿1点で、炭化材の上に重なり、被熱して周縁部が剥離していた。完形品を焼いたものである。③の焼却後に置かれたものは10の粗製の碗1点で、炭層の上から正位で検出され被熱していなかった。④の焼却後に破片として廃棄されたものは1の壺口縁部片、3の甕上半部、5と6の台付鉢片、9の小型直口壺片である。そのうち3の甕上半は破片が散在し一部は柱穴の抜き取り痕に混入していた。9の小型直口壺も破片で散在し炭化材の上で検出した。その破片の一部は1号方形環溝C-1溝の南側の上層からも出土した。なお2の壺口縁部片と12の完形の土鍾はそれぞれ床面の直上で出土したもので、廃棄されたものか竪穴使用中の品物が偶然残されたものか判然としない。さて⑤の特殊な出土状態の鉄鏃群



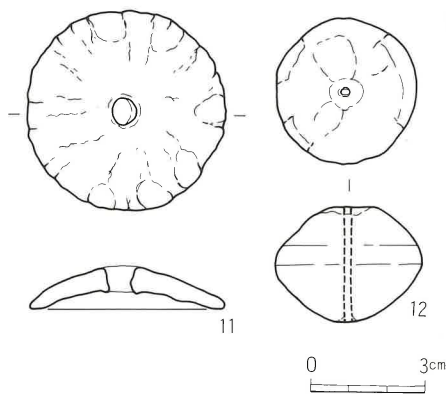
写真8. C区-8号竪穴住居跡ベッド3枳材とりあげ風景

(第72図)とは15～21の7本の鉄鏃で、15～18は炭化

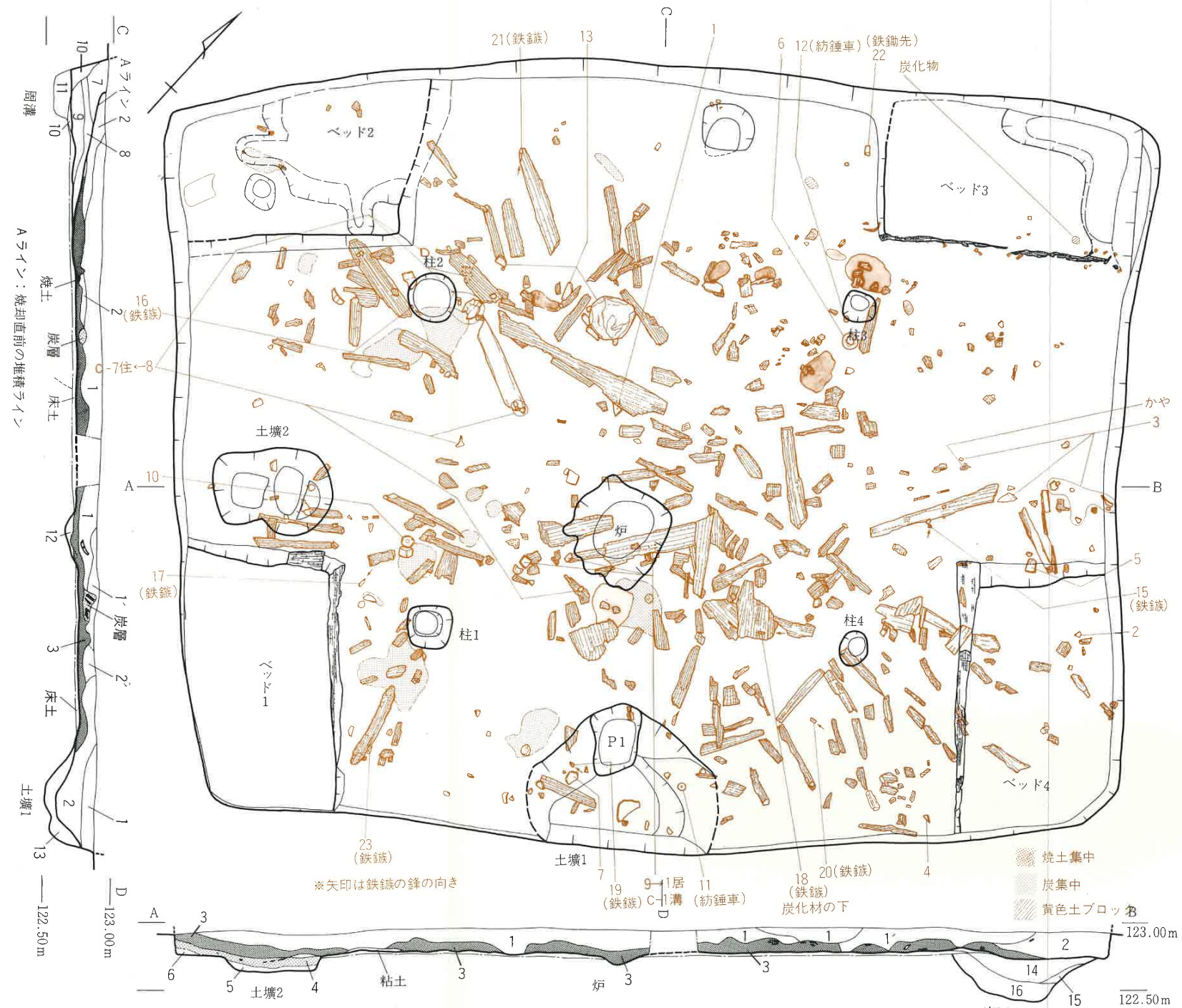


○は、3層廃絶時一括

第70図 C区-8号竪穴住居跡出土遺物① (1~10=1/4、11・12=1/2、13=1/6)



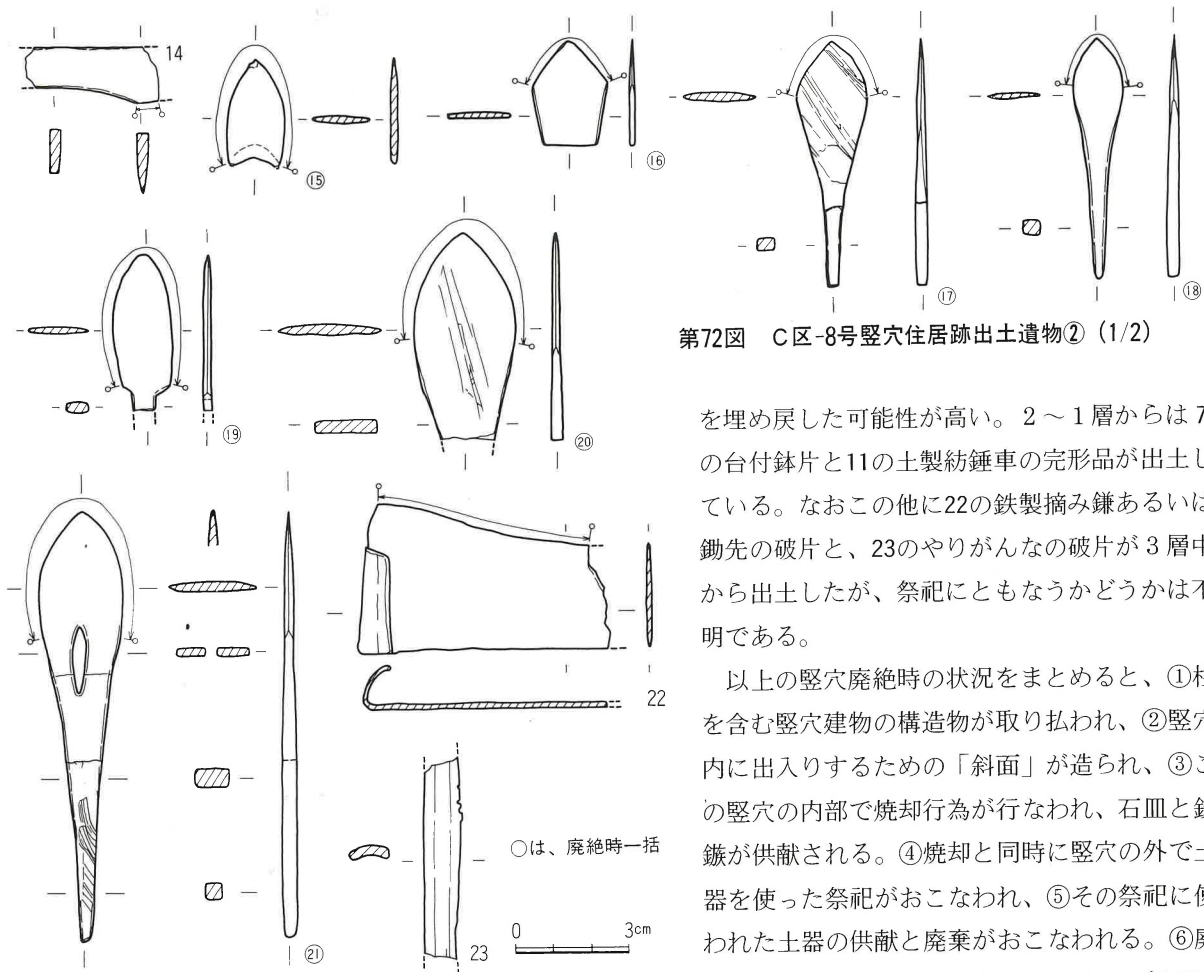
材の下あるいは床面直上で発見され、19~21は炭化材の上に乗るか、やや浮いて検出された。出土状態から見て焼却の前後に遺棄されたことは確実である。19と20は茎部が破損し、15~18の実用品とみられる鉄鏃には装着痕が認められないのに対して、実用品とは認めがたい大型の21の鉄鏃には木質が付着した装着痕がある。おそらく焼却時の祭祀の一環として、21の儀礼の矢1本の供献と、矢を象徴するものとして6本の鉄鏃が供献=廃棄されたものと考えられる。以上の焼却と廃棄の後、その上に黄褐色で遺物の少ない2~1層が堆積する。ところどころに黄色土ブロックの単位があり、焼却廃棄物



- 1+1層：暗黄褐色土（炭片を多く含む。）
- 2層：やや黒かった暗黄褐色土（炭・焼土片を多く含む。）
- 2'層：暗黄褐色土（炭片・黄色土粒子含む。）
- 3層：黒褐色土+炭化材の堆積層（炭や、焼土の集中、炭化材の上下に土器・鉄器が多く出土）→床面上に直接堆積
- 4層：暗黒褐色土（炭化材・炭・土器片含む。）→土壌2上部に堆積=土壌2は廃絶時には開口している。
- 5+6層：黄褐色軟質土（やわらかく、炭など全く含まず。）→竪穴使用中の堆積。
- 7層：暗黄褐色土（炭・黄色土粒子少し含む。）
- 8層：黄褐色粘質土（ややかたく、焼土片・黄色土粒子含む。）
- 9層：暗黄褐色土（炭少し含む。）

- 10層：明黄褐色土（かたく、きれいな土）→床土および壁の化粧土か。
- 11層：やや青みがかかった黄褐色土（炭など全く含まず）→周溝埋立土。
- 12層：=断面A層
- 13層：暗黄褐色軟質土（土器など全く含まず）→土壌1下部埋土
- 14層：暗褐色軟質土（ばさばさし、黄色土小ブロック・炭片多く含む）
- 15層：淡黒褐色軟質土
- 16層：暗黄褐色土（炭・土器片含む。）

第71図 C区-8号 竪穴住居跡④ -遺物出土状態と層序- (1/40)



第72図 C区-8号竪穴住居跡出土遺物② (1/2)

を埋め戻した可能性が高い。2～1層からは7の台付鉢片と11の土製紡錘車の完形品が出土している。なおこの他に22の鉄製摘み鎌あるいは鋤先の破片と、23のやりがんなの破片が3層中から出土したが、祭祀にともなうかどうかは不明である。

以上の竪穴廃絶時の状況をまとめると、①柱を含む竪穴建物の構造物を取り払われ、②竪穴内に入りするための「斜面」が造られ、③この竪穴の内部で焼却行為が行われ、石皿と鉄鎌が供献される。④焼却と同時に竪穴の外で土器を使った祭祀がおこなわれ、⑤その祭祀に使われた土器の供献と廃棄がおこなわれる。⑥廃棄終了後、竪穴は埋め戻される。以上の祭祀は

竪穴住居廃棄時に際しておこなう廃絶祭祀の一例であると推定される。

出土遺物のうち土器は、胎土からみてすべて在地産で、被熱した破片はない。さて1と2は在地系の壺Aで、1は複合口縁壺、2は単口縁壺である。3は伝統的V様式系の壺Bで、外面は右上がりのタタキ痕が残る。4は高坏あるいは台付鉢の脚部片である。5と6は在地系の台付鉢Aである。7も在地系の台付鉢Aであるが、外面にヘラケズリが認められる。8は内外面を丁寧にヘラミガキした在地系の鉢A。9は外面下半に軽いヘラケズリの後にハケとタテ方向のヘラミガキを施す小型直口壺で、畿内系小型精製土器の製作技術の影響が認められる。10は粗雑な造りの在地系の碗A。以上土器の大半は在地系のA類であるが、一部に外来技術の影響が認められる。土製品には11の径5.3cmの手づくねの紡錘車と12の土錘がある。石器としては安山岩製の13の石皿がある。重さ約17kg。鉄器は14が刀子基部片。先に触れた7本の鉄鎌のうち、15は無茎凹基の磨製石鎌の材質転換したもので重量2.3g。16は定角式に似た無茎平基の五角形の鉄鎌で、重量は2.0g。17と18は柳葉形の鉄鎌で、重量は前者が4.9gで後者は3.4g。19は有茎の柳葉形で茎部の先端は破損している。重量約4.5g。以上は重量や造りからみて、実用に耐える鉄鎌である。20の茎部を欠失した柳葉形鉄鎌は大型で、残部の重量が14.3gある。21は有孔の柳葉形鉄鎌で完形品。装着痕が認められ重量は15g。20と21は造りと重量からみて儀器的可能性が高い。ほかに22は摘み鎌の破損品で、刃部はかなり使い込まれている。23はやりがんなの破片である。

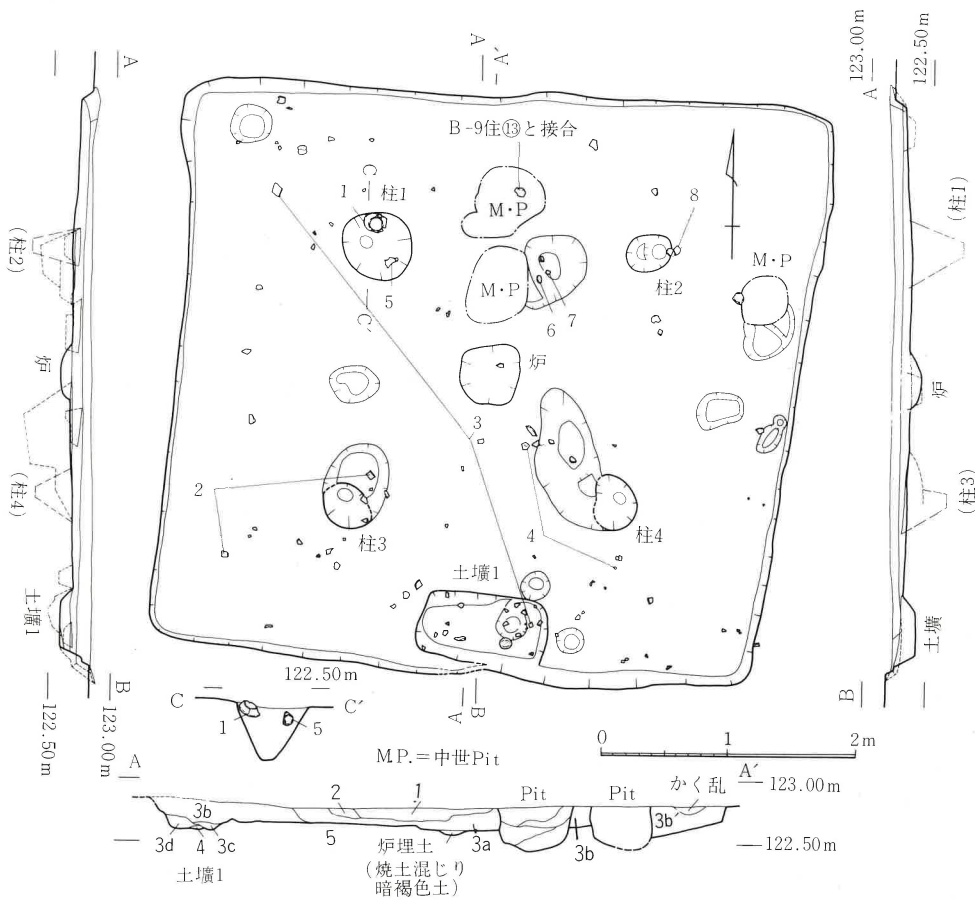
以上のように異例の廃絶祭祀の状況が判明したこの竪穴住居建設の時期は、竪穴の方向からみて1号方形環溝以前であり、また隣接する小迫辻原3期のC-7住と近すぎて併存する可能性はないことから、小迫辻原2期と推定される。廃棄の時期は、廃絶祭祀に伴う土器からみて小迫辻原2期末と推定される。おそらくこの竪穴住居跡がC-7住に建て替えられたと考えられる。(旧E地区竪穴住居18)

C区-9号竖穴住居跡 (第73・74図 →図版30・55)

1号条溝の西数mに位置する方形の竖穴建物で、C-7建物・C-8建物(中世)と重複している。規模は東西510cm、南北490cmと東西にやや長く、残存部の深さは約20cmである。床面積は21.4㎡の中型の竖穴である。東西長軸の方位角は93度で、南北軸は真南北に近い。方位はB-11住の方向と一致する。竖穴の平面形にあわせて配置された4本柱の構造である。柱穴の深さはよく揃っている。床下土壌と周溝はなく、床面は踏みしめられて硬化したものである。竖穴内部の施設として炉1箇所と土壙1箇所が検出された。中央にある炉は浅く凹み、焼土は入るが底面は焼けていないので、通常の地床炉とは異なる形式の炉であると推定される。南辺中央の壁に接する長円形の土壙1は、炉とセットになる対面土壙である。内部に廃絶直後の土(3b層)の堆積が認められるので、少なくとも竖穴廃絶時にはこの土壙は開口していたと推定される。床面中央に簡便だが炉施設をもつ点と、竖穴規模が20㎡をこえる中型規模である点から、居住用の竖穴建物と推定される。床面にめりこんだ4の高坏片

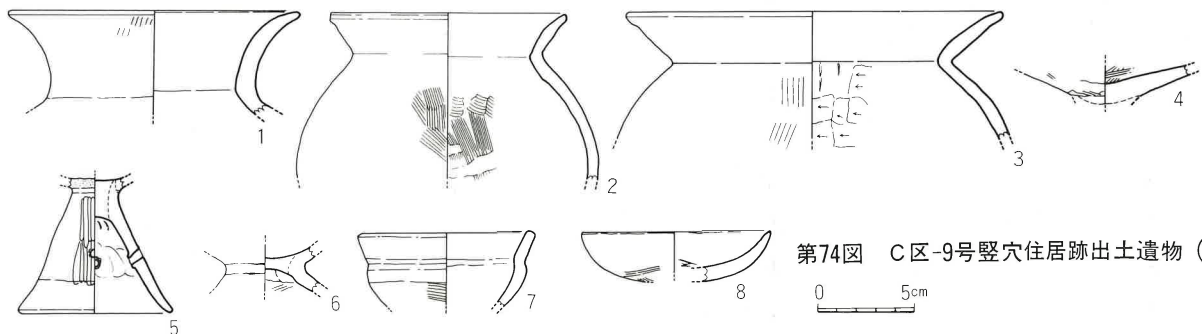
はその使用中に偶然落ちて踏み込まれたものであろう。

廃絶時の状況を示すものとして、柱穴1の抜き跡北側に逆さに置かれたと推定される壺の口縁部1を検出し、そのそばのから小型器台5の脚部片を検出した。廃絶時にはまず建物の取り壊しがおこなわれたことが、このことからわかる。また土壙1の埋土3c層からその上位の3b層中に土器小片の集中がみられ、その中には甕3の破片が含まれた。2の甕も床面上に破片が散在していた。1の壺は口縁部のみ完形でおそらく意図的に割り取られたもので、5の器台も脚部のみ完形で坏部



- | | |
|-----------------------------------|------------|
| 1層：黒色軟質土 | } 土壙、下部の埋土 |
| 2層：黒褐色軟質土 | |
| 3a層：暗褐色軟質土(焼土片まじる) | |
| 3b層：茶褐色軟質土(土器片・炭まじる。) | |
| 3b'層：暗黄褐色軟質土(黄色土ブロック。) | |
| 3c層：黄茶褐色軟質土(小礫含む) | } 土壙、下部の埋土 |
| 3b層：暗茶褐色軟質土(土器片・炭片含む) | |
| 4層：明茶褐色軟質土(黄色粘土ブロック含む。)=3b層と5層の混土 | |
| 5層：黄褐色粘質土→地山 | |

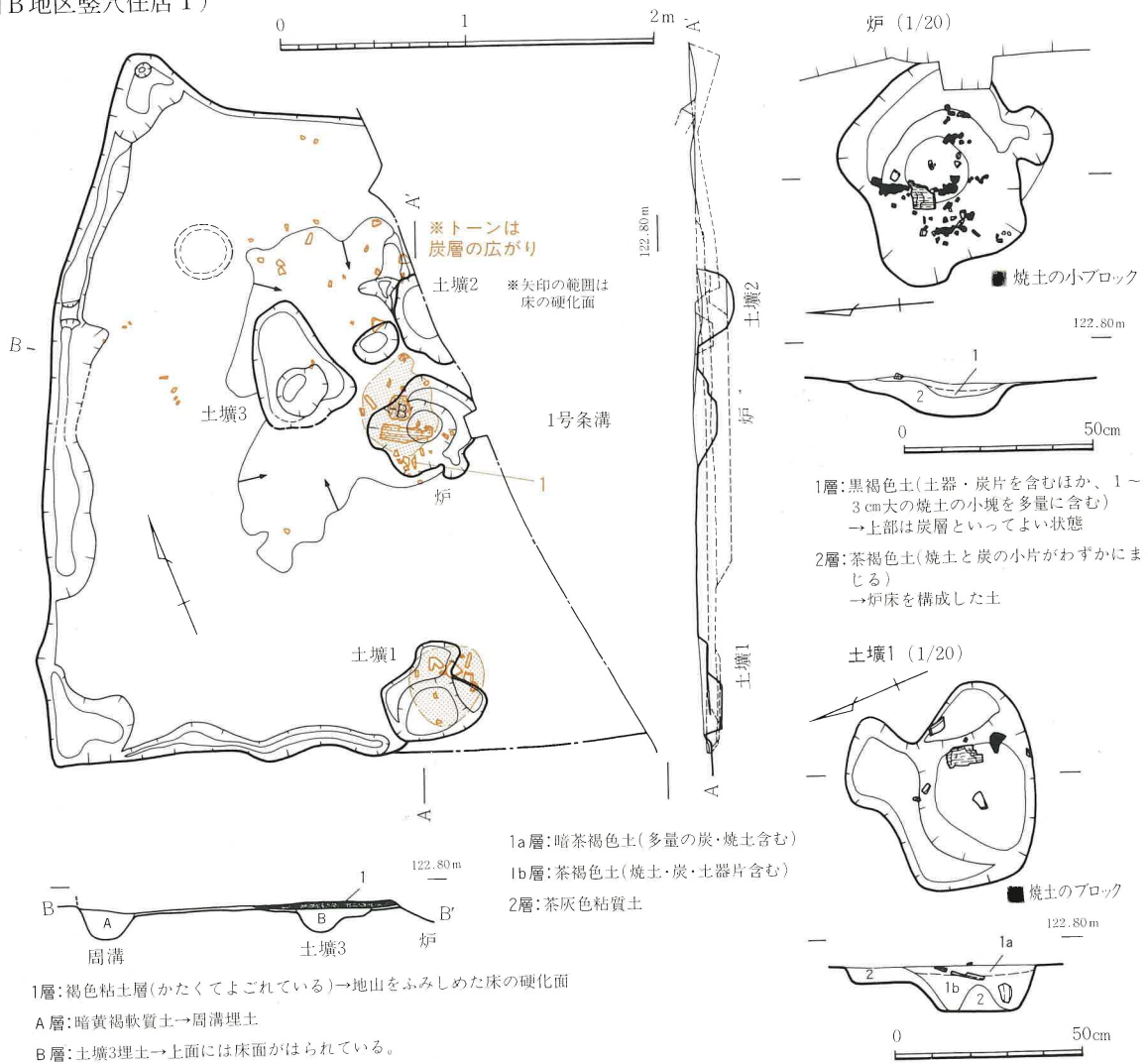
第73図 C区-9号竖穴住居跡 (1/60)



第74図 C区-9号竖穴住居跡出土遺物 (1/4)

を取り除かれている。したがって1・5は竪穴廃絶時に意図的に置かれた土器、すなわち廃絶時の祭祀行為に関わる遺物と推定される。3などの土壙廃棄遺物もそれに関わるかと推測される。なお焼却廃棄物は認められない。埋土は上層の2層から1層になるほど黒色化していき、同時にレンズ状の堆積を示すので、廃絶時の祭祀後は竪穴は放置され自然埋没していったと推定される。この2層からは8の碗片が出土している。なお6と7の小型土器の破片は竪穴を切る中世の柱穴内に混入したもので、この住居の遺物と推定されるものである。

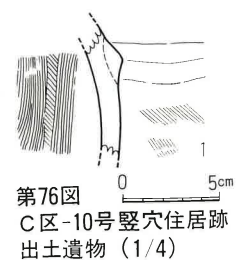
出土遺物のうち土器は胎土からみてすべて在地産であり、被熱を確認できるものはない。1は在地系の単口縁壺。2は布留甕を模倣した在地系の甕Aで、3は内面ヘラケズリの技術的に布留系の甕D。5は布留系の小型器台Dで外面にタテ方向のヘラミガキを施す。6は在地系の台付鉢Aである。7は外来系の形態を模倣した小型鉢D、8は在地系の碗Aである。竪穴住居の時期は、竪穴の方向と出土土器からみて小迫辻原4期と推定される。(旧B地区竪穴住居1)



第75図 C区-10号竪穴住居跡 (1/40・1/20)

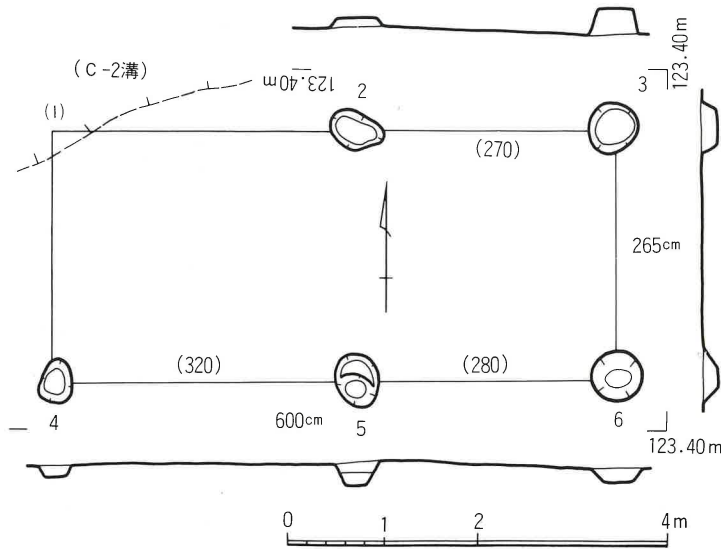
C区-10号竪穴住居跡 (第75・76図 →図版30)

長方形と推定される竪穴建物で、1号条溝C-4溝に東半分を切られている。規模は東西330cm以上、南北370cmとなり、竪穴のほとんどを削平されていて床面がかろうじて残る状態であった。床面積は7.6㎡以上の小型の竪穴である。東西長軸の方位角は113度で、B-6住の方向と一致する。柱穴はなく無柱穴の構造の上屋であったと推定される。一見土壙3が柱穴のように見えるが、その上には床の硬化面が形成されているので、柱穴とは考えにくい。また東辺から南辺にかけて周溝が検出される。床面は踏みしめられて硬化した



もので、とくに中央部は顕著であった。土壙3が床面を刳いだときに検出されたが、床下土壙にしては他の例と位置・規模が異なっている。竪穴内部の遺構は次のとおりである。炉は中央に1箇所あり、床面を皿状に掘り凹めて造っている。内部には炭片と1～3cm大の焼土塊が多量に含まれた黒色土（1層）が堆積し、焼土面は形成されていない。その構造は、焼土と灰を混ぜた炉床を設けた「灰床炉」とよんでよいものである。ちなみにB-6住とD-1住でまったく同じ構造の炉を検出している。土壙は3箇所あり、南壁中央の壁の近くに設けられた土壙1は、炉の南側に設けられる「対面土壙」にあたる。その底が平坦で二段になっている点が、通常の対面土壙と異なっている。そして廃絶直後に堆積したと推定される土（1層）が内部に流れ込んでいるので、廃絶時まで開口していたと推定される。炉の北で半分だけ検出できた円形の土壙2は、炉と関連する可能性が高い。炉と対面土壙の存在からみて、この竪穴建物は小規模ながらも居住用の竪穴住居とみられる。

埋土はほとんど消失していたが、床面には小炭化材や焼土片・炭片等が附着している。焼却廃棄物を投棄した廃絶祭祀がおこなわれた可能性は高い。床面から1の在来系の壺Aの胴部片が出土している。竪穴住居の時期は、1号条溝に切られること、B-6住との竪穴方向の一致から小迫辻原2期と推定される。（旧B地区竪穴住居7）



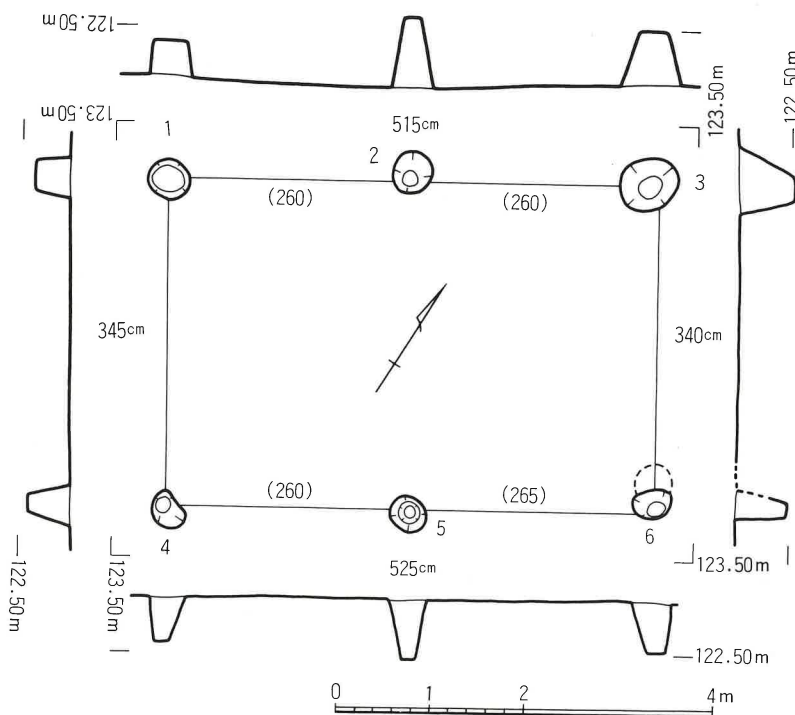
第77図 C区-3号掘立柱建物跡 (1/80)

4) 掘立柱建物跡 (第2表)

2間×1間の構造の掘立柱建物跡を2軒検出している。建物の方向に基づいて、この時期と認定した。

C区-3号掘立柱建物跡 (第77図
→図版31)

2間×1間の掘立柱建物跡で、コーナーの柱穴が2号方形環溝のC-2溝によって削平されたと考えられる。柱穴は円形でその大きさと深さはよく揃っている。柱間寸法は、心心距離で東西長軸長約600cm、南北短軸長265cmを測る。床面積は16.0㎡に復元される小型の建物である。長軸の方位角は89度の東西棟で、周囲にあるC-3住とC-4住の方向に一致する。出土遺物はない。C-2溝に切られ、周辺の竪穴住居跡と方向が一致する点から、この掘立柱建物の時期は小迫辻原2期と推定される。（旧E地区掘立柱建物25=建物C）



第78図 C区-4号掘立柱建物跡 (1/80)

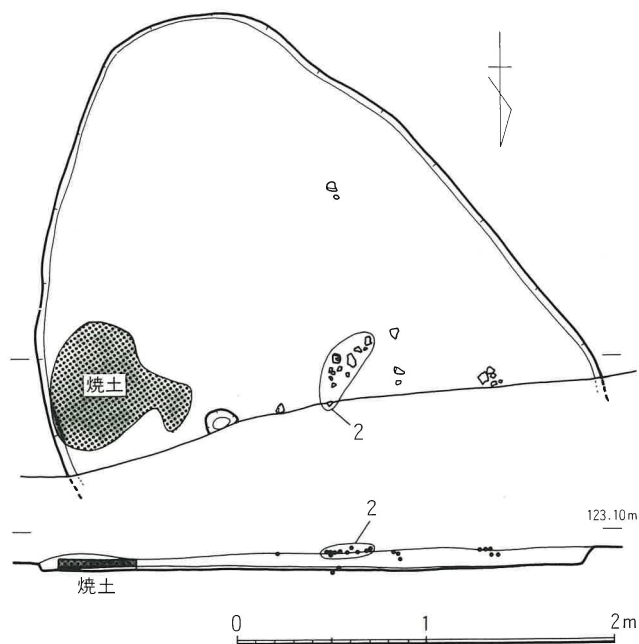
C区-4号掘立柱建物跡 (第78図)

C-7・8住と1号条溝の間で検出された2間×1間の掘立柱建物跡である。柱穴は円形で、その大きさと深さはよく揃っている。柱間寸法は、心心距離で東西長軸長約520cm、南北短軸長345cmを測る。床面積は18.0㎡に復元される小型の建物で、長軸の方位角は57度の東西棟である。出土遺物はない。C-7住またはC-8住と方向がほぼ同じで、どちらかの竪穴住居と関係するものと推定されるので、小迫辻原2ないし3期の建物と推定される。(旧E地区掘立柱建物イ=建物B)

5) 土壌 (第3・6表)

C区-1号土壌 (第79・80図 →図版31)

2号方形環溝の西側のY6調査区で検出された不定形の土壌で、北半は調査区外につづく。規模は東西300cm



第79図 C区-1号土壌 (1/40)

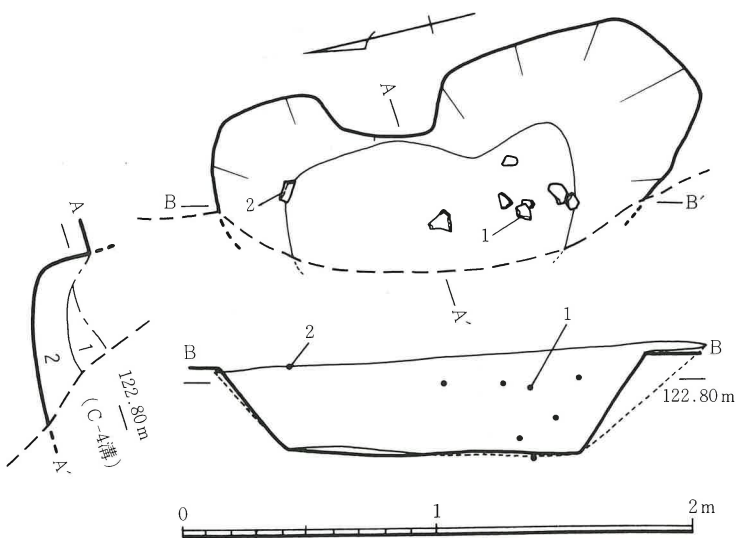


第80図 C区-1号土壌出土遺物 (1/4)

以上、南北255cm以上の大型土壌で、検出面からの深さは約11cmである。底面は平坦で、東端の底面上に焼土の堆積があり、埋土中からは土器の小片が散在して検出された。1の在地系の壺Aの頸部片と2の在地系の甕Aの口縁部片を含み、どちらも胎土は在地産である。土壌の平面形は整っていないが底面は平坦で、なんらかの使用目的のために掘られた土壌であるが、廃棄後はおそらく生活廃棄物の捨て場所になったものと考えられる。土壌の時期は出土土器からみて古墳時代前期前半である。(旧E地区土壌318)

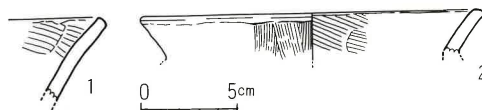
C区-2号土壌 (第81・82図 →図版31)

A4調査区で1号条溝に切られて検出された不定形の土壌で、規模は南北195cm、東西54cm以上、検出面からの深さは約46cmである。底面は形のわりに平坦である。埋土は二層に分かれ、上部になるほど暗くなり、炭片と土器片の混入が目立つようになる。1と2は在地系の甕Aの口縁部片で、どちらも胎土は在地産である。時期は1号条溝以前の小迫辻原2期の可能性が高いが、位置がC-4溝の通路推定地にあたるので、あるいは関連する遺構かもしれない。(旧E地区土壌15)



1層：暗褐色軟質土 (炭・土器片多く含む)
2層：褐色軟質土 (土器片少し含むが、1層ほど炭のよごれがない)

第81図 C区-2号土壌 (1/30)



第82図 C区-2号土壌出土遺物 (1/4)

第3節 奈良時代 (第85図)

この時期にあたる遺構は、C区全体に散漫に分布する。竪穴住居跡4軒・土塋2基を確認したのみで、ほかにピット1本を本文に掲載した。この時代の遺構はまだ存在するであろうが、土器を含まないためにほかの時代の遺構と区別できなかった。

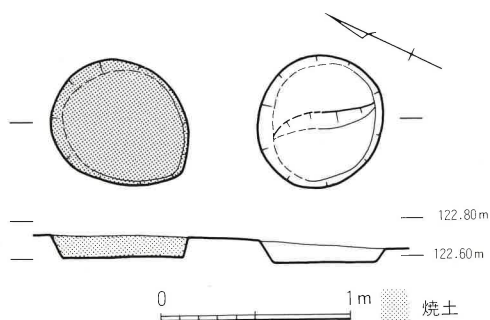
C-13住とC-14住の二つの竪穴住居跡は、接近の具合とカマドの方向などからみて、同時存在ではない。小迫辻原遺跡においては、奈良時代の竪穴住居跡は単独で検出される場合が多く、近接する例は稀である。

1) 竪穴住居跡 (第1・6表)

いずれもカマド付きの竪穴住居跡で、推定例もふくめて4軒を認定した。

C区-11号竪穴住居跡 (第83図)

T5調査区で検出されたもので、ほとんど削平されている。カマドの炉床と推定される円形の土塋と、それと対になる同一形態の円形土塋を、南北に並んで検出した。周辺には柱穴の痕跡はなかった。竪穴の形態と規模等は一切不明である。北土塋の内部には焼土が堆積していたので、カマドの下部遺構である可能性が高い。また南土塋の埋土は焼土を多量に含み、通例カマドの手前によく見られる「灰出し穴」であろうと推定される。以上の点から、カマドを北にもつ無柱穴の小型竪穴建物であったと推定される。



第83図 C区-11号竪穴住居跡 (1/40)

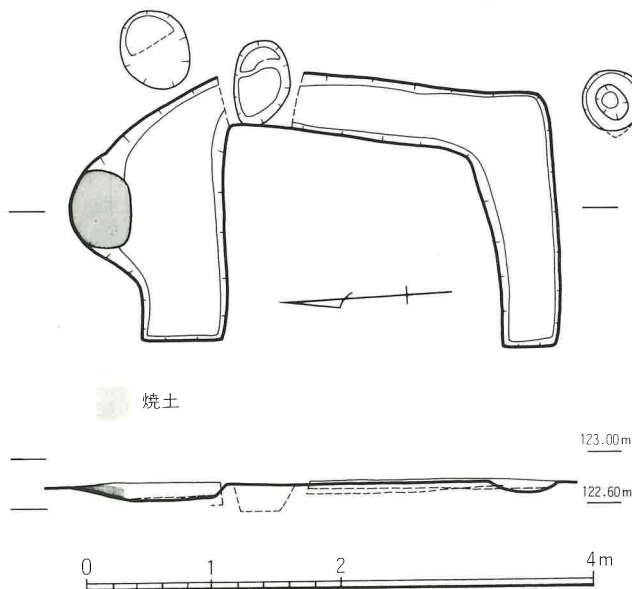
遺物は出土していないが、二つの土塋がカマドだとする想定が正しいければ、小迫辻原遺跡全体の時代別の遺構配置の状況から、奈良時代の可能性がもっとも高いと考えられる。(旧E地区焼土A)

C区-12号竪穴住居跡 (第84図)

W4調査区で検出された長方形を呈すると推定される竪穴建物の痕跡である。遺構はコ字形の浅い溝状の土塋と、その北に張り出して取りつく半円形の部分を検出し、後者には焼土の堆積が存在した。その形状からみて、カマド付き竪穴建物の下部遺構であると推定される。おおよその規模は南北長軸長約390cm、東西短軸長200cm以上となり、南北長軸の方位角は約3度である。柱穴等は検出されず、カマドを北

にもつ無柱穴の小型竪穴建物であったと考えられる。

遺物は出土していないが、カマドをもつ竪穴建物とする想定が正しいければ、小迫辻原遺跡全体の時代別の遺構配置の状況から、奈良時代の可能性がもっとも高いと考えられる。(旧E地区土塋A)



第84図 C区-12号竪穴住居跡 (1/60)

第85図 小迫辻原遺跡C区、遺跡配置図③
 -奈良時代・中世・近世- (1/300)



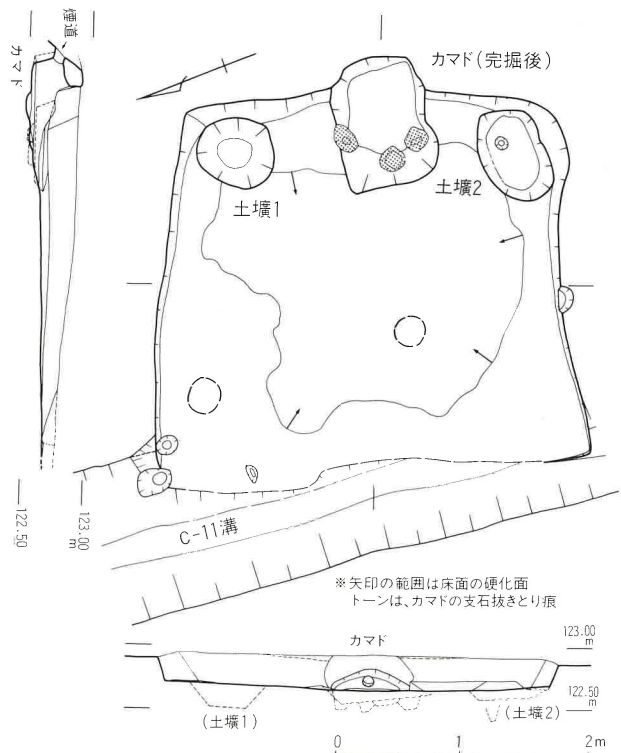


C区-13号竪穴住居跡（第86～88図 →図版32・55）

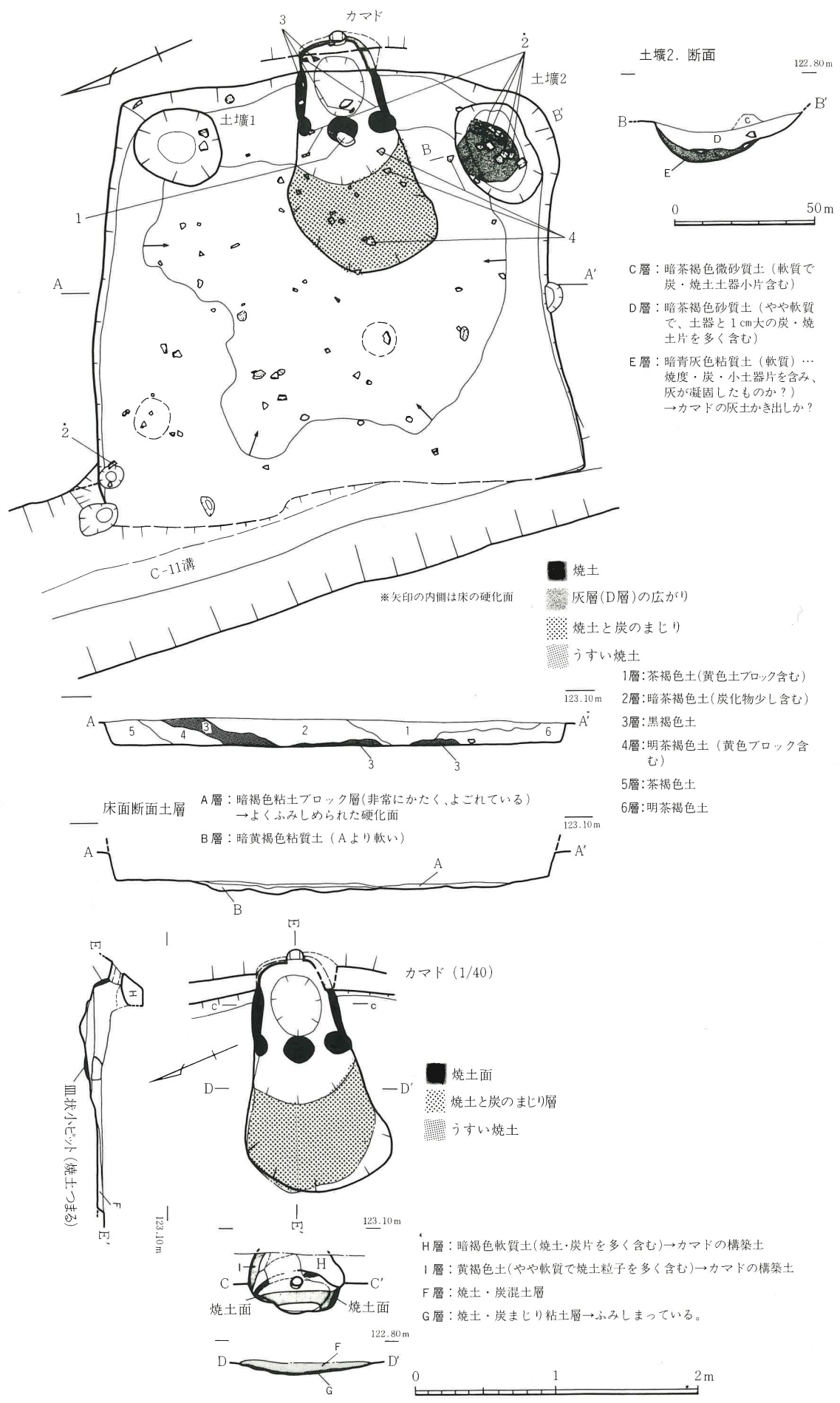
C-14住の東側で検出された東カマドでやや不整な方形の竪穴建物である（第86図）。C-4溝（古墳時代前期前半）を切って造られ、西壁はC-11溝（近世）に破壊されていた。そのため竪穴の西限がはっきりしない。規模は南北長軸長350cm、東西短軸長320cm以上で正方形に近い。床面積は9.0㎡以上になる小型の竪穴である。深さは約20cmで、東西短軸の方位角は109度である。床面をすべて除去しても柱穴は検出できなかったので無柱穴の構造であったと考えられる。周溝はなく、床面は基盤層をそのまま利用して踏み締められた硬化面となっている。この硬化面の広がりを追っていくと、竪穴の中央部からカマドの焚き口と二つの土壇へと伸びる。カマドと二つの土壇が密接に関連していた証拠である。カマドは存在するが床面積があまりに小さく、上屋構造も簡易なものと考えられるので、居住用の竪穴住居とするよりは、炊事専用の「カマ屋」の可能性を考慮すべきであろう。

竪穴の東壁中央に構築されているカマドは、上部が削平されていたが下部の保存状態は良好であった（第87図下）。まず焚き口から煙道にかけて、東側に突出するように深く掘りくぼめ炉床を形づくる。次に粘土混じりの土（H・I層）を使って壁体と煙道を構築している。この構築方法はB-13住とほぼ同じである。両袖には構築時に側石の石材を立てたと推定される小穴が2箇所あり、さらにその中央に、カマドにかける土器を支える支石を立てたと見られる小穴を検出した。燃焼部の周囲は火を受けてよく硬化しており、焚き口手前の斜面には焼土・炭混じりの粘土層（F層）が堆積し、よく踏み締められ硬化していた。その層はカマド使用中に掻きだされたものであろう。内部には炭・焼土混じりの土が充満し、完形に近く復元できる土器片（4）が含まれていた。また側石と支石の石材そのものはなく、小穴の内部には焼土混じりの土が堆積していることから、側石と支石を最後に抜き取ったと考えられる。粘土で構築したはずの両袖部分が検出できなかったのも、側石を抜き取りつつ袖を破壊したためであろう。さてカマドを挟むように竪穴の両隅に小土壇が2箇所掘りこまれている。いずれも底面が皿状で、土壇の上端に床の硬化面が接続する。土壇2の底部には、青灰色の灰？層（E層）がカマドの焚き口の方から流れこむように堆積しており、カマドから掻きだされたものと推定される。したがって土壇2はカマドと密接に関連する遺構である。

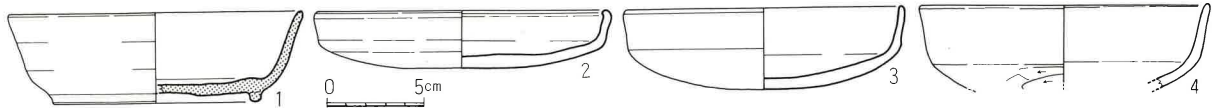
遺物の出土状態から、竪穴廃絶後にカマド祭祀があったことがうかがえる。先にのべたようにカマド廃絶時には、カマドを壊し側石や支石が抜き取られている。さらにその上には焼土・炭混じりの層が広がっており、その中から1の須恵器杯が半分だけ支石抜き取り穴の上で検出され、2の土師器杯は小片に割れて、カマドの残骸と土壇1・土壇2の埋土中に散らばり、接合すると丁度半分に復元できた。おそらく1と2は半分に割って片われを廃棄したものと見られる。3の土師器杯はカマドの残骸のなかで破片となって検出されたもので、ほぼ完形に復元できた。4の土師器杯はカマド手前の掻きだし土中から、これも破片となって検出されたが、半完形に復元できる。以上の土器の出土状態とカマドの破壊状態からみて、次のような過程でカマド祭祀がおこなわれたものと推定される。①まずカマド内部の焼土と灰がカマドの手前と土壇2に掻きだされる。②次にカマドの上部構造物が破壊され、袖に使用されていた側石と支石が抜き取られる。直後に須恵器と土師器の杯が割られ、残骸のなかに置かれあるいは廃棄される。以上である。その後の竪穴の埋没状態は、周縁部から次第に埋没していく典型



第86図 C区-13号竪穴住居跡① - 竪穴内遺構 - (1/60)



第87図 C区-13号竪穴住居跡②—遺物出土状態とカマド— (1/40・1/20)



第88図 C区-13号竪穴住居跡出土遺物 (1/4)

的なレンズ状堆積が観察され、カマド祭祀後そのまま放置されて自然埋没していったものと推定される。埋土中には小土器片や炭を含むので、この竪穴廃絶後も周囲では人の生活が継続したものと推定される。

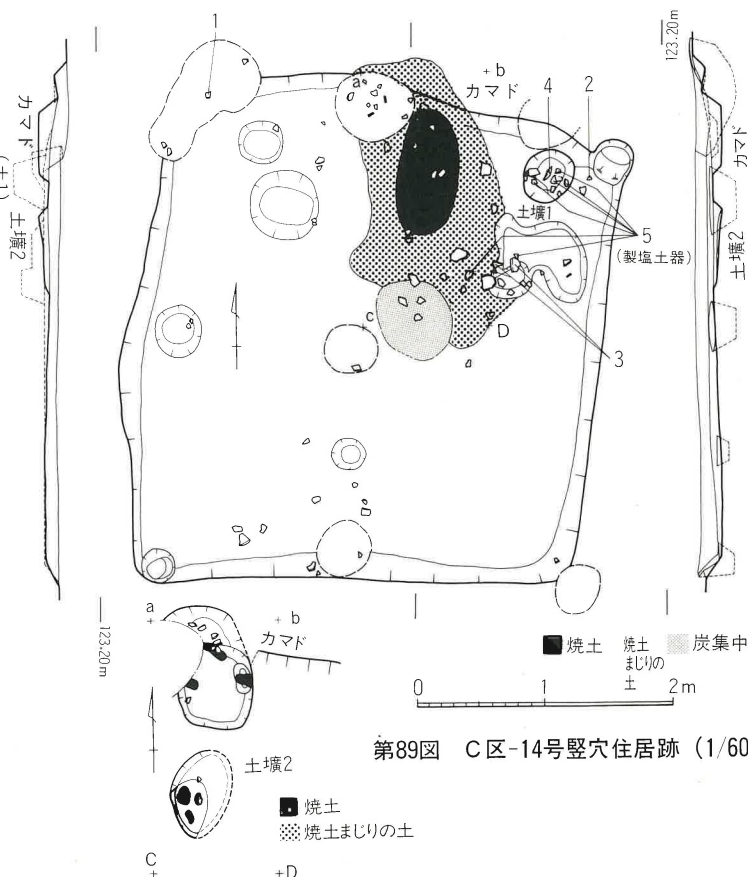
出土遺物は土器のみ(第88図)で、1は高台付きの須恵器坏身、2~4は底部外面を手持ちヘラケズリで調整した土師器坏で、胎土は砂粒が少ない精緻な粘土を用いた精製品である。出土土器からみて8世紀中ごろから後半の奈良時代の遺構と推定される。(旧B地区竪穴住居4)

C区-14号竪穴住居跡 (第89・90図 →図版32・55)

C-13住の西どなりで検出された北カマドで、やや不整な方形の竪穴建物である。C-6建物(中世)と重複している。規模は南北長軸長410cm、東西短軸長390cmで正方形に近い。深さは約10cmである。床面積は12.0㎡になる小型の竪穴で、南北長軸の方位角は6度である。床面をすべて除去しても柱穴を検出できなかったのもともとも無柱穴の構造であったと考えられる。周溝はなく、床面は基盤層をそのまま利用した硬化面となっている。カマドは存在するが床面積があまりに小さく、上屋構造も簡易なものと考えられるので、居住用の竪穴住居とするよりは、炊事専用の「カマ屋」の可能性を考慮すべきであろう。

竪穴内部の施設として北辺ほぼ中央にカマドがあり、その焚き口手前とカマドの側の竪穴コーナーにそれぞれ小土壌がある。カマドは大部分が破壊され、底部のみを北側壁面近くで確認した。カマド底部の楕円形の掘りこみが炉床で、その内部には炭・焼土を含む土が詰まっております、部分的に被熱して赤化したところがあった。また2箇所の土壌のうち土壌1はカマドの焚き口手前の小土壌で、内部に焼土混じりの土が堆積し、カマドと対になる施設である。カマドの東横に位置する土壌2は小型円形の小土壌で、内部には土器片が多量に含まれていた。

竪穴廃絶時に徹底的に破壊されていて、カマドの跡には焼土・炭混じりの層が床面上に堆積し、その周辺から、特に土壌1の内部に須恵器・土師器の小破片が集中していた。量的には土師器が大部分をしめる。1の須恵器坏蓋片と2の坏身片は小破片で検出したが、3の土師器坏は一箇所に破片



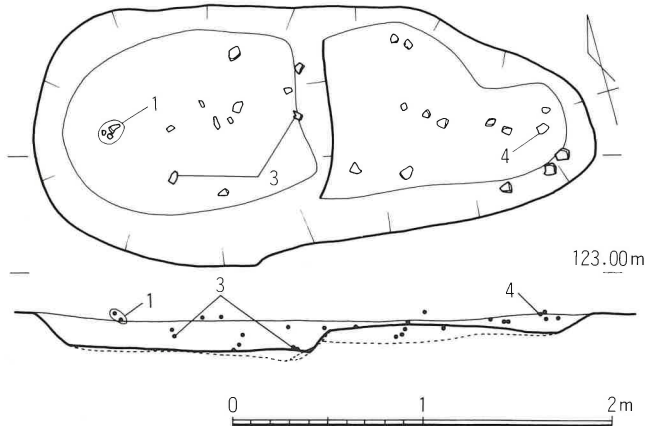
第89図 C区-14号竪穴住居跡 (1/60)



第90図 C区-14号竪穴住居跡出土遺物 (1/4)

が集中し、4の土師器坏片と5の焼塩用製塩土器は土壌1内に破片が集中した。おそらくカマドを破壊した際に破砕されて廃棄されたもので、カマド祭祀の痕跡と推定される。堅穴の埋没状態は残存部が浅いため自然埋没かどうかは不明である。

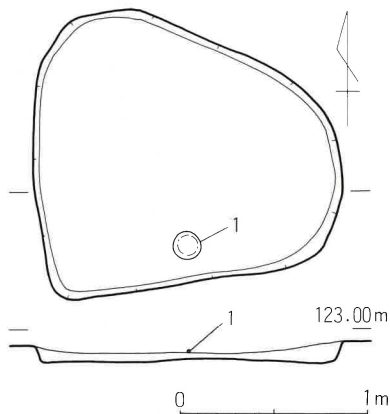
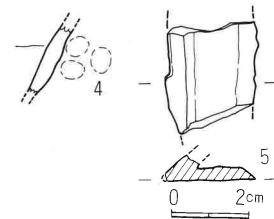
出土遺物のうち3・4は底部外面を手持ちへラケズリで調整した土師器坏で、胎土は砂粒が少ない精緻な粘土を用いた精製品である。5は逆錐形の焼塩用の小型製塩土器で、胎土に石英を多量に含む搬入品である。その特徴から、北部九州玄界灘沿岸の生産地からの搬入であろう。以上の出土土器からみて8世紀中ごろから後半の奈良時代の遺構と推定される。(旧B地区堅穴住居2)



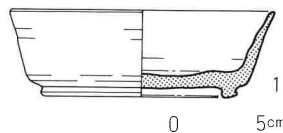
第91図 C区-3号土壌 (1/40)



第92図 C区-3号土壌出土遺物 (1~4=1/4、5=1/2)



第93図 C区-4号土壌 (1/40)



第94図 C区-4号土壌
出土遺物 (1/4)

坦だが段がつき高低がある。その形状からみて何らかの使用目的をもつ土壌だが、用途は不明。埋土は軟らかい淡黒褐色の単一層(1層)で、炭・焼土と土器片を多量に含む。使用停止後はゴミ穴に転用されたと見られる。

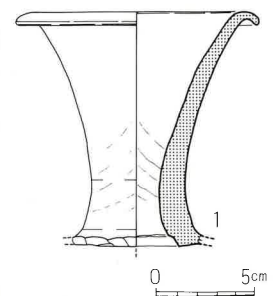
土器はいずれも小片で、1は須恵器坏蓋片、2は土師器の精製の坏片、3は土師器甕の口縁片、4は逆錐形の焼塩用製塩土器の小破片で搬入品である。5は鉄製品で鋤先の一部と見られる。以上の土器からみて8世紀中ごろから後半の奈良時代の遺構と推定される。(旧E地区土壌314)

C区-4号土壌(第93・94図 →図版55)

不定形の土壌で、規模は東西長軸長180cm、南北短軸長148cmで、深さは11cm。底面が平坦なので何らかの使用目的をもつ土壌だが、用途は不明。底面に1の完形の須恵器坏身が1個体、伏せられた状態で出土した。何らかの祭祀行為に伴うと推定される。この土器から8世紀中ごろから後半の奈良時代の遺構と推定される。(旧E地区土壌316)

3) ピット(第95図 →図版55)

B3調査区ピット12の中央から、1の須恵器長頸壺の頸部が出土した。付根の周囲は打ち欠かれたようにきれいに割れているので、故意に頸部を折りとってそれをピットに埋納したものと推定される。



第95図 C区-B3
調査区ピット12
出土遺物 (1/4)

第4節 中 世 (第85図)

この時期にあたる遺構はそれほど多くなく、掘立柱建物跡4棟・墓1基と溝2条を確認した。

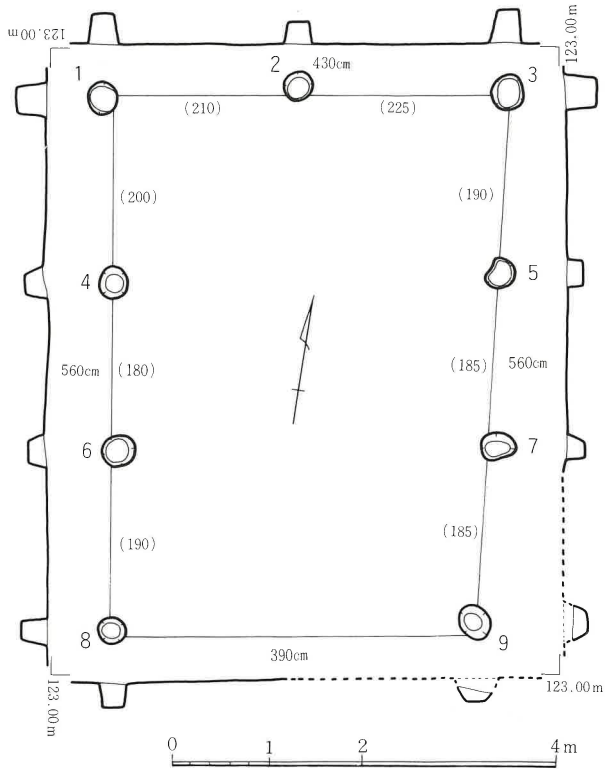
遺構の配置は、C区の中央を南北に走るC-5溝を境にして大きく異なる。すなわちC-5溝以東では中世の遺構はまったく検出されず、これに対して以西では掘立柱建物跡が存在する。このC-5溝が境界をなしていた可能性が高く、B区から連続する鎌倉時代の遺構群の東を限る区画溝の可能性が高い。以上の遺構の時期は、A・B区の中世建物群と同様に、13世紀後半を中心とする鎌倉時代と考えられるが、C-5建物とC-6溝はほかの遺構と方向が異なり、同じ中世といっても異なる時期の可能性が高い。

1) 掘立柱建物跡 (第2表)

4棟の掘立柱建物跡のうち、離れて存在するC-5建物を除く3棟はひとつのまとまりをもつ。C-6建物とC-8建物は方向と梁筋の並びが一致しているので、同時に建てられた可能性が高く、C-7建物とC-8建物は床面積が同一であることから、同一の性格の建物を同じ場所に建て替えた関係にあるといえる。

C区-5号掘立柱建物跡 (第96図 →図版33)

ほかの建物と方向を異にする3間×2間の掘立柱建物跡で、南の梁を支える柱の穴が未検出である。柱穴の大きさは揃っているが、コーナーの柱穴が深い傾向にある。柱間寸法は、心心距離で南北長軸長約560cm、東西短軸

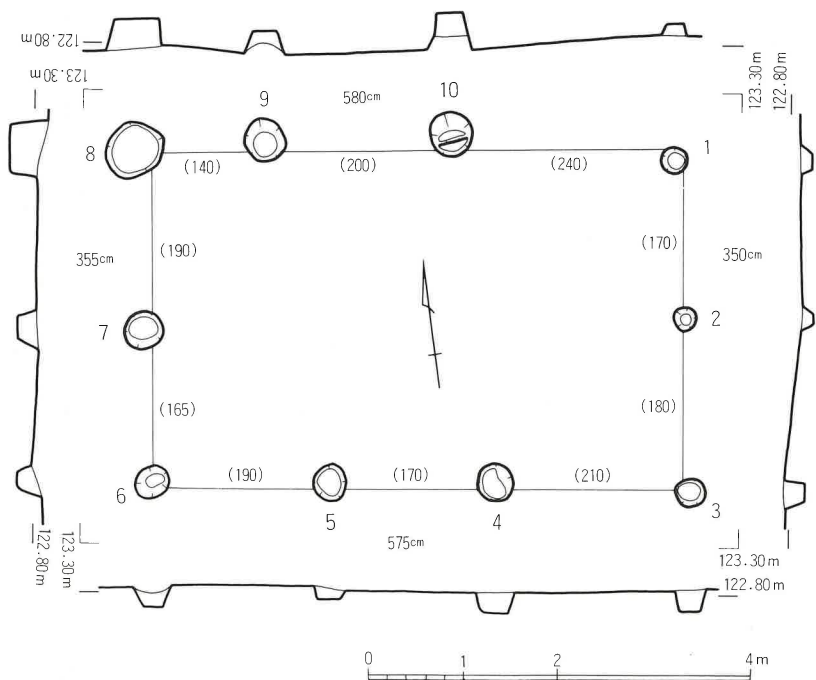


第96図 C区-5号掘立柱建物跡 (1/80)

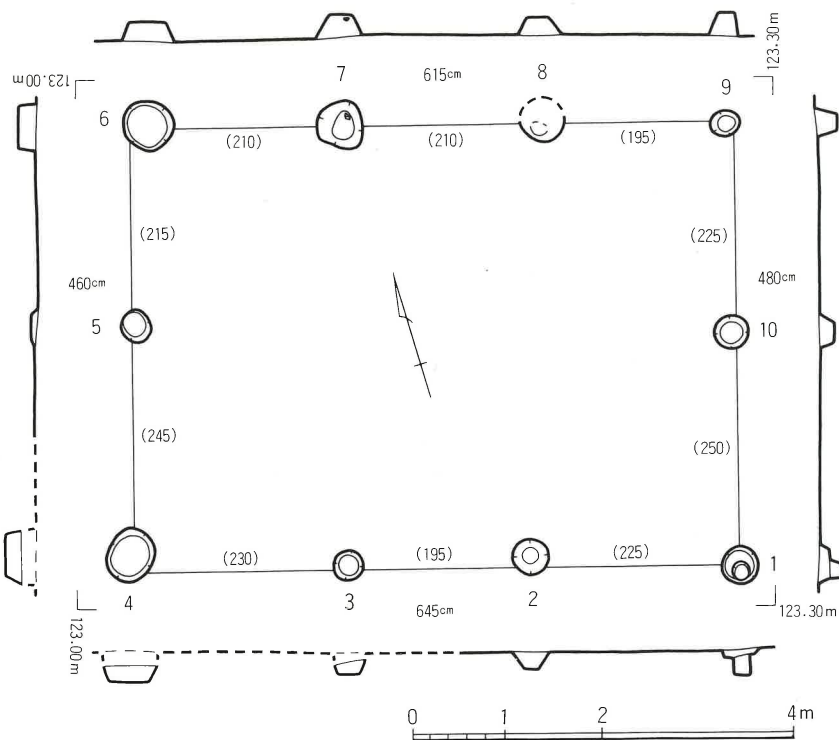
長430cmを測る。床面積は23.1㎡の中型の建物である。長軸の方位角は171度の南北棟で、C-6溝の方向と直交する。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の土質と色調の類似から中世の遺構と認定した。(旧E地区掘立柱建物ア=建物A)

C区-6号掘立柱建物跡 (第97図 →図版33)

C区の西北隅で検出された3間×2間の掘立柱建物跡で、C-13・14住(奈良時代)を切り、C-11溝(近世)が重複する。柱穴の大きさはまちまちだが深さはおおむね揃っている。柱間寸法は、心心距離で東西長軸長約580cm、南北短軸長355cmを測る。床面積は20.



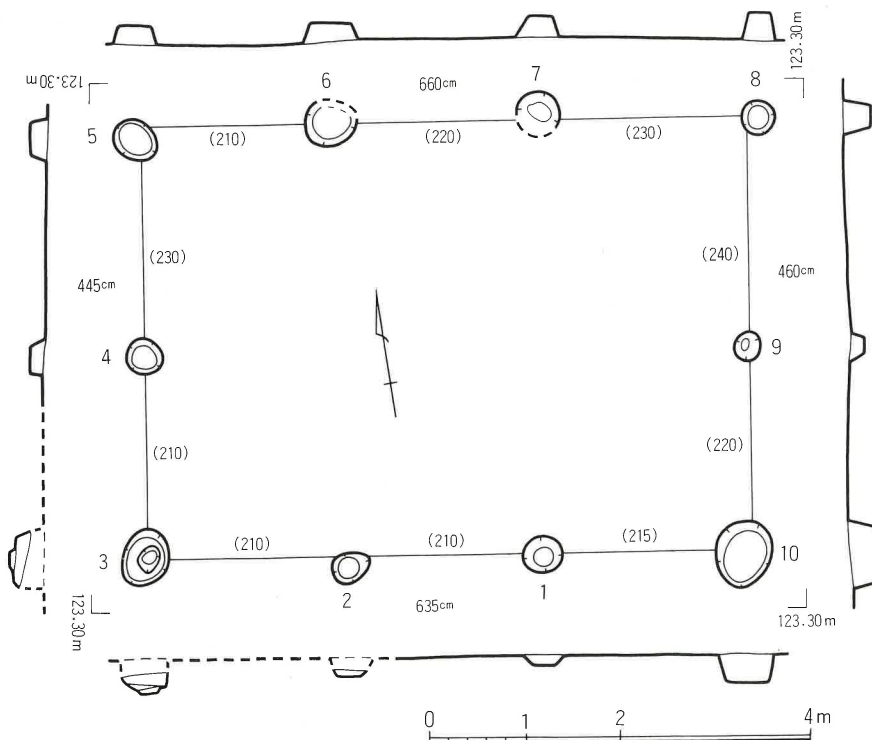
第97図 C区-6号掘立柱建物跡 (1/80)



第98図 C区-7号掘立柱建物跡 (1/80)

— 8 建物と同じ床面積である。長軸の方位角は108度の東西棟である。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と認定した。(旧B地区掘立柱建物2)

C区-8号掘立柱建物跡 (第99図 →図版34)



第99図 C区-8号掘立柱建物跡 (1/80)

3㎡の中型で、長軸の方位角は99度の東西棟の建物である。時期を明示する出土遺物はないが、柱穴埋土の類似から中世の遺構と認定した。(旧B地区掘立柱建物1)

C区-7号掘立柱建物跡 (第98図 →図版34)

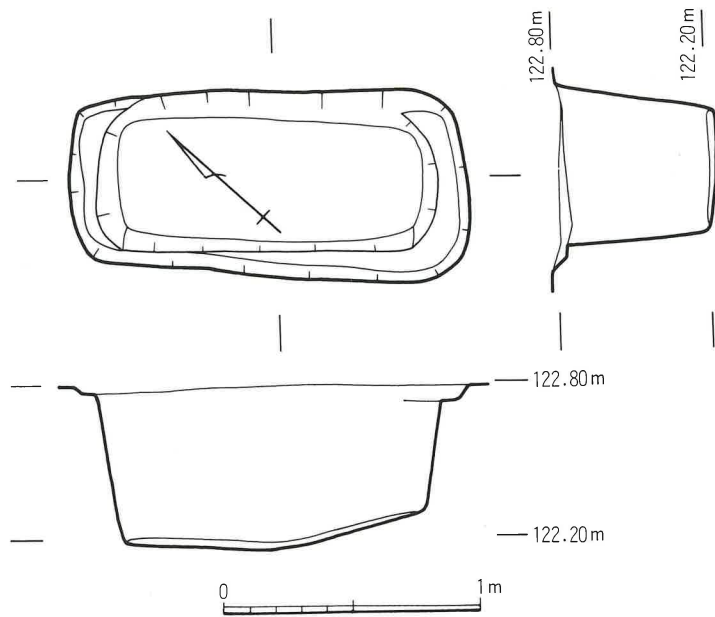
C-6 建物の南で、C-8 住に重複して検出された3間×2間の掘立柱建物跡で、C-9 住(古墳時代前期前半)を切り、C-11溝(近世)が重複する。柱穴はいずれも円形で大きさはまちまちだが、深さはおおむね揃っている。柱間寸法は、心心距離で東西長軸長約650cm、南北短軸長480cmを測る。床面積は29.7㎡の中型の建物で、重複するC

C-7 建物と重複する3間×2間の掘立柱建物跡である。柱穴はいずれも円形で大きさはまちまちだが、深さはおおむね揃っている。柱間寸法は、心心距離で東西長軸長約660cm、南北短軸長460cmを測る。床面積は29.6㎡の中型の建物で、重複するC-7 建物とほぼ同じ床面積である。長軸の方位角は98度の東西棟で、C-6 建物と一致する。時期を明示する遺物はないが、埋土の類似から中世の遺構と認定した。(旧B地区掘立柱建物3)

2) 墓 (第4表)

C区-1号墓 (第100図 →図版34)

B3調査区で検出された長方形の土壇で、C-7・8建物に近接する。長さ135cm、幅62cm深さは65cmである。長軸の方位角は137度で、周囲の遺構とはまったく方向があわない。一部二段掘りで、その形態から土壇墓の可能性があり、埋土の類似から中世としたが、根拠はとぼしい。(旧B地区墓1)



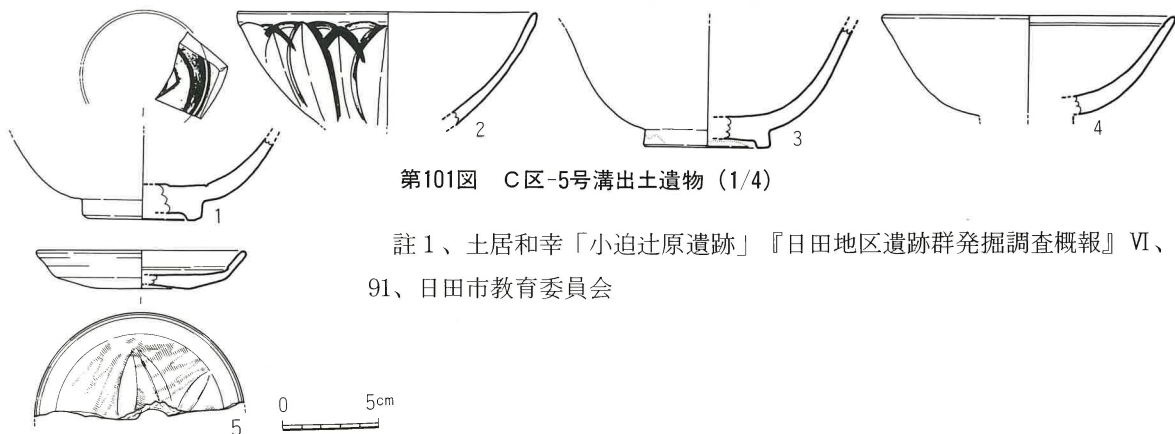
第100図 C区-1号墓 (1/30)

3) 溝 (第5・6表)

C区中央で二条のほぼ直交する溝を検出している。C-5溝は南の延長部が削平されているので、本来C-6溝と交差するものと考えられる。したがってこの二条の溝が同時期に存在していた可能性は少ない。

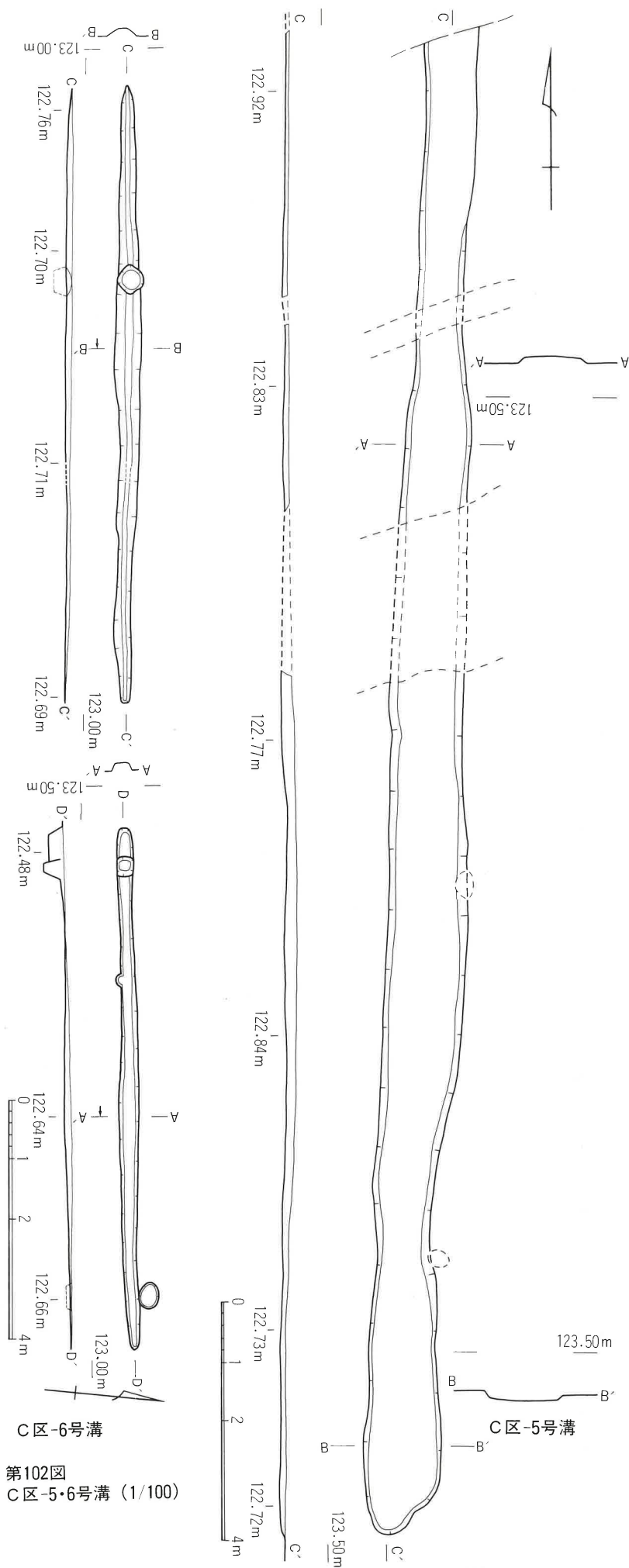
C区-5号溝 (第101・102図 →図版55・56)

C区中央で南北に検出された溝で、2号方形環溝を切って縦断している。南の延長は後世に削平されていると推定される。北の延長はその後の日田市の調査(P区)でさらに北に40m以上伸びることが判明している(註1)。C区では約25mほどを検出し、南北の方位角は2度である。溝の断面は浅いU字形で、その幅は0.9から1.4mを測り、深さは平均20cmである。溝の底面の高さは南へいくにつれてやや高くなる微妙な傾斜をしめす。埋土中から中世前期の輸入陶磁器の破片が断片的に出土している。1は青磁碗で、内面に「金玉満堂」の押印の端が見える。2は鎬蓮弁文の竜泉窯系青磁碗、3も竜泉窯系青磁碗、4は同安窯系青磁碗、5は同安窯系青磁皿である。全体に13~14世紀前半の製品が多く、これより新しい時期の遺物は含まない。したがって溝の埋没年代は中世前期の鎌倉時代と推定される。(旧E地区溝21)



第101図 C区-5号溝出土遺物 (1/4)

註1、土居和幸「小迫辻原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報』VI、1991、日田市教育委員会



C区-6号溝 (第102図)

C-5溝と直交するように検出された東西にのびる細い溝で、長さ約21mほどを検出した。途中一部途切れているが削平されたものである。東西の方位角は85度である。溝の断面はU字形で、その幅は30~50cmを測り検出面からの深さは平均20cmである。溝の底面の高さはほぼ水平である。時期を明示する出土遺物はないが、中世の遺構埋土との類似から中世の遺構と認定した。(旧E地区溝A)

第5節 近世 (第85図)

この時期にあたる遺構はC区全体に分布し、掘立柱建物跡1棟・土壇6基と溝6条を確認した。

遺構の配置の特徴は、西半と東半とでは畑地境界溝の方向が異なることである。西半の畑地境界溝C-9・10・11溝が、A・B両区の畑地境界溝の方向と一致するのに対し、東にあるC-7溝はD区の畑地境界溝の方向と一致する。この事実は、辻原台地の近世の畑地境界設定時における方向設定の基準が、少なくとも2方向あったことを示している。したがって畑地の地割りは台地全体をひとつの単位としておこなわれていないことになる。さらにその後の調査(註1)によって、C-7溝とC-8溝はその北側でそれぞれ曲がってつながり、長方形の区画をなすことが判明している。そうするとこの二つの溝に挟まれた空間で検出されたC-9建物、この方形区画にともなうものと推定される。したがってこの方形区画の内部は

C区-6号溝
第102図
C区-5・6号溝 (1/100)

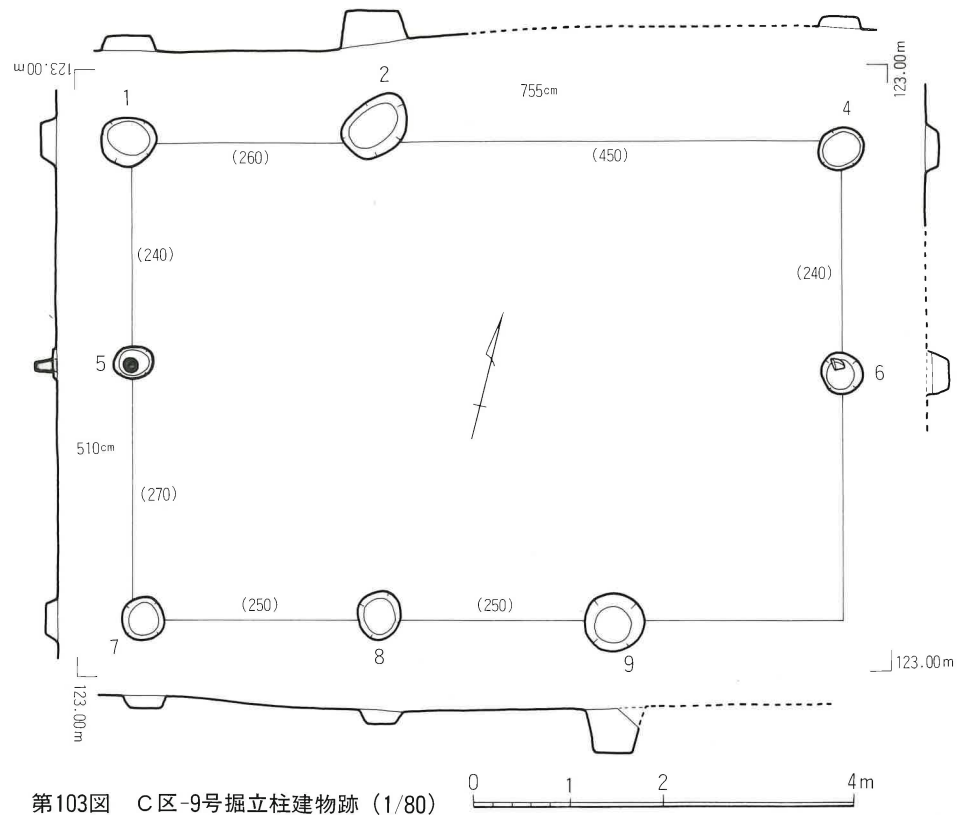
畑地ではなく、少なくとも一時期は宅地であったと見られる。なお概報の段階ではこの区画を中世のものとしていたが、整理の結果、近世に下ろすほうが妥当であると判断した。訂正しておきたい。

註1、土居和幸「小迫辻原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報』VI、1991、日田市教育委員会

1) 掘立柱建物跡
(第1表)

C区-9号掘立柱
建物跡(第103図 →
図版34)

C-7溝とC-8溝
の間で検出された3間
×2間の掘立柱建物跡
である。2本の柱穴が
不明なのは、C-1溝
に重複する部分の遺構
検出作業の不徹底によ
るものである。そのC
-1溝との関係は柱穴
6で確認され、C-1
溝を切ることが判明し
た。柱穴の大きさはま
ちまちで深さも揃わな
い。柱間寸法は、中心



第103図 C区-9号掘立柱建物跡(1/80)

距離で東西長軸長約750cm、東西短軸長510cmを測る、床面積38.4㎡の建物である。長軸の方位角は78度の東西棟で、C-7溝とほぼ直交する。時期を明示する出土遺物はないが、近世の方形区画の溝の内部に位置し、方向も一致するので近世の遺構と認定した。(旧E地区掘立柱建物22)

2) 土壇(第3表)

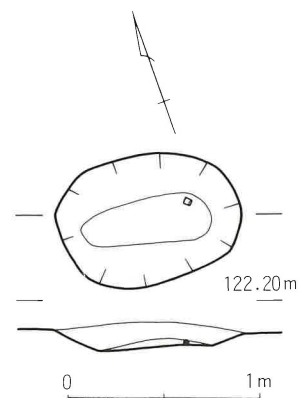
C区には、ほかの区に比べて土壇が多い。とくにC-6~8土壇の3基は、C-8溝と重複あるいは溝の底部に掘られており、その形態から考えて墓の可能性も否定できない。

C区-5号土壇(第104図)

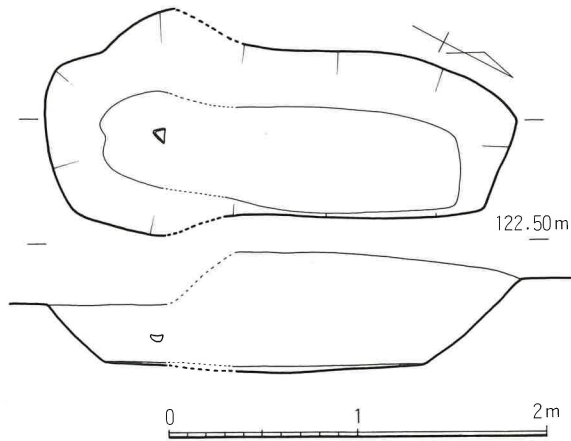
C-7溝とC-8溝の間のS4調査区で検出された小型の長円形土壇である。その規模は東西長軸長97cm、南北短軸長70cmの土壇である。深さは10cmである。底面は平坦だがやや高低がある。性格は不明。時期を明示する出土遺物はないが、埋土が軟らかい黒褐色の単一層(1層)で、近世畑地境界溝の埋土と一致するので近世の遺構と認定した。(旧E地区土壇303)

C区-6号土壇(第105図)

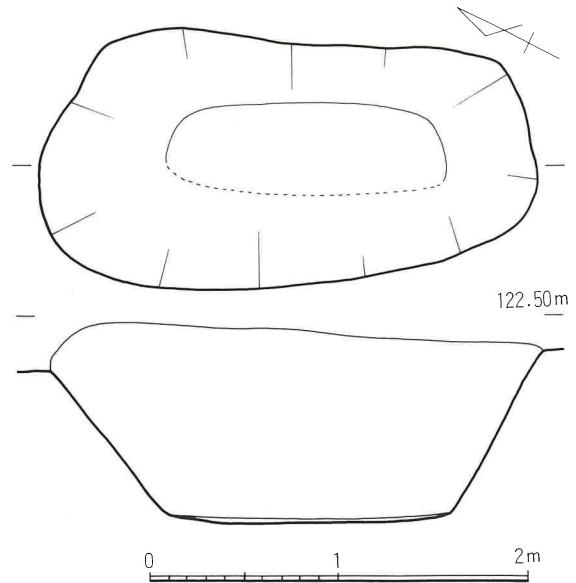
T4調査区のC-8溝底面で検出された長円形の土壇である。その規模は南北長軸長251cm、東西短軸長87cm、深さは63cmである。底面は平坦である。C-8溝を切り、その規模と深さからみて土壇墓の可能性も考えられる。時期を明示する出土遺物はないが、C-8溝の存在を前提とした遺構なので近世と認定した。(旧E地区土壇304)



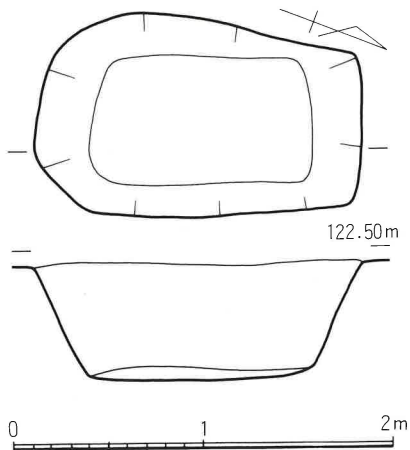
第104図
C区-5号土壇(1/40)



第105図 C区-6号土壇 (1/40)



第106図 C区-7号土壇 (1/40)



第107図 C区-8号土壇 (1/40)

C区-7号土壇 (第106図)

C-6土壇の南に1mほど離れて、溝の底面で検出された長円形の土壇である。その規模は南北長軸長263cm、東西短軸長117cm、深さは107cmである。底面は平坦である。C-8溝がある程度埋まった時点で掘りこまれている。その規模と深さからみて土壇墓の可能性も考えられる。時期を明示する出土遺物はないが、C-8溝の存在を前提とした遺構なので近世と認定した。(旧E地区土壇305)

C区-8号土壇 (第107図)

C-7土壇の斜め横に平行する長円形の土壇で、規模は南北長軸長173cm、東西短軸長106cm、深さは63cmである。底面は平坦である。C-8溝に切られている点がほかの土壇と異なる。その規模と深さからみて土壇墓の可能性も考えられる。埋土中から近世磁器の小片が出土したので近世の遺構と認定した。(旧E地区土壇306)

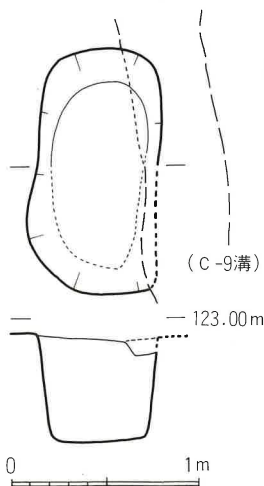
C区-9号土壇 (第108図)

X3調査区でC-9溝と重複して検出された小型の長円形土壇である。その切り合い関係は不明である。規模は南北長軸長131cm、東西短軸長68cm、深さは58cmである。

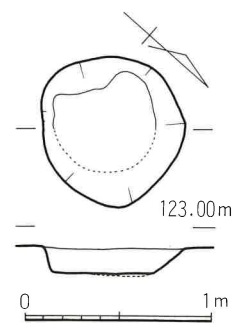
底面は平坦で断面が箱型になる点から、小児用の土壇墓の可能性も考えられる。時期を明示する出土遺物はないが、土壇埋土が近世畑地境界溝のそれと一致するので近世の遺構と認定した。(旧E地区土壇321)

C区-10号土壇 (第109図)

同じくX3調査区で検出された小型の円形土壇である。規模は長軸長80cm、短軸長75cm、深さは12cmで、底面は皿状である。用途は不明。時期を明示する出土遺物はないが、土壇埋土が近世畑地境界溝のそれと一致するので近世の遺構と認定した。(旧E地区土壇320)



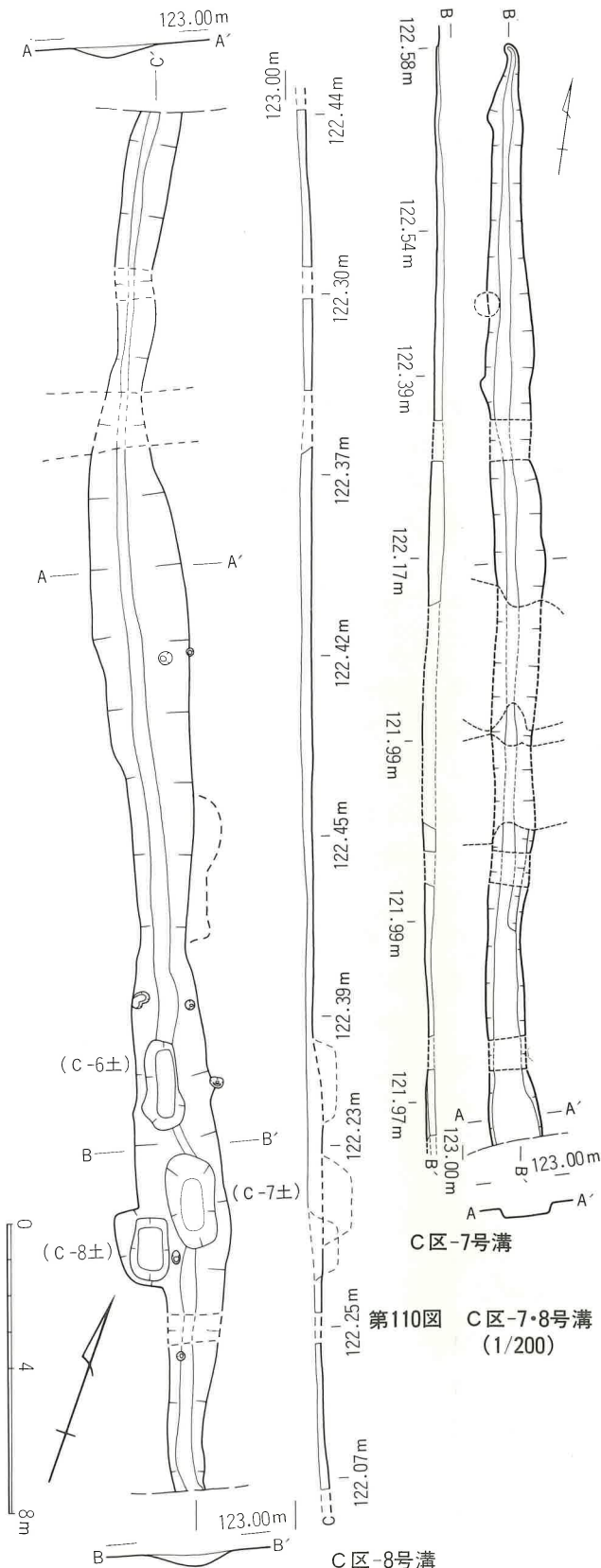
第108図 C区-9号土壇 (1/40)



第109図 C区-10号土壇 (1/40)

3) 溝 (第5・6表)

6条の近世溝のうち、C-7溝とC-8溝は畑地境界溝と宅地区画溝を兼ねている。C-9~12溝は畑地境界溝で、そのうちC-9溝は二条平行の溝で、B区と同様にこの溝を境界として東西で耕作者が異なっている可能性が高い。



第110図 C区-7・8号溝 (1/200)

C区-7号溝 (第110・111図)

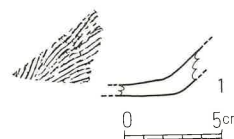
1号方形環溝の各遺構を切って縦断する南北方向の畑地境界溝で、宅地区画溝も兼ねている。南は調査区外にのび、北はさらに5mほどのびたところで西に屈折し、C-8溝と連続することが判明している。C区では31m程を検出し、その南北の方位角は171度である。溝の断面は浅いU字形で、その幅は最大で1.5mを測り、深いところで検出面から約30cmである。溝の底面の高さは、北へいくにつれてやや高くなる傾斜をしめす。埋土中から1の近世陶器摺鉢の破片が出土したので、近世の遺構と認定した。(旧E地区溝18)

C区-8号溝 (第110・112図)

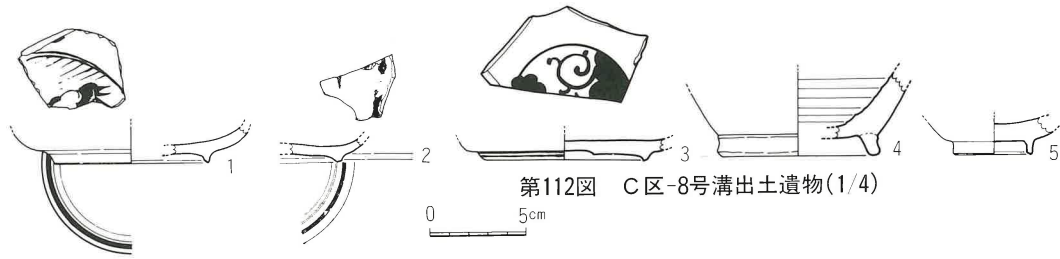
2号方形環溝のC-2溝とC-3・4住(古墳時代前期前半)を切って縦断する南北方向の畑地境界溝で、宅地区画溝も兼ねている。南は調査区外にのび、北はさらに5mほどのびたところで東に屈折し、C-7溝と連続することが判明している。C区では39m程を検出し、その南北の方位角は160度で、C-7溝とは平行しない。溝の断面は浅いU字形で、その幅は最大で2.6mを測り、深いところで検出面から約50cmである。溝の底面の高さはおおむね水平であるが、ところどころ高低がある。南部ではC-6・7・8土壌が、この溝に重なって掘られている。埋土中から1~3の肥前染付磁器の皿の破片が出土した。いずれも18世紀後半から19世紀前半の製品である。4は陶器の壺で、5は陶器の碗である。以上の遺物からこの溝の存続年代の一点は遅くとも19世紀の前半にあるといえる。(旧E地区溝19)

C区-9号溝 (第113・116図)

X5調査区でC-10溝と接する畑地境界溝で、平行する二条の南北溝からなる。C-3土壌(奈良時代)を切り、C-9土壌と重複する。途中が途切れているのは後世の削平のためである。南は調査区外にのび、北はC-10溝につきあたって終わる。



第111図 C区-7号溝 出土遺物 (1/4)

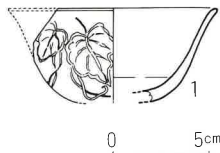


第112図 C区-8号溝出土遺物(1/4)

約38m程を検出し、その南北の方位角は4度で、真北に近い。溝の断面は二条とも浅いU字形で、その幅は最大で2.0mを測り、検出面から深いところで約20cmである。溝の底面の高さはおおむね水平であるが、ところどころ高低がある。埋土中から1のクロム青磁の碗の破片が出土した。明治時代以後の製品である。この遺物からこの溝の存続年代の一点は19世紀末にあるといえる。(旧E地区溝22)

C区-10号溝(第114・116図)

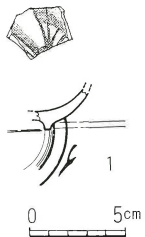
C-9溝と接して東西にのびる畑地境界溝で、この溝とC-9溝が切りあうのか、つながるのかは不明である。



第113図 C区-9号溝出土遺物(1/4)

西は調査区外にのび、東はC-9溝に接して終わる。約26m程を検出し、その東西の方位角は96度で、真東西にあたり、C-9溝とはほぼ直角になる。溝の断面は浅いU字形で、その幅は最大で2.3mを測り、検出面からの深さは最深で約20cmである。溝の底面の高さはおおむね水平であるが、ところどころ高低がある。埋土中から1の18世紀後半製作の近世染付磁器皿の破片が出土したので、近世の遺構と認定した。(旧E地区溝23)

C区-11号溝(第116図)



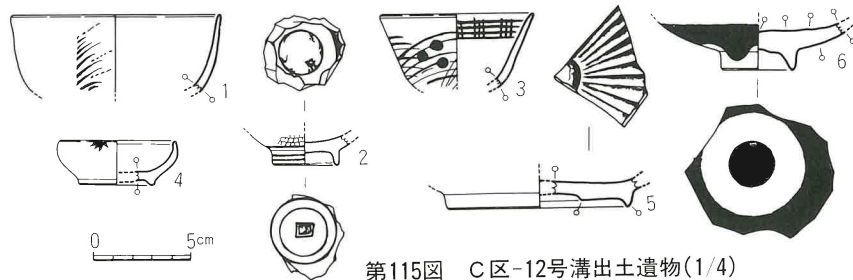
第114図 C区-10号溝出土遺物(1/4)

C区西端で検出された畑地境界溝で、C-13住(奈良時代)を切る。北は調査区外にのび、南は途中で削平されている。南北に約21m程を検出し、その方位角は7度で真北にあたる。C-9溝とは約38m離れて平行に掘られたことになる。溝の断面は浅いU字形で、その幅は最大で1.7mを測り、検出面からの深さは最深で約30cmである。溝の底面の高さはおおむね水平であるが、ところどころ高低がある。C-9溝・C-10溝とこのC-11溝に囲まれた方形の区画が一筆の耕地になると推定される。時期を明示する出土遺物はないが、埋土が近世畑地境界溝の埋土と一致するので近世の遺構と認定した。(旧B地区溝2)

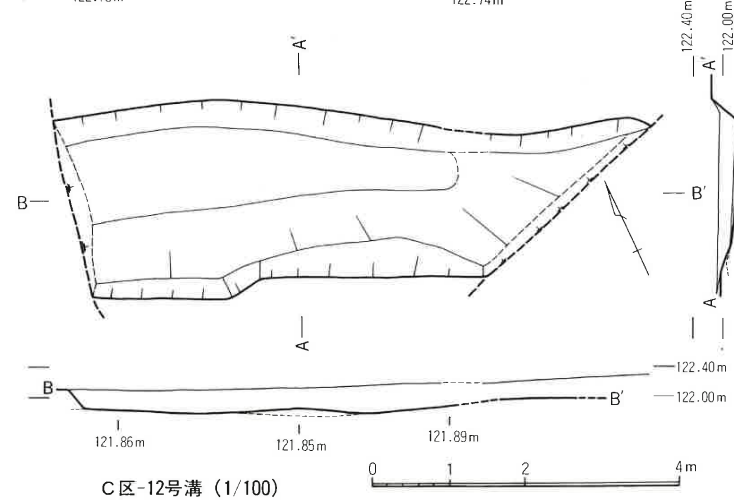
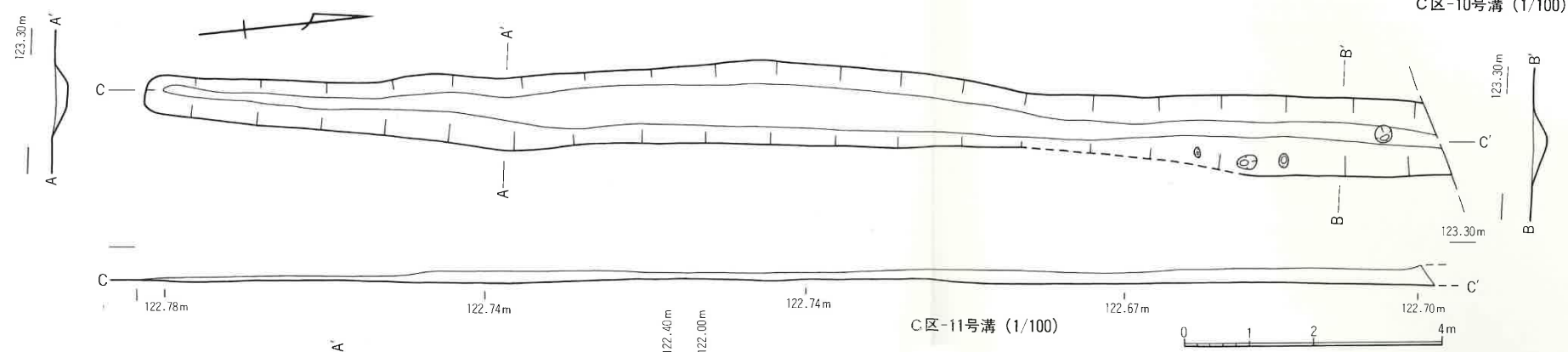
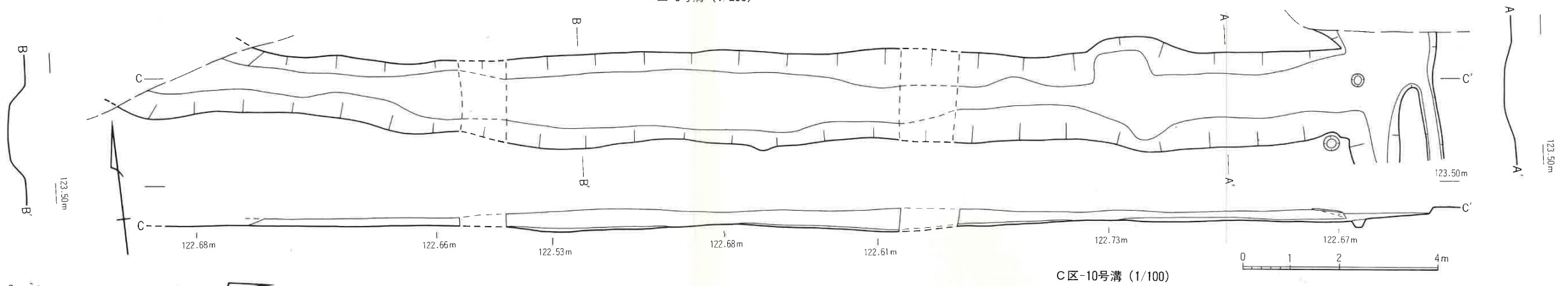
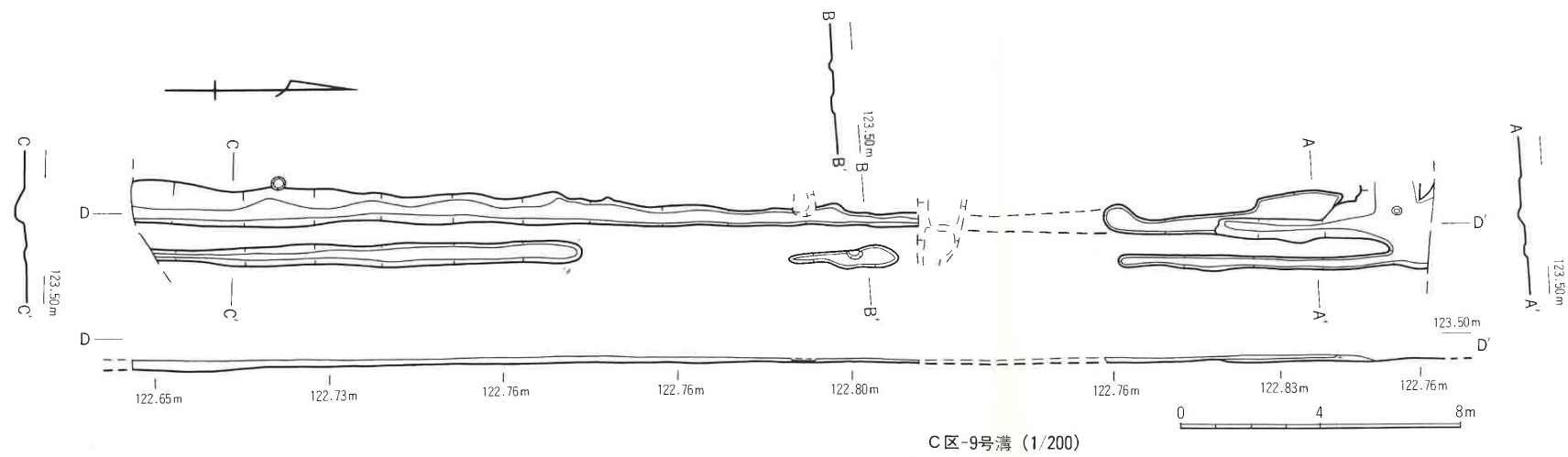
C区-12号溝(第115・116図)

第114図 C区-10号溝出土遺物(1/4)

C区の南西隅で検出された広く深い畑地境界溝である。現代の水道管の埋設溝に切られている。西はB-5溝に連続すると考えられ、東は調査区外にのびる。東西に約8m程を検出し、その方位角は112度である。溝の断面はU字形に近く、その幅は最大で2.6mを測り、検出面からの深さは最深で約60cmである。溝の底面は高低がある。埋土中から1~5の肥前染付磁器の破片が出土した。いずれも19世紀前半以後の製品である。6は陶器の碗である。以上の遺物からこの溝の存続年代の一点は19世紀の前半にあるといえる。(旧B地区溝4)



第115図 C区-12号溝出土遺物(1/4)

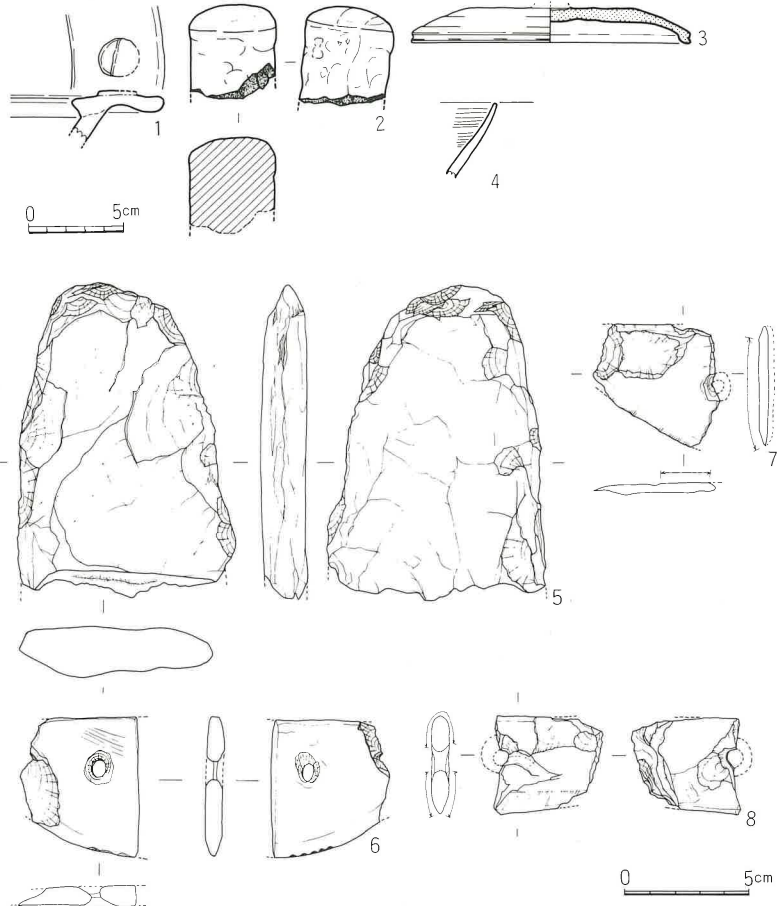


第116图 C区-9·10·11·12号沟 (1/100·1/200)

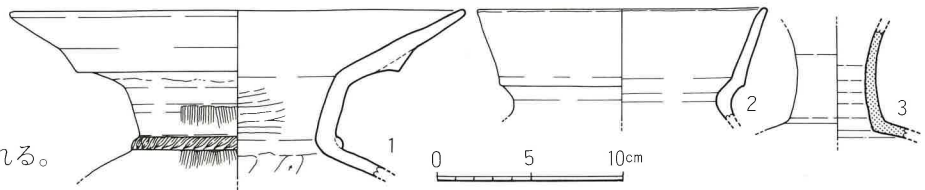
第6節 表面採集遺物
(第117~119図、写真9 →
図版56)

以下の遺物は、表面採集および遺構検出時の遺物と、遺構内出土遺物であるが明らかに古い時代からの残留遺物と考えられるものである。第117図1は上部に浮文のある弥生時代中期の高坏。2は土師器の支脚。3は須恵器坏蓋。4は製塩土器。5は扁平打製石斧。6~8は表採された磨製石包丁で、おそらく弥生時代中期後半のものと思われる。第118図は遺構検出時の遺物である。1は土師器外来系の二重口縁壺、2は山陰系の甕でいずれも胎土は在産。3は奈良時代の須恵器長頸壺。第119図は、1号方形環溝遺構拡張区で遺構検出中に出土した土器である。

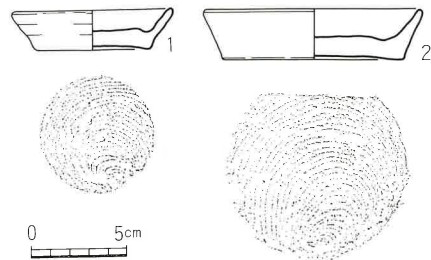
1・2とも底部糸切りの土師質土器の小皿である。1には煤が付着して灯明皿として使用された跡がある。ともにその形態から、中世後期の土器と考えられる。



第117図 C区-表面採集遺物 (1~4=1/4、5~8=1/3)



第118図 C区遺構検出時出土遺物 (1/4)



第119図 C区拡張区B地点出土遺物 (1/4)

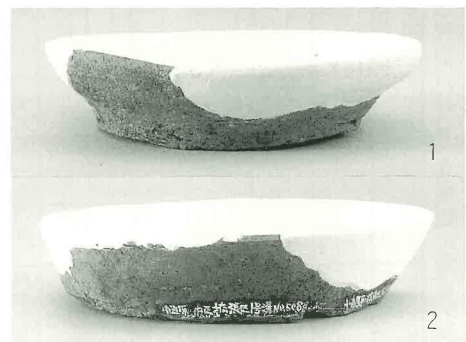


写真9. 拡張区B.出土遺物

第1表 小迫辻原遺跡 C区 竪穴住居跡一覧表

遺構名	調査区	平面形	長軸長 (cm)	短軸長 (cm)	長軸 方位角	床面積 (㎡)	主体本数	地床母有無	内部土層	ベッド有無	床面	床下土層	時期	備考	旧名称
C区-1号竪穴住居	R7.T7	長方形	520	310	79°	14.8.2本		中央1ヶ所	南壁際中央1ヶ所	削り出し1ヶ所・盛り土1ヶ所	踏みしめ	あり1ヶ所	古墳時代前期前半	廃絶祭祀あり・入口施設あり	E-住22
C区-2号竪穴住居	T7.S7	小型方形	370		85°	11.2 無柱穴		中央1ヶ所	南壁際中央1	盛り土1ヶ所	踏みしめ	あり1ヶ所	古墳時代前期前半	廃絶祭祀あり	E-住21
C区-3号竪穴住居	T5.U5	長方形	510 (660)	340	89°	16.9以上 (22.4)2本		中央1ヶ所	南壁際中央1ヶ所・東壁際中央1ヶ所	なし	踏みしめ	なし	古墳時代前期前半	廃絶祭祀あり・C-8溝に切られる	E-住17
C区-4号竪穴住居	U7	長方形	580	390	89°	20.0.2本		中央1ヶ所	南壁際中央1ヶ所・東壁沿1ヶ所	盛り土2ヶ所	貼床	あり1ヶ所	古墳時代前期前半	周溝あり・廃絶祭祀あり・C-8溝に切られる	E-住20
C区-5号竪穴住居	W3	長方形	370	245	67°	7.7 無柱穴		なし	なし	なし	貼床	あり1ヶ所	古墳時代前期前半	東部の張り出しは入口？	E-土309
C区-6号竪穴住居	X6.X5	長方形	550	440	76°	22.6 不明		不明	なし	盛り土1ヶ所	踏みしめ	なし	古墳時代前期前半	周溝あり・C-2溝に切られる	E-住30
C区-7号竪穴住居	Y4.Y3	長方形	960	740	65°	7ないし8 62.6本		中央1ヶ所	南東壁際中央1ヶ所	削り出し1ヶ所・盛り土1ヶ所	踏みしめ	あり3ヶ所	古墳時代前期前半	廃絶祭祀あり	E-住19
C区-8号竪穴住居	Z4.Y4	長方形	730	580	49°	36.4.4本		中央1ヶ所	南東壁中央1ヶ所・南西壁沿1ヶ所	盛り土4ヶ所	貼床	あり2ヶ所	古墳時代前期前半	周溝あり・廃絶祭祀あり	E-住18
C区-9号竪穴住居	R3.C3	方形	510	490	93°	21.4.4本		中央1ヶ所	南壁際中央1ヶ所	なし	踏みしめ	なし	古墳時代前期前半	周溝なし・C-7建物・C-8建物に切られる	B-住1
C区-10号竪穴住居	B2	長方形？	(330)	370	113°	7.6以上 無柱穴？		中央1ヶ所	南壁際中央1ヶ所・中央よりやや北1ヶ所・ほか1ヶ所	なし	踏みしめ	なし	古墳時代前期前半	周溝あり・1号条溝に切られる	B-住7
C区-11号竪穴住居	T5	不明	不明	不明	-	不明 不明		(カマド)？	不明	なし	不明	なし	奈良時代	カマドの下部遺構か	E-焼土A
C区-12号竪穴住居	W4	長方形？	(390)	(200)	(3°)	不明 不明		カマド北辺	不明	なし	不明	なし	奈良時代	カマドつき竪穴の下部遺構	E-土層A
C区-13号竪穴住居	B4	小型方形	350	(320)	109°	9.0以上 無柱穴		南東壁中央(カマド)	南東壁際面隅各1計2ヶ所	なし	踏みしめ	なし	奈良時代	カマド祭祀あり・C-4溝・C-11溝・C-6建物に切られる	B-住4
C区-14号竪穴住居	B5.B4	小型方形	410	390	6°	12.0 無柱穴		北壁中央(カマド)	北東隅1ヶ所・カマド手前1ヶ所	なし	踏みしめ	なし	奈良時代	周溝なし・カマド祭祀あり・C-6建物に切られる	B-住2

第 2 表 小迫辻原遺跡 C区 掘立柱建物跡一覧表

遺構名	調査区	規模 (間数)	縦軸長 (m) (中心距離)	横軸長 (m)		床面積 (㎡)	方位角 (磁北より 東へ長軸の方位角)	時期	備考	旧名称
				中心距離	ひさし付き					
C区- 1号掘立柱建物	S7	3×2以上	6.50	4.10	—	25.90 以上	64°	古墳時代前期前半	1号方形環溝内,東西棟, 総柱? 2号方形環溝内,東西棟,立て直し あり.	E-建20 E-建321~ 325
C区- 2号掘立柱建物	W6	3×1以上	7.00	—	—	—	75°	古墳時代前期前半	—	E-建25?
C区- 3号掘立柱建物	V5	2×1	6.00	2.65	—	16.00	89°	古墳時代前期前半	東西棟	E-建1(B)
C区- 4号掘立柱建物	Z3	2×1	5.20	3.45	—	18.00 ㎡	57°	古墳時代前期前半	—	E-建7
C区- 5号掘立柱建物	W3	3×2	5.60	4.30	—	23.10	171°	中世	南北棟	B-建1
C区- 6号掘立柱建物	B5, B4	3×2	5.80	3.55	—	20.30	99°	中世	東西棟	B-建2
C区- 7号掘立柱建物	B3	3×2	6.50	4.80	—	29.70	108°	中世	東西棟	B-建3
C区- 8号掘立柱建物	B3	3×2	6.60	4.60	—	29.50	97°	中世	東西棟	E-建22
C区- 9号掘立柱建物	T6	3×2	7.55	5.10	—	38.40	78°	近世	C-7,8溝の内部,東西棟	

第 3 表 小迫辻原遺跡 C区 土壘一覧表

遺構名	調査区	形状	分類	長軸長 (単位)		短軸長 (単位)	深さ (cm)	時期	備考	旧名称
				長軸長	短軸長					
C区- 1号土壘	Y6	不定形	F	(300)	(255)	11	古墳時代前期前半	削平された堅穴?、焼土あり	E-土318	
C区- 2号土壘	A4	不定形	F	195	(54)	46	古墳時代前期前半	—	B-土15	
C区- 3号土壘	X4	長円形	C1	298	137	26	奈良時代	C-9溝に切られる	E-土314	
C区- 4号土壘	Z5	不定形	F	180	148	11	奈良時代	底面に完形の須恵器坏身か、ふせておかれている	E-土316	
C区- 5号土壘	S4	小型長円形	C1	97	70	10	近世	—	E-土303	
C区- 6号土壘	T4	長円形	C1	251	87	63	近世	C-8溝を切る,墓の可能性もある	E-土304	
C区- 7号土壘	T4	長円形	C1	263	117	107	近世	C-8溝が埋没してから掘りこまれる	E-土305	
C区- 8号土壘	T4	長方形	E1	173	106	63	近世	C-8溝に切られている,長軸の方位角 159°	E-土306	
C区- 9号土壘	X3	長円形	C1	131	68	58	近世	C-9溝との切り合い関係不明	E-土321	
C区- 10号土壘	X3	小型円形	A2	80	75	12	近世	土器小片混入	E-土320	
C区- 11号土壘	S4	長円形	C1	116	92	15	不明	遺物等なし	E-土301	
C区- 12号土壘	S4	不定形	F	171	88	11	不明	遺物等なし	E-土302	
C区- 13号土壘	V4, V3	不定形	F	250	156	55	不明	底面凹凸で埋土に地山ブロック多い→人為土壘	E-土312	
C区- 14号土壘	V3	不定形	F	226	182	40	不明	遺物等なし	E-土307	
C区- 15号土壘	V2	不定形	F	152	110	13	不明	遺物等なし	E-土308	
C区- 16号土壘	W3	長円形	C1	152	80	6	不明	土器細片と炭を含む	E-土313	
C区- 17号土壘	X5	長円形 (小型)	C1	(135)	100	25	不明	土器小片を含む	E-土330	
C区- 18号土壘	X2	不定形	F	105	86	24	不明	遺物等なし	E-土310	
C区- 19号土壘	Y5	不定形	F	163	53	28	不明	土器細片を含む	E-土317	
C区- 20号土壘	Z5	不定形	F	95	94	11	不明	土器細片を含む	E-土315	

第 4 表 小迫辻原遺跡 C区 墓一覧表

遺構名	調査区	棺形式(上/下)	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	土壌の平面形	方位角 (長軸または頭位)	時期	備考	旧名称
C区-1号墓	B3	土壙墓?	135	62	65	長方形	137°	中世?	—	B-墓1

第 5 表 小迫辻原遺跡 C区 溝一覧表

長さの () は検出した部分のみで、それ以上に長くなることを示す

遺構名	調査区	断面形態	長さ (単位 m)			方向と方位角	時期	備考	旧名称
			長さ	最大幅	最小幅				
C区-1号溝 (1号方形環溝)	07.P8.P7.P6.Q7.Q6.R6. R5.S6.S5.T7.T6	逆台形~V字 形~U字形	東西溝約 43.0	4.5	2.5	東西溝 約 64°	古墳時代前期前半	方形にめぐり、C-7溝に切られる。	E-溝17
C区-2号溝 (2号方形環溝)	U7.U6.V6.V5.W6.W5.X5. X6	逆台形	東西溝約 35.0	3.5	1.5	東西溝 約 72°	古墳時代前期前半	方形にめぐり、北辺に陸橋、C-6住 を切り、C-5・8溝に切られる	E.F-溝20
C区-3号溝 (2号方形環溝)	U6.V6.W6.X6	方形	東西溝 (24.5)	0.7	0.3	東西溝 約 71°	古墳時代前期前半	布堀、C-5溝に切られる	E-土319
C区-4号溝 (1号条溝)	A5.A4.B4.A3.B3.A2.B2. A1.B1	逆台形	(43.0)	3.6	2.0	南北 (湾曲)	古墳時代前期前半	長大な溝の一部、内部に土壙、柱穴 多い、C-10住・C-2土を切り、C-13 住に切られる	E-溝 1
C区-5号溝	V7.V6.V5.V4	U字形	(25.6)	1.4	0.9	南北 2°	中世	C-2溝・C-3溝を切る	E-溝21
C区-6号溝	U4.U3.V4.V3.W3	U字形	(21.5)	0.5	0.3	東西 85°	中世	—	E-溝 A
C区-7号溝	S8.S7.R7.R6.R5	U字形	(31.0)	1.5	0.2	南北 171°	近世	畑地境界溝兼宅地区画溝、C-1建・ C-1溝を切る	E-溝18
C区-8号溝	U7.U6.U5.T5.T4.T3	U字形	(39.0)	2.6	1.0	南北 160°	近世	畑地境界溝兼宅地区画溝、C-2溝・ C-3住を切り、C-4住、C-8土を切 り、C-6土、C-7土に切られる	E-溝19
C区-9号溝	X5.X4.X3.X2.X1	U字形、二条	(37.5)	(2.0)	(2.0)	南北 4°	近世	畑地境界溝、C-3土を切る、C-10溝 と連続?	E-溝22
C区-10号溝	X5.Y5.Z5	U字形	(26.0)	2.3	1.2	東西 96°	近世	畑地境界溝	E-溝23
C区-11号溝	B5.B4.B3	U字形	(20.6)	1.7	0.6	南北 7°	近世	畑地境界溝、C-13住を切る	B-溝 2
C区-12号溝	C1.C0.D1.D0	U字形に近い	(8.0)	2.6	2.1	東西 112°	近世	畑地境界溝、B-5溝に連続する	B-溝 4

第 6 表 小迫辻原遺跡 C 区 出土土器観察表

小迫辻原 1号方形形器遺跡 C区-1号 溝：古墳時代前期前半

E-清17

NO	出土位置 遺跡	種別	規格(口径・高さ)		底径	胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
			口径	高さ				内面	外面				
1B	地点-下層中A	土師器 壺A (複合口縁)	-	-	-	砂粒多い 在り	構上げ	ヨコナデ		-	淡褐色	-	尖筆文字の刻目 口縁部 貼付一帯 三角突帯(文)円形浮 文(3個単位)
2B	地点-下層中A	土師器 壺C? (二重口縁)	-	21.0	-	砂粒多い 在り	構上げ	ヨコナデ		黒斑	淡茶褐色	-	
3B	地点-下層中A	土師器 壺D (二重口縁)	-	-	-	砂粒多い 在り	構上げ	ヨコナデ		-	淡茶褐色	-	頸部突起・直立・ややふくらむ
4B	地点-下層中A	土師器 壺A (複合口縁)	-	-	-	砂粒多い 在り	輪縁み	ヨコナデ	指圧痕→ナデ	-	茶褐色	-	頸部片
5B	地点-下層中A	土師器 壺A	-	(18.8)	-	砂粒多い 在り	構上げ	ヨコナデ	ヨコナデ→指圧痕→ラケズリ	黒斑	灰褐色	-	口縁部
6B	地点-下層中A	土師器 壺A	-	-	-	砂粒多い 在り	構上げ	タテハケ	ヨコナデ	-	茶褐色	-	口縁部片
7B	地点-下層中A	土師器 壺B?	-	(15.7)	-	砂粒多い 在り	構上げ	ヨコナデ		黒斑	褐色	-	口縁部
8B	地点-下層中A	土師器 壺B	-	-	-	砂粒多い 在り	構上げ タテハケ成形	ヨコナデ	ナメハケ→ヨコナデ	-	暗褐色	二次加熱 スズ付置	口縁部片
9B	地点-下層中A	土師器 壺B	-	(20.0)	-	砂粒多い 在り	輪縁み タテハケ成形	ヨコナデ	指圧痕→ヨコナデ	-	淡褐色	二次加熱 スズ付置	口縁部
10B	地点-下層中A	土師器 壺B	-	-	-	砂粒多い 在り	構上げ	ヨコナデ	ヘラケズリ	-	淡茶褐色	-	口縁部片
11B	地点-下層中A	土師器 壺B	-	-	-	砂粒多い 在り	構上げ タテハケ成形	ヨコナデ	ヘラケズリ	-	淡褐色	二次加熱 スズ付置	口縁部片
12B	地点-下層中A	土師器 壺D	-	(14.1)	-	砂粒多い 在り	構上げ	ヨコナデ	ヘラケズリ→ヨコナデ	黒斑	淡褐色	-	口縁部
13B	地点-下層中A	土師器 壺	-	-	-	砂粒多い 在り	構上げ	ヨコナデ	タテハケ→ヨコナデ	-	明褐色	-	頸部片
14B	地点-下層中A	土師器 壺	-	(13.1)	-	砂粒多い 在り	構上げ	ヨコナデ	タテハケ→ヨコナデ	-	褐色	-	口縁部
15B	地点-西土層中A	土師器 壺A	-	-	-	砂粒多い 在り	構上げ	ヨコナデ	ヘラケズリ	黒斑	黒褐色	-	口縁部片
16	土層接合	土師器 高杯B	-	-	-	砂粒多い 在り	差込み	タテハケ	指ナメナデ	黒斑(内)	淡褐色	-	頸部等孔3個
17B	地点-下層中A	土師器 高杯	-	-	(13.6)	砂粒多い 在り	構上げ	ヨコナデ		黒斑	淡褐色	-	頸部等孔4個
18B	地点-西土層中A	土師器 高杯	-	-	(12.0)	砂粒多い 在り	構上げ	ヨコナデ	タテハケ(6本/1cm) → ヨコナデ	黒斑	淡褐色	-	頸部等孔1個
19B	地点-下層中A	土師器 高杯D	-	20.2	-	砂粒多い 在り	構上げ 田原系厚	ヨコナデ	ヨコナデ	黒斑	淡褐色	-	頸部等孔1個
20B	地点-下層中A	土師器 高杯A(D)	-	頸部径 2.9	-	砂粒多い 在り	構上げ 内窪系厚	ヨコナデ	(上)ヨコナデ(下)ナデ (上)ヨコナデ(下)ナデ	-	淡褐色	-	口縁部→頸部突起
21B	地点-下層中A	土師器 高杯B	-	頸部径 3.6	-	砂粒多い 在り	差込み	ヨコナデ	ヘラケズリ→ラケズリ	-	淡茶褐色	-	頸部
22B	地点-下層中A	土師器 高杯B	-	-	-	砂粒多い 在り	構上げ	ナデ		-	淡褐色	-	頸部等孔1個・屈曲する
23B	地点-下層中A	土師器 小型器志D 変部	-	(9.5)	-	砂粒少い・水こし 粘土・輸入	輪縁み	不明		-	明茶褐色	-	変部No.23と同一個性
23	地点-下層中A	土師器 小型器志D 脚部	-	-	12.5	砂粒少い・水こし 粘土・輸入	輪縁み	ヨコナデ	ヨコナデ	-	明茶褐色 (内)明茶褐色	-	頸部等孔4個・No.23と同一個性
24B	地点-下層中A	土師器 小型器志D	-	9.5	-	砂粒多い 在り	構上げ	ヨコナデ	ヨコナデ→ナメハケ(14本/1cm)	黒斑	茶褐色	-	口縁部→頸部
25B	地点-西土層中A	土師器 小型器志D	-	-	(10.8)	砂粒多い 在り	構上げ	ヨコナデ		-	淡褐色	-	頸部
26B	地点-下層中A	土師器 鉢	-	-	-	砂粒多い 在り	構上げ	ナデ	ナメナデ	黒斑	淡茶褐色	-	口縁部→頸部
27B	地点-下層中A	土師器 小型器B?	-	頸部径 11.8以上	12.9	砂粒多い 在り	輪縁み	ナデ	ヘラケズリ?・振ナデ	-	淡褐色	二次加熱 スズ付置	口縁部(不完全に)
28B	地点-下層中A	土師器 小型器B?	-	頸部径 7.6	12.6	砂粒多い 在り	輪縁み	ナデ	指圧痕→接合部	黒斑	茶褐色	-	脚部
29B	地点-下層中A	土師器 小型器B	-	-	(3.8)	砂粒多い 在り	構上げ	ヨコナデ	タテハケ(8本/1cm)・漸次のナデ	黒斑	茶褐色 (内)茶灰色	-	底部
30B	地点-下層中A	土師器 小型器	-	-	-	砂粒多い 在り	構上げ	ヨコナデ		黒斑	淡茶褐色	-	口縁部片
31B	地点-下層中A	土師器 小型器B	-	(9.7)	-	砂粒多い 在り	構上げ	ヨコナデ	ヨコナデ→ヨコナデ	-	淡褐色	-	口縁部
32B	地点-下層中A	土師器 小型器B	-	(13.5)	-	砂粒多い 在り	構上げ	ヨコナデ	ヨコナデ→指圧痕	黒斑	暗茶褐色	二次加熱 スズ付置	口縁部
33B	地点-下層中A	土師器 小型器D	-	(12.8)	-	砂粒多い 在り	構上げ	ナデ	ヘラケズリ	黒斑(内)	明褐色	-	口縁部
34B	地点-下層中A	土師器 小型器	-	(14.1)	-	砂粒多い 在り	構上げ タテハケ成形	ヨコナデ	ナデ→ヘラケズリ(接合部残る)	黒斑	明茶褐色	二次加熱 赤塗	口縁部→頸部(不完全に)
35B	地点-下層中A	土師器 小型器	-	(13.2)	-	砂粒多い 在り	構上げ	ナデ	指圧痕→ナデ	-	灰褐色	-	口縁部→頸部(不完全に)

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用層	備考
				口径	胴部最大径			底径	内面				
14層		土師器	碗	12.8	-	-	横上げ	ナテ	-	-	-	布面焼成時混入	

群-NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用層	備考
				口径	胴部最大径			底径	外面				
下層	16群の下	土師器	壺A	-	-	砂粒多い 在り	横上げ タテ半成形	ヨコハケ	黒班	淡茶褐色	-	胴部片	
	23-4群の準	土師器	高杯B	-	-	砂粒多い 在り	-	ヨコハケ→ナテ	黒班	赤褐色	-	胴部	
1群	31群+5群+北	土師器	壺A	-	-	砂粒多い 在り	横上げ (内側接合)	ナテ	-	暗褐色	-	はりつけ一帯三角突起ハケ工具による 割目	
	4群2層高+上部	土師器	台付碗A	6.6	10.2	8.1	横上げ	ヨコナテ	黒班	暗褐色	-	半筒形 逆におかれる	
2群	52群+5群+6群	土師器	壺D (二重口縁)	-	17.6	-	輪積み (内側接合)	ヨコナテ(二次口縁は横口縁状になる)	黒班	淡褐色	-	口縁部 壺口部は粘土帯をはりつけ	
	62群	土師器	壺D (二重口縁)	-	-	-	横上げ	ヨコハケ→タテハケカキ	黒班	淡褐色	-	口縁部片	
	72群	土師器	壺A (重口縁)	-	-	-	横上げ	タテハケ→ヨコナテ	-	暗褐色	-	口縁部はりつけ一帯突起(割目)	
	82群	土師器	壺A	34.5	(17.6)	-	輪積み タテ半成形	ヨコハケ(8本/1cm) → タテハケ(8本/1cm)	黒班	淡褐色	二次加熱あり	ほぼ球形 下半は正位のまま、下半は割れて高辺に散在	
	92群+6群+上層	土師器	壺A	19.0以上	13.9	19.7	横上げ	ヨコハケ(7-8本/1cm) → ヨコナテ(横部)	黒班	淡褐色	-	口縁→胴部	
	102群+上層	土師器	壺E	20.8以上	28.8~29.0	(35.9)	横上げ	ヨコハラケ(山口縁部は丁寧なヨコナテ)	黒班	淡褐色	-	口縁→胴部 山縁系につぶれた状態で移出	
	112群+北	土師器	壺A?	-	(19.6)	-	横上げ	ヨコハケ→ヨコナテ	黒班	暗褐色	-	口縁部	
	122群+上層+北	土師器	壺A	-	頸部径 (15.2)	-	横上げ タテ半成形	タテハケ→部分的ナテ	-	褐色	-	胴部	
	132群	土師器	壺A	-	-	5.4	横上げ	ハラケスリ→ナテ	黒班	淡茶褐色	二次加熱 スズ付着	底部 平底	
	142群	土師器	壺A(D)	18.2以上	7.7~7.8	19.0	輪積み? (内側接合)	指圧痕→ナテ→ヨコハケ(10本/1cm)	黒班	暗褐色	二次加熱 内底割離	ほぼ球形 胴部ナテがつぶれている	
	152群	土師器	壺A(D)	18.6	14.2	-	横上げ タテ半成形	ヨコハケ(10本/1cm) → タテハケ(8本/1cm)	黒班	淡褐色	二次加熱 スズ付着	球形 胴部内で扁球形品がつぶれた状態 ほぼ球形 口縁部やや肥厚 胴部やや 重厚	
	162群	土師器	壺D	13.0以上	(14.4)	(16.0)	横上げ	ヨコハケ(7本/1cm) → ヨコナテ(横部)	-	茶褐色	二次加熱 スズ付着	口縁部やや肥厚 胴部やや重厚	
	172群+6群+12群+13群	土師器	壺D	13.8以上	(15.9)	(15.6)	横上げ	タテハケ(7本/1cm) → ヨコハケ(横部)	-	淡褐色	二次加熱 スズ付着	口縁部 上部が折れている	
	182群	土師器	支脚 (外半系)	11.0以上	-	-	手づくね	ナテ 指圧痕(横部)によるシロビロレ 横方向に成形時穿孔	黒班	褐色	二次加熱 赤紫	上部が折られている。穿孔1	
	192群	土師器	支脚 (外半系)	7.8以上	-	8.0~9.0	手づくね	ナテ・指圧痕→ヨコ方向に成形時穿孔(腕)打ちかきがある	黒班	淡褐色	-	上部が折られている。穿孔1	
	202群最下層	土師器	台付碗B(A)	6.2	3.8	-	横上げ 円蓋変形	ナテ→ヨコナテ(5本/1cm) → ヨコナテ	黒班	明黄白色 (内)黄灰色	-	穿孔の正位におかれたのち2群の土器が 堆積	
	212群	土師器	台付碗A	-	-	-	横上げ	ヨコハケ(5本/1cm) → ヨコナテ	黒班	明褐色	-	胴部→底部	
	222群	土師器	小壺	-	-	13.4	横上げ	指圧痕→一部ハケ	黒班	淡茶褐色	-	胴部 逆位で移出	
	232群	土師器	碗A	3.0	10.8	-	手づくね?	ヨコナメハケ(5・7本/1cm) → ヨコナテ	黒班	褐色	-	平底	
	242群	土師器	碗	-	-	9.0	手づくね?	キレツハケスリ	黒班	褐色	-	平底	
3群	252群+北	土師器	高杯B?	-	-	-	手づくね	タテハケ(7・9本/1cm)	-	赤褐色 暗茶褐色	二次加熱 赤紫	脚部	
	262群	土師器	高杯B	-	-	-	手づくね	ヨコハケ(5本/1cm) → ヨコナテ	黒班	暗茶褐色	-	中央の芯に割 瓦を接合	
4群	272群+北	土師器	壺D (単口縁)	16.6以上	18.2	22.2	横上げ	ヨコハケ(5本/1cm) → ヨコナテ	黒班	暗褐色	二次加熱 スズ付着	口縁→胴部	
5群	282群	土師器	壺A(D) (単口縁)	-	14.8	-	横上げ タテ半成形	ヨコハケ(5本/1cm) → タテハケ(6本/1cm)	-	淡褐色	-	口縁部	
292群	292群	土師器	壺A	-	-	-	横上げ	ヨコハケ(6本/1cm) → ヨコナテ(横部)	-	黒褐色	-	口縁部片	
302群	302群	土師器	高杯CerD	-	(27.2)	-	横上げ	ナメハケ→ヨコナテ	黒班	淡褐色	-	口縁部	
312群	312群	土師器	高杯	-	-	-	横上げ	ナメハケ→ヨコナテ	黒班	黒褐色	-	口縁部片	
6群	326群+7群	土師器	壺E	-	(28.8)	-	輪積み (外面に接合部)	指圧痕→タテハケ(9本/1cm)	-	淡褐色	-	口縁部1/4片・裏の可能性あり	

33	6群+7群	土師器	壺A	-	(18.0)	-	-	-	砂粒多い 在り	黒斑	黒色	-	口縁部
34	6群+7群+北	土師器	壺A	13.6以上	16.2	21.2	-	-	砂粒多い 在り	黒斑	淡褐色 (外)底茶色 (内)淡茶褐色	二次加熱 スズ付着	口縁~胴部
35	6群+7群	土師器	壺A	-	-	-	-	-	砂粒多い 在り	-	-	-	胴部
36	6群	土師器	高杯E	-	-	-	-	-	砂粒多い 在り	黒斑	淡褐色	-	坏部片
37	6群	土師器	台付碗A	-	胴部径4.2	-	-	-	砂粒多い 在り	-	淡褐色	-	胴部
38	6群	土師器	小型壺B?	14.4	11.2	14.7	-	-	砂粒多い 在り	黒斑	明褐色 (内)明褐色	二次加熱 赤変	ほぼ完形(完形部がヨコたおしてつぶれた 状態を除く)
39	7群+北	土師器	壺D	-	16.6	-	-	-	砂粒多い 在り	黒斑	淡褐色	-	口縁部
40	7群+北	土師器	壺A	-	(18.0)	-	-	-	砂粒多い 在り	黒斑	淡褐色	-	口縁部
41	7群	土師器	壺A(D)	18.6以上	16.8	21.0	-	-	砂粒多い 在り	黒斑	淡褐色	-	口縁~胴部
42	7群	土師器	壺B	-	(15.0)	-	-	-	砂粒多い 在り	-	淡褐色	二次加熱 スズ付着	口縁~胴部
43	7群	土師器	壺A(D)	10.4以上	16.8	-	-	-	砂粒多い 在り	黒斑	淡明褐色	-	口縁Aの茶色の技術所持者があはるた てのDの技術で造ったよう(土器 口縁~胴部Aの技術所持者か上中にDを まいた土器)
44	7群+北	土師器	壺A(D)	10.6以上	(17.4)	-	-	-	砂粒多い 在り	-	褐色	-	口縁~胴部
45	7群	土師器	壺D	-	16.5	-	-	-	砂粒多い 在り	-	淡褐色	-	口縁~胴部
46	7群+上層+北	土師器	鉢A	-	22.6	-	-	-	砂粒多い 在り	-	淡褐色	-	口縁~胴部 外面に口縁部の接合痕残す
47	7群+北	土師器	小型鉢D	-	(9.0)	-	-	-	砂粒多い 在り	黒斑	明褐色	-	口縁~胴部片
48	7群	土師器	小型鉢D	-	-	-	-	-	砂粒多い 在り	黒斑	茶褐色	-	口縁部片
49	7群	土師器	小型鉢D	-	-	-	-	-	砂粒多い 在り	-	灰褐色	-	口縁部
50	7群	土師器	壺A	-	10.8	-	-	-	砂粒多い 在り	-	淡褐色 (やや白い)	-	口縁部
51	6群+7群+9群	土師器	壺A	30.4	13.1	24.0	-	-	砂粒多い 在り	黒斑	茶褐色	二次加熱 スズ付着	底部がしぼり型
52	9群	土師器	壺B	23.7	16.0	19.3	-	-	砂粒多い 在り	-	淡褐色	二次加熱 赤変	底部がしぼり型
53	9群	土師器	壺D	10.0以上	-	-	-	-	砂粒多い 在り	-	淡茶褐色	二次加熱 スズ付着	底部がしぼり型
54	9群	土師器	高杯B	-	-	-	-	-	砂粒多い 在り	黒斑	赤褐色	赤変	底部がしぼり型
55	9群	土師器	壺	3.5	7.4	-	-	-	砂粒多い 在り	黒斑	黒灰色	-	底部がしぼり型
56	9群+10群の間	土師器	台付鉢A	-	-	13.0	-	-	砂粒多い 在り	-	黒灰色	-	底部がしぼり型
57	10群	土師器	台付碗A	9.0以上	17.5	-	-	-	砂粒多い 在り	-	淡褐色	-	底部がしぼり型
58	11群+北+中央	土師器	壺D (壺口縁)	-	15.3	-	-	-	砂粒多い 在り	黒斑	淡褐色	-	底部がしぼり型
59	11群+北	土師器	壺A	-	22.5	-	-	-	砂粒多い 在り	-	淡褐色	二次加熱 スズ付着	底部がしぼり型
60	11群	土師器	壺A	頸部径 11.2	16.0	-	-	-	砂粒多い 在り	-	淡褐色	二次加熱 スズ付着	底部がしぼり型
61	11群+上層	土師器	高杯A	-	23.4	-	-	-	砂粒多い 在り	黒斑	明褐色・淡黄 褐色	-	底部がしぼり型
61	11群+20群+25群	土師器	高杯A	-	-	16.4~16.5	-	-	砂粒多い 在り	黒斑	淡黄褐色	-	底部がしぼり型
62	11群+中央	土師器	高杯D	-	20.2	-	-	-	砂粒多い 在り	黒斑	淡褐色	-	底部がしぼり型
63	11群	土師器	高杯	-	-	(15.5)	-	-	砂粒多い 在り	-	褐色	二次加熱 スズ付着	底部がしぼり型
64	11群	土師器	長頸壺D	7.6以上	11.5	-	-	-	砂粒多い 在り	-	淡褐色	-	底部がしぼり型
65	11群+12群	土師器	壺	3.2	7.9	-	-	-	砂粒多い 在り	-	明褐色	-	ほぼ完形(赤色顔料付着)
66	12群+15群+19群	土師器	壺D (壺口縁)	29.0以上	頸部径 11.6	25.4	-	-	砂粒多い 在り	黒斑	明褐色	二次加熱 スズ付着	底部がしぼり型
67	12群	土師器	壺A(D)	-	21.8	-	-	-	砂粒多い 在り	黒斑	淡茶褐色	-	底部がしぼり型
68	12群	土師器	壺A(B)	25.4以上	(17.6)	(23.6)	-	-	砂粒多い 在り	黒斑	淡褐色	-	1/3形(内面)上半に接合痕残る
69	12群	土師器	壺A	-	18.0	-	-	-	砂粒多い 在り	-	赤褐色	二次加熱 スズ付着	口縁部
70	12群	土師器	壺A(頸部A)	-	17.0	-	-	-	砂粒多い 在り	-	淡褐色	赤変	口縁部(台付長頸壺?)
71	12群+13群+中央	土師器	壺A	-	(16.5)	-	-	-	砂粒多い 在り	-	褐色	赤変	口縁部

72	12群	土師器	壺Aor(B)	-	(15.0)	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	タテハク(6本/1cm)→ヨコナデ(口縁)	ヨコハゲ→ヨコナデ(口縁) ナメハゲ	ヨコハゲ→ヨコナデ(口縁) 指圧痕→ヨコハゲ(8本/1cm)	黒斑	赤褐色	二次加熱 スス付着	口縁部 口縁端部が小さく肥厚
73	12群	土師器	壺A	-	13.8	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナメハゲ(8本/1cm)	指圧痕→ヨコハゲ(8本/1cm)	黒斑	褐色	-	胴部	
74	12群+18群+中央	土師器	壺A(D)	-	16.0	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	平行タタキ(水平)→タテハゲ(7本/1cm)→ヨコハゲ	ヨコハゲ(9本/1cm)→タテハゲ(8本/1cm)	-	赤褐色	二次加熱 スス付着	2/3形	
75	12群+14群+15群+16群+北	土師器	壺B(D)	-	19.4	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	平行タタキ(右上下)→タテハゲ(10本/1cm)→ヨコハゲ(8本/1cm)	ナデ→ヘラタテスリ→タテハゲ(口縁)	黒斑	赤褐色	二次加熱 スス付着	半定形 外面に接合痕→分割成形?	
76	12群	土師器	壺A	-	(14.6)	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	タテハゲ(9本/1cm)→ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラタテスリ	-	褐色	二次加熱 赤変	口縁部	
77	12群	土師器	壺D	-	20.0	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ・口縁上面を面取り?	ヨコナデ→ヘラタテスリ	-	黒灰色~ 黒褐色	-	口縁部 1/6片 口縁端部肥厚	
78	12群+14群	土師器	壺D	-	(18.2)	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナメハゲ	ヨコナデ・ナデ	-	赤褐色	二次加熱 スス付着	口縁部 口縁端部ははりつけて肥厚	
79	12群+上層	土師器	壺D	-	頸部径 17.6	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナメハゲ→一箇するヨコハゲ(胴部) →底状文	ヨコナデ→ヘラタテスリ	-	赤褐色	二次加熱 スス付着	胴部 胎土に赤紫母、石炭を多く含む(文) 一帯赤状文	
80	12群	土師器	支脚D	-	18.1	-	-	(12.0)	砂粒多い 在地	手づくね	指圧痕・ナデ・中央、横方向に成形時の穿孔	ヨコナデ	黒斑	赤褐色	二次加熱 赤変	破綻されている状態で後出	
81	12群+北+中央	土師器	高杯D	-	22.6	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナメハゲ→ヨコハゲ(口縁)	ヨコナデ	-	赤褐色	-	口縁部 No62と同一?	
82	12群+中央	土師器	高杯F	-	(12.8)	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	タテハゲ→ヘラタテスリ→ナメハゲ	ヨコナデ→ヨコハゲ	黒斑	赤褐色	-	口縁部	
83	12群	土師器	高杯?	-	-	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ・指圧痕	ナメハゲ(10本/1cm)	-	暗褐色	-	口縁部片	
84	12群+13群+14群+上層+中央	土師器	台付鉢A	-	15.0~ 15.3	20.4~21.0	-	6.3	砂粒多い 在地	横上げ	平行タタキ(右上下)→タテハゲ(10本/1cm)	ヨコハゲ(10本/1cm)→一部ヨコハゲ(口縁) リーナデ	黒斑	赤褐色	-	定形 12,13,14群の上部に敷在	
85	12群	土師器	小型壺D	-	6.6以上	-	-	10.2	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ・ヨコハゲ(タテスリ)→ヨコハゲ	ヨコハゲ・ナデ→指圧痕(底部粘土層)	黒斑	褐色	-	胴部	
86	12群	土師器	小型壺B	-	-	-	-	3.8	砂粒多い 在地	横上げ	平行タタキ・ナデ	ナデ	-	褐色	-	底部	
87	12群+中央	土師器	小型壺F	-	11.3	-	-	10.6	砂粒多い 在地	横上げ	タテハゲ(6~8本/1cm)→ヘラタテスリ(下)	ヨコハゲ→ナデ→ヨコナデ	-	黒褐色	-	半定形	
88	12群+上層	土師器	小型鉢D	-	7.45	-	-	9.6	砂粒多い 在地	横上げ	タテハゲ(6本/1cm)→ナデ(取)→ヨコナデ(口縁)	ヨコハゲ(5本/1cm)→ナデ→ヨコナデ	黒斑	暗褐色~ 赤褐色	-	半定形	
89	12群+上層	土師器	小型鉢D	-	(14.0)	-	-	-	精緻	横上げ	ヨヘラタテ(細かい)	ナデ(僅減・不明)	-	赤褐色	-	定形に還元	
90	13群+14群	土師器	壺D	-	(14.2)	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	タテハゲ(8本/1cm)→ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	黒斑	褐色	-	口縁部	
91	13群	土師器	小型壺	-	-	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	不定方向のハゲ・ナデ	ヘラタテスリ→ナデ	黒斑	暗褐色	-	底部	
92	13群	土師器	碗	-	9.0	-	-	-	砂粒多い 在地	手づくね	ナデ・ヨコナデ・ヒビが多い	指圧痕・ヨコナデ・ヒビが多い	黒斑	赤褐色	-	定形(平底のみ) 最下部に正位で後出	
93	14群	土師器	壺A	-	-	30.0	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	平行タタキ(右上下)→タテハゲ(5本/1cm)	ヨコハゲ	黒斑	赤褐色	-	胴部(口縁)つけ一帯赤紫	
94	12群+14群+15群+16群+17群+北+中央	土師器	壺B (二重口縁)	-	頸部径 12.7	34.6以上	-	35.7	砂粒多い 在地	横上げ	輪形	タテハゲ(5本/1cm) (接合痕よく残り)	黒斑	赤褐色	-	半定形 口縁部は故意に欠いた可能性あり	
95	12群+14群+15群+16群+17群+18群+北+中央	土師器	壺A (単口縁)	-	(14.2)	29.5以上	-	27.0	砂粒多い 在地	横上げ	不定方向のハゲ	平行タタキ(右上下)→タテハゲ(8本/1cm)	黒斑	赤褐色	-	はりつづけ一帯三角赤紫(ハゲ工具の刻目) 白・紫紫の粘土質なる(白色)	
96	12群+14群+北+中央	土師器	壺A	-	16.5	25.0以上	-	26.2	砂粒多い 在地	横上げ	平行タタキ(水平)→タテハゲ(7本/1cm)	指圧痕→タテハゲ(8・10・4本/1cm) ナデ→タテハゲ(8本/1cm)→ヨコハゲ(8・6本/1cm)	黒斑	明褐色・黒褐色 赤・明茶褐色	二次加熱 スス付着	口縁~胴部	
97	14群	土師器	壺	-	-	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ヘラタテ	ナデ	-	明褐色	二次加熱 赤紫	底部 張り底	
98	14群+北半	土師器	壺A	-	-	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	タテハゲ(7本/1cm)	ヨコハゲ(5・3本/1cm)	-	赤褐色	二次加熱 赤紫	口縁~胴部片	
99	14群	土師器	壺A	-	16.0	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	タテハゲ(8本/1cm)→ヨコナデ(口縁)	ヨコナデ(口縁)→タテハゲ(8本/1cm)	-	明褐色	二次加熱 スス付着	口縁~胴部	
100	11群+14群+上層	土師器	壺D	-	(18.8)	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ	ナメハゲ(8本/1cm)→タテハゲ(6本/1cm)	-	褐色	-	口縁部 胎土に赤紫母、石炭を多く混入	
101	14群	土師器	鉢	-	-	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	タテハゲ(5本/1cm)・ナデ	タテハゲ(9~10本/1cm)→タテハゲ(8本/1cm)	-	暗褐色	-	胴部→底部 胎土に5mm径の石を混入	
102	11群+12群+14群	土師器	高杯B	-	21.8	12.8以上	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	差込み	ヨコハゲ→タテハゲ(10本/1cm)	黒斑	赤黄色・赤色 赤褐色	二次加熱 スス付着	14群側面下部に逆位で後出	
103	14群+上層	土師器	高杯?	-	(23.4)	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ・一部ナメハゲ(8本/1cm)	ヨコ・タテハゲ→ヨコナデ(口縁)	黒斑	淡茶褐色	-	口縁部(不完全品)	
104	14群	土師器	小型壺B	-	-	-	-	3.8	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ?	ナデ	黒斑	赤褐色	-	底部 胎土が混入	
105	14群	土師器	小型鉢A	-	6.0	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ・指圧痕	細かいヨコハゲ	-	明茶褐色 赤褐色	二次加熱 赤紫	つぶれて後出	
106	14群	土師器	碗A	-	4.0	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ハゲ(10本/1cm)・(キレツ残る)	ヨコナデ→放射状指圧痕→ナメハゲ(6本/1cm)	黒斑	暗褐色	-	定形	
107	15群+18群	土師器	壺B	-	20.8以上	-	-	23.2	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ・板状工具でタタキ→タテハゲ(8本/1cm)	指圧痕(斜射状指圧痕)→ナメハゲ(6本/1cm)	黒斑	赤褐色	二次加熱 スス付着	胴部~底部	
108	15群	土師器	壺	-	(15.0)	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ	ナメハゲ(11本/1cm)→ヨコナデ(口縁)	黒斑	暗褐色	二次加熱 スス付着	口縁部	
109	12群+15群	土師器	壺D	-	15.0	-	-	19.6	砂粒多い 在地	横上げ	指圧痕(キレツ残る)	ヨコナデ(口縁)・ナメハゲ(8本/1cm)	-	淡赤褐色	二次加熱 スス付着	口縁~胴部	
110	15群+上層+北	土師器	碗A	-	(8.2)	4.5以上	-	(8.4)	砂粒多い 在地	手づくね	平行タタキ(右上下)→タテハゲ(5本/1cm)	ナデ・指圧痕(キレツ残る)	黒斑	赤褐色	二次加熱 あり	口縁部	
111	16群+17群+18群+中央	土師器	壺A	-	頸部径 21.6	-	-	(29.2)	砂粒多い 在地	横上げ	指圧痕→ナメハゲ(7本/1cm)	指圧痕→ナメハゲ(7本/1cm)	黒斑	赤茶褐色	二次加熱 あり	胴部	

112	16群	土師器	小型壺A	-	-	-	-	砂粒多い 在り	手づくね	指圧痕、ひび割れが多い(未調整)	ヨコナテ	黒斑	明褐色	-	胴部のみ	
117	17群	土師器	壺A(D)	22.0	14.2	18.9	-	砂粒多い 在り	種上げ タタキ成形	平行タタキ(水)→ヨコナテ・ナナメハク(6本/1cm)	ヨコナテ ヨコハク(6本/1cm)→ナナメハク(6・10本/1cm)	黒斑	暗褐色～ 明褐色	二次加熱 スス付着	赤変	胴部のみ
114	17群+18群	土師器	変型D	13.0	-	-	-	砂粒多い 在り	手づくね	指圧痕・底部上げ底	ヨコハク(5本/1cm)	黒斑	淡褐色	二次加熱	赤変	胴部
115	17群	土師器	脚部F	4.5以上	-	-	10.2	砂粒多い 在り	種上げ	ナテ	ヨコハク(5本/1cm)	黒斑	灰褐色～ 灰褐色	-	-	底部・側面不明外果系土器
116	18群+上層	土師器	壺A	-	-	-	-	砂粒多い 在り	種上げ	タテハク・ナテ	ヨコハク(12本/1cm)→ナテ	黒斑	褐色	-	-	底部片平底
117	16群+18群+19群+北	土師器	壺A	-	頸部込	-	22.2	砂粒多い 在り	輪積み タタキ成形	平行タタキ(水)→一部分のタテハク(8本/1cm)	指圧痕→ナナメハク→ナナメハク(8本/1cm) タテハク→ナテ・タテハク	-	暗茶褐色	二次加熱 スス付着	-	胴部(内外面・接合面残)
118	17群+18群	土師器	高杯B? (外果系)	9.8以上	24.8	-	-	砂粒多い 在り	種上げ (田舎丸縁)	タテハク(8本/1cm)→一部ヨコナテ	ヨコハク(5本/1cm)→ナテ	-	灰褐色～ 赤褐色	二次加熱	赤変	胴部
119	18群	土師器	台付碗A	-	頸部込5.0	-	-	砂粒多い 在り	種上げ	ヨコナテ	ヨコハク(5本/1cm)→ヨコナテ	黒斑	赤褐色	二次加熱	赤変	胴部
120	18群	土師器	小型器台B(D)	8.9	8.6	-	10.2	砂粒多い 在り	種上げ	タテハク(5本/1cm)→ヨコナテ	ヨコナテ(下)ヨコハク(7本/1cm)	黒斑	赤褐色	-	-	器形を構成して後出(等孔4外から内へ)
121	18群+中央	土師器	台付小型壺A	9.0以上	9.4	11.2	-	砂粒多い 在り	種上げ	タテハク・ヨコナテ	ナテ→ヨコナテ	黒斑	明褐色	-	-	器形を構成して後出(等孔2以下を全面あり)
122	18群	土師器	小型壺A	11.8	10.2	11.5	-	砂粒多い 在り	種上げ	タテハク・ナテ→ヨコナテ	指圧痕→ヨコナテ→ヨコナテ(口縁)	黒斑	黄赤褐色	二次加熱	赤変	器形を構成して後出
123	19群	土師器	壺B	19.2以上	-	22.3	-	砂粒多い 在り	輪積み 形・分割成形	平行タタキ(右)上(下)→ヨコハク(7本/1cm)→ナナメハク(6本/1cm)→ナテ	指圧痕→ヨコナテ→ヨコナテ(口縁) ナナメハク(5本/1cm)→ナナメハク(9本/1cm)→ナテ	黒斑	明褐色	-	-	器形(接合面残)を分割成形が明瞭(内面のハケ工量が異なる)
124	18群+19群	土師器	壺B (二重口縁)	-	16.8	-	-	砂粒多い 在り	輪積み	タテハク(6・3本/1cm)→ナテ→ヨコナテ	ヨコナテ→タテハク	黒斑	明褐色	-	-	口縁部
125	19群	土師器	壺B	-	(14.8)	-	-	砂粒多い 在り	種上げ	タテハク→ヨコナテ	ヨコナテ→タテハク	-	赤褐色	-	-	口縁部
126	11群+19群+上層	土師器	壺E	-	17.6	-	-	砂粒多い 在り	種上げ	指圧痕→ヨコナテ	ナテ→ヨコナテ	-	赤褐色	-	-	口縁部
127	18群+19群+中央	土師器	壺A	22.0以上	-	19.8	-	砂粒多い 在り	種上げ タタキ成形	ヨコナテ→タテハク(5本/1cm)→ナナメハク(5本/1cm)	ヨコハク(5本/1cm)→ナナメハク(9本/1cm)→ナテ	黒斑	暗褐色	二次加熱	赤変	胴部
128	12群+19群	土師器	壺A	18.0以上	(19.8)	21.2	-	砂粒多い 在り	種上げ タタキ成形	平行タタキ(水)→タテハク(6本/1cm)	タテハク(6本/1cm)→ヨコナテ(接合面残)	-	赤褐色	二次加熱	赤変	胴部
129	19群	土師器	壺A(D)?	25.0	16.4	21.0	-	砂粒多い 在り	種上げ タタキ成形	平行タタキ(水)→タテハク(6本/1cm)	指圧痕→ナテ→ヨコナテ(口縁)	-	赤褐色	二次加熱	赤変	器形を構成して後出
130	19群(庫前)+19群	土師器	壺D	9.2以上	(17.4)	-	-	砂粒多い 在り	種上げ	ヨコナテ(赤)キ・林のヨコハク	ヨコハク・指圧痕→ヨコナテ(口縁)	黒斑	褐色	二次加熱	赤変	器形を構成して後出
131	19群+北+中央	土師器	壺D	13.0以上	(18.0)	25.8	-	砂粒多い 在り	種上げ	タテハク(4本/1cm)→ヨコナテ(口縁)	ナテ→ナナメハク	-	明褐色	-	-	口縁部
132	19群+中央	土師器	壺A	18.0以上	15.4	17.9	-	砂粒多い 在り	輪積み	タテハク(4本/1cm)→ヨコハク(5本/1cm)・割縁	ナテ→タテハク(接合面残)	黒斑	赤褐色	二次加熱	赤変	胴部
133	19群	土師器	壺A	-	14.8	21.8	-	砂粒多い 在り	種積み タタキ成形	平行タタキ(右)下(上)→タテハク(6本/1cm)	指圧痕→ヨコナテ(口縁)	-	赤褐色	二次加熱	赤変	胴部
134	19群	土師器	壺B(D)?	12.6以上	12.5	16.4	-	砂粒多い 在り	種積み 分割成形?	(口)タテハク(5本/1cm)→(下)ヨコハク(10本/1cm)	指圧痕→ヨコナテ(口縁)	-	暗茶褐色	二次加熱	赤変	胴部
135	19群+20群	土師器	台付碗(BA)	9.2以上	14.6	-	-	砂粒多い 在り	種積み 分割成形	平行タタキ(右)上(下)→タテハク(6本/1cm)	一部へらがる	黒斑	明褐色	-	-	口縁部
136	19群	土師器	小型壺B(D)	12.6以上	6.3	13.2	-	砂粒多い 在り	種積み 分割成形	平行タタキ(右)上(下)→タテハク(6本/1cm)	指圧痕→ナテ→ヨコナテ	黒斑	赤褐色	二次加熱	赤変	器形を構成して後出
137	20群	土師器	壺A	-	頸部込	-	-	砂粒多い 在り	種上げ	ナナメハク(6本/1cm)	ナナメハク	黒斑	褐色	-	-	脚部はひらけ→三角変形
138	20群+中央	土師器	壺B	7.8以上	-	約4.5	-	砂粒多い 在り	種上げ タタキ成形	平行タタキ(右)上(下)→タテハク(6本/1cm)	指圧痕→ヨコナテ(口縁)	黒斑	淡褐色	二次加熱	赤変	底部内面→タテハク
139	20群+中央	土師器	壺A	22.8以上	15.4	18.6	-	砂粒多い 在り	種上げ タタキ成形	平行タタキ(右)下(上)→タテハク(8本/1cm)	指圧痕→ナナメハク(8本/1cm)	-	赤褐色	二次加熱	赤変	2/3器形(底部のみ)
140	20群	土師器	高杯A	-	28.4	-	-	砂粒多い 在り	種上げ	タテハク(6本/1cm)→ヨコナテ	ヨコハク(8本/1cm)→ヨコナテ	-	黄褐色	二次加熱	赤変	口縁部(口)
141	20群	土師器	小型壺A(D)	11.9	10.8	11.6	-	砂粒多い 在り	種上げ	ヨコハク(6本/1cm)	ヨコハク(口縁)→タテハク	-	明褐色	二次加熱	赤変	器形を構成して後出(等孔20群群)
142	19群+19群+21群+22群	土師器	大型壺A	35.0以上	-	40.4	-	砂粒多い 在り	種上げ タタキ成形	平行タタキ(右)上(下)→タテハク(6本/1cm)	ナナメハク	黒斑	赤褐色	二次加熱	赤変	胴部
143	20群+22群	土師器	壺D (二重口縁)	-	24.4	-	-	砂粒多い 在り	種上げ	タテハク→ヨコナテ→ヨコナテ(口縁)	ヨコハク→ヨコナテ→ヨコナテ(口縁)	黒斑	明褐色	二次加熱	赤変	器形を構成して後出(等孔20群群)
144	22群	土師器	壺A(E) (二重口縁)	27.8以上	19.0	26.2	-	砂粒多い 在り	種上げ	タテハク(6本/1cm)→ヨコナテ(群部)	指圧痕→ナナメハク(8本/1cm)→ナナメハク(6本/1cm)	黒斑	赤褐色	二次加熱	赤変	器形を構成して後出(等孔20群群)
145	22群	土師器	壺B? (二重口縁)	-	(13.1)	-	-	砂粒多い 在り	種上げ	ヨコナテ	ヨコハク→ヨコナテ	-	淡褐色	-	-	口縁部
146	22群+中央	土師器	壺B (二重口縁)	29.7	17.0-17.2	26.7	3.5	砂粒多い 在り	種上げ タタキ成形 分割成形	平行タタキ(右)上(下)→タテハク(8本/1cm)→ナナメハク(6本/1cm)→ナナメハク(20-25本/1cm)	ヨコハク(10本/1cm)(口縁)→ナテ→ナメハク(20-25本/1cm)	黒斑	赤褐色	二次加熱	赤変	器形を構成して後出(等孔20群群)
147	22群	土師器	壺E	-	19.6	-	-	砂粒多い 在り	種上げ	ヨコナテ	ナナメハク(7本/1cm)→ナテ(下)	黒斑	赤褐色	二次加熱	赤変	口縁部
148	22群+中央	土師器	壺A	32.0以上	-	22.2	-	砂粒多い 在り	種上げ タタキ成形	平行タタキ(水)→タテハク(11本/1cm)	ナナメハク(7本/1cm)→ナテ(下)	-	明褐色	二次加熱	赤変	器形を構成して後出(等孔20群群)
149	22群+北	土師器	壺A	-	(19.6)	-	-	砂粒多い 在り	種上げ	ヨコナテ	指圧痕→ヨコハク(8本/1cm)→タテハク	-	赤褐色	二次加熱	赤変	口縁部
150	22群+中央	土師器	壺A	21.2以上	17.9	22.8	-	砂粒多い 在り	種上げ タタキ成形	平行タタキ(水)→タテハク(11本/1cm)	指圧痕→ヨコハク(8本/1cm)→タテハク	-	赤褐色	二次加熱	赤変	口縁部

151/22群	土師器	壺A	17.5以上	152	17.8	-	砂粒多い 在り	積上げ	タテハク(6本/1cm)→ヨコナデ(口縁) ナデ(口縁)	ヨコナデ→ヘラケズリ 指圧痕→ヨコナメハク→タテヘラケ ズリ	-	明茶褐色～ 黒褐色	二次加熱 黒変 剥離	上半
152/22群+中央	土師器	壺B	24.5～ 24.7	158	21.3	-	砂粒多い 在り	積上げ	タテハク(7本/1cm)・ナメハク→ヨコ ナデ(口縁)	ヨコナデ→ヨコナメハク→タテヘラケ ズリ	-	灰黄褐色	二次加熱・ス ス付着(内面黒変)	変形品が割れて散在
153/22群	土師器	壺B?	-	(138)	-	-	砂粒多い 在り	積上げ	タテハク(10本/1cm)→ヨコナデ 本/1cm	ヨコナデ	-	黒灰色	-	口縁部
154/22群	土師器	壺D	-	174	-	-	砂粒多い 在り	積上げ	タテハク(10本/1cm)→一部ヨコハク(6 本/1cm)	ヨコナデ(口縁)→ヨコヘラケズリ	-	淡褐色	-	口縁部
155/22群	土師器	高杯A	8.0以上	158	-	-	砂粒多い 在り	積上げ (凹縁残)	タテハク→ヨコナデ・主要なナデ	ヨコハク→タテヘラケズリ	黒斑	淡褐色	-	脚内面は削り
156/22群	土師器	小型器台B(D)	-	-	8.6	-	砂粒多い 在り	積上げ	タテハク→タテヘラケズリ	ヨコハク→ヨコナデ(脚縁)	-	褐色	-	脚部穿孔3穴、環部はない、脚部のみ・ 22群の臺上部に正位で検出
157/22群	土師器	小型壺A	14.8	(132)	14.6	-	砂粒多い 在り	積上げ	ナメハク(4本/1cm)→ヨコナメハク(4本/1cm) 平行タテキ(水・右)→ヨコナメ ハク→ナデ	ヘラケズリ→ナメハク→ヨコナメハク(4本/1cm) ヨコヘラケズリ→ヨコナメハク→ヨコナデ(口 縁)	-	淡褐色～ 淡赤褐色	二次加熱 赤変 スス付着?	半変形
158/22群	土師器	小型壺A	-	148	16.8	-	砂粒多い 在り	積上げ タテキ成形	ナデ→ヨコナデ(口縁)	ナデ	-	茶褐色～ 黒褐色	二次加熱 スス付着	口縁～脚部片
159/22群+中央	土師器	小型鉢D	5.6以上	9.1	-	-	砂粒多い 在り	積上げ	ナデ→ヨコナデ(口縁)	ナデ	-	淡褐色	-	口縁～脚部片
160/23群+中央	土師器	壺B(D)	18.0以上	16.0	20.6	-	砂粒多い 在り	積上げ タテキ成形	平行タテキ(水・平)→タテヘラケ(10本 /1cm)	指圧痕→ヨコナデ(口縁)→ヘラケズリ	黒斑	淡褐色	二次加熱 赤変 スス付着	口縁～脚部(内面に接合痕残る)・逆位に おかれて検出
161/23群+中央	土師器	小型壺B	7.0以上	13.4	14.2	-	砂粒多い 在り	積上げ	ナデ→ヨコナデ(口縁)	ナデ→一部ヨコナメハク(指圧痕残 る)	-	明褐色	二次加熱 スス付着	口縁～脚部(内面に接合痕よくのこる)
162/24群	土師器	壺B?	24.4以上	-	27.8	-	砂粒多い 在り	輪積み	平行タテキ(水・平)→ナメハク(指圧痕残 る)	ナメハク(9・10本/1cm)・ナデ→ヨコナデ (口縁)	黒斑	淡褐色	-	脚部片破片が24群全体にちらばる
163/24群	土師器	高杯B	8.4以上	21.5	-	-	砂粒多い 在り	積上げ	ナメハク(9本/1cm)・タテハク(9本 /1cm)	ヨコナメハク(10本/1cm)・ナデ→ヨコナデ (口縁)	黒斑	赤色 丹塗りあり	二次加熱 赤変 スス付着	環～脚部(中央、脚部説おられて坏 部は正位で検出)
164/24群	土師器	台付鉢B(A)	8.0以上	12.8	-	-	砂粒多い 在り	積上げ	タテハク(5本/1cm)→ヨコナデ→ヨコヘ ラケズリ	ヨコナデ→タテヘラケズリ(放射状)(脚 縁)	-	淡黄褐色	-	-
165/25群	土師器	壺A (複合口縁)	-	-	(202)	-	砂粒多い 在り	輪積み	タテハク→ヨコナデ→ハク 工具による 刻目	ナメハク→ヨコナデ	-	茶褐色	-	口縁部(文)刻目
166/25群	土師器	壺A (複合口縁)	-	-	-	-	砂粒多い 在り	-	ヨコナデ	指圧痕→ヨコナデ	-	淡赤褐色	-	口縁部片
167/25群	土師器	壺B?	-	-	-	-	砂粒多い 在り	-	ヨコナデ	-	-	淡褐色	-	口縁部片
168/25群	土師器	壺A(B)(二重口縁)	31.6以上	21.5	27.4	-	砂粒多い 在り	輪積み (内側接合)	タテハク(10本/1cm)・ナメハク(9本 /1cm)→ナデ?	ヘラケズリ→タテヘラケ→タテヘラケ→ヨコナメ ハク	黒斑	淡褐色	-	ほぼ変形
169/25群+北+西	土師器	壺A (単口縁)	28.0以上	17.6	29.2	-	砂粒多い 在り	積上げ タテキ成形	平行タテキ(水・平)→タテヘラケ→ヨコハ ク(9本/1cm)	指圧痕・タテヘラケズリ→ヨコハク(10本 /1cm)	黒斑	淡褐色	-	ほぼ変形
170/25群	土師器	壺A(D)	-	(158)	-	-	砂粒多い 在り	積上げ	平行タテキ(右)→ヨコナデ(口縁)	指圧痕→斜めの環ハク	黒斑	褐色	-	口縁部～脚部
171/25群	土師器	壺A	-	14.4	-	-	砂粒多い 在り	積上げ	タテハク(7本/1cm)→ヨコナデ	ナメハク(7本/1cm)→ヨコナデ	-	淡褐色	-	口縁部
172/25群	土師器	壺A	-	(157)	-	-	砂粒多い 在り	積上げ	ヨコナデ	-	-	淡褐色	-	口縁部
173/25群+南	土師器	壺A	32.0	20.8	23.6	-	砂粒多い 在り	積上げ タテキ成形	平行タテキ(水・平)→タテヘラケ(8・10本 /1cm)→ヨコナデ(口縁)	ナメハク(5本/1cm)→タテヘラケズリ→ ヨコナメハク(9本/1cm)	黒斑	淡褐色～ 明黄褐色	-	変形に僅元・25群の中央に破片がちらば る
174/25群+南	土師器	壺A	30.4	18.2	23.0	-	砂粒多い 在り	積上げ タテキ成形	平行タテキ(水・平)→タテヘラケ(5本 /1cm)	ヨコナメハク(9本/1cm) /1cm(底部)	-	淡褐色	二次加熱 スス付着	変形品に僅元
175/25群	土師器	壺A	-	-	(21.4)	-	砂粒多い 在り	積上げ タテキ成形	平行タテキ(水・平)→ナメハク(16本 /1cm)	ヘラケズリによる丁寧なナデ	-	淡褐色～ 黒灰色	二次加熱 スス付着	底部
176/25群+中央	土師器	壺B	21.6	15.8～16.0	19.0	-	砂粒多い 在り	積上げ	タテハク(3本/1cm)→ナメハク→ヨ コナデ(口縁)	ナメハク	黒斑	明褐色	-	変形に僅元
177/25群	土師器	壺D	24.0	17.4	22.0	-	砂粒多い 在り	積上げ タテキ成形	タテヘラケ→ナメハク(8本/1cm)→脚 部ヨコハク	ナメハク	-	暗茶色～ 黒褐色	二次加熱 あり 石多い・変形品がつぶれて検出	(文)・脚部(脚部痕跡・脚部に金・骨・ 石多い・変形品がつぶれて検出
178/25群	土師器	壺D	21.3以上	17.6	23.2	-	砂粒多い 在り	積上げ タテキ成形?	タテヘラケ→ナメハク・脚部に一糸痕跡 あり	ヨコナデ(口縁)→ヘラケズリ	黒斑	明黄色	二次加熱 スス付着	ほぼ変形(底部中央)・脚部に金・骨・石 多い・臺上部に接合痕よくのこる
179/25群	土師器	壺B(D)	20.5	17.0	18.8	-	砂粒多い 在り	積上げ タテキ成形	タテヘラケ→ナメハク(全面右)→脚 部ナデ	ヨコヘラケズリ	-	淡褐色	二次加熱 スス付着	ほぼ変形 変形品がつぶれている
180/25群+南	土師器	壺A(D)	-	14.0	-	-	砂粒多い 在り	輪積み	タテハク(6本/1cm)→ヨコナデ(口縁)	ヨコハク→ナデ→指圧痕(接合痕残る)	黒斑	淡褐色	-	口縁部
181/25群	土師器	高杯A	-	(50)	-	-	砂粒多い 在り	逆縁成形 (凹縁残)	タテヘラケズリ	ナメハク→ナデ→一部ハク(内)はほり 痕	-	淡褐色	二次加熱 赤変 スス付着	環～脚部片
182/25群	土師器	小型壺B(D)	11.4	12.3	13.1	-	砂粒多い 在り	積上げ	タテハク(8本/1cm)→ヨコナメハク ハク	ナメハク→ナデ	-	淡褐色	二次加熱 スス付着	変形に僅元 僅位でほかの土器の上の に
183/25群	土師器	小型壺A	15.4	12.5～14.5	-	-	砂粒多い 在り	積上げ 壺A(D)	タテハク(7本/1cm)→指圧痕・ナメ ハク	指圧痕→ナデ→ヘラケズリ	-	淡褐色	二次加熱 スス付着	変形に僅元 変形品がつぶれている
184/26群	土師器	壺A(D) (二重口縁)	38.0以上	20.6～20.8	28.6	-	砂粒多い 在り	積上げ 壺A(D)	平行タテキ(水・平)→タテヘラケ(10本 /1cm)→ナメハク(6本/1cm)	ハク(接合痕残る)	黒斑	淡褐色	-	変形に僅元 変形品がつぶれている 指圧痕に僅元・25群の中央に破片がちらば る
185/26群+27群	土師器	壺A(D) (単口縁)	34.0以上	20.0	30.0	-	砂粒多い 在り	積上げ 壺A(D)	平行タテキ(水・平)→タテヘラケ(6本 /1cm)→ナメハク(6本/1cm)	ナメハク(6本/1cm)・指圧痕・ナメハク→ ヨコナメハク(6本/1cm)→ヘラケズリ(一 部)・上部に接合痕残る	黒斑	淡褐色	-	ほぼ変形(底部穴縁) 逆位でつぶれた状 で検出
186/27群	土師器	壺D	-	15.4	-	-	砂粒多い 在り	積上げ	タテハク(8本/1cm)→タテヘラケズリ→ ヨコナデ(口縁)	ヨコハク(9本/1cm)→ナデ→一部ハク	黒斑	淡黄褐色	-	口縁部～脚部
187/27群	土師器	壺A	-	17.4	(24.0)	-	砂粒多い 在り	積上げ	タテヘラケ→ナメハク→ナデ	ナデ→ヘラケズリ	-	暗茶褐色～ 明黄色	-	口縁部～脚部
188/27群	土師器	壺A(?)	-	-	-	-	砂粒多い 在り	積上げ	ナメハク→ナメハク→ナデ	ナデ→ヘラケズリ	-	褐色	-	環なし一次骨
189/27群	土師器	壺A	-	16.0	-	-	砂粒多い 在り	積上げ	タテハク(8本/1cm)→ヨコナデ	ヨコハク(10本/1cm)	-	明褐色	-	口縁部

190(27群)	土師器	壺B	19.4	16.6	202	-	砂粒多い 在り	横上げ	タテナメヨコハク(9×10本/1cm)・不 明	ヨコナメハク・ナゲナゲ(口縁)・ヨコナメ ヘラケスリ	黒斑	淡茶褐色	二次加熱 赤変 スズ付蓋	赤変 (口縁1/5赤変)・口縁部は打ち欠い て、残り赤変直におく
191(27群)	土師器	壺A	15.2以上	17.6	220-224	-	砂粒多い 在り	横上げ	タテハク(8本/1cm)	指圧痕・ヘラケスリ→ヨコハク(6本/1cm) →ヨコハク	黒斑	淡褐色	二次加熱 赤変 スズ付蓋	上半変形 上半のみを正位で検出
20群	土師器	壺B(D) (単口縁)	29.6	16.2	26.6	4.8	砂粒多い 在り	横上げ 分割成形	タテハク(5本/1cm)→ヨコナゲ・タテヨ コナメハク(7本/1cm)	ヘラケスリ→ヨコナメハク(6本/1cm) →ヨコハク	黒斑	淡褐色	二次加熱 赤変 スズ付蓋	赤変(平底)・赤変直に割れた・片縁で検出 脚部(口縁)は二重変直(裂目)・鼓形器 台の上1/2赤変
193(28群)	土師器	器台A(E)	7.6以上	頸部径9.6	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	タテハク(7本/1cm)→ヨコナゲ	ナゲ→ヨコハク(3本/1cm)→ヘラケスリ	-	淡褐色	-	-
29群	土師器	壺B	-	-	-	(2.5)	砂粒多い 在り	横上げ	指圧痕・ナゲ	ヘラケスリによるナゲ	-	淡褐色	-	底部
195(29群)	土師器	壺A	-	(12.6)	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	タテハク(8本/1cm)→ヨコナゲ	ヨコナメハク	-	褐色	-	口縁部
196(29群)	土師器	台付鉢A	5.7以上	14.7	-	-	砂粒多い 在り	分割成形 脚部接合	タテハク(5本/1cm)→ヨコナゲ(脚縁が 深い)	ヨコナゲ(脚底・ナゲ)	黒斑	明褐色	-	脚の部分赤変品 下部に 脚部をおりとられ て、正位におかれる
197(29群)	土師器	壺A	4.4	8.8	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	ヨコハク・指圧痕→ヨコナゲ(口縁)	ナゲ	黒斑	明褐色	-	赤変品を器下部で正位で検出
198(29群)	土師器	壺A	2.0以上	(9.5)	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	ヨコナゲ	ヨコナゲ	-	黒褐色	-	口縁部
199(7群の上)	土師器	壺A	-	頸部径 (17.5)	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	ナメハク(6本/1cm)・タテハク(口縁) →ヨコナゲ	タテハク(6本/1cm)・ナゲ	-	褐色	-	頸部片 貼付→壺三角変直(裂目)
200(4-5群間の上)	土師器	壺A	-	-	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	タテハク→ヨコナゲ	ナメハク	-	茶褐色	-	貼付→壺変直(斜格子)
201(14群の上)	土師器	壺B	-	-	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	平行タテナゲ(右ナゲ)→ナゲ	指圧痕・ナゲ	黒斑	暗褐色	-	底部
202(2群の上)	土師器	壺A(D)	11.6以上	(15.2)	-	6.4	砂粒多い 在り	横上げ 編織み タテナゲ成形	平行タテナゲ(右ナゲ)→ナゲ 平行タテナゲ(左ナゲ)→ナゲ タテナゲ(6本/1cm)	ヨコハク(6本/1cm)→ヨコナゲ(接合薄縁 有)	-	暗褐色	-	底部
203(5群の上)	土師器	壺A	-	-	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	ナメハク→ヨコナゲ	ヨコハク	-	淡茶褐色	-	口縁部
204(12群の上)	土師器	壺A(D)	-	(14.0)	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	タテハク(6本/1cm)→ヨコナゲ	ヨコハク→ヘラケスリ→ナメハク	-	褐色	-	口縁部
205(6群の上)	土師器	壺D	-	-	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	ヨコナゲ・タテハク(?)	ヨコナゲ・指圧痕→ヘラケスリ	-	褐色	-	口縁部
206(11群の上)	土師器	壺D	7.0以上	19.0	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	タテハク(5本/1cm)→ヨコナゲ(口縁)	ヨコナゲ→ヘラケスリ	黒斑	明褐色	-	二次加熱 赤変 スズ付蓋
207(12群の上(車から)・北)	土師器	壺D	-	-	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	タテハク→ヨコナゲ・ヨコハク(脚部)	指圧痕→ヘラケスリ	-	明褐色	-	在地の胎土で造った壺D
208(7群の上・北)	土師器	壺D	-	16.6	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	タテハク(7本/1cm)→ヨコナゲ	ヨコナゲ(口縁)→ナメハクヘラケスリ	-	淡褐色	-	口縁部
209(9-10群間)	好土土師器	壺A	-	-	-	3.8	砂粒多い 在り	横上げ	丁字ナゲ	ナゲ	黒斑	褐色	-	底部
210(4群の上+6群の上(車 から))	土師器	高杯B	6.2以上	-	-	-	砂粒多い 在り	横上げ 差込み	タテナメハク(10本/1cm)	ナゲ	-	淡褐色	-	脚部(穿孔)2 数字(番号)不明
211(9-10群間)	土師器	高杯A	7.6以上	-	-	-	砂粒多い 在り	横上げ 差込み (凹変直)	タテヘラケスリ	ヘラケスリ(下)ヘラケスリ	黒斑	淡褐色 黒灰色	-	脚部(穿孔)4ヶ所
212(9-10群間(車から))	土師器	台付鉢A	-	-	(17.5)	-	砂粒多い 在り	横上げ	ヨコハク→タテヘラケスリ→ヨコナゲ	丁字ナゲ	黒斑	淡褐色	-	脚部 同一個体 2013?
213(9-10群間)	土師器	台付鉢A	-	頸部径 (12.1)	14.5	-	砂粒多い 在り	横上げ (内脚接合)	タテハク→タテヘラケスリ→タテヘラケスリ	ヨコナゲ	黒斑	褐色	-	脚部
214(2群の上)	土師器	台付壺?	-	-	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	タテハク(4本/1cm)	指圧痕・ナゲ	-	淡茶褐色	-	底部
215(1群の上)	土師器	壺B	-	-	-	3.4	砂粒多い 在り	横上げ	ナメハク	ナゲ	-	褐色	-	底部
216(15群の上)	土師器	小型鉢D	6.0以上	(12.2)	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	タテハク(6本/1cm)→ヨコナゲヘラケ スリ	ヨコナゲ・タテヘラケスリ	黒斑	褐色	-	口縁部
217(3群の上)	土師器	壺	-	-	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	ヨコナゲ	ヨコナゲ	-	暗茶褐色	-	二次加熱 赤変
218(12群の上・北)	土師器	壺A	3.1	(12.2)	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	ハク(5本/1cm)→ヨコナゲ(口縁)	ナゲ	黒斑	暗褐色 黒褐色	-	口縁部
219(後出)	土師器	壺A	-	(10.6)	-	-	砂粒多い 在り	手つなね	指圧痕 ナメハク(8本/1cm) (6本/1cm)・タテハク	指圧痕・ヨコナゲ	黒斑	褐色 暗褐色	-	口縁部
220(北一居)	土師器 (複合口縁)	壺A	-	(13.6)	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	ナメハク(8本/1cm) (6本/1cm)	ナゲ→ヨコナゲ(口縁)	-	褐色 暗褐色	-	口縁部
221(北一居)	土師器 (複合口縁)	壺A	-	(12.0)	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	ヨコナゲ	指圧痕・ヨコナゲ	-	茶褐色	-	口縁部
222(北一居)	土師器 (複合口縁)	壺A	-	-	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	タテハク(6本/1cm)→ヨコナゲ	ヨコナゲ	-	赤黄色	-	口縁部片 貼付→壺変直(裂目)
223(北一居)	土師器	壺A	-	-	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	タテハク→ヨコナゲ	ハク	黒斑	褐色	-	脚部片 貼付台形変直
224(北一居)	土師器	壺A	-	-	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	ナメハク→ヨコナゲ	ヨコハク→ナゲ	-	褐色	-	脚部片 貼付壺変直
225(北一居)	土師器	壺A	-	-	-	-	砂粒多い 在り	横上げ (内脚接合)	ナメハク→ヨコナゲ	タテハク	-	褐色	-	脚部片 貼付→壺変直(裂目)
226(北一居)	土師器 (単口縁)	壺A	5.9以上	12.5	-	-	砂粒多い 在り	横上げ	ナメハク(8本/1cm)→ヘラケスリ	ヨコハク(8本/1cm)→ヘラケスリ	-	淡茶褐色	-	口縁部
227(北一居)	土師器	壺B	-	-	-	3.1	砂粒多い 在り	横上げ	指圧痕→ナゲ	ハク(10本/1cm) (とられた瀬杭ハケ)	-	淡褐色	-	底部
228(北一居)	土師器	壺?	-	-	-	5.2	砂粒多い 在り	横上げ	指圧痕→ナゲ	指圧痕・ヘラケスリ(外脚部)	-	淡茶褐色	-	底部(平底) 底部はヘラケスリで整える
229(北一居)	土師器	壺B	-	-	-	3.2	砂粒多い 在り	横上げ	ナゲ	ヘラケスリ	黒斑	淡褐色	-	底部(平底)

200	北一拵	土師器	甕B	6.8以上	(14.1)	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	タテハゲ(6本/1cm)→ヨコナデ(口縁)	ナナメハゲ(接合痕残る)	-	茶褐色	二次加熱 スズ付着	口縁→胴部
201	北一拵	土師器	甕D	-	(14.8)	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ	黒斑	暗褐色	-	口縁部
202	北一拵	土師器	甕D	-	(17.0)	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ	ヨコナデ→ヘラケズリ	黒斑	褐色	-	口縁部
203	北一拵	土師器	甕B(D)	5.0以上	(12.4)	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ ヨコナデ(8本/1cm)→ヨコナデ(肩部ヨコハゲ)	ナデ	-	茶褐色	不完全品 口縁部タテキ工程省略した甕	口縁部
204	北一拵	土師器	甕	-	(11.3)	12.3	-	砂粒多い 在地	輪漕み	ヨコハゲ(接合痕残る)	指圧痕(接合痕残る)	黒斑	褐色	-	口縁部
205	北一拵	土師器	高杯B	5.4以上	-	-	-	砂粒多い 在地	(中重)	タテハゲ→タテヘラケズリ→ヘラナデ	ナデ	-	黄灰色	-	脚部
206	北+中央	土師器	高杯E	-	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	タテハゲ→ヨコナデ	ヨコナデ	黒斑	淡褐色	-	口縁部
207	北一拵	土師器	高杯A	-	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナナメハゲ(8本/1cm)	ヘラシカキ	-	淡褐色	-	口縁部片
208	北一拵	土師器	小型鉢D	-	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコヘラシカキ	ヨコナデ	-	淡褐色	-	口縁部片
209	北一拵	土師器	小型鉢D	-	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコハゲ(5本/1cm)→ヨコナデ(口縁)	ヨコナデ(口縁)→ヘラケズリ	-	赤茶褐色	-	口縁部片
210	北一拵	土師器	小型鉢D	-	-	-	-	砂粒多い 輸入	横上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	-	赤褐色	-	口縁部 胎土に金雲母混入
211	北一拵	土師器	輪漕器台	2.8	-	(11.8)	-	砂粒多い 在地	手づくね	指圧痕→ナデ	-	-	淡褐色	-	口縁部 胎土に金雲母混入
212	北一拵	土師器	加工品	-	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	-	-	-	暗褐色	-	土器の体部除け田形に加工している
213	中央一拵	土師器	甕A	-	(30.6)	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナナメタテハゲ(5本/1cm)→ヨコナデ	ナナメハゲ(6本/1cm)→ヨコナデ	-	淡茶褐色	-	口縁部
214	中央一拵	土師器	甕A (複合口縁)	-	(20.6)	(21.4)	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナナメハゲ→ナデ	指圧痕→ナナメハゲ	-	褐色	-	口縁部
215	中央一拵	土師器	甕A	-	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	タテハゲ(8本/1cm)	ナデ→指圧痕	-	褐色	-	頸部 貼付→金雲母(列目)
216	中央一拵	土師器	高杯	-	-	-	(14.5)	砂粒多い 在地	横上げ	シカキ林のタテハゲ(8本/1cm)	ヨコハゲ(4本/1cm)→ヨコナデ	黒斑	淡茶褐色	-	脚部 穿孔1 残存
217	中央一拵	土師器	台付鉢A	4.5以上	-	14.6	-	砂粒多い 在地	横上げ	タテハゲ(6本/1cm)	タテハゲ(7本/1cm)	黒斑	淡褐色	-	脚部 穿孔3→所を後赤される
218	中央一拵	土師器?	甕A	2.5以上	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	指圧痕	指圧痕	黒斑	黄灰色	-	底部(平底)
219	中央一拵	土師器	台付鉢?	-	-	(13.0)	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ	指圧痕?	-	赤褐色	-	胴部
220	中央一拵	土師器	小型鉢D	-	-	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	指圧痕→ナデ(接合痕残る)	ヨコハゲ(6本/1cm)→ナデ	-	黄灰色	-	口縁部 暗褐色つくり
221	南一拵	土師器	甕D (二重口縁)	-	(20.6)	-	-	砂粒多い 在地	輪漕み	ヨコナデ(接合痕残る)	ヨコハゲ(5本/1cm)→ヨコナデ	黒斑	茶褐色	-	口縁部
222	南一拵	土師器	甕A (二重口縁)	-	(15.6)	-	-	砂粒多い 在地	輪漕み	タテハゲ→ヨコナデ	指圧痕→ヨコハゲ	黒斑	暗茶褐色	-	口縁部
223	南一拵	土師器	甕A (単口縁)	-	(18.2)	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	タテハゲ(6本/1cm)→ヨコナデ	ヨコナデ→ナデ(指圧痕残る)	-	黄灰色	-	口縁部
224	南一拵	土師器	甕A(D?)	-	(13.0)	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	-	茶褐色	-	口縁部
225	南一拵	土師器	甕B?	-	(15.0)	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	ナデ→タテハゲ(6本/1cm)→タテヘラケズリ	ナデ→ヘラケズリ	黒斑	褐色	-	口縁→胴部
226	南一拵	土師器	甕B(D)	-	(12.6)	-	-	砂粒多い 在地	横上げ	タテハゲ(10本/1cm)→ヨコナデ(口縁)	ヨコヘラケズリ	黒斑	淡褐色	-	口縁→胴部
227	南一拵	土師器	甕A	-	-	-	-	砂粒多い 在地	タテキ成形	平行タテキ(右ナリ)→タテヘラケズリ	タテヘラケズリ	黒斑	黄灰色～ 茶褐色	-	底部
228	一拵	土師器	支脚D	-	-	-	-	砂粒多い 在地	手づくね	指圧痕→ナデ	指圧痕→ナデ	黒斑	黄灰色～ 淡褐色	二次加熱 赤雲	故事に割られた上、破けている
229	12拵?	土師器	支脚D	-	-	-	-	砂粒多い 在地	手づくね	指圧痕→ナデ	指圧痕→ナデ	-	淡褐色	二次加熱 赤雲	故事に破砕されている

小迫辻原 1号条溝・C区-4号溝内土器A:古墳時代前期前半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(口径は標準径・単位cm)		胎土	成形	調整		構成	色調	使用痕	備考
				口径	胴部最大径			外	内				
13層		土師器	甕B	-	(14.6)	砂粒多い 在地	横上げ	ナナメハゲ	ナナメハゲ(7本/1cm)	-	淡褐色	-	口縁部
22層		土師器	甕A	-	(16.6)	在地	タテキ成形	平行タテキ→タテハゲ(7本/1cm)	ヘラケズリ→ナナメハゲ(7本/1cm)	-	黄灰色	-	胴部片
30層		土師器	甕D	-	(15.8)	砂粒多い 輸入	横上げ	ヨコナデ	ヨコナデ	-	淡褐色	-	口縁部 胎土に金雲母混入
42層		土師器	小型甕	-	-	5.0 在地	輪漕み	ナデ	タテハゲ	黒斑	茶褐色	-	底部

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(0.2cmは標準寸法・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1層・床面上部	土師器	壺A	-	-	砂粒多い 在地?	積上げ	タテハケ・ヨコハケ	黒斑	暗褐色	-	口縁部片 胴部片 主に使用した土器を投棄 No4とNo5は同一 底部 平底縁を・直上1~3cmで出土と柱 穴1内出土品が接合	
2	1層・床面上部	土師器	壺A	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ・ヨコハケ	-	赤褐色	二次加熱 スス付着		
3	3層・柱穴内(竪穴時)	土師器	壺A	-	-	4.0 砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ(8本/1cm)・底部ナデ	黒斑	褐色	-		
4	6層・床面上部(竪穴時)	土師器	壺A	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	ナメハケ	黒斑	赤褐色	-	No5・No2と同一個体	
5	6層・床面上部(竪穴時)	土師器	壺A	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	粗いタテハケ・丁寧なナデ	黒斑	赤褐色	二次加熱 スス付着	No2・No4と同一個体・ほとんど丸底	
6	1層・床面上部	土師器	台付鉢A	-	-	砂粒多い 在地	?	ヨコハケ (上)丁寧なナデ(下)粗い底・荒いナデ	黒斑	黒灰色	-		

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(0.2cmは標準寸法・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	2層・床面上部(竪穴時)	土師器	壺A	-	(27.6)	砂粒多い 在地	積上げ	平行タテハケ・ヨコハケ(10/1cm)→ ヘラタテハケ(下部)	黒斑	赤褐色 黒灰色	-	胴部 灰の立ち上がりの中で検出・底部わずかに 平底のみ	
2	2層・床面上部(竪穴時)	土師器	壺または壺A	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	ナメハケ(4本/1cm)	黒斑	赤褐色 黒灰色	二次加熱による 赤変		

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(0.2cmは標準寸法・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	3層・床上5cm(炭化材の 上)	土師器	壺A	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコハケ	黒斑	褐色	-	口縁部片	
2	4層・土壌2内	土師器	小型壺C	-	(13.4)	砂粒多い 在地	積上げ	ナデ?	-	明褐色	二次加熱 赤変	口縁部片	
3	3層・床上4cm	土師器	小型鉢D	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ・ヨコハケ	-	暗茶褐色	二次加熱 スス付着	胴部片	
4	2層	土師器	碗A	-	(9.8)	砂粒多い 在地	積上げ	ナデ・ヨコハケ	黒斑	赤褐色	-		

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(0.2cmは標準寸法・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1層・土中	土師器	壺A	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコハケ	黒斑	赤褐色	-	口縁部片	
2	2層・土中	土師器	壺A	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコ・ナメハケ	-	赤褐色	二次加熱による	胴部片	
3	2層	土師器	支脚D	-	4.8~5.2	砂粒多い 在地	手づくね	指圧痕・ナデ	黒斑	黒灰色 (内)淡灰褐色	二次加熱による 赤変	穿孔あり	
4	1層・土中	土師器	台付鉢A	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	タテハケ・ヨコハケ	黒斑	赤褐色	-	胴部	

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(0.2cmは標準寸法・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	4層・床面上部(竪穴時)	土師器	壺A (口縁)	44.2	19.4	5.0 砂粒少 在地	積上げ	細いタテハケ・ヨコハケ→ 細いタテハケ・ヨコハケ	黒斑	赤褐色	-	定形につぶれている・刻目深部(縁部)・平 底に直ハケ底	
2	1・2層流入	土師器	壺A (口縁)	-	(12.6)	砂粒多い 在地	積上げ	ヨコハケ	-	赤褐色	-	(又)刻目一受面僅部状文	
3	4層・柱穴内(竪穴時)	土師器	壺A (口縁)	-	13.5	砂粒多い 在地	積上げ	ナメハケ(6本/1cm)・ヨコハケ(4本/1cm)・ヨコハケ	黒斑	明褐色	-	口縁部片・胴部三角形等	
4	1・2層流入	土師器	壺A (口縁)	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	ナデ	黒斑	赤褐色	-	貼付茶葉(条痕あり)	
5	4層・床面上部(竪穴時)	土師器	壺A (口縁)	-	(8.2)	砂粒多い 在地	積上げ	平行タテハケ	-	赤褐色	-	口縁部片 底上2cm出土	
6	4層	土師器	壺A (口縁)	-	-	砂粒多い 在地	積上げ	ナデ	-	暗褐色	-	口縁部片 (外)暗褐色	
7	1・2層流入	土師器	壺B	-	-	3.0 砂粒多 在地?	積上げ	ヘラタテハケ	黒斑	暗褐色 (内)暗褐色	-	底平底 匠裁的V溝式糸・胎土に石 葉多く含む	

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸法は標準径・単位cm)	胎土	成形	調整	焼成	色調	使用痕	備考
4	床面にめいこ	土師器	高坏か 鉢	器高 -	砂粒多い 在地 (14.0)	積上げ	ナデ	-	淡褐色	-	脚部 使用中の踵入(床面にめいこ)
5	3層・産地時一括	土師器	台付鉢 A	器高 (11.8)	砂粒多い 在地	積上げ	タテハク(8本/1cm)	黒斑	黒灰色	-	床 5cm
6	3層・産地時一括	土師器	台付鉢 A	器高 -	砂粒多い 在地 (脚径12.4)	円蓋赤堇?	ナデ→ヘラミカキ・ヨコハク(6本/1cm)	黒斑	黄褐色	-	底部 中心に向かうヨコハク(6本/1cm)
7	2層流入	土師器	台付鉢 A	器高 -	砂粒多い 在地	積上げ	ヘラミカキ	黒斑	赤褐色	-	-
8	3層・産地時一括	土師器	鉢 A	器高 11.5 (20.0)	砂粒多い 在地 (17.4)	積上げ	ナナムハク(10本/1cm)・ヘラミカキ・指圧痕	黒斑	黒褐色	-	底部 頭部は方形・C-7(柱上層と接合・床面直上から炭化材の下)
9	3層・炭化材の上・産地	土師器	鉢 A	器高 (8.0)	砂粒少ない 在地	積上げ	ヨコハク(9本/1cm)・ヨコナデ→らせん状ハク(脚)	-	黄褐色～ 赤褐色	-	1層 方形・産地時・C-1(床面上層と接合)
10	3層・炭化材の上・産地	土師器	碗 A	器高 4.8 (9.3)	砂粒多い 在地	積上げ	粗く深い唇部・指圧痕	黒斑	明褐色～ 黒灰色	-	碗形 五位におかれたような状況

小迫辻原 C区-9号 竪穴住居：古墳時代前期前半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸法は標準径・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			外部	内部				
1	柱穴1内	土師器	蓋 A (単口鉢)	器高 -	砂粒多い 在地	積上げ	タテハク→ナデ	黒斑	淡褐色～ 灰褐色	-	-	口縁 碗形 産地時に柱穴内に逆さにおく	
2	埋土中+床面直上	土師器	鉢 A(D)	器高 (12.5)	砂粒多い 在地 (16.1)	?	ナナムハク(8本/1cm)	-	淡褐色～ 赤褐色	-	-	胴部 1/8片	
3	床面直上+土層1埋土中	土師器	鉢 D(A)	器高 (20.1)	砂粒多い 在地	積上げ	タテハク(4→5本/1cm)	黒斑	淡褐色～ 黒灰色	-	-	口縁部 1/8片	
4	床面にめいこ	土師器	高坏	器高 -	砂粒多い 在地	脚部はひりこけ	ハケ→ナデ	-	淡褐色	-	-	-	
5	柱穴1埋土内	土師器	小型器台 D	器高 -	砂粒多い 在地 (8.3)	円蓋赤堇	タテヘラミカキ・ヨコナデ	黒斑	淡褐色～ 黒灰色	-	-	脚部 碗形 4穴掌孔(外から掌孔)	
6	PM内	土師器	台付鉢 A	器高 -	砂粒多い 在地	積上げ	指ナデ・ハク	-	淡褐色～ 黒灰色	-	-	-	
7	PM上(床面直上ではなし)	土師器	小型鉢 D(A)	器高 (9.4)	砂粒多い 在地	?	ヨコナデ	黒斑	淡褐色	-	-	4×5cm片	
8	床より5cm埋土中	土師器	碗 A	器高 (2.6)	砂粒多い 在地 (10.1)	?	ハケ(7本/1cm)→ヨコナデ	-	淡褐色～ 黒灰色	-	-	4×6cm片	

小迫辻原 C区-10号 竪穴住居：古墳時代前期前半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸法は標準径・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			外部	内部				
1	床面直上	土師器	蓋 A	器高 -	砂粒多い 在地	積上げ	ナナムハク・ヨコナデ	-	淡茶褐色	-	-	-	一等三角空蓋

小迫辻原 C区-13号 竪穴住居：奈良時代

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸法は標準径・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			外部	内部				
1	カマト祭所一括	須恵器	坏身	器高 4.7 (15.6)	砂粒少ない	形(回転へうり)	回転ヨコナデ	-	淡黄灰色	-	-	-	1/2片
2	カマト内+土層1+土層	土師器	坏(精製)	器高 3.0 (15.7)	砂粒少ない	積上げ	ヨコナデ→手持ちヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ	明褐色	-	-	-	1/2片
3	カマト祭所一括	土師器	坏(精製)	器高 4.3 (15.0)	砂粒少ない	積上げ?	丁寧なナデ→ヨコナデ	-	明褐色	-	-	-	碗形(僅元)
4	カマト祭所一括	土師器	坏(精製)	器高 - (15.4)	砂粒少ない	積上げ	ナデ→手持ちヘラケズリ	ナデ・ヨコナデ	淡褐色	-	-	-	碗形(僅元)

小迫辻原 C区-14号 竪穴住居：奈良時代

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(寸法は標準径・単位cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			外部	内部				
1	PM内埋土に混入	須恵器	坏蓋	器高 -	砂粒少ない	積上げ	回転へうり・回転ナデ	回転ヨコナデ	淡黄灰色	-	-	-	口縁部片
2	土層1周辺	須恵器	坏身	器高 -	砂粒少ない	積上げ	ヨコナデ(回転ナデ)	-	明褐色	-	-	-	口縁部片
3	土層1周辺	土師器	坏(精製)	器高 15.8 (14.3)	砂粒少ない	?	ヨコナデ・不明	ナデ	淡褐色～ 明褐色	-	-	-	1/4片
4	土層1周辺	土師器	坏(精製)	器高 (14.3)	砂粒少ない	積上げ	丁寧なヨコナデ→手持ちヘラケズリ?	丁寧なヨコナデ	明褐色	-	-	-	口縁部片
5	土層1周辺	土師器	坏(精製)	器高 (13.0)	砂粒多い	積上げ	指圧痕	丁寧なナデ	明褐色～ 黄色	-	-	-	口縁部片 外側に土層の下に電磁が入る・胎土に 赤鉄質特異 石炭が多い

小遺跡原 O区-1号 土蔵：古墳時代前期前半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(○つききは径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	埋土	土師器	壺A	-	-	砂粒多い 在地	種上げ	ヨコナテ	ヨコ・ナメハナテ(10本/1cm)	-	淡褐色	-	胴部
2	埋土	土師器	壺A	-	-	砂粒多い 在地	種上げ	タテハナテ(9・10本/1cm)	ヨコハナテ(9・10本/1cm)	-	淡褐色	-	口縁部

E-Y6-土318

小遺跡原 O区-2号 土蔵：古墳時代前期前半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(○つききは径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1層	土師器	壺A	-	-	砂粒多い 在地	種上げ	ヨコナテ	ヨコ・タテハナテ(4本/1cm)	-	淡褐色～ 黒灰色	-	口縁部
2	2層	土師器	壺A	-	(18.2)	砂粒多い 在地	種上げ	タテハナテ(1本/1cm)	ナメハナテ(6本/1cm)	-	淡褐色	-	口縁部

B-A4-土15

小遺跡原 O区-3号 土蔵：弥生時代前期後半～中期前半

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(○つききは径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1層	須恵器	坏蓋	-	-	砂粒少ない	種上げ	回転ヘラケズリ・回転ヨコナテ・ナデ(内面)		-	灰白色	-	口縁部片
2	2層	土師器	杯	-	-	精製胎土	種上げ	ヨコナテ		-	褐色	-	口縁部片
3	3層	土師器	粗裂壺	-	(24.8)	砂粒少ない 在地	種上げ	ヨコナテ	ヘラケズリ	-	明褐色 淡褐色	-	口縁部片
4	4層	土師器	逆鉢形	-	-	砂粒少ない 輸入	手づくね	指任痕	ナデ	-	(脚)淡青灰色	-	胴部片 胎土に小石多しい

F-X4-土314

小遺跡原 O区-4号 土蔵：奈良時代

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(○つききは径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1層	須恵器	坏身	4.5	13.9～14.0	10.8 砂粒少ない	種上げ	回転ヨコナテ(底へら切り)		-	淡青灰色	-	ほぼ完形ふせて置かれる・ほりつけ高

E-Z5-土316

小遺跡原 O区-5号 溝：中世

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(○つききは径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	埋土中	中国製青磁 (13世紀後半)	碗	-	-	(5.8) 精練土	口クワ成形	種かけ(底黒釉)	種かけ・書入	-	淡緑色	-	金玉溝室(内面)
2	埋土中	中国製青磁 電泉 窯(13～14C)	碗	-	(16.0)	精練土	口クワ成形	種かけ		-	淡緑灰色	-	(文)黒澤井文
3	埋土中	中国製青磁 電泉 窯	碗	-	-	(6.6) 精練土	口クワ成形	種かけ		-	淡緑色	-	
4	埋土中	中国製青磁 同安 窯?	碗	-	(15.6)	精練土	口クワ成形			-	淡黄色	-	一糸沈線(内面)
5	埋土中	中国製青磁 同安 窯(12～13C前)	皿	1.9	(11.2)	(5.0) 精練土	口クワ成形	(底)種引き 種かけ		-	淡緑色	-	底部内面に文様

E-V6-溝21

小遺跡原 O区-7号 溝：近世

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(○つききは径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	埋土中	陶器	すり鉢	-	-	-	口クワ成形		かき目	-	茶褐色	-	

E-溝18

小遺跡原 O区-8号 溝：近世

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(○つききは径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	埋土中	磁器 肥前急行 180後～190前	皿	-	(8.2)	-	口クワ成形			-	-	-	
2	埋土中	磁器 肥前急行 180後～190前	皿	-	-	-	口クワ成形	靴の目印製高台		-	-	-	
3	埋土中	磁器・備前急行 (1780～1820)	皿	-	-	(4.4)	口クワ成形	皿部に染付文様 靴の目印製高台		-	淡灰色 (文様)藍色	-	
4	埋土中	陶器	壺	-	-	(8.8)	口クワ成形			-	淡緑褐色	-	
5	埋土中	陶器	碗	-	-	(4.3)	口クワ成形			-	淡黄色	-	

E-溝19

小迫辻原 C区-9号 溝:近世

E-溝9

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(口つきは後元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
4	埋土中	クワノ器類 (近代1870~)	碗	4.9~5.0	(11.2)	-	ロクロ成形	へら模様の上に輪かけ	-	-	黄緑色	-	

小迫辻原 C区-10号 溝:近世

E-溝23

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(口つきは後元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	埋土中	肥前器類 (1750~1780)	皿?	-	-	-	-	高文	-	-	-	-	底部片

小迫辻原 C区-12号 溝:近世

B-DI-溝4

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(口つきは後元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	埋土中	肥前器類	小碗	-	(11.2)	灰白色	ロクロ成形	草文	-	-	灰白色~藍色	-	口縁部~胴部
2	埋土中	肥前器類	碗	-	-	高台径3.6 黄白色	ロクロ成形	-	-	-	白濁色~淡藍色	-	底部
3	埋土中	肥前器類	小碗	-	(6.2)	(4.0) 明灰色	ロクロ成形	-	-	-	明灰色~(文)藍色	-	口縁部~胴部
4	埋土中	肥前器類	紅皿?	2.3	(8.2)	(9.6) 灰白色	ロクロ成形	-	-	-	灰白色~藍色	-	1/4片
5	埋土中	磁器	皿	-	-	高台径(6.7) 灰白色	ロクロ成形	靴の目凹形高台(底)輪はき	-	-	明緑白色	-	底部1/5片
6	埋土中	陶器	碗	-	-	高台径3.6 粉色	ロクロ成形	単輪・無輪→砂目(底)指圧痕	靴の目輪はき	-	淡灰色	-	底部高台に砂目

小迫辻原 C区奈良時代ピット

B-奈良ピット

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(口つきは後元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	B9調査区ピット12	須臾器	長頸壺	-	12.8	-	積上げ	回転ヨコナデ・全体に自然釉	-	-	黒青灰色	-	口縁部~胴部ありとられている

小迫辻原 C区素面採集土器

群-NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格(口つきは後元径・単位(cm))		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
C区	1C-9住跡留	弥生中期土器	高杯D	-	-	砂粒多い在土	輪積み	ヨコナデ	-	-	明褐色	二次加熱痕	口縁部片上面に凹形貼付
	2C-3土溝残留	土器類(古墳前)	支脚D	-	-	砂粒多い在土	積上げ	指圧ナデ	-	-	茶褐色	-	上部中委
	3表層	須臾器(奈良)	坏蓋	-	-	砂粒多い在土	巻き上げ	回転へら削り・ヨコナデ	ヨコナデ	-	灰色自然釉	-	胎土に石灰多い
	4表層	新石器(奈良) 埴土器類	逆錘形 壺B(二重口縁)	-	-	砂粒多い在土	手づたね	クチャ・与子のナデ・ハケ様の模様	ヨコ方向の自然釉帯・ヨコハケ	ヨコナデ	-	淡褐色	-
C区 採出時	1遺構後出時	土器類(古墳前)	壺E	(24.2)	-	砂粒多い在土	積上げ	クチャ・ハケ(8本/1cm)・ヨコナデ	ヨコナデ・ヨコハケ(3本/1cm)	黒町	淡褐色~灰色	-	口縁部片 貼付三角炎帯・頸部 貼付炎帯(列目)
	2遺構後出時	土器類(古墳前)	長頸壺	(15.4)	-	砂粒多い在土	積上げ	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	-	淡褐色	-	口縁部
C区 採集時	1遺構後出時	須臾器(奈良)	小皿	-	5.0	砂粒多い在土	ロクロ	回転ナデ	回転ナデ	-	淡青灰色	-	頸部
	2F 瓶蓋区	土器類(中世)	小皿	2.1	8.2	6.0 在土	ロクロ	回転ヨコナデ・(底)回転系切り	回転ナデ 一指ナデ	-	淡茶褐色	スス付痕	基部変形・口縁1/6形
C区 採集時	1遺構後出時	土器類(中世)	小皿	2.7	11.2	9.6 在土	ロクロ	回転ヨコナデ・(底)回転系切り	ヨコ指ナデ 一指ナデ	-	淡明褐色	-	基部変形・口縁1/6形

第 7 表 小迫辻原遺跡 C区 出土土製品一覽表

小迫辻原 C区-6号竪穴住居・古墳時代前期前半 E-Y4・Z4-18住

NO	出土位置・遺構	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
			厚さ	径			外面	内面				
11	1層流孔込み土製品	紡錘車	1.1	5.3	—	手づくね	丁嚢ナナ子	—	—	明橙褐色～茶褐色(紫色)? 淡褐色～黒灰色	—	完形 完形使用中?・祭祀 廃棄?
12,3	2層床面直上土製品	土鏝	3.0	4.0	—	手づくね	指圧痕	黒斑	—	—	—	—

小迫辻原 1号条溝(C区-4号溝):古墳時代前期前半 B-1溝

NO	出土位置・遺構	器種	規格()つぎは復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整		焼成	色調	使用痕	備考
			厚さ	外径			穿孔径	底径				
260	22群の西中央一括	王鏝または土玉	2.1	1.25	—	手づくね	丁嚢ナナ子	—	—	淡褐色	—	4mm大穿孔あり・下から上へ

第 8 表 小迫辻原遺跡 C区 出土石器観察表

出土遺構	No.	位置・層序	器種	石材	()つぎは破片・単位(cm)			重量 (単位g)	備考
					長さ	幅	厚さ		
C区-1号条溝(C-4溝)	261	25群	磨石	安山岩	(8.7)	9.6	3.9	(360.6)	一部欠損
(古墳時代前期・前半)	262	11群	磨石	安山岩	14.0	11.1	4.8	1275.0	完形
C区-2号竪穴住居	1	2層:床面直上	石皿	安山岩	38.1	32.4	7.6	14200.0	ほぼ完形 炭層の上にいる
(古墳時代前期・前半)	5	周溝埋土内	砥石	砂岩質頁岩	15.2	3.9	2.3	215.1	完形
C区-4号竪穴住居	42	4層 廃絶時一括床上 2cm	磨石	凝灰岩質安山岩	(8.2)	(8.1)	2.8	(251.0)	半折
(古墳時代前期・前半)	13	3層 廃絶時一括	石皿	安山岩	(35.7以上)	33.3	10.0	(17000.0)	加熱の為割れている・スス付着・炭化材の上にいる

小迫辻原 表面採集石器

出土遺構	NO	位置・層序	器種	石材	()つぎは破片・単位(cm)			重量 (単位g)	備考
					長さ	幅	厚さ		
C区-10トレンチ(縄文時代)	5	拡張区	扁平打製石斧	安山岩	(11.9)	7.7	1.8	(258)	半折
C区 X-5調査区(弥生時代)	6	表採	磨製石包丁	硬質砂岩	(5.5)	(4.2)	0.8	(29)	穿孔部以外全面研磨・両面穿孔
C区 B3調査区 Pit 8 (弥生時代)	7	埋土中	磨製石包丁	硬質砂岩	(4.9)	(4.5)	3.5	(12)	穿孔1. 両面穿孔
C区 A-3調査区(弥生時代)	8	検出中	磨製石包丁	結晶片岩	(3.6)	(3.9)	0.7	(16)	穿孔1. 両面穿孔

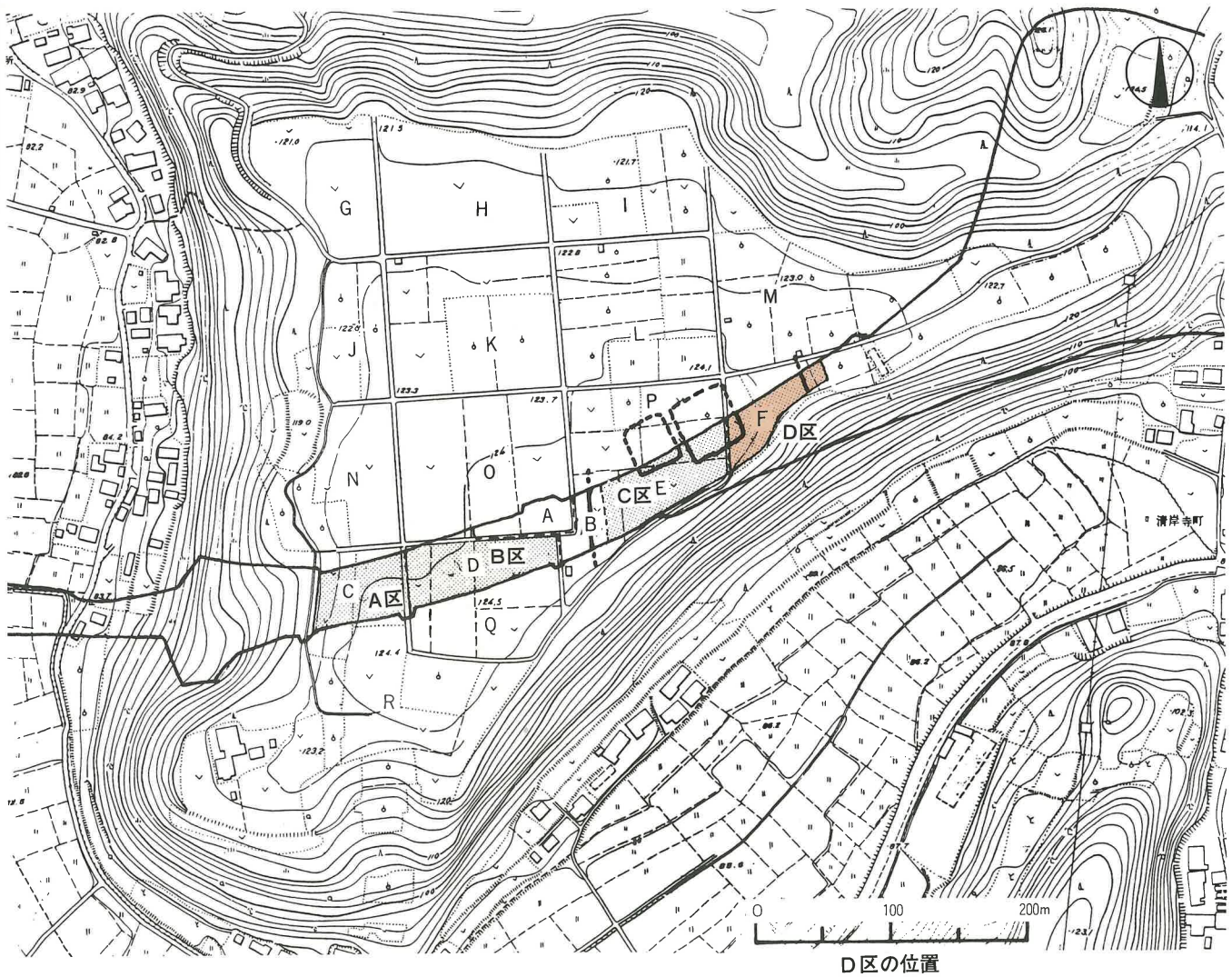
第9表 小迫辻原遺跡 C区 出土鉄器観察表

出土遺構	NO	位置・層序	器種	規格		単位(cm)		重量 (単位g)	装着痕	分類	備考
				全長	刀部長	刀部長	厚さ				
C区-1号溝(1号方形環溝) (古墳時代前期前半)	78	A地点上層	鉄鏃	7.3	—	(5.4)	0.2	(18.0)	なし	F	上層の流込み
	34	C地点	鉄鏃・定角 ヤリガンナ	(3.8)	—	1.8	0.4	(4.5)	—	A2	
				(5.5)	—	1.0	0.4	(6.9)	—	—	2枚の鉄の鍛接痕がある
C区-4号溝(1号条溝) (古墳時代前期前半)	263	北一括	鉄器器種不明	(4.5)	—	2.5	0.3	(11.5)	—	—	刀部は確認できない
	7	6層・床面直上・廃絶時一括	鉄鏃、柳葉形	9.75	—	2.0	0.2	15.0	なし	C2	基部厚 0.4cm
C区-3号堅穴住居 (古墳時代前期・前半)	3	2層・床上3cm	鉄鏃、無茎柳葉形	4.15	—	2.0	0.2	3.6	なし	C2	完形
	43	土壇1埋土内	鉄鏃、柳葉形	(3.7)	—	1.4	0.2	(3.5)	—	C2	廃絶時一括
(5.3)				—	—	0.3	(2.9)	なし	—	—	
C区-8号堅穴住居 (古墳時代前期・前半)	14	はり床中	刀子	(3.5)	—	1.5	0.3	(4.8)	—	—	堅穴使用中の混入
	15	3層 廃絶時一括	鉄鏃無茎	2.8	—	1.5	0.2	2.3	なし	E1	床面 2cm
	16	3層 廃絶時一括	鉄鏃無茎	2.75	—	1.95	0.1	2.0	なし	E2	床面直上
	17	3層 廃絶時一括	鉄鏃、柳葉形	6.4	—	1.9	0.25	4.9	なし	C3	床面直上
	18	3層 廃絶時一括	鉄鏃、柳葉形	6.35	—	1.3	0.3	3.4	なし	D2	炭化材の下・床面直上
	19	3層 廃絶時一括	鉄鏃有茎	(4.1)	3.5	1.6	0.2	(4.5)	—	D1	床上 6cm
	20	3層 廃絶時一括	鉄鏃、柳葉形	(5.4)	—	2.7	0.2	(14.3)	—	—	基部厚 0.35cm
	21	3層 廃絶時一括	鉄鏃・有孔	11.3	—	2.2	0.4	15.0	あり	B	炭化材の上・床上 3cm
	22	3層?	鉄槌鏃、鋤先	(6.5)	(5.8)	4.9	0.1	(17.5)	—	—	床上 9cm
	23	3層	やりがんな	(5.3)	—	1.0	0.3	(4.0)	—	—	床上 1cm
C区-3号土壇 (奈良時代)	5	1層	鉄器、U字形鋤先	—	—	—	—	(7.8)	—	—	

第7章 D区の記録



実測風景 (1987年)



D区の位置



第1節 D区の調査概要（第1図 →図版1）

D区は本調査時の旧F地区である。1号方形環溝から東の台地東部にあたる。現状では周囲と高さが変わらないが、D-1住付近からD-1溝付近にかけては表土が厚く、旧地形はその東西に比べて1m弱段差がついて低くなっている。この一段低い旧地形が古墳時代にもそうであったことは、ピット群の底面レベルが低くなることと、D-1住の深さからみて明らかである。それゆえ1号方形環溝はD区からみると一段高い場所に建設されたように見える。また同じくD-1溝はその低所の東端に掘削されていることになる。この低い地形は、D-1土壙と周辺ピット群の存在からみて、弥生時代の当初から存在していたと推定される。おそらく自然地形としてやや窪んでいた場所を、古墳時代前期前半の遺構建設期にD-1溝と1号方形環溝の建設にあわせて一定程度整形して、一段低い地形がより強調されるようになったと推定される。

D区ではこの地形の上面で、あきらかな現代の溝（4条1単位の溝が2単位あるが、これは現在の葡萄畑の溝である。）を除いて、竪穴住居跡1軒・土壙14基・溝5条とピット多数を検出した。この内以下に報告する遺構は、出土遺物・切り合い関係・土質等により時期の判定が可能であったもののみである。文章のない遺構は章末の遺構一覧表を参照されたい（第1～3表）。

D区の遺構の時期別分布の特徴は、弥生時代の遺構がほとんどないこと、奈良時代から中世の遺構もまったく検出されていない点にある。近世溝の位置と高さからみて、近世までこの地形が存続していたことは明らかであるから、削平されて失われたのではなく本来このD区には存在しなかったと考えられる。

第2節 弥生時代前期後半～中期初頭（第2図）

この時期の遺構は、D区中央の南端すなわち丘陵が斜面へと転じる台地平坦面の端に1基の土壙と周辺のピット群が見つかっている。

1) 土壙（第2・4表）

D区-1号土壙（第3～5図）

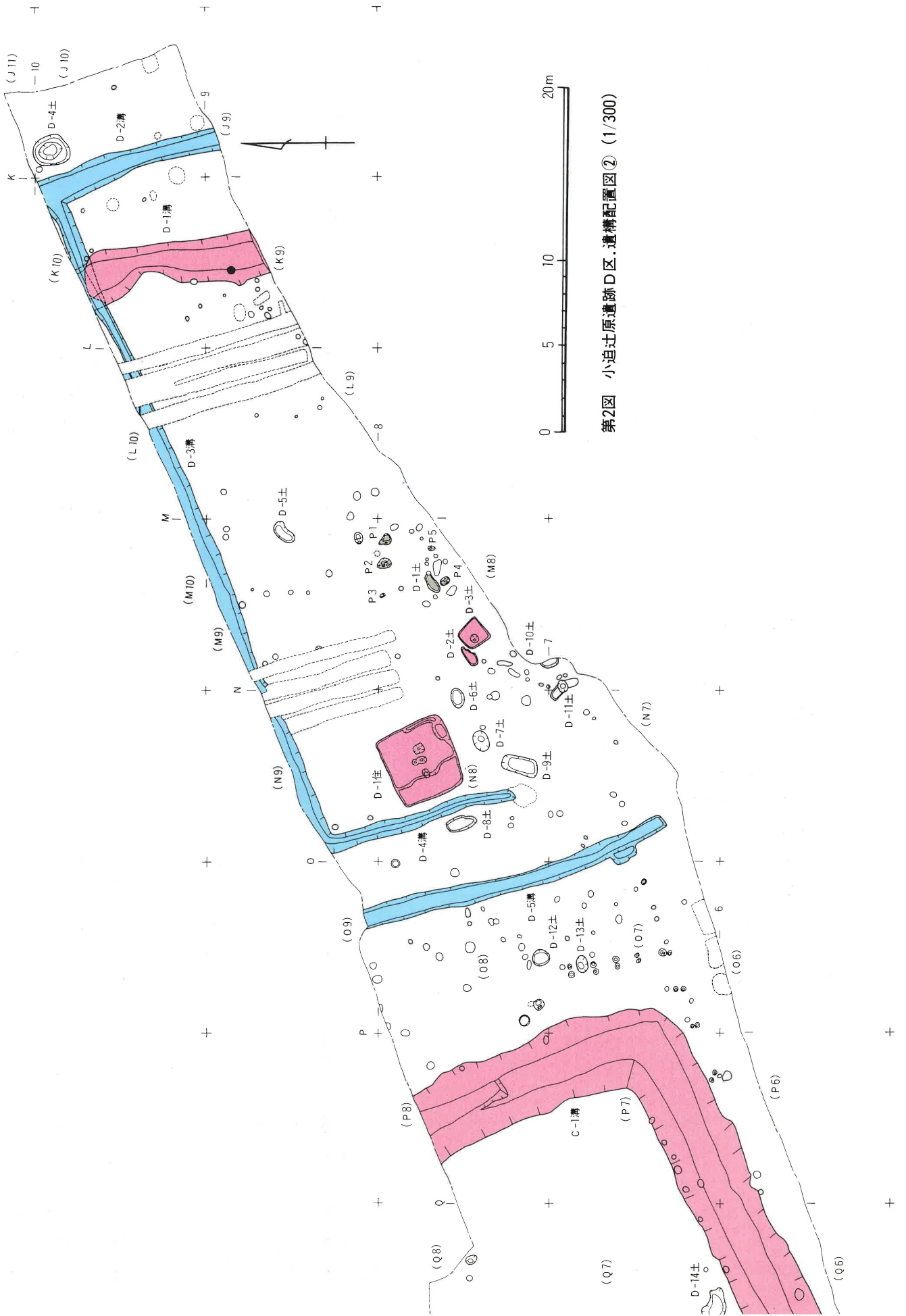
平面形が長円形にちかい形の定まらない浅い土壙で、規模は長さ130cm・幅60cm、底面は平坦に近く、深さは検出面から14cmほどである。埋土は基盤層に含まれている2～3cm大の小礫を含む暗黄褐色の軟らかい単一層（1層）で、この層中の中央からやや偏った位置に、底面から浮いて土器片が数点検出された。土器片はいずれも甕形土器の破片で、図示できるのは1の口縁部破片のみである。口縁部が逆L字形になる甕Cである。弥生時代前期末から中期初頭の土器と考えられ、土壙の年代もその時期であろう。土壙の機能を推定する手がかりはない。（旧F地区土壙202）

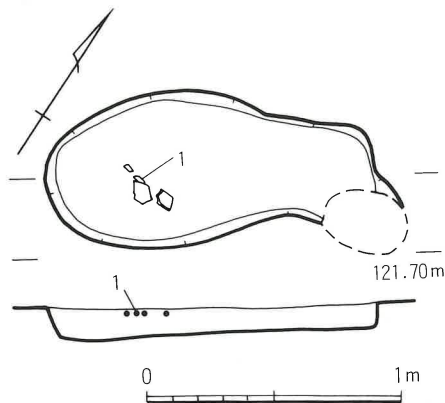
M8調査区ピット1～5（第5図）

このD区-1号土壙周辺には、土壙と同質の土が埋まったピット群が第5図のように分布している。その内ピット1からピット5の5箇所です器の細片が出土した。実測できる破片はないが、質感からD区-1号土壙の土器片と同一時期のものとみられる。

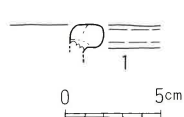
以上のピット群とD-1土壙は、この付近しかこの時期の遺物・遺構が検出できない点からみて、同一の遺構の一部分である可能性がある。明確な柱穴配置は復元できないものの円形竪穴住居跡の痕跡の可能性はあるが、手がかりが乏しいので、断定は控えたい。

前述したように、ピット群とD-1土壙の遺構の検出標高は121.50m付近で、現地表面よりかなり深い位置で検出されたことになる。ピットの深さからみて、以上の弥生時代の遺構群が現地表面にちかい高さから掘りこまれたとは考えられないので、当時の地表面は121.50mよりやや高いと推定される。したがってこの時期からこの





第3図 D区-1号土壌 (1/30)



第4図 D区-1号土壌
出土遺物 (1/4)

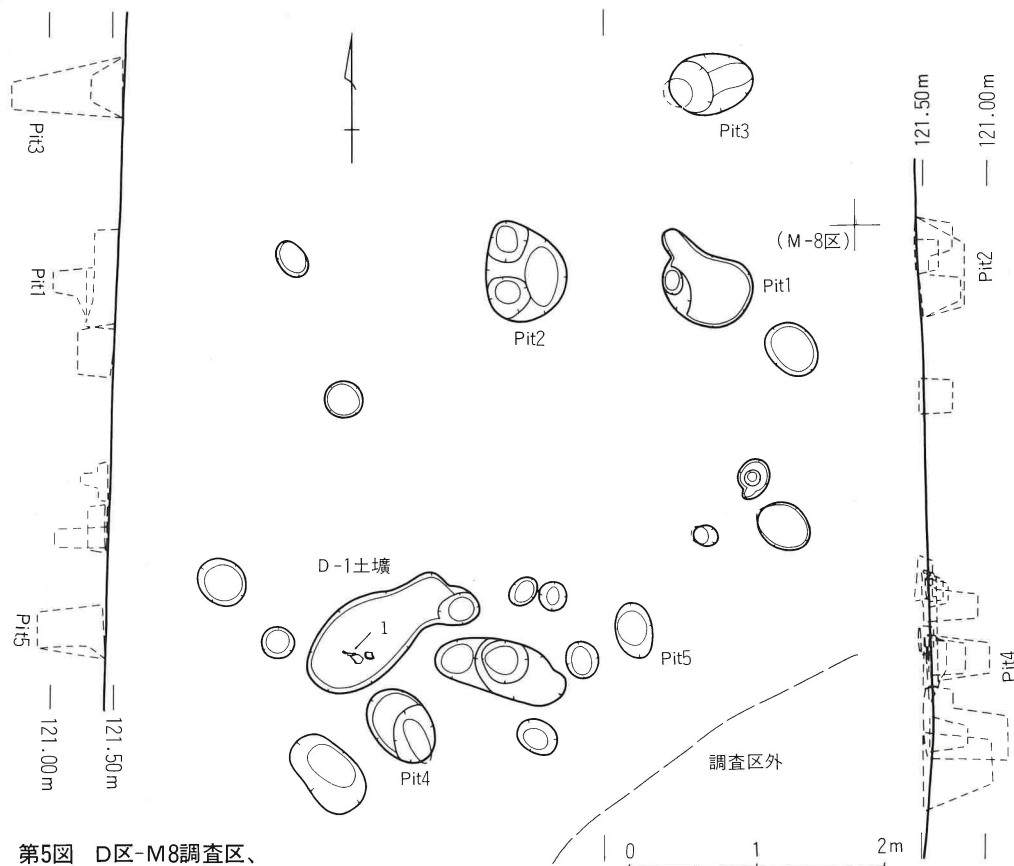
付近の地形は一段低かったと推定される。

第3節 古墳時代前期前半 (第2図)

第6章でふれた1号方形環溝をのぞいたこの時期の遺構は、一段低い地形に残された竪穴住居跡1軒・土壌2基と溝1条である。周辺で検出された多くのピットの中にはこの時期の遺物を含むものは確認できなかった。

1) 竪穴住居跡 (第1・4・5表)

D区-1号竪穴住居跡 (カラー図版上、第6~9図 →図版2・3・6)



第5図 D区-M8調査区、
D区-1号土壌周辺ピット群 (1/60)

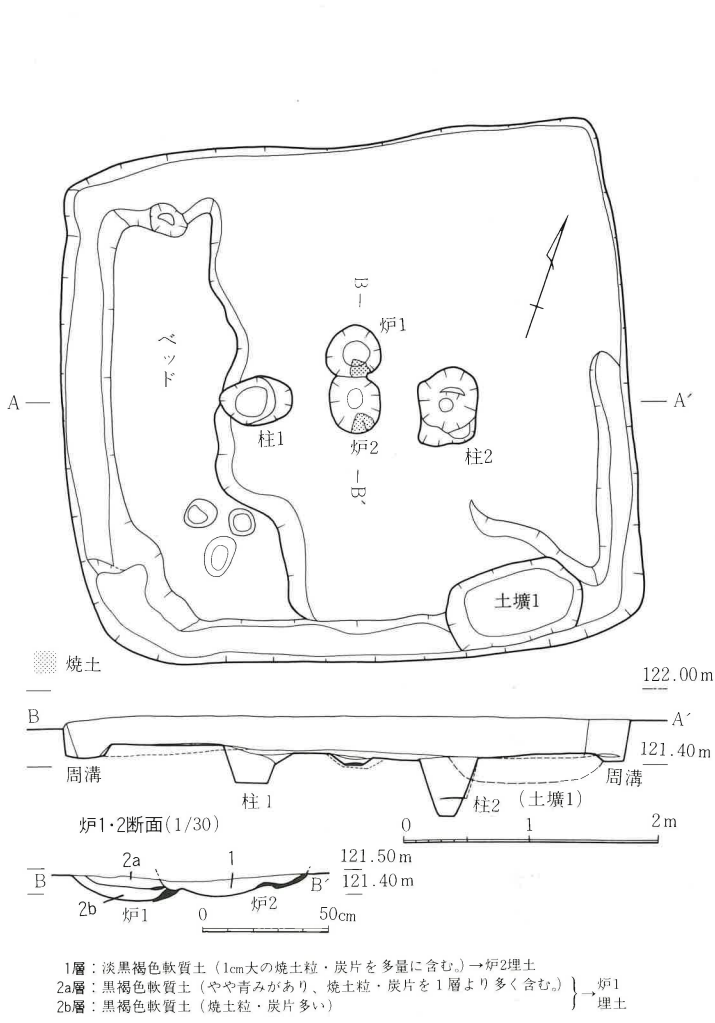
D区中央の一段低くなった場所の西部に位置する方形竪穴建物である。竪穴の形態と規模は、南北420cm、東西450cmと東西にやや長い長方形で、ややゆがんでいる。東西長軸の方位角は約66度で、1号方形環溝の方位角64度と近似する。支柱穴は東西に並ぶ2本柱で、

深さは不揃いである。床面積は16.9㎡で小型である。内部施設として、地山を削りだしたベッド状遺構が柱1に接して西側に設けられている。ベッドの南部分は竪穴中央にむかって拡張されている。このベッドの背後から南辺さらに東辺にひと続きの周溝が掘られていたが、土層を観察すると竪穴完成時には黄色土を含む土で埋められており、排水溝ではなく壁材を固定するための溝と推定される。床面には土を盛って均したような貼床の痕跡はなく、踏み締められて硬化した床であった。南辺の東寄りに長円形の小土壌1が周溝を切り南壁に接して掘りこまれている。竪穴完成直後あるいは竪穴使用中のある時点で設けられた施設と推定される。またこの土壌の埋土上部には竪穴廃絶時に廃棄された土器群の一部が落ち込んでいるので、竪穴廃絶時まで機能して開口していたと推定される。支柱穴に挟まれた竪穴中央に炉が2箇所あり、炉1から炉2へと造りなおして南へ移動している。この炉は炉底が焼けて赤色に硬化する焼土面が底面中央になく、代わりに炉内の埋土には炭片と1~2cm大の硬

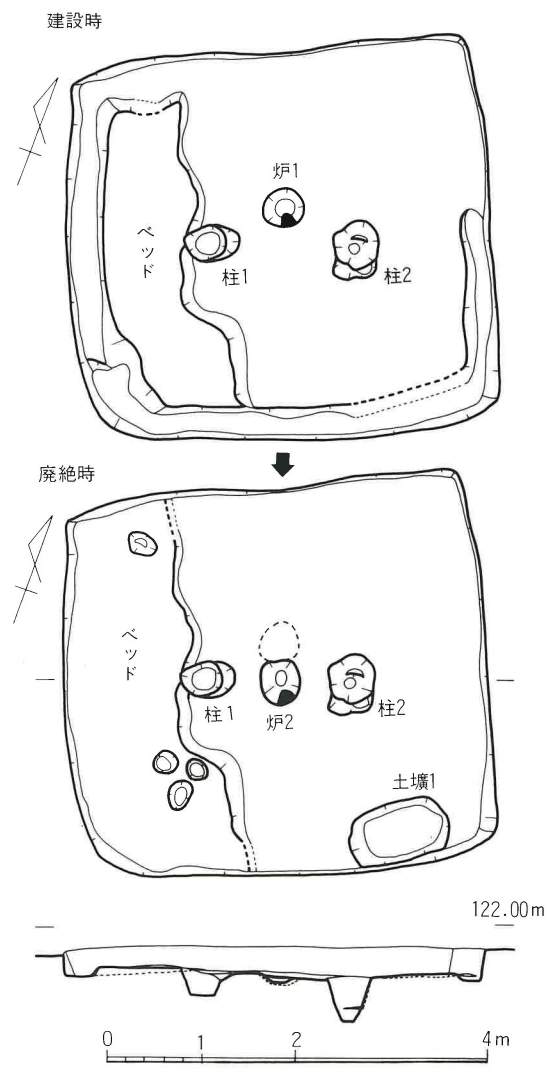
い小さな焼土塊が多量に含まれていた。焼土塊と灰を混ぜて保熱構造とした「灰床炉」と呼んでよい地床炉である。このため焼土面は炉の南側傾斜面にのみ小さく広がり、炉は南側から使用されていたと推定される。このような炉の構造はC区-10号竪穴住居などでも検出されている。以上の観察からこの竪穴住居跡の変遷を示したのが第7図である。

この竪穴建物の機能は炉の存在とベッド状遺構の作り付け等からみて、当初から居住用に設計され、実際にそのように使われたと推定される。

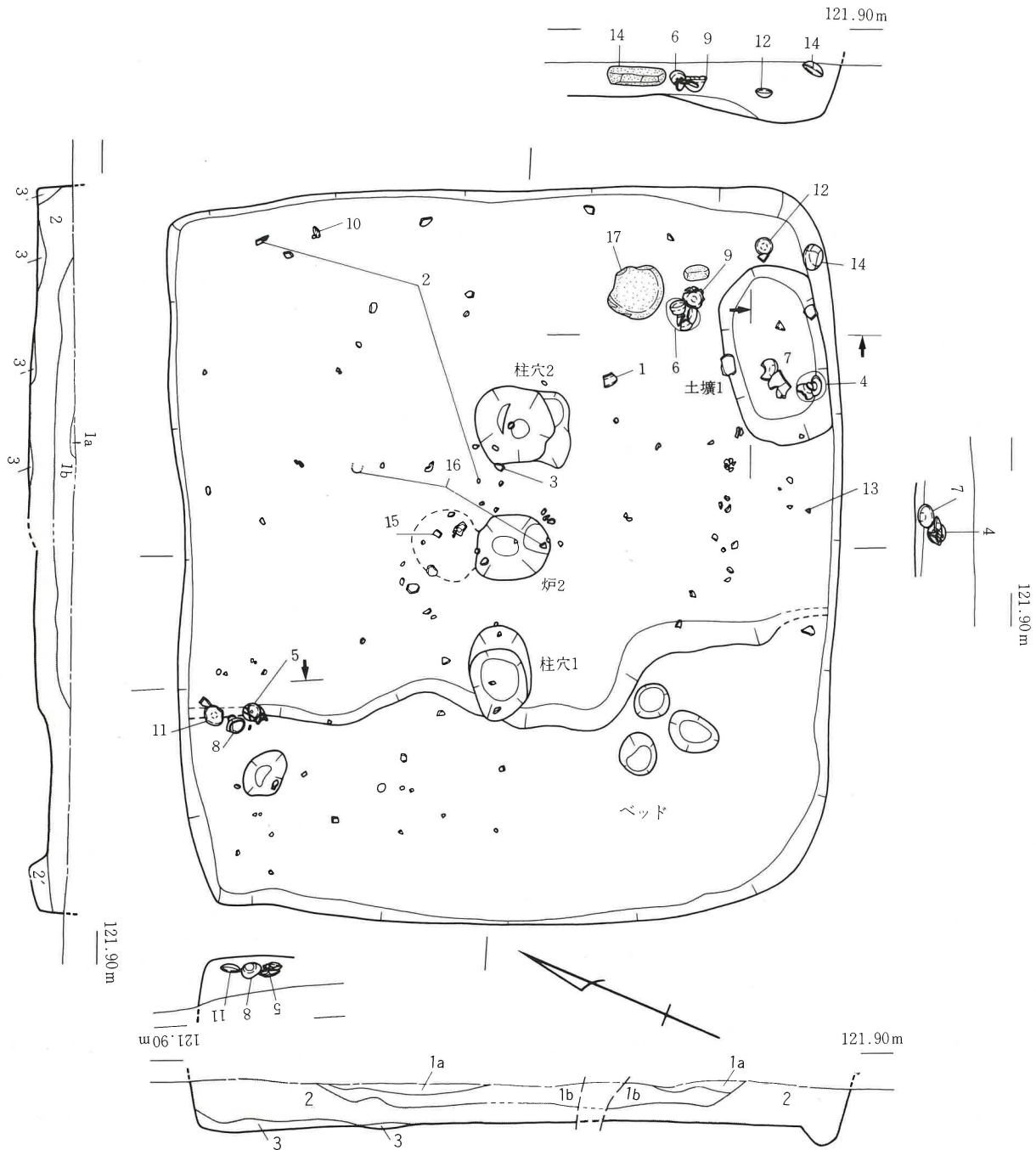
竪穴の埋没状態は、まず床面に張りついて黄褐色粘質土の硬い層（3層）が広がり、遺物も含まず汚れてもいないので、人為的に埋められた土あるいは柱抜き取り時の基盤層の土と推定される。次に遺物を大量に含む暗黄褐色の硬い粘質土（2層）が厚く堆積している。この層中の遺物出土状態は特筆すべきものがある。すなわちベッド北端の壁ぎわと、土塙1周辺に完形の小型土器群が置かれた状態で出土した。後者には土器のほかに石皿が加わっている。ベッド北端では、完形に復元できた5の小型器台Cが正位に置かれた状態で見つかり、その向こうの壁際では11の碗Aが完形で正位に置かれて見つかった。この両者に挟まれて8の台付碗Aの坏部のみが完形で正位に置かれていた。脚部は故意に割り取られたと推定される。この3個体は同時に高さを揃えて置かれたものと推定される。一方土塙1周辺の竪穴東南隅では、土塙を取り囲むように半円形に小型土器群が出土した。南壁際では、完形に復元できる4の小型器台Cが頸部で折れて横転した状態で、そのそばでは8と同じく脚部を折り取られた7の台付鉢Aが坏部のみ完形で正位に置かれていた。4は脚部を失っていない。その奥では6の台付鉢



第6図 D区-1号竪穴住居跡①-竪穴内遺構と炉の重複-(1/60)



第7図 D区-1号竪穴住居跡②-竪穴内遺構の変遷-(1/80)

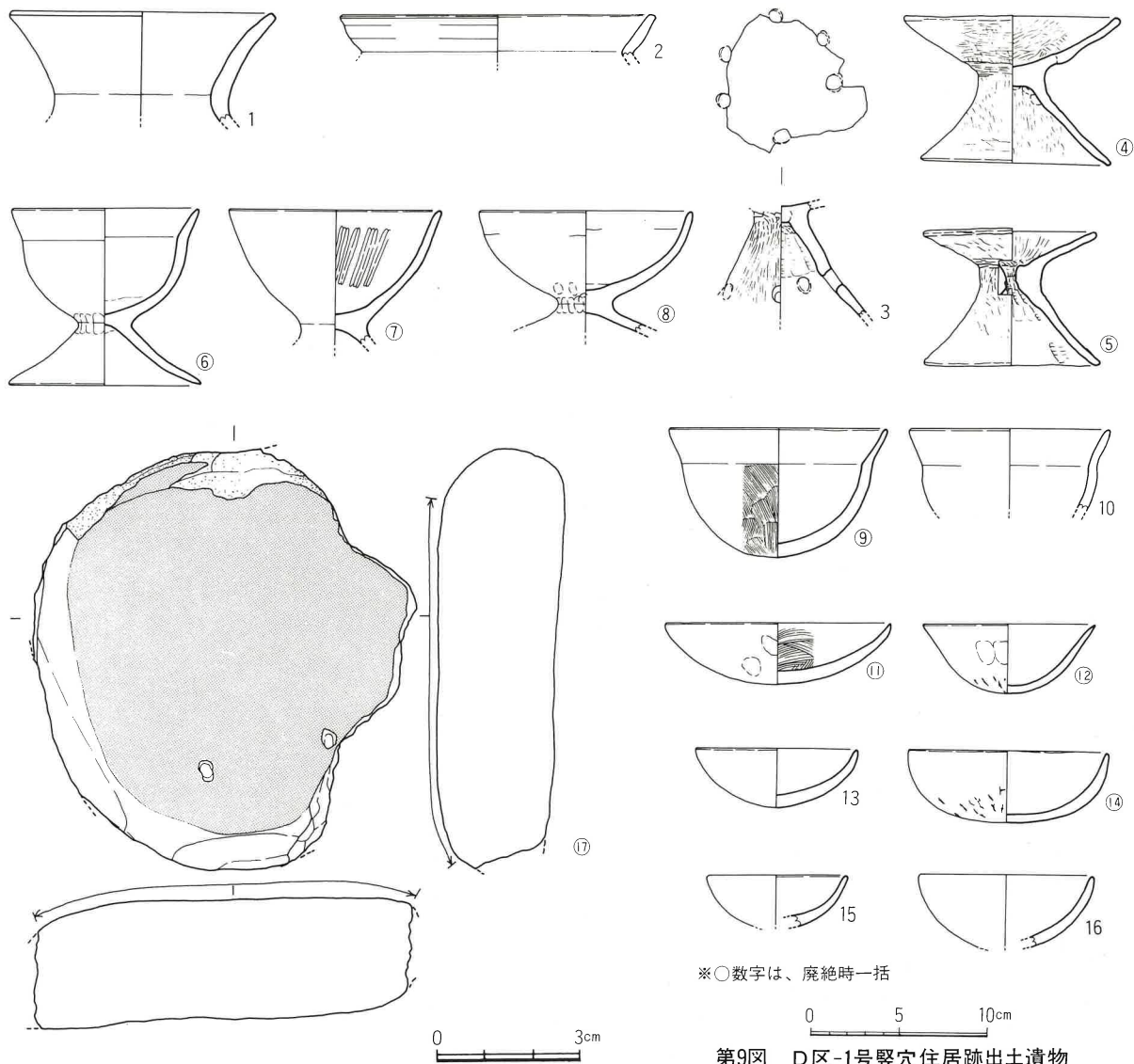


- 1a層：淡黒褐色軟質土（炭・焼土・土器片は少ない。）
- 1b層：黒褐色軟質土（炭・焼土は少ないが、土器小片を多く含む。）
- 2層：暗黄褐色粘質土（かたい。炭片を少量含むが焼土片はきわめて少ない。土器を多量に含む。）
- 2'層：2層土に黄色土山ブロックを含む→周溝埋土

3層：黄褐色粘質土（かたい。炭・焼土・土器片は一切含まない。）

第8図 D区-1号竪穴住居跡③—遺物出土状態と層序— (1/40)

Aと9の小型鉢Dがとなりあわせで検出された。6は完形のまま横転してつぶれた状態でみつきり、4と同じように脚部を失っていない。9はその東となりで完形で正位に置かれていた。さらにこの6と9の背後にはほぼ同じ高さで、重さ20kgもある17の石皿が出土した。この石皿は水平で検出されたので土器群供献時に置かれたと考えられる。焼けて片側が割れているが、割れた破片は竪穴内にはみあたらなかった。さらに竪穴隅には完形の12の碗Aがやや低い位置に正位で見つかり、壁に接してやや高い位置にやはり完形の14の碗Aが、今度は逆さまに伏せたようにみつかった。このほかに7付近には、内面をヘラケズリで仕上げた大型の壺とみられる破片が同じ高さで検出されたが、大部分の破片はこの竪穴内にはなかった。4と7、6と9は明らかに台付の小型供献用土



第9図 D区-1号竪穴住居跡出土遺物
(1~16=1/4、17=2/3)

器と、脚のない碗あるいは脚を取りのぞいた土器を組み合わせ使用している、ベッド北端の土器群の組成とは異なっている。また台付土器は使用後故意に頸部で折られて放置されたと推定される。

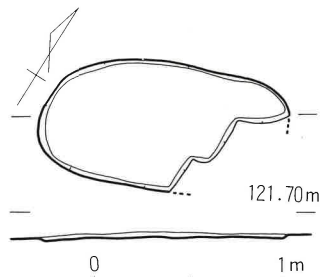
以上の土器群は2層の下部で床面よりやや浮いた状態で出土した。土器の出土位置と遺存状態からみて2層の暗黄褐色土そのものも土器供献後に、以上の小型土器を使用した祭祀的行為を密封するために故意に埋め戻された土層と考えられる。ところで2層中には完形小型土器群以外に2・3・10・13・15・16の土器が破片として出土した。2の甕Dを除いて他は高坏や碗などの小型土器で、供献品と器種が一致する。そして埋め戻されたと推定される2層中の比較的下位から見つかったものが多く、偶然の混ざりこみとは考えがたい。また土器とともに置かれた石皿が被熱しているにもかかわらず、2層中には炭化材はなく炭・焼土もきわめて少ないので、竪穴内での焼却行為があったとは考えがたい。石皿が焼けたのは竪穴外であり、被熱時に割れた破片がなかったのはそのためであろう。そうすると竪穴内に土器を供献する前に、竪穴の外で石皿を火にあて、破片のみが出土した甕を含む小型土器群を使用した祭祀がおこなわれていたと推測される。つまり竪穴外でまずはじめに石皿を焼く行為を含む小型土器を使った祭祀があり、次にそこで焼かれた石皿を竪穴内に移し、新たに用意した小型土器群あるいは先の祭祀で使われた土器の一部をも再利用して、竪穴内で小型土器を使った供献儀礼がおこなわれたと考えられる。その際前段階の祭祀で使用された土器は破砕され、その一部が2層に入ったと推測される。なお1層

は黒褐色の腐食化した土層で、1の壺Dはこの層に含まれ祭祀後に放置されて自然埋没する際に入ったものである。1層中での出土遺物は1以外にはきわめて少なく、堅穴廃絶時に以上の祭祀をおこなった後は、D区-1号堅穴住居周辺は、ごみが捨てられるような生活をする場所ではなかったと推定される。

出土遺物は以上の土器・石皿であるが、土器の胎土は地元のもので搬入品はない。意匠と技法からみて在地系と外来系に大別されるが、外来系の小型器台Cや小型鉢Dが在地系の台付碗・鉢Aや碗Aとともに使用されて、必ずしも偏っていない。また3の高坏Fは外来系でも畿内のものとは異なっている。

この堅穴住居跡の時期は、堅穴の方位が1号方形環溝と一致する点からみて、それと同時期に建設され並行して使用されていたと推定されるが、上記した堅穴廃絶時の一括土器は1号方形環溝のC-1溝出土土器と比べて古い様相を示しているので、D-1住の廃絶時期は1号方形環溝の廃絶の以前であると推定される。したがって古墳時代前期前半の小迫辻原3期にあたる。(旧F地区堅穴住居16)

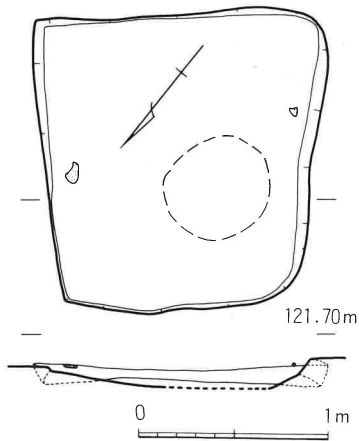
2) 土壌 (第2表)



第10図 D区-2号土壌 (1/40)

D区-2号土壌 (第10図)

平面形がやや長円形の形の定まらない浅い土壌で、規模は長さ144cm・幅67cm、底面は平坦に近く、深さは検出面から4cmである。黒褐色の軟質土がつまり、土師器の細片が出土したので、この時期の土壌としたが、明確ではない。(旧F地区土壌203)



第11図 D区-3号土壌 (1/40)

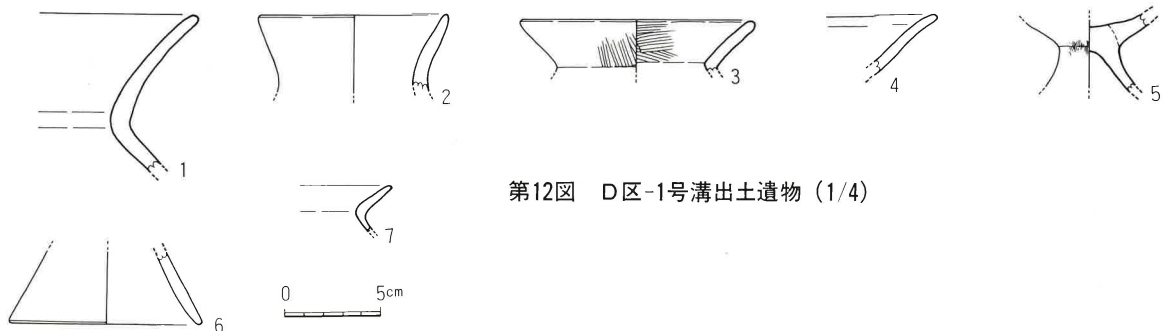
D区-3号土壌 (第11図)

中央に後世のピットがあるいびつな正方形の浅い土壌で、規模は長さ156cm・幅156cm、底面は平坦に近く深さは検出面から15cmである。土師器の細片を10点ほど含む暗褐色軟質土が埋土で、出土土器がこの時期の土師器に限られるのでこの時期とした。(旧F地区土壌204)

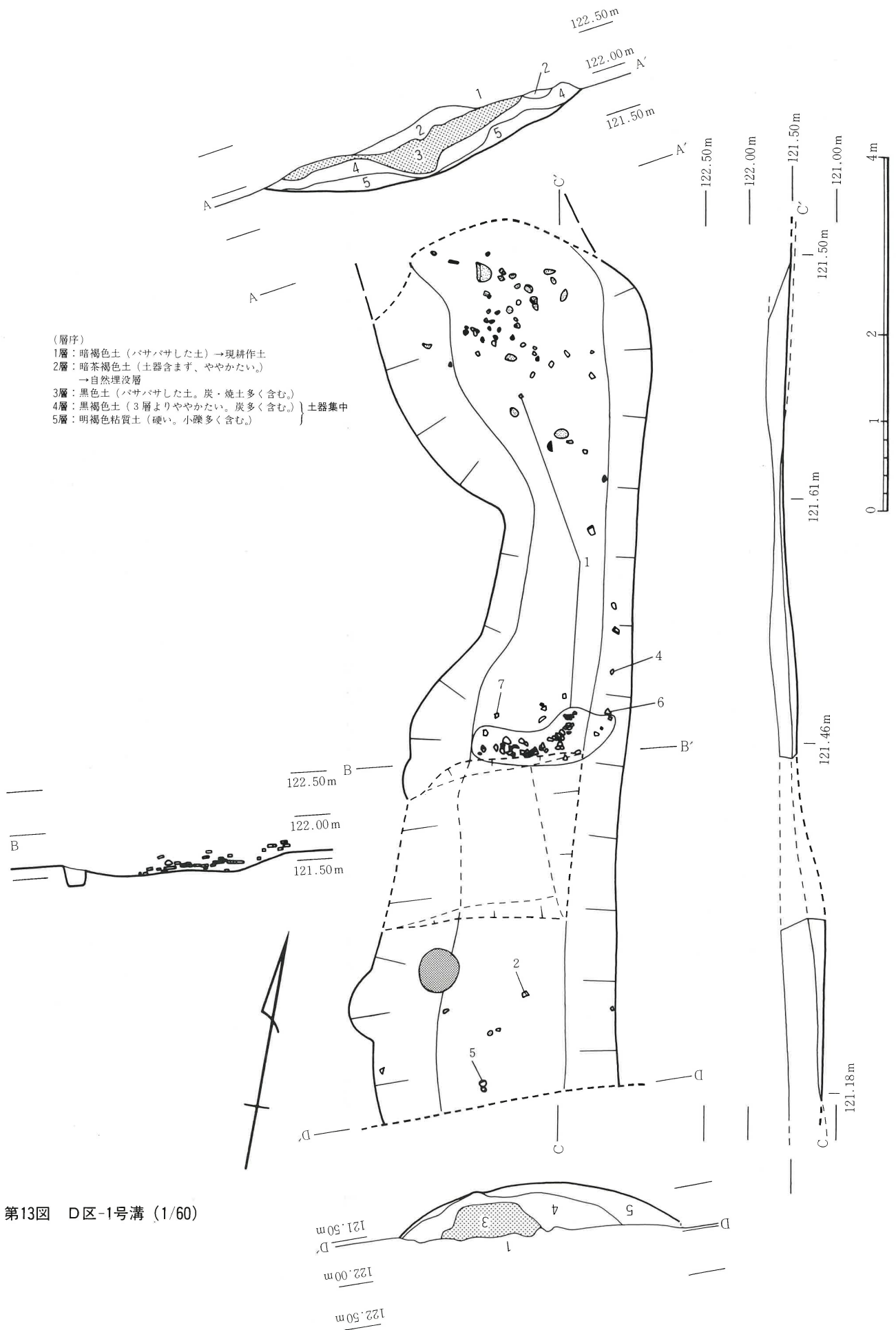
3) 溝 (第3・4表)

D区-1号溝 (カラー図版下、第12・13図 → 図版4~6)

D区東端に近い位置で検出された南北に伸びる溝で約10m分が検出された。北端は近世のD-3溝にきられている。途中で西に湾曲して正確な方向を計測するのはむずかしい。断面は浅いU字形で、ほかの古



第12図 D区-1号溝出土遺物 (1/4)



第13図 D区-1号溝 (1/60)

墳時代前期前半の溝の形態とは異なっている。底面にはかなり高低差があり中央部が浅くなっている。そのため中央部の検出面での溝幅は約1.6mと狭くなっている。他の場所では幅は3mを越える。周辺には柵列等の遺構は認められず、土層の堆積にも土塁の崩壊に由来する土層はなく、大がかりな防御遺構の一部ではなく、特定の場所を区画するための溝と考えられる。

最下層に硬くしまった明褐色土（5層）が堆積し、その層とその上の4層に遺物の集中する地点が2箇所認められた。北側の集中地点は拳大の礫が集中するなかに土師器片が混ざりこみ、中央部の集中地点では底面近くに1の単口縁壺を中心に土師器のみが検出された。1の破片は北側と中央部で破片が別れて出土したので、同時におこなわれた遺物一括廃棄である。1の壺は復元すると破片が足りず、ほかに中央部集中地点から出土した4と6の高坏と7の小型壺Bや、下層のほかの場所で出土した2の壺Aと5の台付鉢Aも破片であった。したがって以上の下層の遺物集中はここで遺物の供献行為がおこなわれたのではなく、別な場所で使用された遺物が、一括して同時に廃棄されたものと推定される。3層以上の土層は腐食化した黒色に近い土で、遺物廃棄後の自然埋没層である。遺物はほとんどなく、D区-1号竪穴住居跡周辺と同様に、この付近では遺物廃棄後は生活用の空間として利用されていなかったと推測される。

土器は在地産の胎土を用いた土師器で、1の壺の内面は全面ヘラケズリが施され、外来系の技術が在地化した段階の製品とみられ、小型土器の多くは在地系で、7の小型壺Bは口縁端部を細く仕上げる畿内の伝統的V様式系の特徴を残している。

この溝の掘削時期ははっきりしないが、1号方形環溝やD-1住などの遺構がこの付近に展開する時期に掘られた可能性が高く、それらの遺構と共存したのち、土器からみて1号方形環溝とその関連遺構群の機能停止後あるいはそれからまもなく遺物廃棄がおこなわれたと推定される。したがって古墳時代前期前半の小迫辻原3・4期とみられる。ところでこの溝の延長はその後の日田市の調査でも見つかっていないので、どのような規模になるかは今のところ不明である。（旧F地区溝12）

第4節 近世（第2図）

1) 溝（第3表）

1960年代の耕地整理前の畑地の境界に掘られた溝である。4条を検出した。出土遺物から掘削はいずれも近世にさかのぼると推定される。D-2・3・4溝は一連のもので、その溝に囲まれた長方形の区画は近世から現代まで用いられた畑地の一区画を示すと考えられる。またD-4溝とD-5溝の間は幅が2m強しかなく、畑地の一筆としては狭すぎるので、農道であった可能性がある。

D区-2号溝（第14図）

南北に伸びる畑地境界溝で、底面の高さは水平である。北端でD-3溝に接続する。（旧F地区溝15）

D区-3号溝（第14図）

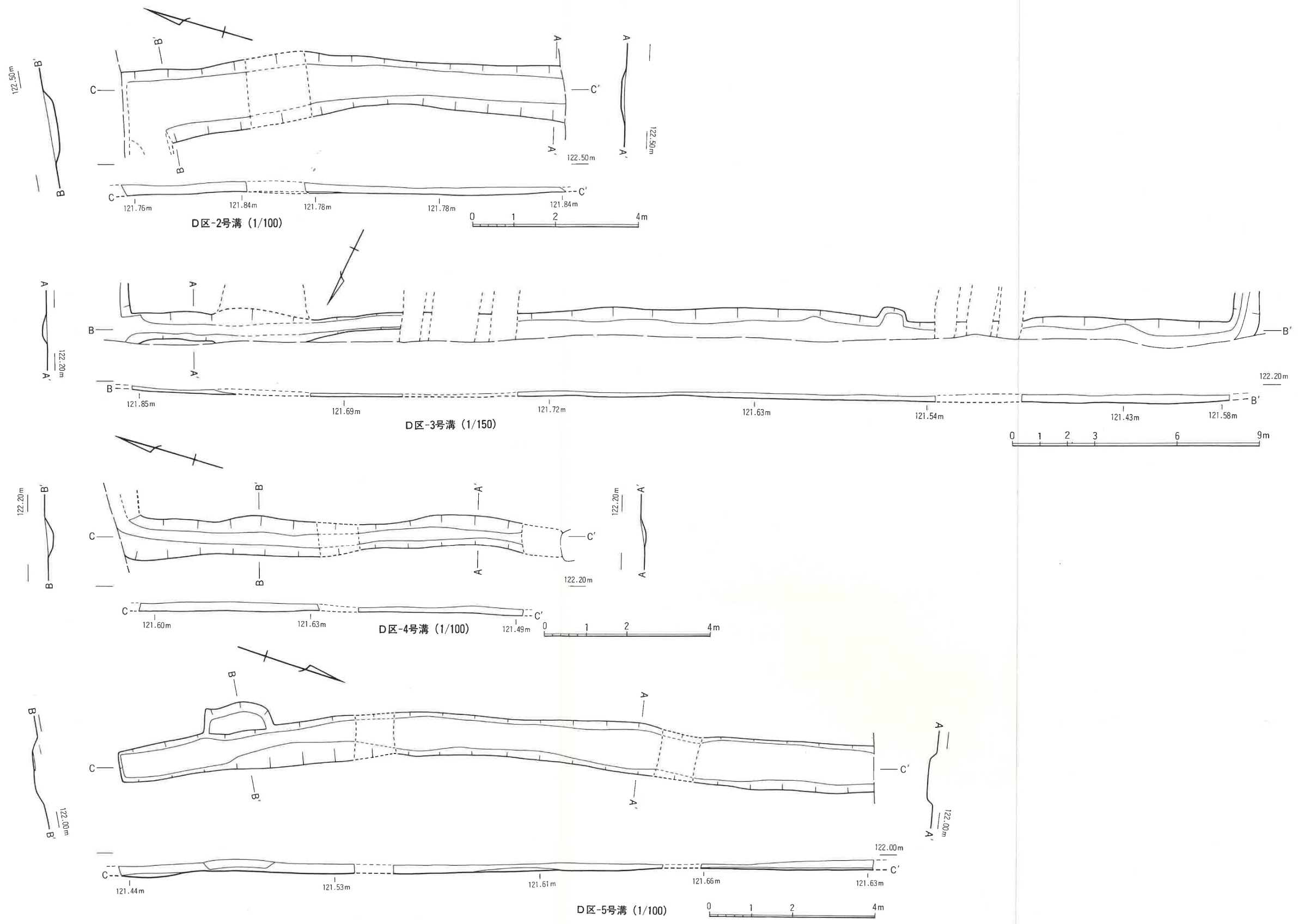
東西に40m以上にわたって伸びる畑地境界溝で、東西両端ではほぼ直角にそれぞれD-2溝とD-3溝に接続する。底面の高さは東に行くほど低くなる。（旧F地区溝16）

D区-4号溝（第14図）

南北に伸びて途中で途切れる畑地境界溝で、北端でD-3溝に接続する。底面は南ほど低くなる。（旧F地区溝13溝）

D区-5号溝（第14図）

D-4溝に平行して南北に伸びる畑地境界溝で、底面の高さは南に行くほど低くなる。（旧F地区溝14）



第14图 D区-2·3·4·5号沟 (1/100·1/150)

第 1 表 小迫辻原遺跡 D区 竪穴住居跡一覽表

遺構名	調査区	平面形	長軸長 (cm)	短軸長 (cm)	長軸方位角	床面積 (㎡)	主体本部	地床炉有無	時期	内部土壌	ヘッド有無	床面	床下土壌	時期	備考	旧名称
D区-1号竪穴住居	N8	方形	450	420	66°	16.9	2本	中央2ヶ所 (つくりなおし)	南壁際東より1ヶ所	削り出し1ヶ所	踏みしめ	なし	古墳時代前期前半	周溝あり	周溝あり・廃絶祭祀あり	F-住16

第 2 表 小迫辻原遺跡 D区 土壌一覽表

遺構名	調査区	形状	分類	最大幅 (単位: cm)		最小幅 (単位: cm)		時期	備考	旧名称
				長さ	幅	長さ	幅			
D区-1号土壌	M8	不定形	F	130	60	14	14	弥生時代前期後半~中期初頭		F-土202
D区-2号土壌	M8	長円形	C1	144	67	4	4	古墳時代前期前半	土器小片を含む	F-土203
D区-3号土壌	M8	長方形	E1	156	156	15	15	古墳時代前期前半	土器小片を含む	F-土204
D区-4号土壌	J10	大型円形 (底丸)	-	215	180	33	33	不明	遺物なし, 層位逆転→風倒木痕?	F-土200
D区-5号土壌	M9	不定形	F	145	75	15	15	不明	遺物等なし	F-土201
D区-6号土壌	N8	長円形	C1	115	77	25	25	不明	遺物等なし	F-土209
D区-7号土壌	N8	長円形	C1	126	82	5	5	不明	遺物等なし	F-土208
D区-8号土壌	N8	長円形	C1	182	92	15	15	不明	遺物等なし	F-土207
D区-9号土壌	N8	長円形	C1	219	100	48	48	不明	土壌墓の可能性あり	F-土210
D区-10号土壌	M8	長円形?	E1?	105	(40)	23	23	不明	遺物等なし	F-土206
D区-11号土壌	M7, N7	不定形	F	220	70	60	60	不明	遺物等なし	F-土205
D区-12号土壌	08, 07	長円形	C1	102	88	10	10	不明	遺物等なし	F-土213
D区-13号土壌	07	小型円形 (底丸)	A4	101	81	41	41	不明	遺物等なし	F-土214
D区-14号土壌	07	不定形	F	187	106	22	22	不明	遺物等なし	F-土215

第 3 表 小迫辻原遺跡 D区 溝一覽表

遺構名	調査区	断面形態	長さ (単位: m)		方向と方位角	時期	備考	旧名称
			長さ	幅				
D区-1号溝	K10, K9	U字形	(10.5)	3.1	南北 (やや湾曲)	古墳時代前期前半	遺物一括廃棄あり, D-3溝に切られる	F-溝12
D区-2号溝	J10, J9, K10	U字形	(11.0)	1.8	南北 (やや湾曲)	近世	畑地境界溝, D-3溝と連続	F-溝15
D区-3号溝	K10, L10, M10, M9, N9	U字形	(43.0)	(1.0)	東西 66°	近世	畑地境界溝, D-2・4溝と連続	F-溝16
D区-4号溝	N9, N8	U字形	(10.0)	1.0	南北 165°	近世	畑地境界溝, D-3溝と連続	F-溝13
D区-5号溝	09, 08, 07, N7	U字形	(18.7)	1.25	南北 (やや湾曲)	近世	畑地境界溝	F-溝14

長さの () は検出した部分のみで, それ以上に長くなることを示す

第 4 表 小迫辻原遺跡 D 区 出土土器観察表

小迫辻原 D 区-1号 竪穴住居：古墳時代前期前半

F-IH-1住16

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()のきば復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1.6層	土師器	甕 D (卑口縁)	—	(152)	—	積上げ	ヨコナデ	黒斑	淡褐色	—	口縁部片 上層流入	
2	2層	土師器	甕 D	—	(18.0)	・在地	積上げ?	ヨコナデ	黒斑	淡褐色 黒灰色	—	口縁部片 脚部片 床土3cm出土・穿孔6穴?(腐滅がはげしい)	
3	2・3層	土師器	高坏 F	—	—	・在地	—	タテハケ	—	淡褐色	—	完形 頸部で折れて横転している	
4	4層・焼絶時一拵	土師器	小型器台 C	8.3	12.3	砂粒少い	—	ヨコナナメハラミガキ・ヨコナデ	黒斑	淡褐色	—	完形 正位でおかれつつはれている	
5	5層・焼絶時一拵	土師器	小型器台 C	7.7	9.8	砂粒少い	—	ヨコナナメハラミガキ・ヨコナデ	黒斑	淡褐色	—	完形 正位でおかれつつはれている	
6	6層・焼絶時一拵	土師器	台付鉢 A	9.9	10.8	砂粒多い	—	全面ナデ調整・口縁部ヨコナデ・体部と脚部の接合部に指圧痕	黒斑	暗褐色	—	完形 正位でおかれた後横転して埋没	
7	7層・焼絶時一拵	土師器	台付鉢 A	—	11.8	・在地	積上げ	ナデ	黒斑	茶褐色	—	脚部を除去し、坏部のみ正位におかれている	
8	8層・焼絶時一拵	土師器	台付鉢 A	—	12.0	・在地	積上げ 円盤充與	ナデ・口縁部ヨコナデ	黒斑	明褐色	—	脚部を除去し、完形の坏部のみ正位におかれている	
9	9層・焼絶時一拵	土師器	小型鉢 D	7.1	(12.2)	・在地	積上げ	ナデ	黒斑	茶褐色	—	完形 正位におかれる	
10	10層	土師器	小型鉢 D	—	(11.3)	・在地	積上げ	ヨコナデ	黒斑	灰褐色	—	完形 正位におかれる	
11	11層・焼絶時一拵	土師器	鉢 A	3.4	12.9	砂粒多い	手づね	指圧痕・ナデ	黒斑	明黄褐色	—	完形 正位におかれる	
12	12層・焼絶時一拵	土師器	鉢 A	3.8	9.8	・在地	手づね	指圧痕	黒斑	淡褐色	—	完形 正位におかれる	
13	13層	土師器	鉢 A	(3.4)	(9.2)	・在地	積上げ	ナデ	黒斑	灰褐色	—	破片	
14	14層・焼絶時一拵	土師器	鉢 A	4.0	11.3	砂粒多い	型づりか 手づね	ヨコナデ・ナデ	—	明褐色	—	完形 逆位にふせられている	
15	15層・炉上投梁	土師器	鉢 A	(3.0)	(8.0)	・在地	積上げ	ナデ	黒斑	淡黄褐色	—	口縁部片	
16	16層	土師器	鉢 A	—	(10.0)	・在地	積上げ	ナデ	黒斑	茶褐色	—	口縁部片	

小迫辻原 D 区-1号 土壇：弥生時代前期後半～中期中頭

F-M8-土202

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()のきば復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1層	弥生式土器	甕 C	—	—	砂粒多い	積上げ	ヨコナデ・指圧痕・口縁上面 削り痕	—	—	暗茶褐色	—	口縁部

小迫辻原 D 区-1号 溝：古墳時代前期前半

F-K10-溝12

NO	出土位置・遺構	種別	器種	規格()のきば復元径・単位(cm)		胎土	成形	調整面		焼成	色調	使用痕	備考
				器高	口径			胴部最大径	底径				
1	1下層 4.5層	土師器	甕 A(D?) (卑口縁)	—	—	砂粒多い	積上げ	ヨコナデ	黒斑	淡黄褐色 ～黒灰色	—	口縁部～頸部	
2	2下層 4.5層	土師器	甕 A	—	(10.2)	・在地	積上げ	ヨコナデ	—	淡黄白色 ～赤色	—	口縁部(外面丹塗り)	
3	3層位不明	土師器	甕 A	—	(12.6)	・在地	積上げ	ナデ・ナメ・ヨコナデ(6本/1cm)・ナメ・ヨコナデ(6本/1cm)	黒斑	黒灰色	—	口縁部	
4	4下層 4.5層	土師器	高坏	—	—	砂粒多い	積上げ	ヨコナデ	—	淡黄褐色	—	口縁部	
5	5下層 4.5層	土師器	台付鉢 A (腐坏?)	—	—	砂粒多い	差込み	タテハケ・ヨコナデ	—	淡褐色	—	頸部～台部	
6	6下層 4.5層	土師器	高坏 or 台	—	—	砂粒多い	積上げ	ヨコナデ	—	淡黄褐色 黄白色	—	脚部	
7	7下層 4.5層	土師器	小型甕 B	—	—	砂粒多い	積上げ	ヨコナデ	黒斑	赤褐色 赤黄	二次加熱 赤変?	口縁部	

第 5 表 小迫辻原遺跡 D区 出土石器観察表

出土遺構	No.	位置・層序	器種	石材	()つきは破片・単位(cm)			重量 (単位g)	備考
					長さ	幅	厚さ		
D区-1号竪穴住居 (古墳時代前期・前半)	17	2層 廃絶時一括	石皿	安山岩	35.2	(32.0)	10.0	(20000.0)	一部欠損 周囲が被熱し割れて いる

報告書抄録

フリガナ	オザコツジバルイセキ I
書名	小迫辻原遺跡 I
副書名	A・B・C・D区編
巻次	I
シリーズ名	九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	10
編著者	田中裕介・土居和幸・清水宗昭
編集機関	大分県教育委員会
所在地	〒870-0021 大分県大分市府内町3-10-1
発行年月日	1999年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おざこつじばる 小迫辻原遺跡	おおいたひた 大分県日田市 おざこつじ 大字小迫字辻 ばる きとうずか 原・経塚	44204-6	651002	33度20分	130度56分	19851001 } 19880630	約1万5千㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
小迫辻原遺跡	集落跡・ 豪族居館跡	縄文時代	土壇2基。	土器・石器	袋状貯蔵穴多数。 成人用甕棺2基を含む小規模な墓地 方形の環溝をもつ「豪族居館」2基と台地を両断する条溝に、住居跡多数。 入り口をもつ溝で区画した方形の館跡。 畑地境界溝。
		弥生時代前期後半～中期初	堅穴住居跡9軒、土壇181基、墓1基。	土器・石器・石剣	
		弥生時代中期後半	土壇18基、甕棺墓4基、土器蓋墓1基、石蓋土壇墓1基。	土器・石器多数	
		古墳時代前期前半	方形環溝遺構2基、溝一条、堅穴住居跡24軒、掘立柱建物跡2棟、土壇9基、小児土器棺墓1基。	土器・石器・鉄器 鏡片1点	
		奈良時代	堅穴住居跡5軒、土壇2基。	中国製陶磁器、土師質土器	
中世	館跡、掘立柱建物跡23棟、土壇8基、墓2基、溝2条など。				
		近世	掘立柱建物跡2棟、土壇8基、溝21条など。	近世陶磁器	

小迫辻原遺跡 I

— A・B・C・D区編 —

九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書10

発 行

大分県教育委員会

発行年月日

平成11年3月31日

印 刷

三恵印刷株式会社

